

平成 10 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2000 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



上：方広寺南面石垣

下左：方広寺南門

下右：鑄造遺構（六波羅政庁跡）



弥生時代後期の大型竪穴住居（大藪遺跡）

序

京都市内には平安京跡をはじめとして、歴史都市にふさわしい重要な遺跡が数多くあります。当研究所は昭和 51 年発足以来、これらの遺跡の調査研究、普及啓発活動に鋭意、つとめてまいりましたが、このたび平成 10 年度に実施いたしました調査概要、普及啓発活動などを報告させていただきます。

今年度は京都和風迎賓施設建設に伴う発掘調査を本格的にはじめ、江戸時代の公家屋敷の一端が明らかになっております。

このほか、平安京の左京域で大規模調査を行い、江戸時代の武家屋敷跡や町家跡などの様子も明らかになってきております。名勝滴翠園では、園池の庭石、導水路を検出しております。

平安京の右京域では、河川化する道祖大路東側溝と三条坊門小路南側溝、西坊城小路東側溝、皇嘉門大路西側溝と路面、西坊城小路西側溝と楊梅小路北側溝など、街路に関連する遺構の発見が相次いでおります。井戸内から、墨で馬が描かれた折敷の底板が出土したのも注目されました。

平安京周辺地域の調査におきまして、多くの成果をあげることができたのも 10 年度の特徴でした。暗渠排水溝を備えた大型の堅穴住居を検出した大藪遺跡、工事中に多量の銭貨が出土した鞍馬二ノ町埋蔵銭出土地、水を流しだす暗渠施設や、南西端付近の土塁と濠を調査した山科本願寺跡、東西方向の築地を伴う石垣を 170 m にわたって検出した伏見城跡、南面する石垣、南門、回廊、鑄造遺構などを検出した方広寺跡などがあります。方広寺の南門は格の高い八足門で、回廊は複廊でした。方広寺の遺構を本格的に発掘、検出できたのは、今回が初めてです。

以上のように、多くの調査成果をあげることができたほかに、遺物の保存処理や文化財講座なども実施いたしました。

これらの報告が、今後とも学術研究の資料として、また市民のみなさまに遺跡への関心と理解を深める上で、貢献できれば幸いと考えております。

おわりに、埋蔵文化財の調査を依頼された原因者の方々や京都市をはじめ関係諸機関の方々に御礼申し上げますとともに、今後とも広く市民のみなさまにも当研究所の活動を理解していただけますよう深く御願い申し上げます。

2000 年 2 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成10年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため次年度に報告するものについては表10・11に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系VIによった。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、市街図（縮尺：1/25,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、新呼称に準拠した。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第3号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従った。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。
- 8 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、今年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 9 図版1・2の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。
- 10 平成10年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、『京都市内遺跡発掘調査概報』平成10年度に報告している。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は資料課（村井伸也・幸明綾子）が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集・調整は資料課が行った。

目次

第1章 発掘調査

I	平成10年度の発掘調査概要	1
II	平安宮・京跡	
1	平安宮正親司・漆室跡	3
2	平安京左京北辺四坊	7
3	平安京左京一条四坊	17
4	平安京左京二条四坊1	20
5	平安京左京二条四坊2	30
6	平安京左京六条三坊	39
7	平安京左京七条二坊・ 名勝滴翠園	44
8	平安京左京九条一坊	48
9	平安京左京九条二坊	50
10	平安京右京三条一坊1	57
11	平安京右京三条一坊2	59
12	平安京右京三条二坊	62
13	平安京右京六条一坊1	66
14	平安京右京六条一坊2	67
III	中臣遺跡	
15	中臣遺跡77次調査	68
16	中臣遺跡78次調査	76
IV	長岡京跡	
17	長岡京左京一条三坊1	77
18	長岡京左京一条三坊2	81
19	長岡京左京一条三坊3	85
20	長岡京左京一条三坊4	88

V その他の遺跡

21	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地	93
22	六波羅政庁跡	94
23	山科本願寺跡	104
24	大藪遺跡	105
25	下三栖遺跡	111
26	伏見城跡	117

第2章 試掘・立会調査

I	平成10年度の試掘・ 立会調査概要	122
II	平安宮・京跡	
1	平安宮正親司・漆室跡	123
2	平安京左京三条二・三坊	124
3	平安京左京六条一坊1	125
4	東寺講堂須弥壇	127
5	平安京右京五条二坊	129
6	平安京右京七条三坊	130
III	その他の遺跡	
7	長岡京左京九条四坊	131
8	史跡賀茂御祖神社境内	132
9	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	134
10	法性寺跡	138
11	伏見城跡	139
12	京都市内遺跡	140

第3章 資料整理

- 1 保存処理 …………… 142
- 2 復元彩色 …………… 144

第4章 普及啓発事業等報告

- 1 普及啓発および
技術者養成事業 …………… 145
- 2 京都市考古資料館状況報告 …………… 148
- 3 役職員名簿 …………… 152

図 版 目 次

図版 1	調査位置図 1	平安京・長岡京・白河街区・伏見地区調査位置図
図版 2	調査位置図 2	1 洛北地区調査位置図 2 市原地区調査位置図 3 長岡京地区調査位置図 4 山科・醍醐地区調査位置図
図版 3	平安宮正親司・漆室跡	1 A区全景 2 B区全景
図版 4	平安京左京北辺四坊	1 1区全景 2 1区北東部
図版 5	平安京左京北辺四坊	1 1区礎石建物A 1 2 1区池 57 3 1区井戸 309
図版 6	平安京左京北辺四坊	1 2区石垣をもつ溝 678 と溝 675 2 2区南半部
図版 7	平安京左京北辺四坊	1 2区石垣 875 2 2区井戸 918 3 2区井戸 1060 4 2区井戸 1068
図版 8	平安京左京北辺四坊	1 土壌 725 出土遺物 2 土壌 674 出土遺物
図版 9	平安京左京北辺四坊	1 土壌 716 出土遺物 2 土壌 687 出土遺物
図版 10	平安京左京一条四坊	1 第1面全景 2 築地 1
図版 11	平安京左京二条四坊 1	1 第2面西半全景 2 第2面東半全景

図版 12	平安京左京二条四坊 1	1 第3面西半全景 2 第3面東半全景
図版 13	平安京左京二条四坊 1	1 第4面東半全景 2 東洞院大路東側溝 3 東洞院大路東側溝と路面
図版 14	平安京左京二条四坊 2	1 1区第1面全景 2 1区第1面石垣 310
図版 15	平安京左京二条四坊 2	1 1区第2面全景 2 1区第3面全景
図版 16	平安京左京二条四坊 2	1 1区第4面全景 2 1区第4面井戸 1421
図版 17	平安京左京二条四坊 2	1 2区第1面全景 2 2区第1面建物 825
図版 18	平安京左京二条四坊 2	1 2区第2面全景 2 2区第2面土壌 1354
図版 19	平安京左京二条四坊 2	1 2区第3面全景 2 2区第4面全景
図版 20	平安京左京六条三坊	1 第2面全景 2 路面敷 300 3 築地 370
図版 21	平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	滄浪池北東区全景
図版 22	平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	1 滄浪池旧池滝石組 2 導水路と漆喰枿 3 醒眠泉旧池庭石検出状況
図版 23	平安京左京九条一坊	1 1トレンチ全景 2 2トレンチ全景
図版 24	平安京左京九条二坊	1 A区中世から近世全景 2 A区土壌7泉水
図版 25	平安京左京九条二坊	1 A区平安時代園池・石敷汀 2 B区近世全景 3 B区平安時代後期から鎌倉時代全景
図版 26	平安京右京三条一坊 1	1 4区全景 2 5区全景
図版 27	平安京右京三条一坊 2	1 A区全景 2 S D 29 上面瓦検出状況

図版 28	平安京右京三条一坊 2	1 B区全景
		2 S G 108
		3 C-1区全景
		4 C-2区全景
図版 29	平安京右京三条二坊	1 全景
		2 S E 401
		3 S D 120
図版 30	平安京右京六条一坊 1・2	1 15次調査全景
		2 14次調査全景
図版 31	中臣遺跡 77次調査	1 1区第2面全景
		2 1区 S H 96
図版 32	中臣遺跡 77次調査	1 2区全景
		2 4区第2面全景
図版 33	中臣遺跡 77次調査	1 4区 S H 307
		2 1区 S K 92 土器出土状況
		3 1区 S D 41 鉄刀出土状況
図版 34	中臣遺跡 78次調査	1 全景
		2 3号方形周溝墓
図版 35	長岡京左京一条三坊 1	1 C-1 A区戦国期から江戸時代前期全景
		2 C-1 A区室町時代後期から江戸時代初期全景
		3 C-1 B区室町時代後期から江戸時代前期全景
図版 36	長岡京左京一条三坊 1	1 S E 62
		2 壺棺
		3 弥生時代中期包含層遺物出土状況
図版 37	長岡京左京一条三坊 2	1 平安時代以降全景
		2 弥生時代全景
図版 38	長岡京左京一条三坊 3	1 中世以降全景
		2 弥生時代全景
図版 39	長岡京左京一条三坊 4	1 D-4区近代水車遺構の用水路全景
		2 D-4区中世全景
図版 40	長岡京左京一条三坊 4	1 E-1区长岡京期全景
		2 D-4区古墳時代前期 S X 58
図版 41	六波羅政庁跡 1	1 1区全景
		2 1区南門
図版 42	六波羅政庁跡 1	1 1区雨落溝

図版 42	六波羅政庁跡	2	1 区石組溝
		3	1 区鑄造遺構
図版 43	六波羅政庁跡	1	2 区全景
		2	2 区石垣裏込め断ち割り
図版 44	六波羅政庁跡	1	4 区全景
		2	7 区東部全景
		3	7 区西部全景
図版 45	六波羅政庁跡	1	8 区北部全景
		2	8 区中央部全景
		3	8 区南部全景
		4	2 区出土軒瓦、鞆羽口
図版 46	大藪遺跡	1	A 1 区中世全景
		2	A 2 区中世全景
図版 47	大藪遺跡	1	A 1 区北西部中世柱穴群
		2	A 1 区 S B 18
		3	A 1 区中世井戸
図版 48	大藪遺跡	1	A 3 区長岡京期全景
		2	A 2 区長岡京期 S A 9
		3	A 3 区長岡京期 S E 12
図版 49	大藪遺跡	1	A 1 区弥生時代全景
		2	A 1 区 S X 3
図版 50	大藪遺跡	1	A 1 区 S H 4
		2	A 1 区 S H 4 木樋
		3	A 1 区 S H 4 支柱穴
図版 51	伏見城跡	1	1 区全景
		2	2 区全景
図版 52	伏見城跡	1	3 区全景
		2	4 区全景
図版 53	伏見城跡	1	6 区石垣
		2	1 区 S D 1
		3	1 区石仏出土状況
図版 54	東寺講堂須弥壇	1	調査前の状況
		2	河原石を除去した状況
		3	亀裂の状態
図版 55	史跡賀茂御祖神社境内	1	1 トレンチ全景

図版 55 史跡賀茂御祖神社境内	2	2 トレンチ全景
	3	2 トレンチ石列
図版 56 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1	2・3 トレンチ室町時代全景
	2	3 トレンチ室町時代全景

図 目 次

図 1 平安宮正親司・漆室跡	調査位置図	3
2 〃	遺構平面図	4
3 〃	軒瓦拓影	5
4 〃	文字瓦拓影	6
5 平安京左京北辺四坊	調査位置図	7
6 〃	平安時代中期から後期遺構平面図	9
7 〃	鎌倉時代・室町時代後期遺構平面図	10
8 〃	江戸時代前半期遺構平面図	11
9 〃	江戸時代後半期遺構平面図	12
10 〃	溝 7 出土イギリス製水差と井戸 354 出土皿	14
11 〃	イギリス製皿裏面	14
12 平安京左京一条四坊	調査位置図	17
13 〃	遺構実測図	18
14 平安京左京二条四坊 1	調査位置図	20
15 〃	北壁断面図	21
16 〃	第 1 面遺構平面図	22
17 〃	第 2 面遺構平面図	23
18 〃	第 3 面遺構平面図	24
19 〃	第 4 面遺構平面図	25
20 〃	第 2 面ゴミ穴 353 出土遺物実測図	28
21 〃	織部向付	29
22 平安京左京二条四坊 2	調査位置図	30
23 〃	1 区主要遺構配置図	32
24 〃	2 区主要遺構配置図	34
25 平安京左京六条三坊	調査位置図	39
26 〃	調査区配置図	39
27 〃	第 2 面遺構平面図	40
28 〃	土壌 172・283 出土輸入陶磁器	41

図 29	平安京左京六条三坊	軒瓦拓影	42
30	〃	近世土壇出土「乾山」銘陶器	43
31	〃	井戸 048 出土陶器製ガスコンロ	43
32	平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	調査位置図	44
33	〃	調査区配置図	44
34	〃	醒眠泉周辺実測図	45
35	〃	滄浪池北東区実測図	46
36	平安京左京九条一坊	調査位置図	48
37	〃	1 区遺構実測図	48
38	〃	2 区遺構実測図	49
39	平安京左京九条二坊	調査位置図	50
40	〃	A 区第 2 面 - 2 遺構平面図	51
41	〃	B 区遺構平面図	53
42	平安京右京三条一坊 1	調査位置図	57
43	〃	4 区遺構平面図	57
44	〃	5 区遺構平面図	58
45	平安京右京三条一坊 2	調査位置図	59
46	〃	A・B 区遺構平面図	60
47	〃	C - 1・2 区遺構平面図	60
48	〃	A 区 S D 29 出土遺物実測図	61
49	平安京右京三条二坊	調査位置図	62
50	〃	遺構変遷図	63
51	〃	銅製蛇尾実測図	64
52	〃	S E 400 出土遺物実測図	64
53	平安京右京六条一坊 1	調査位置図	66
54	〃	S E 20	66
55	〃	土器実測図	66
56	平安京右京六条一坊 2	調査位置図	67
57	〃	遺構平面図	67
58	中臣遺跡 77 次調査	調査位置図	68
59	〃	1・2 区遺構平面図	69
60	〃	4 区遺構平面図	71
61	〃	竪穴住居実測図	72
62	〃	整地層出土土器実測図	73
63	〃	土器実測図	74

図 64	中臣遺跡 78 次調査	調査位置図	76
65	長岡京左京一条三坊 1	調査位置図	77
66	〃	遺構平面図	78
67	〃	山城国下久世庄絵図	80
68	長岡京左京一条三坊 2	調査位置図	81
69	〃	遺構平面図	81
70	〃	遺構平面図	82
71	〃	拡張区画断面図	83
72	長岡京左京一条三坊 3	調査位置図	85
73	〃	遺構平面図	86
74	長岡京左京一条三坊 4	調査位置図	88
75	〃	S D 5 胴木検出状況	88
76	〃	長岡京期遺構平面図	90
77	〃	条坊検出地点とその数値	91
78	〃	水車設置許可証	92
79	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地	調査位置図	93
80	〃	S K 1	93
81	六波羅政庁跡	調査位置図	94
82	〃	1 区南門根固め断面図	94
83	〃	1・2 区遺構実測図	95
84	〃	1 区鑄造遺構実測図	96
85	〃	2 区石垣断ち割り断面図	97
86	〃	4 区遺構平面図	98
87	〃	4 区埋甕遺構	98
88	〃	7 区遺構平面図	99
89	〃	8 区遺構平面図	100
90	〃	8 区出土土器実測図	101
91	〃	2 区出土銅製錫杖頭部	102
92	山科本願寺跡	調査位置図	104
93	〃	暗渠	104
94	〃	土塁	104
95	大藪遺跡	調査位置図	105
96	〃	調査区配置図	105
97	〃	遺構平面図	106
98	〃	S H 4 実測図	107

図 99	大藪遺跡	S E 12 実測図	107
100	〃	S X 3・S E 12 出土遺物実測図	109
101	〃	位牌実測図	110
102	下三栖遺跡	調査位置図	111
103	〃	遺構平面図	112
104	〃	遺物実測図	114
105	〃	第 2 面全景	116
106	伏見城跡	調査位置図	117
107	〃	1 区遺構実測図	117
108	〃	2～5 区遺構平面図	118
109	〃	6 区遺構実測図	120
110	〃	軒平瓦拓影	121
111	平安宮正親司・漆室跡	調査位置図	123
112	〃	全景	123
113	平安京左京三条二・三坊	調査位置図	124
114	平安京左京六条一坊	調査位置図	125
115	〃	遺構平面図	125
116	〃	北壁断面	126
117	〃	全景	126
118	東寺講堂須弥壇	調査位置図	127
119	〃	錢貨出土状況	128
120	〃	鍬出土状況	128
121	平安京右京五条二坊	調査位置図	129
122	〃	No. 3 地点調査風景	129
123	平安京右京七条三坊	調査位置図	130
124	〃	1 区東壁断面図	130
125	長岡京左京九条四坊	調査位置図	131
126	史跡賀茂御祖神社境内	調査位置図	132
127	〃	1 トレンチ遺構平面図	132
128	〃	2 トレンチ遺構平面図	132
129	〃	土器実測図	133
130	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	調査位置図	134
131	〃	調査区配置図	134
132	〃	遺構実測図	135
133	〃	S G 55 出土土器実測図	136

図 134	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1 トレンチ全景	137
135	〃	S G 55	137
136	法性寺跡	調査位置図	138
137	〃	調査風景	138
138	伏見城跡	調査位置図	139
139	〃	トレンチおよび遺構配置図	139

表 目 次

表 1	長岡京左京一条三坊 2	拡張区画出土遺物集計表	84
2	〃	土師器杯皿類形式と推定年代対照表	84
3	平安京左京六条一坊	出土土器破片数一覧表	126
4	〃	出土土師器杯皿類形式分布表	126
5	京都市内遺跡	国庫補助による立会調査件数一覧表	140
6	保存処理	木製品受け入れ一覧表	142
7	〃	保存処理済み一覧表	142
8	復元彩色	復元彩色件数一覧表	144
9	京都市考古資料館状況報告	入館者数一覧表	151
10	平成 10 年度発掘調査一覧表		154
11	平成 10 年度試掘・立会調査一覧表		156
12	平成 10 年度その他契約一覧表		157

第1章 発掘調査

I 平成10年度の発掘調査概要

平成10年度の発掘調査の委託契約件数は32件で、そのうち文化庁による国庫補助事業は3件である。平成9年度の委託契約件数46件より14件減少している。内訳は、平安宮跡1件、平安京跡15件（左京域11件、右京域4件）、中臣遺跡3件、長岡京跡4件、その他遺跡9件である。昨年度に比べ大幅に委託契約件数が減少したのは、平安京跡の委託契約が25件から15件に減少したことが要因の一つである。

平安京左京北辺四坊（98HK-GS003）、左京六条三坊八町（98HK-PP001）、左京八条二坊（99HK-EQ001）、中臣遺跡（98RT-NK079）、長岡京跡（98NG-SD-D2・3区）、史跡醍醐寺境内（98FD-DT003）の5件は、今年度契約ではあるが次年度にまたがる継続調査であり、まとめて次年度に報告することにする。平安京右京六条一坊三町（13）、右京六条一坊六町（14）の調査は、1件の契約であるが、町が異なり別調査区であるため、2項目に分けて報告する。今回報告する発掘調査の項目数は26項目である。

平安宮・京跡 平安宮の調査は、正親司・漆室跡（1）の1件のみであった。江戸時代の大規模な土取穴を検出することどまった。

平安京左京域では、1000㎡を越える発掘調査区を設定した調査が3例あり、左京域の大規模調査が目立つ年度であった。その一つに今年度より開始した京都和風迎賓施設建設に伴う左京北辺四坊（2）の発掘調査がある。江戸時代前期以降の公家屋敷の一端が明らかになり、ヨーロッパの陶磁器、ガラス製品が出土している。左京二条四坊1（4）も1000㎡を越える竹間小学校跡地で行った大規模調査である。江戸時代の町屋跡を良好な状態で検出し、江戸時代から近代までの町家構造の変遷を明らかにすることができた。同じく左京二条四坊2（5）の調査も大規模で、4000㎡の発掘調査である。江戸時代前期の武家屋敷跡が検出されている。江戸時代中期から後期の町家境の石垣、井戸、竈、石室などを検出した。

これら一連の発掘調査は、調査面積を十分に確保して実施できたこともあって、以前にはあまり知られていなかった公家屋敷、武家屋敷、町屋などの江戸時代京都の様相を、部分的ではあるが明らかにすることができた。

左京域では、ほかにも寛政度内裏の石垣を伴う築地を検出した左京一条四坊（3）の調査、平安時代中期の園池、平安時代後期の付け替えられた六条坊門小路が検出された左京六条三坊（6）の調査、弥生時代後期の流路を検出し、平安時代以後は田畑などの耕作地であったことが判明した左京九条一坊（8）の調査、平安時代末期から鎌倉時代の柱穴、井戸、土壇、溝、池状遺構などを検出した左京九条二坊（9）の調査などがある。

左京七条二坊・名勝滴翠園（7）の調査では、旧池の庭石、導水路が検出され、本願寺移転後

まもない17世紀初頭に飛雲閣が建築され、滄浪池も築造されたことを確認でき、この調査によって、飛雲閣と庭園の関係が層位的に明らかになってきた。

右京城では、右京三条二坊(12)の調査で、平安時代前期(9世紀中頃)の河川化する道祖大路東側溝と三条坊門小路南側溝、宅地内溝を検出した。加えて平安時代前期から中期の3時期にわたる建物、井戸を検出した。墨で飾り具をつけた馬が描かれた折敷の底板が井戸内から出土したのも注目される。右京三条一坊1(10)では、西坊城小路東側溝、右京三条一坊2(11)では、平安時代後期の皇嘉門大路西側溝と路面を検出した。この調査では「右坊」と記された文字瓦が出土している。右京六条一坊2(14)では平安時代の西坊城小路西側溝と楊梅小路北側溝を検出している。右京六条一坊1(13)では、中世、近世の土取穴のため、平安時代から鎌倉時代の井戸の検出にとどまった。右京城では、平安京街路に関連する遺構の発見が各所で相次いだ。

中臣遺跡 中臣遺跡77次調査(15)では栗栖野丘陵の東斜面で、5世紀末から6世紀初頭の方墳の西辺溝を検出した。7世紀の竪穴住居8棟も検出している。中臣遺跡78次調査(16)では、弥生時代中期の方形周溝墓2基、7世紀中葉の竪穴住居1棟を検出した。

長岡京跡 4件の長岡京左京一条三坊の調査は、西羽束師川の河川改修事業に伴うものである。左京一条三坊1(17)では東土川集落の成立と関係する室町時代後期の集落跡を検出した。左京一条三坊2(18)では、長岡京の東三坊坊間東小路西側溝と一条条間南小路南側溝とのL字形の取り付き部分を検出した。左京一条三坊3(19)では、室町時代後期の集落跡の検出に加え、弥生時代の溝を検出している。左京一条三坊4(20)では、室町時代後期の遺構を検出するとともに長岡京の一条大路北側溝を検出した。

その他の遺跡 その他の遺跡では、工事中に多量の銭貨が出土した鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地(21)の発掘調査がある。銭貨は3万枚以上、土壌内に納められていたと考えられている。

六波羅政庁跡(22)では、方広寺の南面石垣、南門、回廊、鑄造遺構などを検出した。南門は格の高い八足門で、回廊は複廊であった。方広寺の遺構を本格的に検出できたのは、今回が初めてである。

注目された遺跡に山科本願寺跡(23)がある。寺内町内から水を流し出す暗渠施設や、南西端付近の土塁と濠を調査した。

大藪遺跡(24)では、暗渠排水溝を備えた大型の竪穴住居が検出された。濠に区画された室町時代の建物、井戸なども検出された。下三栖遺跡(25)では、平安時代中期の井戸や鎌倉時代の井戸などを検出した。伏見城跡(26)では、東西方向の築地を伴う石垣を170mにわたって検出している。

上記のように、平安京跡の周辺地域においても重要な遺跡調査が行われたのが、今年度の発掘調査の特徴である。

(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮正親司・漆室跡 (図版1・3)

経過 京都市立仁和小学校の位置する場所は平安宮内の北西隅にあたり、正親司・漆室・兵庫寮などの官衙街の一角に推定される。これまで同校内では発掘調査が2回実施されており、1回目の調査は昭和52年(1977)の旧東校舎新築時に、江戸時代の井戸や土器溜状の遺構が検出された。2回目の調査は昭和61年(1986)の講堂増改築時に実施され、江戸時代の墓や土砂採掘の土取穴が検出された。

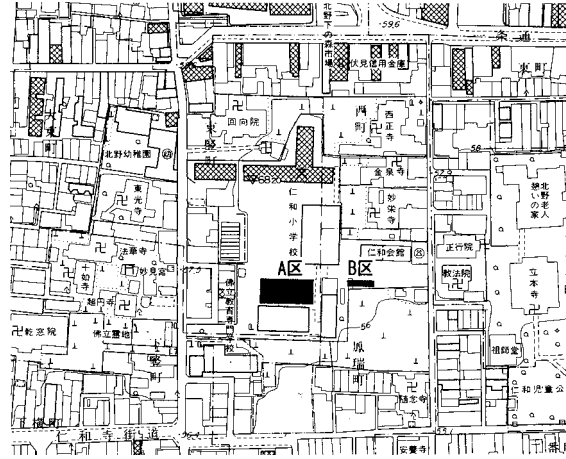


図1 調査位置図 (1:5,000)

本調査は、同校内の校舎改築工事に伴う発掘調査で、改築工事は敷地南側の本館および東隣の南北棟校舎を解体し、その跡地に約2000㎡規模の新校舎を建築するというものである。本調査に先立って平成10年(1998)6月16日から26日にかけて試掘調査を実施し、また同年9月4日から14日にかけては旧校舎の基礎撤去に伴い立会調査を実施した。今回の調査はこれらの調査成果を踏まえ、平安宮関連の遺構および遺物の検出を主な目的として実施した。調査区はA・B区の2箇所を設定した。A区は旧校舎基礎の攪乱が及んでいない旧本館北側に東西36.0m、南北16.5～19.0m、面積624㎡の規模で設けた。A区北半は漆室および正親司間の東西区画路、南半は正親司北辺部に推定される。B区は水槽棟の建設予定地で東西18.0m、南北4.0m、面積72㎡の規模で設けた。A区から東へ約20m離れた位置で、同じく東西区画路に推定される。

遺構 A区の現表土は標高約56.3mの平坦面で校庭グラウンドの整地層であり、B区もほぼ同様である。基本層位は、校内整地層の次に厚さ0.3～0.6mの耕作土層が堆積し、地表下1.6m(標高54.7m)で近世の遺構面となる。B区では地表下1.3m(標高55.0m)以下に黄褐色粘土層や褐色砂礫層の地山が堆積していた。

遺構検出状況は、A区では中央北側と南西隅にのみ遺構面が残存しており、その他は江戸時代の大規模な土取穴で占められていた。遺構面では土壌やピットなどを検出したが、いずれも近世の遺構であり、小規模な土取穴と考えられる遺構も検出した。B区では土取穴は未検出であり、第1面に江戸時代の遺構面、第2面に平安時代以降と考えられる遺構面が残存していた。第1面では柱穴、土壌などを検出したが、第2面では明確な遺構は検出しなかった。A・B両区ともに平安時代の遺構は未検出であった。以上の状況から遺構数は少なく、A区では土壌9基(土壌1・3・4・8～11・13・14)、ピット2基(ピット12・15)、B区では土壌7基(土壌1・13・14・16～18・22)、柱穴4基(柱穴15・19～21)を検出した。

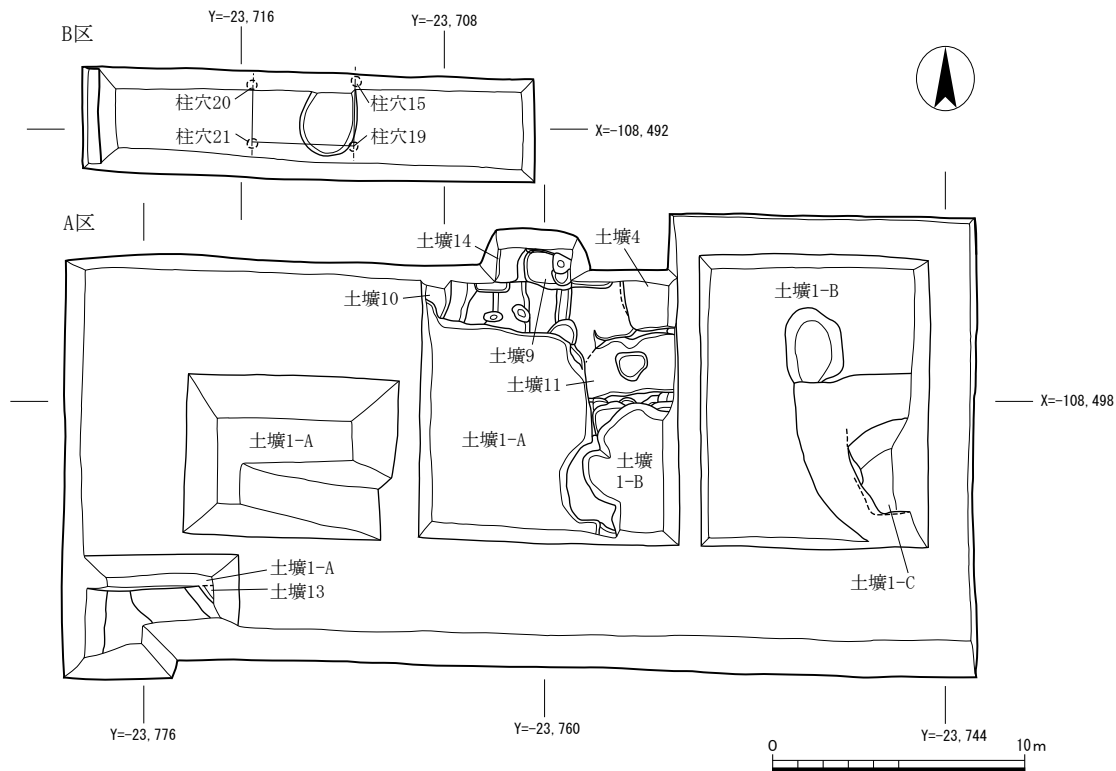


図2 遺構平面図 (1:300)

土壙1 (A区) は、江戸時代の大規模な土取穴である。遺構の全体は調査区外にまで広がっており、規模や形状は未確認であったが、調査区の中央付近で東西に大きく分かれ、2基以上の遺構になる可能性があった (土壙1-A・B)。遺構の深さは調査の最終段階で東壁側の一部を断ち割り掘り下げたところ、地表下4.5m (標高51.8m) で底部を検出した (土壙1-C)。遺構埋土は、褐色系の砂礫や暗褐色から黒褐色の砂泥や泥砂などが交互に重なった典型的な互層堆積の状態を示していた。遺物量は少なく、平安宮関連の軒瓦が混入遺物として少量出土した。

土壙4 (A区) は、調査区中央の北壁際で遺構の南東部を部分的に検出した。埋土の土質や堆積状況から土壙1とは独立した遺構と考えているが、これの一部分である可能性もある。近世の遺物に混入して平安宮関連の軒瓦が比較的多量に出土した。

土壙13 (A区) は、調査区南西隅の南西グリッドで検出した。遺構の西壁の一部を検出しただけで、規模や形状は明らかではない。遺構の深さは地表下2.6m (標高53.7m) まで掘り下げたが、底部は未検出である。西壁面は20～30°の角度でゆるやかに傾斜していた。流路とも想定されるが、土取穴の可能性もある。

柱穴15・19～21の4基 (B区) は、いずれも径0.3m、深さ約0.4mである。約4.0mの間隔を置いて柱間2.0mで並ぶ南北方向の2列の柱列で、南北棟の建物の可能性がある。

遺物 平安時代から江戸時代までの遺物が整理箱にして21箱分出土した。その内訳は土器類10箱、瓦類11箱である。瓦類には軒瓦4箱分が含まれている。

平安時代の遺物は、近世の遺構に混入して出土した土師器皿、須恵器杯蓋・鉢・壺・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、白磁椀、青磁椀、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などである。平安時代前期

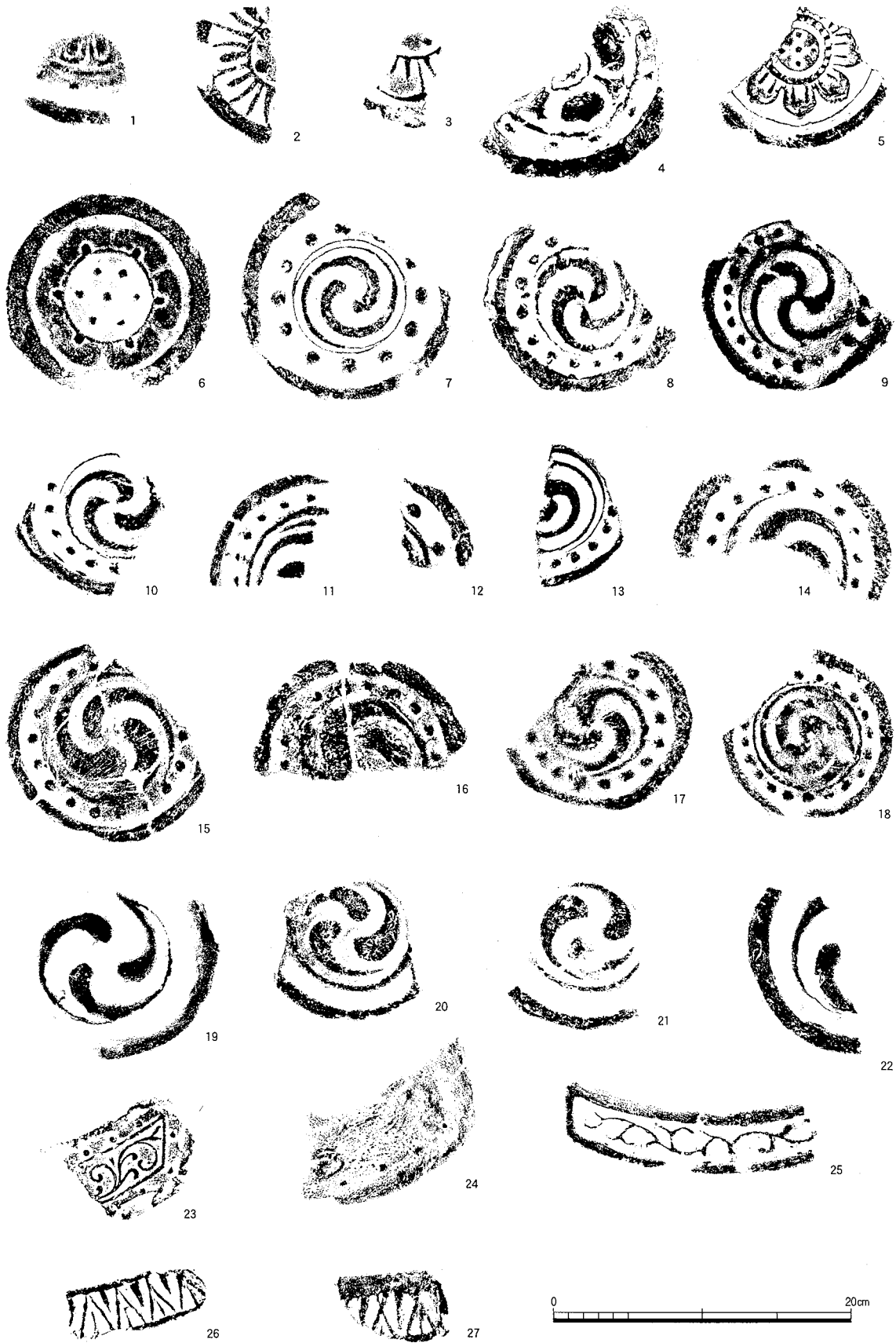


図3 軒瓦拓影 (A区土壇 1 : 24 A区土壇 1 ~ 3 · 5 ~ 23 · 25 ~ 27 B区土壇) (1 : 4)



図4 文字瓦拓影 (1:2)

から中期の遺物も含まれているが、主体は平安時代後期の遺物である。鎌倉時代から室町時代の遺物は、土師器皿、瓦器羽釜などが土壇4から混入して出土した。桃山時代から江戸時代の遺物は、土師器皿・塩壺、国産陶磁器椀・皿・鉢・播鉢などがある。

平安宮関連の遺物と考えられる軒瓦は混入遺物としてA区の土壇4から主に出土したが、土壇1（土取穴）やB区の遺構からも少量出土した。軒瓦の内訳は軒丸瓦30点（巴文16点、蓮華文9点、不明5点）、軒平瓦8点（唐草文6点、幾何学文2点）で、計38点を数える。遺存状態の良好なものを図示した。軒丸瓦に巴文が多いことが特徴的といえ、大型の破片が多く、中には丸瓦部を含め完存に近いもの（図3-18）も含まれている。また、平瓦凸面に凹型成形台の痕跡を明瞭に残し、凹面に木工寮の造瓦であることを示す「木口」銘の刻印をもつ平安時代前期から中期の文字瓦もみられる（図4）。これらは平安時代前期から鎌倉時代までの時代幅があるが、平安時代後期のものが多い。

小結 校内での発掘調査は本調査が3回目となり、今回こそは平安宮関連の遺構が検出されるであろうと期待されたが、江戸時代の遺構である土取穴に攪乱されていて未発見であった。

しかし、平安宮関連の瓦類の出土は江戸時代の遺構に混入していたとはいえ、校内では初めての出土例であり、貴重な発見となった。これらは宮内官衙の設営状況あるいはその存続期間などを具体的に検討していく上で重要な資料となる。

大規模な土取穴について補足しておく。改築工事に伴って実施された地質調査の報告資料を参考に推定すると、土取穴の深さは地表下4.1～5.5 mにまで達すると想定される。また、粘土層は砂礫層と交互に堆積しており、地表下2.0 mまでの間で、層厚0.3～2.1 mの3～4層の粘土層しか確認されていないことから、粘土層自体の堆積量は決して多くない。調査の最終段階で検出した土壇1-Cは、地表下4.2 mの砂礫層下に堆積する粘土層を求めて掘り下げられた状況であり、土取り作業の困難な一面を物語るものである。

仁和小学校の東に隣接する日蓮宗立本寺は、当初京極今出川（現立本寺前町）にあったが、江戸時代中頃、宝永五年（1708）の大火にあって焼失し、現在の場所に移った。移転当時は豪商灰屋紹益のかんりの援助があったとされる。移転時の伽藍配置は七本松通以西、下ノ森通以东とされており、当地点は境内地に含まれない。しかし、江戸時代後期には寺地が約十万坪あったとされることから、おそらく当地点も寺域内に取り込まれていたと考えられる。今回の調査では立本寺との関連を示す直接的な資料は得られなかったが、この遺構の時期が立本寺移転の時期とほぼ一致すること、労力を尽くして大規模に掘られ、短期間に埋め戻されたものであることなどから、この遺構は豊かな財力を背景にした寺院の造営を目的に土砂採掘した土取穴とも考えられ、立本寺関連の遺構と推定することが可能である。立本寺の伽藍配置などについては三木随法氏（日蓮宗教法院）に御教示を得た。記して御礼申し上げる次第である。（長戸満男）

2 平安京左京北辺四坊（図版1・4～9）

経過 本調査は京都和風迎賓施設の建設に伴う第1回目の発掘調査である。調査対象地は平安京北東隅の東西2町、左京北辺四坊五・八町に位置する。五町は藤原公親や小野延貞の邸宅が、八町は藤原褒子の「京極殿」が想定される。また南側の六・七町には、藤原良房の邸宅「染殿」や清和上皇の後院「清和院」が所在したとされる。このほか当地は、桃山時代から江戸時代の全期間を通して、公家衆の屋敷が集中していたところでもある。

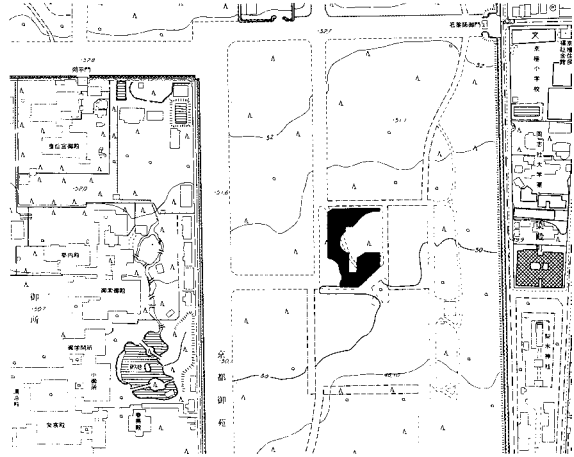


図5 調査位置図（1:7,500）

発掘調査に先立ち、仮り囲い設置ならびに敷地内の樹木移植に伴う立会調査を実施した。仮り囲い設置に伴う立会調査は、1998年1月6日より1月19日まで実施した。幅1.8m、深さ0.6mの仮り囲い設置に伴う掘削に立ち会い、壁面を清掃し層序の把握を行った。すべて江戸時代の遺構・整地面にとどまった。

樹木移植に伴う立会調査は、平成9年（1997）12月18日より開始した。まず敷地の西辺・北辺の生垣が撤去された。掘削深は0.4mと浅く、江戸時代の盛土層の範囲内であった。樹木移植は平成10年（1998）1月から3月前半まで行われ、御苑内各地区に移植された。掘削深は大きい樹木で深さ約1.5mであった。多くは江戸時代の整地層・盛土層の範囲内であったが、一部で地山の砂礫層といわゆる聚楽土に類似した泥土層（聚楽土と呼んでおく）がみられた。石列や石垣、花崗岩の切石、漆喰の暗渠、火災による焼土の入った土壌、火災瓦の土壌、土器の廃棄土壌、小礫の整地面、洪水による砂礫層などを確認した。

発掘調査は南半分を第1調査区として開始した。3月末より重機掘削を北東側から開始したところ、現地表下0.5mで黄色系の整地層を検出し、この上面で建物の礎石を認めた。そして、礎石建物、焼瓦を含む土壌、石組井戸、土管を入れた溝、石垣をもつ溝、礫敷の通路など江戸時代前期の遺構群を検出した。5月下旬に全景写真を撮影し、建物と遺構の関係が明確となった6月9日には記者発表、6月13日には現地説明会を開催、約200名の参加があった。

礎石建物のさらにも礎石があり、建築当初の状態が明確になった。礎石建物の礎石を取り外し、集石遺構・井戸・通路などを順次掘り下げた。調査区の南部では、大規模な土取穴が重複すること、礎石建物を検出した北東部においても、下には大規模な土取穴が掘られている状況が判明した。砂礫の地山面上では、室町時代後期の柱穴を多数検出した。これらを調査し、7月末に2回目の全景写真を撮影した。石組井戸や柱穴を断ち割り、平安時代の遺構を調査した。調査区の壁面を断ち割りし、土層図を作成した。

第2調査区は8月中旬から開始した。この調査区は、重機掘削の段階で江戸時代後期の巨大

なゴミ処理の土壌が各所に掘られている状況が明らかとなった。ゴミ処理の土壌は北西部と中央部で特に大規模なものがあり、 $X=-108,380$ 付近では聚楽土の地山が東西に残ることが判明した。10月中旬には $X=-108,380$ 付近にある東西溝と調査区南半部の状況を写真撮影した。ゴミ処理土壌の掘り下げ、石組井戸、石垣をもつ溝などの検出作業を続行した。11月中旬に江戸時代前期の遺構の全景写真を撮影した。礎石建物は北東部で検出したが、第1調査区の礎石建物ほど遺存状態は良好ではなかった。石組井戸の断ち割り、北東部では整地層、洪水起源とみられる砂礫層を掘り下げた。北東部においては11月末から土取穴の連続する箇所（土壌1000とする）を掘り下げた。一連の土取穴によって、北東部の聚楽土は広範囲に採取されていることが判明した。土取穴をすべて掘り上げ、南半部では室町時代の遺構を調査し、12月中旬に2回目の全景写真を撮影した。北半部では聚楽土の地山面上で平安時代の溝が遺存していた（溝1054・1055・1058）。南半部の東壁沿いでは、平安時代の井戸を3基検出した（井戸1060・1061・1068）。調査区の壁面に沿って断ち割り、断面図を作成した。平行して3基の井戸を調査した。1999年1月より断面図の作成などを行い、同月末に埋め戻して調査は終了した。

遺構 基本層序 調査区内での地山の状況は、砂礫面と聚楽土の両方がある。前者は深さ1m以内で検出されるが、後者は室町・江戸時代に土取りが行われたので、検出面は深い。

北側から概説する。2区北東では大規模な土壌878が掘られていたので、上から1mまで盛土層があり、以下には焼土を含む整地層が0.1m、土壌を覆う整地層が0.4mある。それ以下は土壌878の埋土で、地表から2.8mで地山の聚楽土に達する。これより西 $Y=-21,152$ 付近の北壁では、上から0.8mに整地層があり、その下には洪水によるとみられる砂礫層が厚さ0.15mある。この下には灰黄褐色泥土層が厚さ0.1mある。下部の土取穴（北壁では土壌1015、南では土壌1000）での地山面までの深さは2.1mに達する。その西 $Y=-21,160$ 付近の北壁では路面状を呈する礫敷の箇所がある。礫敷層は地表下0.8mから1.2mまであり、数層に分層できる。その下では室町時代後期の土壌1043がある。土壌底までの深さは1.9mである。2区西壁は北端に土壌674が掘られている。深さ0.7mまでが土壌を整地した層で、下は土壌674の埋土が堆積する。土壌底までの深さは2.6mである。土壌674は $X=-108,377$ 付近で垂直に立ち上がる。これより南2.5mにかけては平坦面がある。敷地の境であったため、ゴミ穴が掘られることがなかったものとみられる。

$X=-108,397$ 以南では砂礫層が堆積する。この付近では砂礫層の上部に聚楽土の堆積がみられる。地山が最も高いのは2区南西の $X=-108,406$ 付近で、0.55mまでが整地層、0.2mが土壌埋土で、地山は0.75mで検出される。

1区北東部においても土取穴が分布する。江戸時代の礎石建物A1・A2は深さ1.0m付近にある。整地層は土取穴を埋めた際のもので、厚さ0.8mある。北東部での土取穴の埋土は厚さ0.5mで、穴底は深さ2.3mである。1区の中央部には洪水によるとみられる砂礫層が堆積する。地表下0.7mにあり、厚さ0.1mほどである。江戸時代後期に属する。

1区南壁付近の地山は砂礫層である。南壁の $Y=-21,153$ 付近では通路Dとした礫敷面が0.65mにある。その下は江戸時代の整地層があり、地山の砂礫層は深さ1.3mである。

平安時代の遺構（図6） 地山の聚楽土が広範囲に採取されたため、平安時代遺構の遺存状態は良くない。地山が削平されていない箇所では、井戸・土壌・溝などを検出した。富小路については、西築地想定位置で井戸1060・1061・1068を、路面想定位置の中央で溝1058、東築地想定位置で溝1054、さらにその東3mで溝1055を検出したため、計画どおり造られていなかったことが判明した。溝1058の東肩には礫を敷いた箇所がある。この礫敷面は2区北端から1区南端まで断続的に分布する。条坊計画の半分の規模で南北路が通っていた可能性がある。溝はそれぞれ幅約1m、深さ0.5mほどある。井戸1061は方形縦板組みの木枠構造であるが、井戸1060は下段に方形横板組み、上段に方形縦板組みと二重の木枠をもち、さらに中央には縦板を円形に組んだ複雑な構造をもつ。井戸1068は方形縦板組みの上部に石組みを円形にめぐらせた珍しい構造をもつ。以上は、平安時代の中期・後期に属する。

鎌倉時代の遺構（図7） 井戸309と井戸917が該当する。ともに河原石を組み上げた井戸であるが、石組みは下段で方形となる。井戸917は検出面から約2mで底に達する。

室町時代後期の遺構（図7） 平安時代の遺構と同様に削平された範囲が広く、遺構の残りは良くない。柱穴多数と井戸、土壌、礫敷面などがあり、室町時代の後半期（15・16世紀）に属する。

柱穴は掘立柱建物を構成するものであるが、建物としては復元できなかつた。柱痕跡は10cm前後と小規模なものが大半である。底に石を敷くものも少数ある。柱間2m前後で2間ないし3間分の柱並びが数列復元できたが、図示していない。井戸はすべて石組井戸で、調査区の西半で多く検出した。人頭大の河原石を積み上げて井筒を形成する。

1区北端、富小路想定位置の中央では礫を敷いた面が南北に分布する。富小路を踏襲した路面とみられるが、側溝に該当するものは

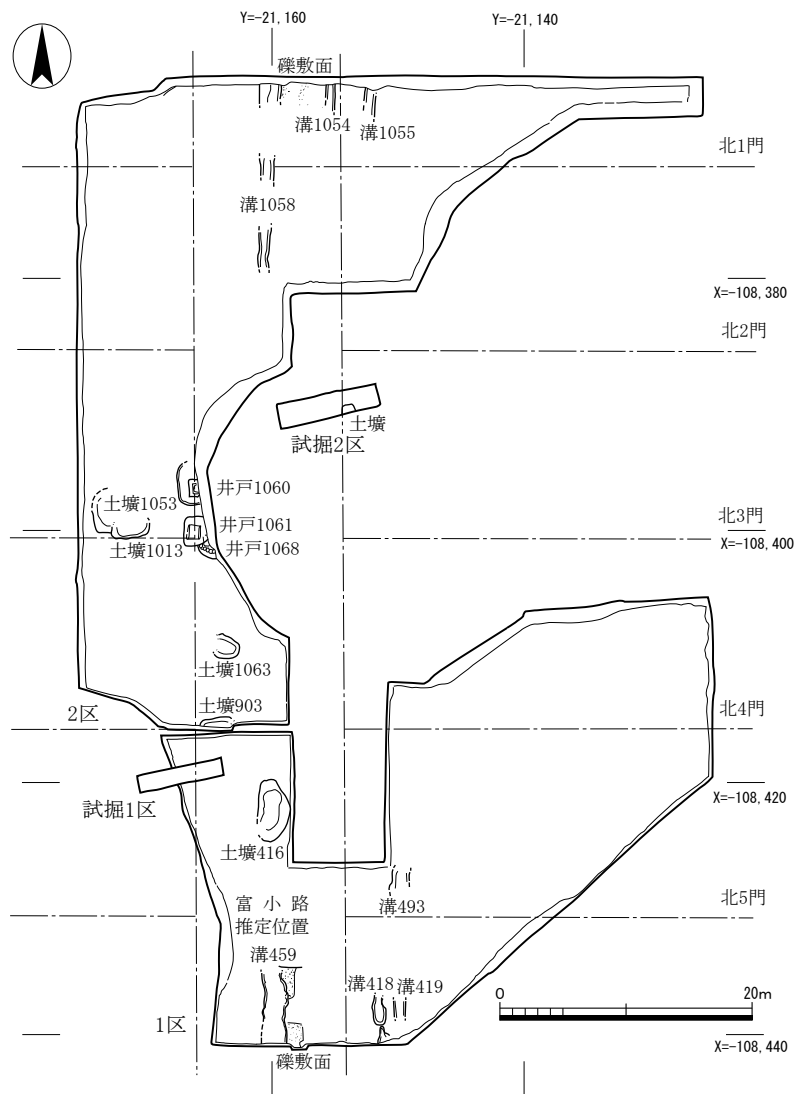


図6 平安時代中期から後期遺構平面図（1:600）

未検出である。礫敷面は先述した溝 1058 の上部に施され、西側では土壌 1043 上にも重なって敷かれる。

江戸時代前半期の遺構（図 8） 豊臣秀吉によって公家屋敷街が開かれる 16 世紀後半から 18 世紀中頃までを一括する。これらの遺構の下層では、1 区北半部と 2 区北東部で土取穴を検出している。これらは桃山時代に属し、公家屋敷街の整備に先だって実施された大規模な土取穴と推定できる。

江戸時代前半期の遺構には、礎石建物・通路・溝・井戸・集石・石組・石室・土壌などがある。1 区ではそれらを一体的に検出したことが特記できる。礎石建物は、1 区で建物 A 1・建物 A 2・建物 B、2 区で建物 L を検出した。これらは前述した土取穴を埋めて建てられたものである。建物 A 1・A 2 は特に保存状態が良好であった。建物 A 1 は 2 間×5 間で南東に軒の出をもつ。礎石は一抱えほどの大型石材が用いられる。建物中央には井戸 28 があるが、建物との関係は不明である。建物東端には石を並べ縁を造る。建物南東隅には集石 367・368 がある。雨水を受ける雨落の施設とみられる。建物 A 1 の北東隅で胞衣壺 45 を検出した。建物 A 1 はその後

に拡張されて建物 A 2 となる。建物 A 2 の東端は建物 A 1 と同じ位置にあり、棟を西に延ばす。建物 A 2 の南には東西に礫を敷いた面がある。建物間を通行する通路と考え、通路 C とした。通路 C の南には溝 213 があり、通路 C の側溝とみられる。通路 C は集石 368 の付近で消滅し、その先には石組 6・石室 97 がある。屋外でこれらの施設が利用されたとみられる。通路 C は 2 区では検出されず、2 区ではこの位置に柵 G がある。ただし、柵 G の北約 7 m には通路 C に類似した礫敷面を検出しており、通路 C より分岐した道筋がここにいたったともみられる。建物 B は建物 A 1・A 2 の南にある大型建物であるが、礎石がわずかし

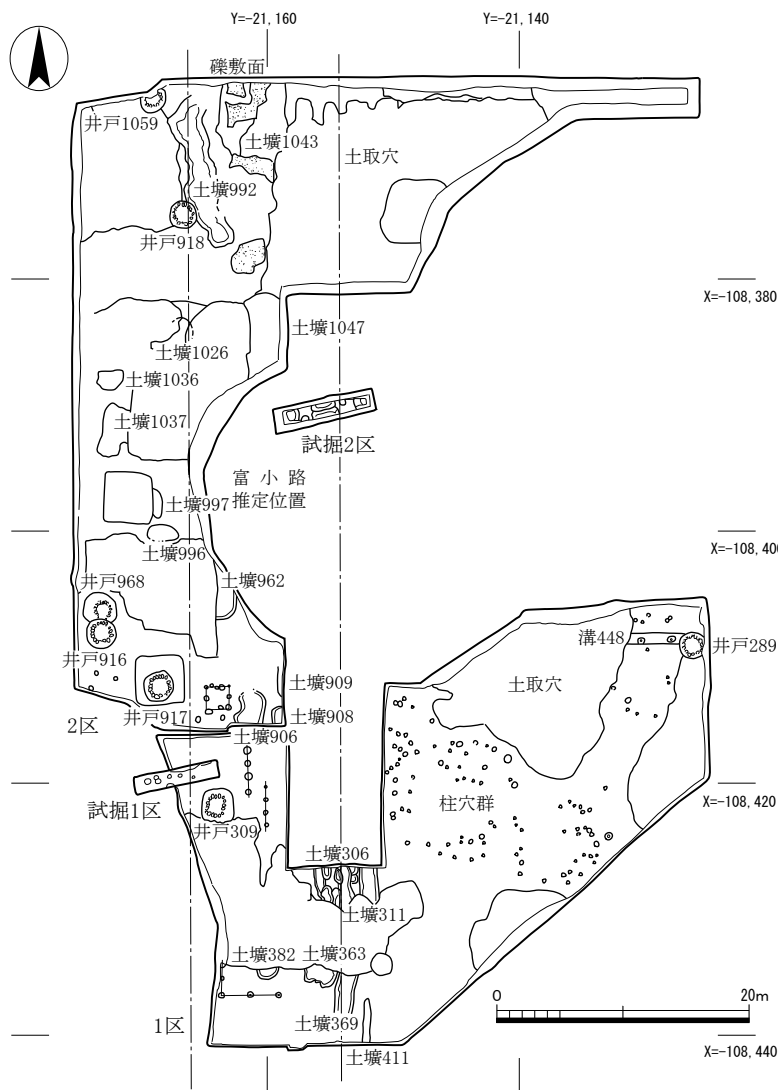


図 7 鎌倉時代・室町時代後期遺構平面図（1:600）

検出できていないため内部の間取りは判断できない。内部のほぼ中央で焼けた箇所があり、竈があったと想定した。建物Bは東端が建物A 1・A 2と並ぶ。北東隅に張り出し部がある。緑の施設であろうか。建物Bの南には集石遺構が分布する。集石 157・165 は建物Bと平行する東西に

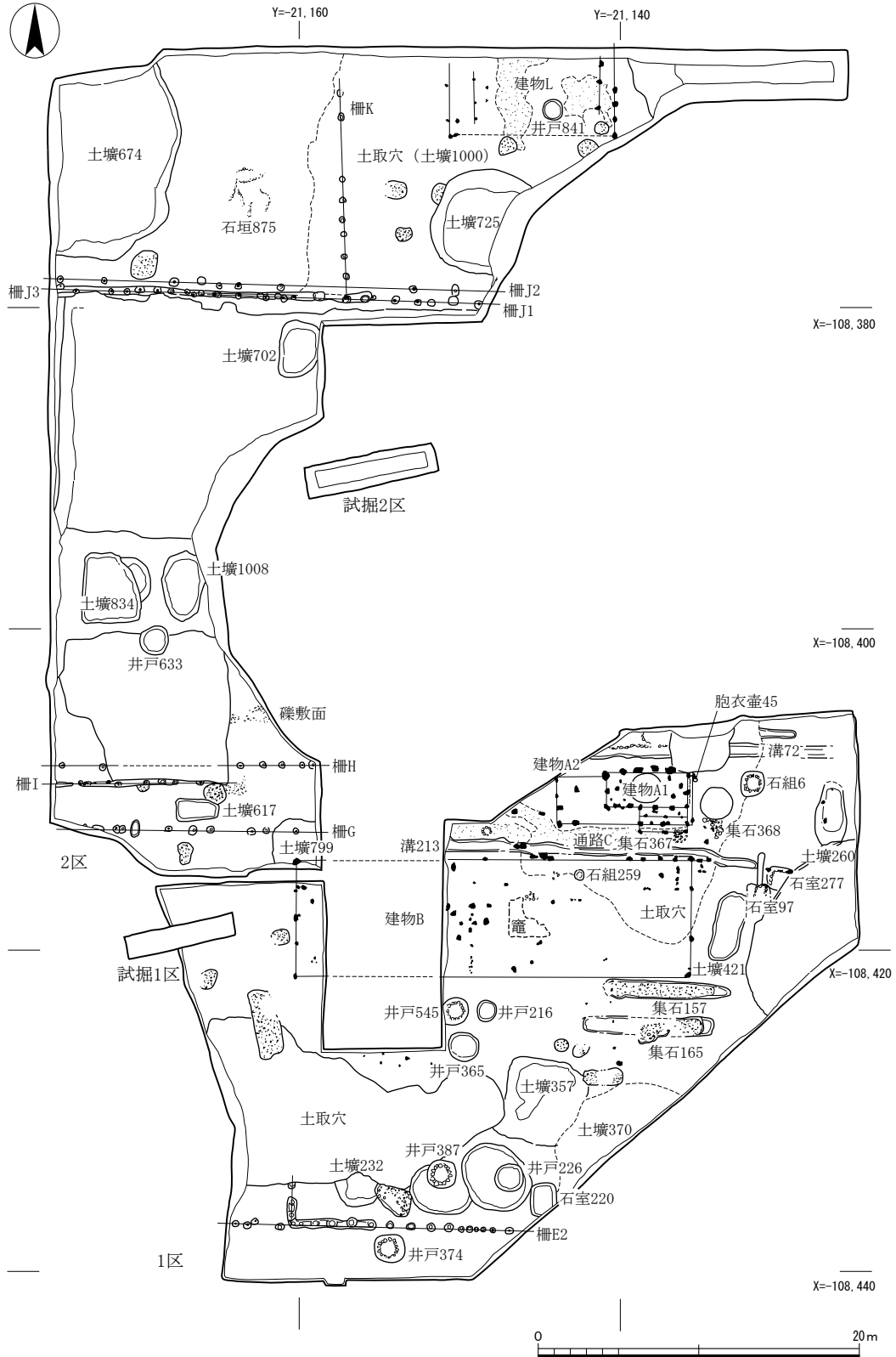


図8 江戸時代前半期遺構平面図 (1:400)

長い遺構で、屋外に設置された湿気抜きの施設とみられる。南端で東西柵E 2を検出した。溝底に柱穴が連続する布掘り柱列である。北端で検出した溝72は北壁に石垣をもつ。

2区北東部においても礎石建物とみてよい礎石列を2列以上検出した。礎石列を結ぶ形で建物Lを復元した。建物の東西中央は1区の建物A2の西端を北上させた位置にあたる。建物Lの南においても集石遺構が多数掘られており、建物Bの周辺と共通する状況がみられた。

X=-108,380付近では東西柵を3時期にわたり検出した。最古の柵J3は布掘り柱列の構造をもつ。柵J1はY=-21,157付近で南北の柵Kと直角に交わる。東西柵の北で土壌674を検出した。この土壌は大規模なゴミ処理のための穴であり、北と西の調査区外へ延長する。石垣875は土取穴を掘削した際に生じる排土の土留めを目的に構築された石垣とみられる。構築の順序からみて、西から東に土取り作業が進行したように判断される。

江戸時代後半期の遺構(図9) 18世紀中頃より幕末期にいたる遺構を一括した。建築に伴う遺構はみられず、かわって大規模な土壌が各所に穿たれた状況がみられる。1区南端の溝7は石垣をもつ溝である。石垣は2時期にわたり、最初に北側、後には南側に石垣を構築する。溝7の

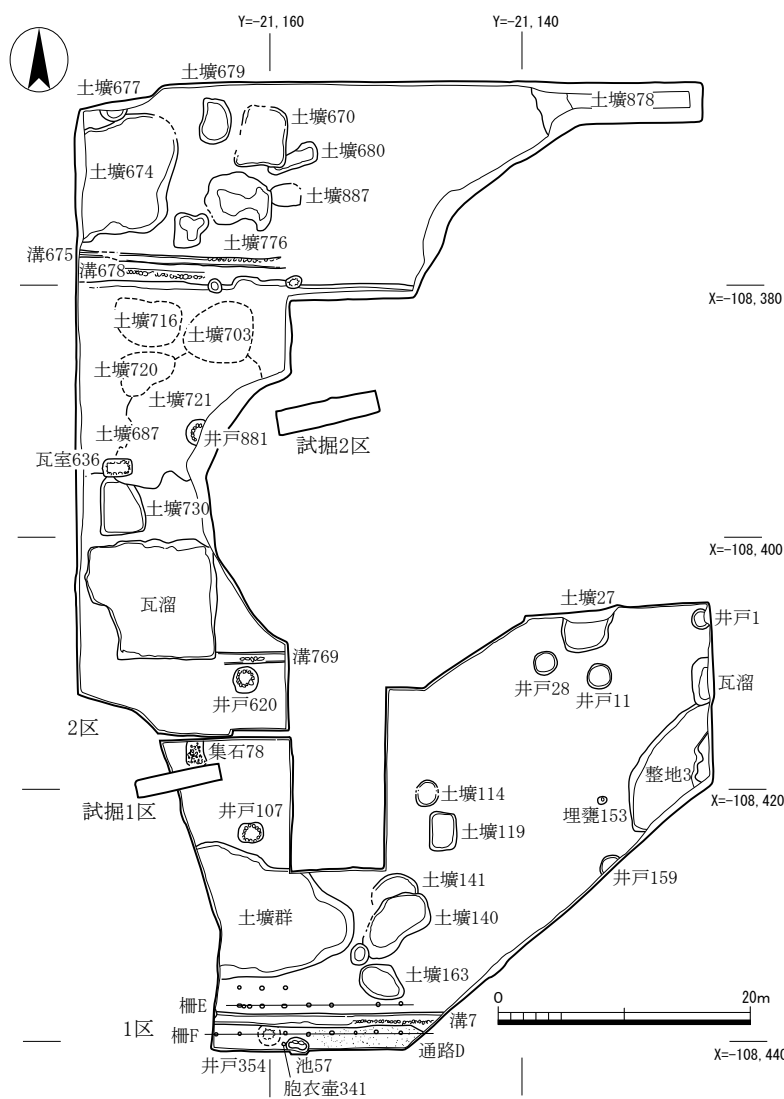


図9 江戸時代後半期遺構平面図(1:600)

北と南には柵E・Fがある。柵Fの南には礫を敷いた面がある。これを通路Dとした。これら溝・柵・通路は屋敷の境界施設とみてよい遺構である。南壁沿いで検出した池57は、庭園に伴う施設とみられるが、通路D上で検出しており、通路が廃棄された後に造られたとみられる。胞衣壺341も通路D上で検出している。溝7の北側にはゴミ処理のための土壌が点在するが、中央から東側にかけては顕著な遺構がない。

2区南端では南側に石垣をもつ溝769を検出した。その北には、焼けた瓦が大量に投棄された土壌がある。X=-108,380~395付近にも大規模な土壌が多数掘られ

る。土壙 687 と名付けたが、下部では土壙が連続する。これらを、土壙 703・716・720・721 として区分した。

X=-108, 380 付近では、石垣をもつ東西の溝 675・678 がある。この場所は、下層で東西の柵 J 1・J 2・J 3 を検出しており、屋敷の境界であったことを示している。溝 675・678 は、その最後の施設である。

溝 675 の北側においても大規模な土壙が多数掘られている。土壙 674 は 18 世紀中頃まで利用された大規模なゴミ処理の土壙である。2 区北東端で検出した土壙 878 も規模が大きく、調査区ではその西端を検出したにすぎない。土壙 776 からは、一分金が 1 枚出土した。

遺物 出土した遺物は整理箱にして 1290 箱である。江戸時代の各時期のものが大半で、出土総数の 8 割近くを占めている。平安時代より古い遺物としては、古墳時代前期の高杯・甕などの土師器を数点確認している。いずれも平安時代や江戸時代の遺構に混入して出土したものである。平安時代の遺物は前期にさかのぼるものはなく、中期・後期のものが井戸・土壙・溝などから出土している。溝 1054・井戸 1060 は 10 世紀前葉、土壙 1053 は 10 世紀後葉、溝 1055・1058・井戸 1061・1068 は 11 世紀末から 12 世紀初頭のものである。比較的出土量が多いのは土壙 1053 で、整理箱で約 20 箱分ある。土師器皿・甕・高杯・羽釜、須恵器杯・蓋・壺・瓶子・鉢・甕、緑釉陶器碗・鉢、灰釉陶器碗・皿・壺・耳皿、白色土器三足皿・碗・皿・高杯・盤、黒色土器碗・壺・甕、輸入陶磁器青磁・白磁、瓦類などである。白色土器の出土比率が高い。

鎌倉・室町時代の遺物の出土量は多くない。その中で比較的まとまって出土した土壙 1043 は、15 世紀代が中心である。土師器皿、瓦器鍋・釜・皿、焼締陶器甕・壺・鉢、天目碗、輸入陶磁器青磁・白磁・黄釉鉄絵陶器、瓦類、石製品などである。

桃山時代の遺物は建物 A・B、土取穴などから出土しているが、江戸時代前期の遺物と混在している。美濃・瀬戸系（灰釉・天目・志野・褐釉）、信楽系陶器、唐津陶器、備前陶器（徳利・播鉢）、朝鮮磁器（皿）、中国磁器（碗）などである。

江戸時代の遺物は幕末・明治初期のものも含めて、各時期のものが多種多様に出土している。膨大な遺物量のため整理作業が進んでおらず、詳細は論じられないが、各時期の出土資料の中で、一括性が高いと考えられるものを中心に概説しておく。

江戸時代前期の遺物は、建物 A・B、井戸 226・365、土壙 725・834 などからのものが主である。その中で土壙 725 からの出土遺物（図版 8-1）が整理箱で約 110 箱あり、量的には突出している。内容は、土師器皿・蓋、土師質土器焙烙・釜、瓦質土器火入・瓦燈、焼塩壺（京都産・泉州産）、唐津陶器碗・皿・鉢・甕・京焼風陶器、肥前磁器染付碗・皿・壺、色絵碗、瑠璃釉碗、白磁碗、青磁碗・皿、美濃・瀬戸系陶器灰釉・御深井釉・褐釉、丹波陶器盤・壺・播鉢、備前陶器徳利・播鉢、信楽陶器播鉢・壺・鉢、京焼壺・碗、軟質施釉陶器、中国磁器碗・皿・呉須赤絵・合子、銭貨（寛永通寶）、瓦類などである。泉州産焼塩壺の銘が二重枠「天下一堺ミなど / 藤左衛門」の単一であることや、肥前磁器、丹波播鉢、「清閑寺」「御菩薩」銘の京焼の資料などから、1660 年代を中心とする年代観が与えられる。

江戸時代中期の遺物は、土壙 232・674・730・776 などが主である。土壙 674 は土取穴の跡をゴミ捨穴に転用したもので、整理箱で約 200 箱の出土遺物がある（図版 8－2）。土師器が出土量の 8 割以上を占める。皿が主で、蓋・高杯がある。その他の遺物では、土師質土器焙烙・風炉・火入、瓦質土器火入・瓦燈、土製品人形・玩具・土鈴・つぼつぼ、焼塩壺（京都産・泉州産）、肥前磁器椀・皿・壺・鉢・小杯、肥前陶器京焼風陶器椀・皿、唐津系陶器椀・皿・鉢、京・信楽系陶器椀・皿・香炉・鬘だらい・花入・灯明皿、軟質施釉陶器椀・皿、信楽系陶器挿鉢・壺・甕、堺・明石系挿鉢、美濃系陶器椀・皿・鉢・鬘盥、備前陶器挿鉢・徳利、丹波陶器甕・鉢、瓦類、銅製品煙管・引手・髪飾、銭貨（寛永通寶）、石製品臼・砥石・硯・ぼんどこ、ガラス製品簪、骨製品髪飾、鉄製品釘・その他などである。焼塩壺の刻印が「難波浄因」「泉湊伊織」であること、肥前磁器がコンニャク文の粗製のものが大半を占めていること、肥前陶器が内野山窯指標の銅緑釉椀・皿と京焼風陶器の退化した山水楼閣文などが中心となることなどから、18 世紀半ばまでのものである。

江戸時代後期の遺物は火災整理のための土壙 27 や土壙 687（図版 9－2）・703・716（図版 9－1）・720・721 など大型の土壙の遺物が中心である。同じく土師器の皿・蓋類が大部分であるが、その他の遺物も多岐にわたっている。土師質土器涼炉・風炉・焙烙・火消壺・ゴマ煎・胞衣壺、瓦質土器火入・瓦燈、土製品人形・玩具・箱庭道具・泥面子、焼塩壺京都産・ロクロ製品、中国磁器端反椀、肥前磁器椀・皿・油壺・紅皿・杯洗・鉢・小杯・段重、京焼系磁器煎茶用急須・椀、京・信楽系陶器椀・皿・香炉・鬘盥・急須・片口・花入・灯明皿、軟質施釉陶器楽系茶道具類、信楽系陶器挿鉢・甕・壺・仏花瓶、堺焼灰器、堺・明石系挿鉢、美濃・瀬戸系磁器椀・皿、美濃・瀬戸系陶器椀・皿・鉢・甕・餌入、萩焼、備前陶器、瓦類、銅製品煙管・飾金具など、銭貨（寛永通寶）、鉄製品（釘・銚など）、ガラス製品椀・簪・ポッペン、石製品臼・砥石・硯、鑄造関連遺物埴塙・鞆羽口・とりべ、壁土などである。土壙 716 は土壙 687 の下層で検出したゴミ穴で、それぞれ 1830 年代、1850 年代までの様相のものである。



図 10 溝 7 出土イギリス製水差と井戸 354 出土皿



図 11 イギリス製皿裏面

幕末・明治初期の出土遺物は公家屋敷廃絶に伴う遺構からのものである。整地3・溝7・井戸354などが主で、特に溝7・井戸354ではヨーロッパ製の陶磁器やガラス製のボウルなどが一括出土している。図10・11はイギリス製のクリームウエアーで、底部のプリントマークから、水差がPinder, Bourne & Co. 社製（1862～82年操業）、皿がCockson & Chetwynd社製（1867～75年操業）のものである^{註1}。

小結 1・2区で検出した礎石建物は、江戸時代前半期に属する公家の屋敷跡である。屋敷の主は、豊富な絵図の存在によって比定することができる。礎石建物の下部には大規模な土取穴が掘られている。その埋没は桃山時代以降に求められるので、礎石建物は江戸時代前期には成立したことは確かである。該当する時期の絵図として、『中むかし公家町之絵図』（1610年代に成立）、『寛永十四年洛中絵図』（1637年成立）、『寛永後万治前洛中絵図』（1642年頃成立）などがある。これらを参考に屋敷の主について考える。

『現地説明会資料』（1998年6月13日実施）では、周辺屋敷との関係から、1区で検出した礎石建物を『寛永十四年洛中絵図』にみえる「千種少将殿」の遺構と考えた。しかし、東側調査区での所見やその後に実施した2区の調査状況から、再考を要することとなった。1・2区では東西方向の柵・溝を検出している。北から、柵J（これはJ1・J2・J3が重複する）、柵Hと石垣をもつ溝72、柵E2である。これらは屋敷の境界を示す施設と考えることができる。それぞれの距離を求めると、柵Jから柵H間が約30m、柵Hから柵E2間が約29mとなる。先の絵図3点には敷地の南北幅が数値で記載されている。しかもその数値は3絵図ともほぼ等しい。『寛永後万治前洛中絵図』を例にすると、北から「富小路右兵へ殿十九間」（1間1.96mとして約37m）、「（記載なし）十五間半」（約30m）、「菌宰相殿十四間半」（約28.5m）、「志水谷中将殿二十間」（約39m）と表記する。これに約30m間隔という東西方向の遺構にあてはめると、柵J以北が「富小路殿」、柵Jと柵H間が空白地（『寛永十四年洛中絵図』では「千種殿」）、柵Hと柵E2までの間が「菌殿」の屋敷とみるのが妥当となる。以上、現地説明会当時の比定とは異なる結果となったことを述べておく。

次に、「富小路家」「千種家」の境界と考えた柵Jは、先述のように3時期の重複があり、さらにこの場所で石垣をもつ溝675・678に改修される。同様に、「園（菌）家」「清水谷（志水谷）家」の境界と考えた柵E2も、柵E1と石垣をもつ溝7に改修される。さらに、柵Jと柵Eの付近には土取穴が掘られていないことも共通している。これらは、柵Jと柵Eの場所が江戸時代の全期間を通じて屋敷の南北境界となっていたとことを示すものと思われる。したがって、宝永の大火（1708年）以後に施行されたと考えられる後半期の屋敷配置においても、溝675・678以北が富小路家、溝675・678より溝7までが園家であったと想定できる。公家屋敷街の変遷については、以上のような見通しが得られた。

平安時代の遺構については、大半が削平を受けていたため十分な把握はできなかった。しかし、富小路については、条坊計画と異なる様相が判明し注目される。これは西築地想定位置で井戸が3基検出されたことや、側溝が該当位置に検出できなかったことで判断された。ただし路面想定

位置において礫敷面も検出しているので、狭い規模の南北道路が通されていた可能性も残る。あるいは、東西2町を一つの宅地として利用し、その中央に小径が通されていたことも考えられる。平安京北東隅での利用状況を知る貴重な資料である。

多量に出土した江戸時代遺物については、現状で判明している特徴をまとめる。

土器・陶磁器類の遺物組成の中では、土師器皿・蓋類の占める割合が極端に多い。町家を中心とする従来の調査では、17世紀以降土師器類の占める割合が徐々に減少し、19世紀では20%を超えることは少なくなる^{註2}。ところが土壙674は、18世紀半ばの比較的一括性の高い大型廃棄土壙であるが、概算でも土師器類の占める割合が80%を超える。

生産に関連する遺物がほとんど出土していない。京都は、近世を通じて常に手工業生産地の中心的な位置を占めており、発掘調査においても、一定の割合で生産に関連した遺物が出土するのが普通である。しかし本調査では、極めて少量の鋳造関係の遺物を除いて検出されていない。

幕末・明治初期の遺構から、基準資料になりうる一群の資料が検出された。19世紀代の考古学的な検証は、発掘調査が進んでいないこともあって全体的な解明にはほど遠い。しかし、今回調査した整地3・溝7・井戸354などから一括性の高い遺物群が出土しており注目される。とりわけ井戸354からは、イギリス製陶磁器を含めガラスコップ・ワインボトルなど洋食器が含まれており、西洋文化の受容を物語る資料とあって良い。

本調査地は、近世を通して公家町が形成されていたところである。出土遺物に中世的要素の多い土師器類が多く検出されることは、公家衆が古くからの生活習慣を近世においても持続させていたことを感じさせる。また公家という階層性を考えると、生産に関連した遺物が少ないことも肯定できる。一方、明治維新前夜に公家衆の果たした役割を考えると、西洋文化の波が公家衆の生活にも及んでいたことを知る資料が出土したことは興味深い。

(丸川義広・能芝 勉・木下保明・藤村雅美・辻 裕司)

註1 ヨーロッパ陶磁器とガラス製品については、神戸市立博物館の岡 泰正氏の教示による。

註2 堀内明博ほか「平安京左京二条四坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

鈴木重治『上京・西大路町遺跡桜の御所跡隣接地点の発掘—同志社大学育真館地点の

発掘調査—』同志社大学校地学術調査委員会 1997年など

3 平安京左京一条四坊 (図版1・10)

経過 本調査は京都御所南東隅の建春門脇に位置する参観者用便所整備工事に伴うものである。調査地点は平安京左京一条四坊八町にあたるが、文献史料から当八町の平安時代の様相は明らかでなく、鎌倉時代初期には後鳥羽上皇の御所が営まれたことが知られる。江戸時代初期の内裏造営の際には当八町の北辺がその範囲に取り込まれ、調査地点周辺は内裏の前面道路であったと考えられる。江戸時代中期、寛政度内裏の史料によれば内裏南面にみられる中央拡張部の東面築地付近となり、楽器蔵や伶人楽屋などの殿舎が建ち並ぶ区画に位置することとなる。

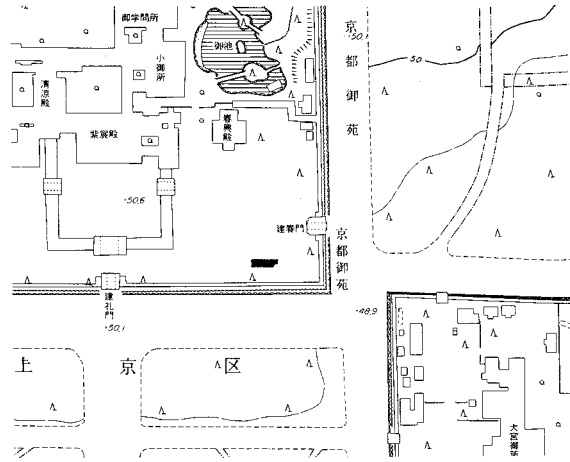


図12 調査位置図 (1:5,000)

京都御所での発掘調査は今回が2回目であり、1回目は昭和50年(1975)に実施され、平安京一条大路の路面などを検出した^{註1}。立会調査は過去数回実施されており、その都度成果を得ている。今回の付帯工事に伴う立会調査でも紫宸殿回廊の南西側で江戸時代の内裏造営用石材とみられる大型の花崗岩切石が出土し、承明門の南側で平安時代の遺物が出土したことなどから本調査にかかる期待は大きく、また京都御所内での本格的な調査であることからその成果が注目された。

調査区は東西15.0m、南北5.0m、面積75㎡の規模で設定したが、検出した石組み遺構の性格を確認する目的で東壁側北半部を東西2.5m、南北3.0m、面積7.5㎡で拡張したため、最終的に82.5㎡となった。石組み遺構は現状保存が可能となり、調査終了の復旧に際しては遺構の保護をはかるため細砂を一部使用して埋め戻した。これら一連の調査区拡張から設計変更を含めた遺構保存については、宮内庁京都事務所の理解と賛同を得て御指導いただいた。

遺構 検出遺構は江戸時代の築地1、柵列2、柱列45、道路敷きなど計57基で、平安時代の遺構は未検出であった。築地1は、二列一組の石列が幅約3.0mの規模で南北方向に配置された石組み遺構であり、調査区東端の現地地表下約1.4m(標高49.7m)で検出した。検出長は西側石組みが4.5m(石材6個以上)、東側石組みが2.3m(石材3個以上)を測る。石組みは路面敷きを掘り込んで構築されており、西側の掘形は幅約1.2m(東側は未確認)、中間部は幅1.1mほど開いていた。石材は60~90cm大の花崗岩の切石で、外側の東西面は方形に平面加工して化粧仕上げを施してあった。

柵列2は、東西方向に並ぶ柱列群の遺構であり、調査区中央で検出した。柱列群全体では最大幅1.6m、検出長約14mを測り、柱穴は33基を数えた。柱列は7列が確認でき、柱穴3~8基が柱間2.0~4.0mで配列されていた。柱列45は、築地1西側で南北方向に検出した柱穴2基で、柱間約2.8mを測る。掘形は径0.2~0.3mで、径10cm前後の柱当りが空洞化しており、小型の柱穴である。北壁断面で見られるように、柱当りが石組み側に傾斜しており、築地の構築に伴う足場などの関連遺構と推定される。道路敷きは、路面5枚を検出した。全体の厚さは約0.4mを

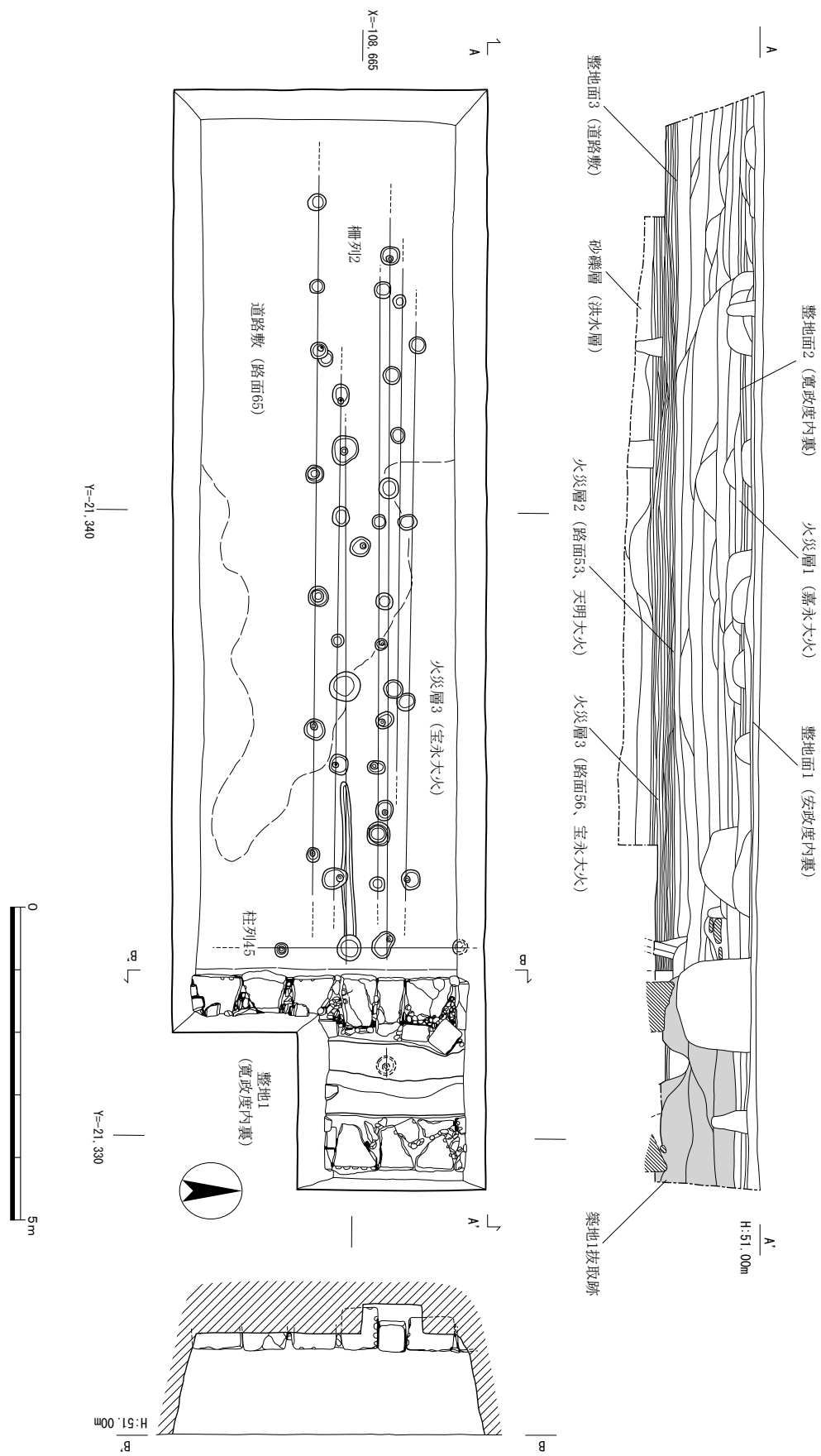


图 13 遺構実測図 (1:100)

測る。各層を細分すれば2～6cmの厚さで11層に分層でき、小礫混の泥砂層と細砂層とが交互に堆積していた。また、焼土を多量に混入する火災層が最上面の路面53と中間面の路面56で認められた。

遺物 江戸時代から平安時代までの遺物が整理箱にして5箱分出土した。江戸時代の遺物は土師器、国産陶磁器、瓦などがあり、中期以降の遺物が相対的に多い。瓦には棟込瓦の菊丸瓦が多く出土しており、菊花文には8弁と16弁の2種類がみられた。また伏見城跡でも出土例のある桃山時代から江戸時代初期の菊丸瓦もみられた。室町時代から鎌倉時代の遺物は近世の層遺構に混入して出土し、平安時代の遺物も同様に土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。平安時代後期の遺物が多量であった。

小結 本調査の目的は、当左京一条四坊八町の平安時代の様相を知る手掛かりを得ることであったが、江戸時代をさかのぼる遺構が検出されなかった。しかし、混入遺物として出土した室町・鎌倉・平安各時代の土器や瓦類などからみて、ほかの平安京の調査成果と同様、当八町においても文献史料だけではうかがえない各時代の遺構が残存する可能性が高まった。

本調査の成果は江戸時代の遺構から近世内裏の変遷をたどれたことである。ここでは各遺構を内裏の変遷史に位置付けて古い時期から順を追って概述しておく。最も古い遺構は道路敷きである。路面56の火災層は宝永五年(1708)の大火によるもの、路面53の火災層は天明八年(1788)の大火によるものと考えられ、この遺構は延宝度から宝永度にいたる内裏の前面道路と推定される。柵列2は、宝永度内裏の南面築地から7～8m南側の位置にあると推定される。宝永度内裏の史料によると、天皇が退位後に仙洞御所へ移徙する際、埒という背の低い柵列を道路内に仮設したとあり、柵列2はその北側部分と推定される。柱列が数多く複数回の柵列を同時に検出したと考えられる。天明大火後、寛政度内裏造営では主要な殿舎を平安時代の様式に戻して再建された。その際、敷地の南北が拡大されたが、南側は全面的に拡大すると、南東では女院御所の北西端に接し、南西では清水谷家敷地の北東端に接するため、必要とされた中央部だけが突出した形で拡張された。今回の調査ではこの拡張部が厚さ約1mの盛土によって造成され、寛政度内裏の整地面が現地表付近にまで嵩上げされたことがわかった。築地1は、築地基壇の基礎石と推定され、出土遺物や史料などから寛政度内裏の南側拡張部東面に築かれた南北築地に相当する遺構であることが判明した。従来、この南北築地の詳細な位置に関して内裏の史料では東端築地から「十五間」あるいは「十六間半」との記載がみられただけであったが、今回の調査においてこの長さが29.7mであるとの実数値が明らかとなった。

以上、寛政度内裏の築地遺構をはじめ、検出遺構を通じて内裏の変遷過程の一端を解明した。これらは近世内裏の沿革史を研究する上で貴重な成果であり、京都御所の最初の遺構として今後の重要な資料になるであろう。なお、今回の調査成果に基づいて推定復元断面図の作成を試みた^{註2}が、細部に関してはさらに検証する必要があると考えられ、今後の課題となった。(長戸満男)

註1 松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』28 1976年

註2 長戸満男「京都御所の築地跡」『リーフレット京都』132 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1999年

4 平安京左京二条四坊 1 (図版 1・11～13)

経過 調査地は、平安京左京二条四坊三町の西端部にあたり、西側は東洞院通、東側は間之町通に面している。本町は、平安時代中期に源是輔の邸宅があったとされ、万寿三年(1026)には源扶義から藤原兼隆へ伝領されたと伝えられる。平安時代後期には源有仁の邸宅となり、後白河上皇の臨時の御所として使用された。その後は、藤原師長の冷泉東洞院亭の場所とも伝えられる。鎌倉時代の藤原定家・為家の「冷泉家」^{註1}「高倉家」の比定地の一つでもある。また、

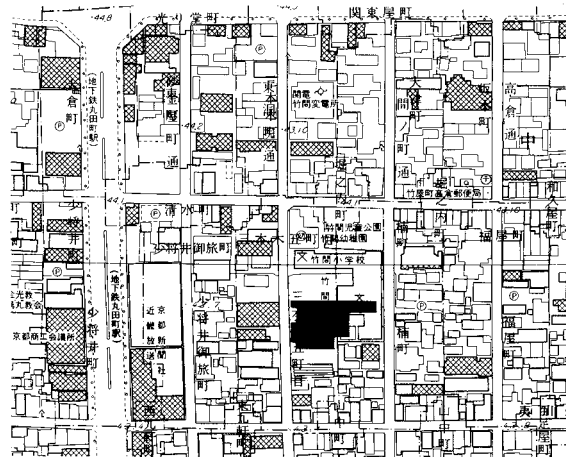


図 14 調査位置図 (1:5,000)

調査区の西半は東洞院大路内にあたり、上記の邸宅遺構に加えて、道路、側溝、築地などの検出が期待された。また、当地は明治初年に開設された竹間小学校の跡地であることから、近現代の攪乱による遺跡破壊が比較的少なく、とりわけ運動場部分にあたる調査区西半は遺構の残存状況が良好であることも予想できた。

調査は、天明大火(1788)に伴う焼土層下の洪水砂礫層(砂礫①)中位、現地表下約1mまで重機で掘削し、これ以下を人力で行った。平面的な調査は、砂礫①の下面(第1面)、宝永大火(1708)に伴うと思われる火災面(第2面)、江戸時代初期の最初の町家と思われる面(第3面)、遺跡の基盤である黄褐色シルト～砂礫層上面(第4面)を調査したのち、同じ層順で部分的に残る平安京以前の遺構を調査した(第5面)。各遺構面で平面図と写真記録を作成し、遺構面と遺構面の間で検出した遺構についても随時記録した。図面類はすべて手描きで作成した。

この間、3月14日には地元向けの現地見学会、3月16日には御所南小学校5年生対象の見学会を催した。

遺構 江戸時代の堆積層は、主として人為的な整地層の細かな重なりからなる。整地は各町家単位で個別に行われるため、各整地層は町家境を越えて広がることはない。また、均質で薄い化粧土を重ねる建物下部分の整地と、生活廃棄物を多く包含する裏庭部の整地は異なる場合が多い。建物下部分の整地も土間敷きのおり庭部分と床下部分で様相が異なる。したがって、これらの整地層を、調査区全域にわたる基本層序として記載することはできない。しかし、各町家の整地層の重なりはそれぞれ、数枚の火災層と洪水砂礫層をはさんでいる。これらは町家境を越えて広がる堆積層であり、相互の先後関係と出土遺物に留意すれば、鍵層として評価できる。これを基準とすることで、各町家整地層の記載が可能になり、年代的な関係を把握できる。また、火災層は宝永(1708)、天明(1788)、元治(1864)の各大火に対応すると考えられ、暦年代の指標になる。洪水砂礫層も古記録に記載された洪水に比定できる可能性がある。これら江戸時代堆積層の下面は、一部に残る16世紀末の整地層をはさんで基盤層になる。古代から中世にかけての整地

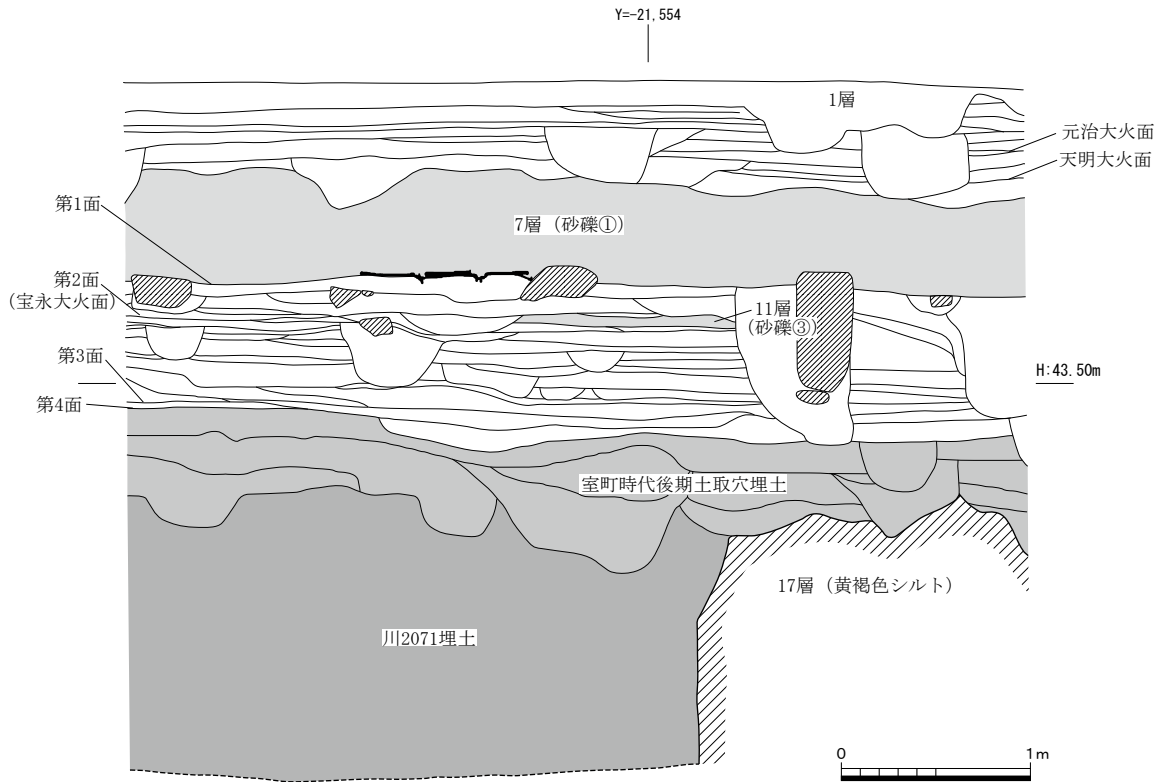


図15 北壁断面図 (1:40)

層は存在しない。火災層と洪水砂礫層を基準に据えた基本層序は以下のとおりである。括弧内の数値は厚めに堆積している部分の凡その層厚である。

1層…旧竹間小学校盛土層 (30 cm)、2層…19世紀後半の町家整地層群 (5 cm)、3層…火災層 (15 cm、上屋倒壊層、焼灰層、焼面に細分できる。元治大火対応)、4層…18世紀末～19世紀前半の町家整地層群 (30 cm)、5層…火災層 (15 cm、上屋倒壊層、焼灰層、焼面に細分できる。天明大火対応)、6層…18世紀後半の町家整地層群 (10 cm)、7層…洪水砂礫層 (60 cm、砂礫①)、8層…18世紀中頃の町家整地層群 (20 cm)、9層…洪水砂礫層 (25 cm、砂礫②)、10層…18世紀前半の町家整地層群 (20 cm)、11層…洪水砂礫層 (5 cm、砂礫③)、12層…火災層 (2 cm、焼灰層、焼面に細分できる。宝永大火対応)、13層…17世紀初～18世紀初めめめめの町家整地層 (40 cm、洪水砂礫3枚を挟む)、14層…最初の町家整地層 (2 cm、17世紀初)、15層…褐色砂泥層 (20 cm、16世紀末の整地層)、16層…褐色シルト層 (縄文時代?の自然堆積層)、17層…黄褐色シルト～砂礫層 (沖積層下部層)。

以上の堆積層のうち、面的な調査を行ったのは、7層下面 (第1面)、13層上面 (第2面)、14層上面 (第3面)、16・17層上面 (第4面、第5面) である。

江戸時代の遺構は第1～3面で検出した。各面で江戸時代初期から近代にかけての町家跡を、東洞院通側に7軒、間之町通側に6軒の計13軒分を検出した。東洞院通と間之町通で挟まれた空間は、南北方向の背割り溝246によって東西に二分される。第1面の背割り溝は兩岸を石積みで護岸する。各町家単位で石の積み方が異なっており、個別の町家世帯を越えた協業によるもの

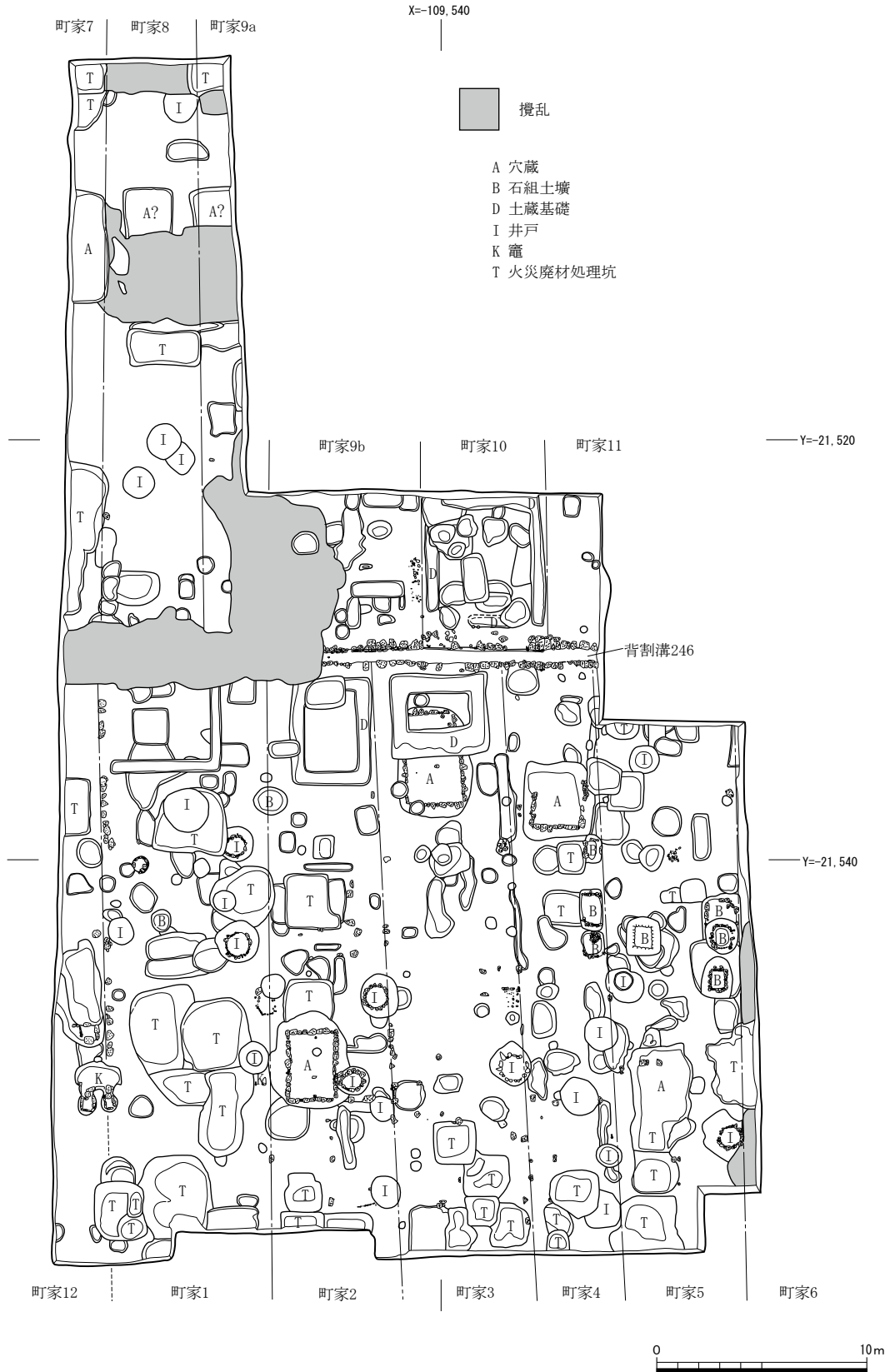


图 16 第 1 面遺構平面図 (1:300)

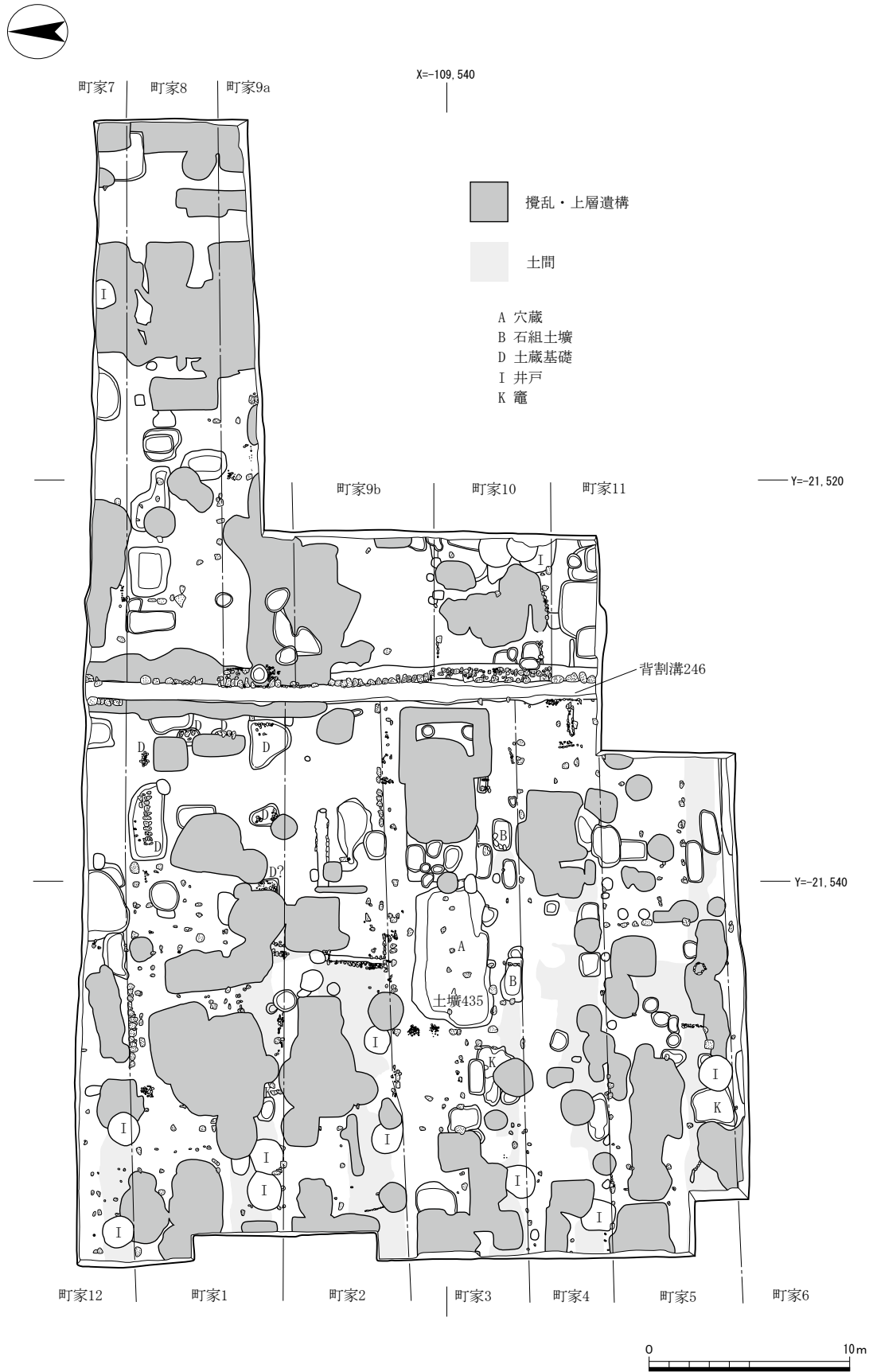


図17 第2面遺構平面図 (1:300)



図18 第3面遺構平面図 (1:300)

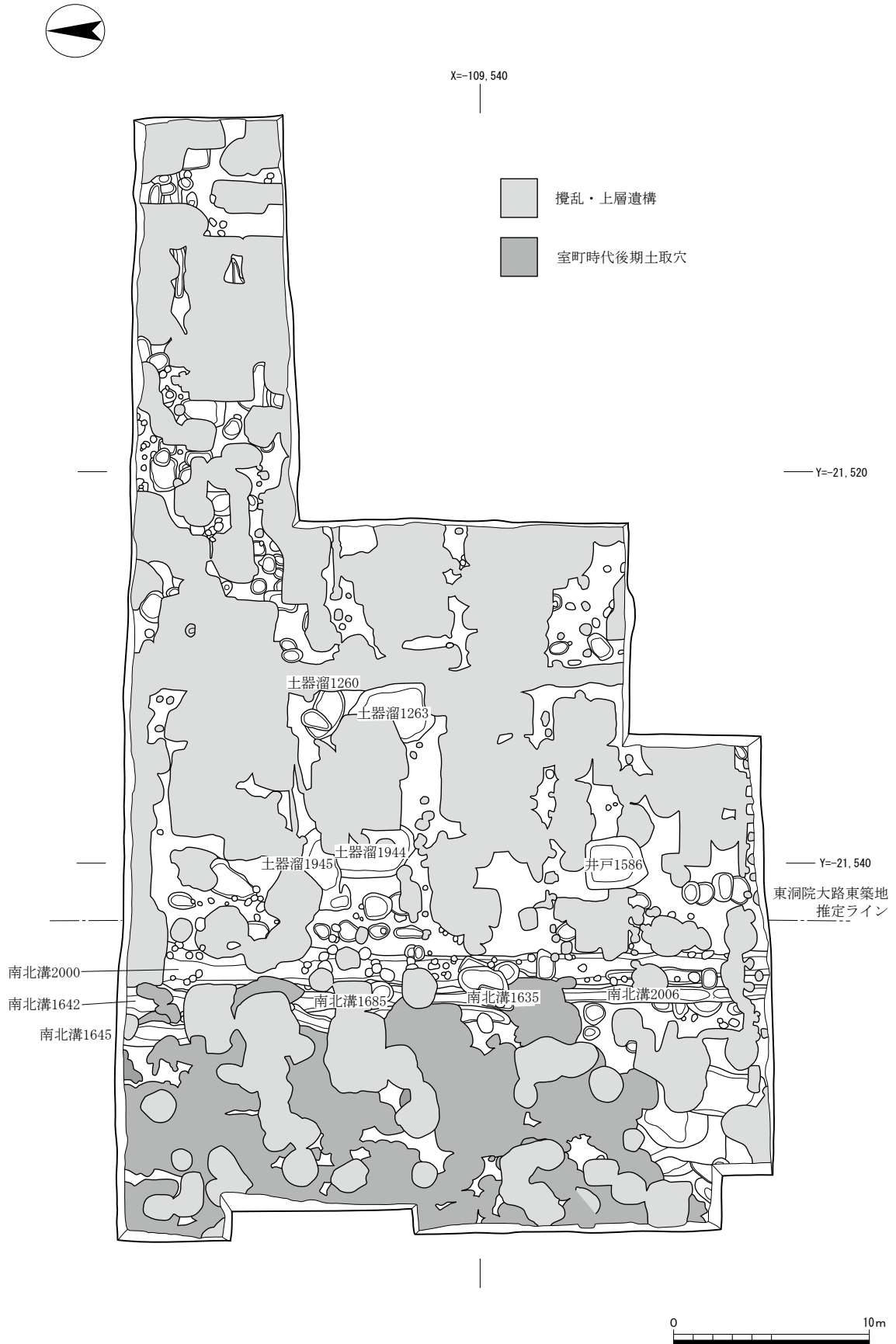


図19 第4面遺構平面図 (1:300)

ではなく、整地土の積み重ねに応じた各町家単位での作業である。第2面では石積みの護岸は、間之町通側の町家のみにもみられる。第3面では、石積みの護岸はなく、木製の杭と板を用いた護岸の痕跡のみを検出する。町家割りは、最初の町家が築かれた江戸時代初期から近代にいたるまで基本的に変化しない。町家境は、建物基礎の石列（第1面・第2面）か柱列（第3面）、もしくは整地土の違いで認識できる。

第1面から第3面を通じて、町家空間のオモテ側（道路側）半分には常に建物がある。建物は第1面と第2面では礎石建物、第3面では明確な礎石は検出できていない。第1・2面では建物の南半部に道路に面した玄関部分から屋敷奥に通じる土間部分（通り庭）がある。通り庭の幅は広いもので京間1.5間、狭いもので京間1間ある。通り庭には井戸、竈などを検出する。通り庭部分の奥で便槽もしくは流し関連の遺構と考える石組土壌や土壌を検出している。第3面では、土間部分は明確に検出されず、各町家ごとの井戸も明確ではない。第1・2面のとおおり庭の北側は座敷部分にあたり、各町家のこの部分に礎石群や長方形の穴蔵を検出する。石組みの穴蔵は第1面のみで検出され、天明・元治いずれかの大火か、文政十三年（1830）の京都大地震もしくは、竹間小学校関連施設建設時の町家の取り壊しによって廃棄されている。第2面の町家3には石組みを用いない穴蔵風の遺構（土壌435）を検出したが、これは宝永大火期の施設ではない可能性がある。

町家裏側（背割溝側）半分は、各時代、各町家で様々な空間利用が行われている。第1面では、最奥部に土蔵を有する町家（町家1・2・3・10）、井戸を有する町家（町家1・5・8）などがある。第2面では、明確に土蔵を検出できたのは町家1のみである。第3面では、最奥部に大型のゴミ穴を有し、オモテの建物部分との間は空間地として残すのが一般的であるが、第2面では、各町家奥にも礎石や土間が検出され、背割り溝付近まで建物が続いていた様子がうかがえる。

第4面では平安時代前期から室町時代後期の遺構を検出した。

室町時代後期の遺構には溝、土取穴、柱穴、土壌などがある。東洞院通の東側溝状の溝（南北溝1645）を認めるが、遺物が少なく時期は明確ではない。これより西側の道路部分で、土取穴を数多く検出した。土取穴は道路内の良好なシルト層が分布する範囲に密集する。道路側溝より東の屋敷内側にあたる部分には、基本的にこの時期の遺構はなく、側溝の内側に掘立柱の柱列を認めるのみである。調査区東部の間之町通側には、柱穴、土壌などを認める。

鎌倉時代の遺構には井戸、土器溜、溝、路面などがある。鎌倉時代初期の井戸1基（井戸1586）と土器溜数基（土器溜1263・1260など）を検出した。井戸には2時期の重なりがある。古い方は円形の水溜を有する。新しい方は板で組んだ方形の水溜を有し上部は方形の板組みである。また、平安時代の東洞院大路東側溝の少し西側で、連続しない南北溝状の遺構（南北溝1642・1643・1684・1685）を検出した。柱痕跡は検出していないが、屋敷と道路を画する屏の布掘り掘形の可能性がある。

平安時代前期から中期の東洞院大路東側溝（南北溝2000）を検出した。また一部に小礫敷の路面を検出した。築地は未検出で、屋敷の内側にも建物や井戸などの遺構を検出することはでき

なかった。また、東洞院大路内に北東から南西方向の自然流路（川 2071）と、東洞院大路東側溝と一部重なる自然流路を検出した。いずれも平安時代前期の土器類を含む。川 2071 は 17 層を削り込み、浅い谷地形の底部を流れる大きな自然流路の一部で、最上部のシルト層のみに遺物を包含している。平安時代以前から存在していた自然流路と考える。溝 2070 も東洞院大路上を流れるが調査区北端では、大路東側溝と重なるため、側溝のみでは処理できなくなった雨水が氾濫し新たな自然河道を形成したものとする。

第 4 面と同様の遺構面で北東から南西方向の溝 2 条を検出した。いずれも調査区北西に向かってゆるやかに下る谷地形に平行する。埋土は水成砂礫層であるが、溝の断面形から人為的な掘削溝と考える。弥生時代後期から庄内式の土器を包含する。導排水路の働きを有する溝か、何らかの施設・空間を区画する溝と考える。

遺物 遺物は整理箱に 908 箱出土した。この内の 80%以上を江戸時代の遺物が占める。

江戸時代の遺物は土器・陶磁器類が大半を占める。瓦類は原則として軒瓦のみを採取している。これらのうち、天明大火、元治大火に対応する廃材処理穴から出土している一群の遺物は、年代比定の定点となり得る資料である。また、第 2 面検出遺構から出土する遺物は、宝永大火時の遺物の組合せを示す良好な資料となるものがある。図 20 に掲げた資料は、第 2 面ゴミ穴 353 から出土した資料である。この遺構は、埋土上部を宝永大火の焼灰層が薄く覆っているもので、掲げた出土資料は 17 世紀末から 18 世紀初頭にかけての良好な一括資料と考える。1～32 は土師器皿、33～37 は土師器デンボ、52・54～56 は肥前磁器染付、59 は肥前磁器上絵付、40・49～51 は肥前磁器白磁、41 は肥前磁器青磁、53 は肥前陶胎染付、42～43・57・58 の銅緑釉の椀皿類、60 の褐釉大鉢、61・62 の椀、64 の褐釉片口はいずれも肥前陶器、44 は肥前京焼風陶器、45・46 は京焼、48 の褐釉壺は信楽、63 の褐釉鉢は美濃、65・66 は瓦質土器火舎、67 は土師質土器火舎、47 の褐釉壺は産地不明である。38 の焼塩壺、39 の肥前陶器は明らかに製作年代がさかのぼるものである。ゴミ穴 353 からは、これ以外に肥前磁器型押人形、丹波播鉢、信楽播鉢、中国製の磁器類、土師質土器焙烙、伏見人形各種などが出土している。これ以外の江戸時代の特記すべき遺物としては、町家 6 の土壌内から出土した底部外面に和歌が記された織部向付などがある^{註 2}。

室町時代後期の遺物は東洞院大路上で検出した多数の土取穴群からまとまって出土している。15 世紀後半から 16 世紀後半にかけての遺物群である。

鎌倉時代前半の遺物は土器溜群と井戸 1586 から集中して出土している。ここからは、平安時代後期から鎌倉時代にかけての軒丸瓦が数点出土している。

平安時代の遺物は、東洞院大路東側溝からまとまって出土している。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器に加え、土馬が 1 点出土している。

弥生時代から古墳時代にかけての土器は第 5 面の溝および近世の遺構埋土中から出土している。第 5 面の溝からは生駒西麓産の庄内式甕型土器が出土している。近世遺構の埋土からはⅣ期の弥生土器が出土している。また、地山（17 層）上に薄く乗る褐色シルト層（16 層）から縄文晩期土器と思われる細片が少量出土している。

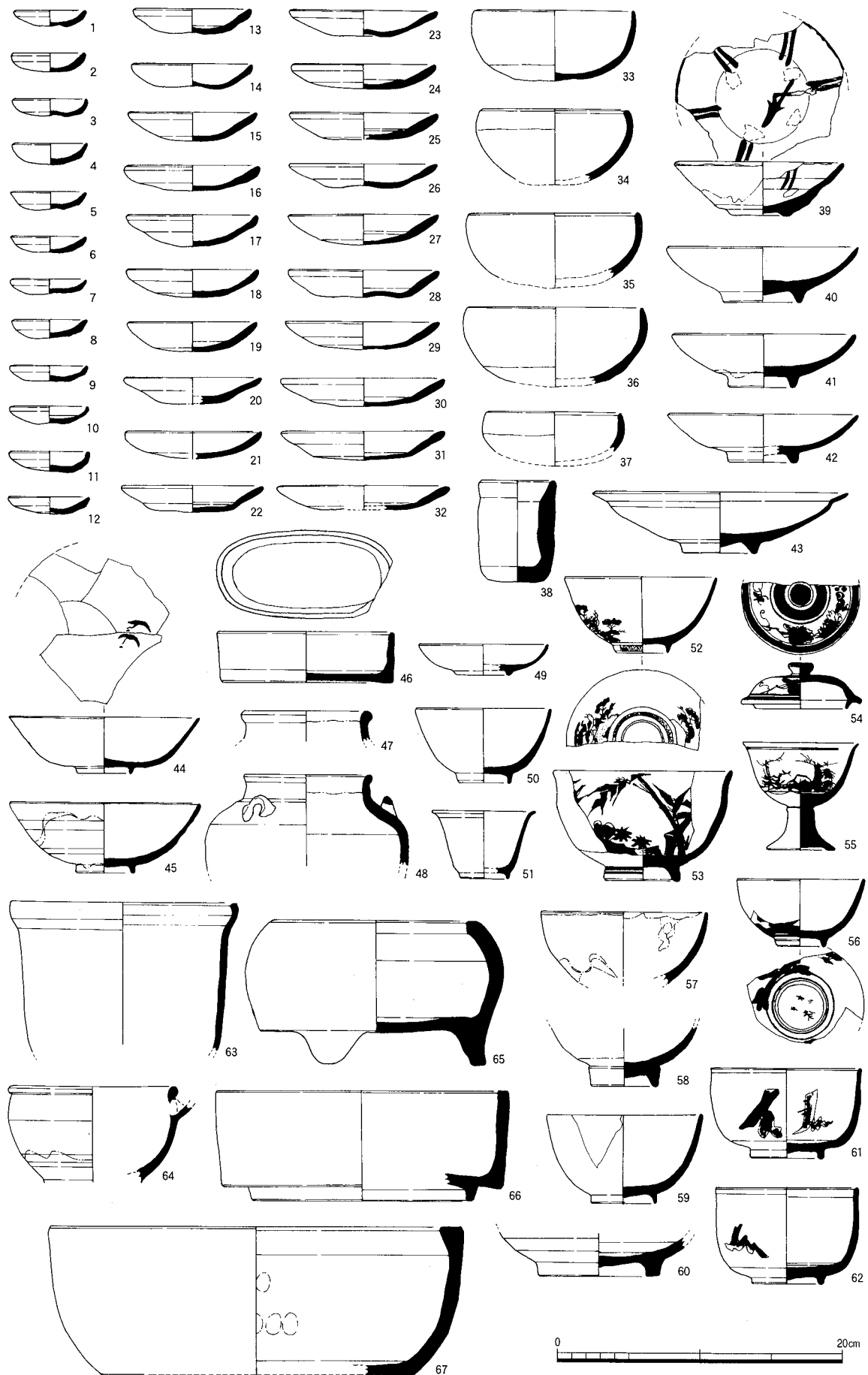


図 20 第 2 面ゴミ穴 353 出土遺物出土実測図 (1:4)

小結 弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構の存在は、近くに集落跡が存在したことを示す。出土した土器類は器面の状態が良好で破片も大きいため、河川によって運ばれたものではなく、調査区近辺で使用、廃棄されたものであろう。

平安時代の東洞院大路東側溝を良好な状態で検出し、一部で路面敷きも検出できた。他方、築地や当地に継続して営まれたという貴族層の邸宅を示す建物、井戸などの宅地内施設は検出できなかった。また、東洞院大路内に平安時代前期の流路2条を検出した。大路中央を斜めに横切る川 2071 は平安時代以前から存在する自然河川であり、条坊設置後もなお、平安京内に自然地形が残っていることを示す。また、溝 2070 は側溝で処理しきれない洪水時の雨水によって形成された流路で、治水面での都市基盤整備の遅れを示す資料といえる。

鎌倉時代前期の井戸と土器溜群は、貴族層の邸宅の一面を検出したものと考えられる。当該期には、当地に藤原定家・為家の「冷泉家」「高倉家」が存在したという説があるが、これとの関連を積極的にうかがわせる資料は得られなかった。

鎌倉時代後期以降室町時代前期にかけて目立った遺構はなく、一定規模の邸宅も小規模町家の集住形態もなかったものと思われる。この時期当地は耕地化されていたか、公家・武家層管理下の私有地として空地化していたと考える。

室町後期の遺構は、東洞院大路上に多数検出した土取穴群である。東洞院大路はこの時期まで当初の道幅をおよそ維持しているが、大路としての働きは失っていたようである。土取穴群は応仁の乱後の都市基盤の荒廃と復興の実態を示す資料と考える。大路に面した部分には、この時期の遺構を認めないが、調査区東半には柱穴、土壇などがみられる。古代条坊の小径部分に面した範囲にこの時期の街区が存在した可能性がある。

江戸時代の町家跡を良好な状態で検出した。江戸時代初期から近代にいたるまで、町家割りが基本的に変更なく継続されていることを確認し、基本的な町家構造の変遷を明らかにできた。また、第2面では町家建物の礎石などが良く残り、今後の整理作業で詳細な町家構造の復元が可能になるだろう。

(内田好昭・高 正龍・堀内寛昭)

註1 山田邦和「左京全町の概要」『平安京提要』 角川書店 1994年 187～310頁

註2 文化庁編『発掘された日本列島'99 新発見考古速報』 朝日新聞社 1999年

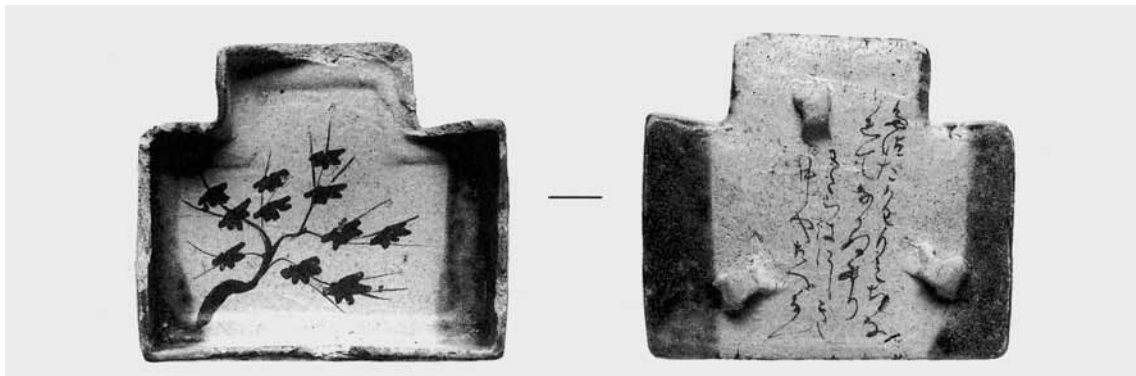


図 21 織部向付

5 平安京左京二条四坊2 (図版1・14～19)

経過 今回の調査は、京都地方・簡易裁判所の工事に伴う発掘調査である。

調査地周辺の歴史的状況については、文献や調査成果から次のようにまとめることができる。平安京以前の遺跡では、調査地南側の御所南小学校の調査で古墳時代から飛鳥時代の流路、烏丸丸太町南西角の調査で古墳時代前期と後期の竪穴住居を検出している。平安時代、調査地は平安京左京二条四坊十町にあたり、記録によれば平安時代後期から鎌倉時代にかけて、

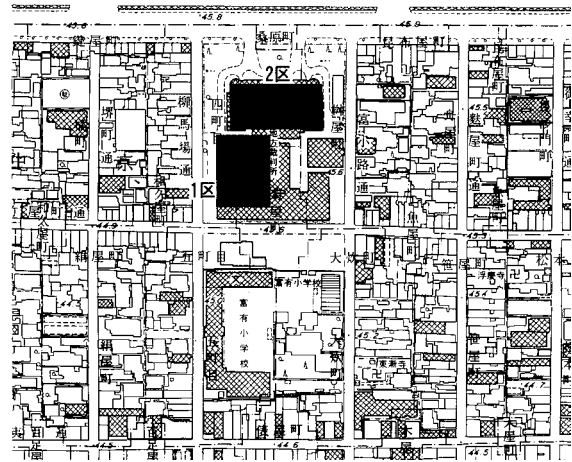


図 22 調査位置図 (1:5,000)

白河法皇の御所となった「春日殿」、後鳥羽上皇の御所となった「大炊御門殿」があったことが推定されている。御所南小学校の調査では平安時代後期以降になって遺構・遺物が増加しており、4分の1町規模の区画をもった屋敷が存在していたことが明らかになった。室町時代のことはよくわかっていないが、室町時代中頃には、室町幕府の要人である畠山持国の屋敷が近隣にあったとされている。御所南小学校の調査では、この時期の遺構・遺物も多数検出している。桃山時代になると豊臣秀吉による京都の町の改造に伴い、富小路が今の場所に造り替えられ、現在の地割りができあがった。続く江戸時代前期には、調査地に「松平中務少輔」の屋敷があったことが『洛中絵図』に描かれている。江戸時代中期から後期にかけては、相馬家の屋敷が調査地内の一角に記されている絵図もある。一方、御所南小学校の調査では、桃山時代以降、富小路通・竹屋町通・柳馬場通に面して町屋が建ち並んだ遺構群を良好な状態で検出することができた。また、発掘調査に先立って実施した試掘調査では、平安時代から江戸時代にいたる複数の生活面や遺構群が認められた。

これらの状況を受けて、調査は江戸時代の生活面より開始することとした。調査区は調査地南西側の1区と北側の2区の二つに分け、1区・2区ともに第1面から第4面まで順次掘り下げて精査を行い、最後に断ち割りによる下層の状況の観察を行って調査を完了した。排土はすべて調査区外へ搬出した。なお、調査中には地元見学会・現地説明会を開催するとともに、速報を5回掲示し、調査成果の公開につとめた。

遺構 1区・2区とも基本的に同じ堆積状況を示していた。地表面から約1mの厚さで盛土層あり、盛土層の下は江戸時代中期から後期の遺構成立面(第1面)で、厚さ約20cmのにぶい黄褐色砂泥層を中心とする整地層(第1層)が調査区のほぼ全域に広がっている。第1面の検出高は、2区北端と1区南端では2区の方が約30cm高く、北側が高い地形が復元できる。その下層には厚さ約15～25cmの灰褐色砂泥層・暗褐色砂泥層などの整地層(第2層)があり、その上面で室町時代後半から江戸時代前期の遺構を検出した(第2面)。ただし、2区では第1面で江戸時代

前期の遺構を検出している。平安時代後期から室町時代前半の遺構成立面（第3面）はさらに下層の褐色砂泥層・灰黄褐色砂泥層などの整地層（第3層）の上面になる。厚さは約15～30cmで南側に向かって徐々に厚くなる。第2面・第3面が成立する堆積土は面的な広がりをもたない複雑な重複関係にあるが、多数の遺物が含まれていた。平安時代前期から中期の遺構はそれらの下層の褐色泥砂層・オリーブ褐色泥砂層（第4層）の上面に成立している（第4面）。第4層は厚さ約10～30cmで南側ほど厚い堆積となっている。その下層は直径数cmから10数cmの円礫を多量に含む砂礫層となっており、一部で古墳時代から飛鳥時代の遺構を検出した。砂礫層からは遺物は出土していない。

調査で検出した遺構は、1区1768基、2区2564基、総数4332基となる。各時期の遺構については、1区と2区に分けて主だったものを報告する。

1区は4面に分けて調査を実施した(図23)。第1面(江戸時代中期から後期)では、建物の柱穴・井戸・土壇・竈・石室・石垣を検出した。井戸は10数基あり、調査区西半を中心に分布している。多くはすでに壊されていたが、石組み・甄積みのものを確認した。土壇の多くはゴミを処理した穴と考えられ、茶碗・皿などの食器、壺・甕などの貯蔵器、瓦などが多量に出土した。調査区北部の土壇353の下層からは江戸時代前期の土器がまとまって出土している。調査区南東部の土壇301は竈である。半円形に赤く焼けた土が残り、内側には真っ白な灰が積もっていた。石室の形態にはいろいろなものがある。調査区北部の土壇216・217は直径約1m、深さが1.5m近くあり、小ぶりの円礫を丸く積み上げていた。土壇216は底部にも石を敷き詰めており、井戸とは考えられない。また、調査区南東部を中心に直径約0.6～0.8m、深さ約0.3～0.6mの小型の石室が6基分布する。方形の土壇419以外は、円形に人頭大から握り拳大の石を積み上げている。石室は形によって異なった機能を担ったと推定できるが、用途の特定はできていない。柱穴は多数検出しているものの攪乱を受けている部分が多いため建物の間口や奥行きを復元することができていない。しかしながら、調査区西半の一部には土間の貼り土と推定できる黄褐色の粘土が残っていた。また、調査区南西部の東西方向の石垣310は敷地境の施設であったと考えられる。最も高いところで約0.4mが残存する。

第2面(室町時代後半から江戸時代前期)では、塀・建物の柱穴・井戸・土壇・石室・石敷遺構を検出した。塀は南北方向・東西方向それぞれ1列ずつあり、柱を据えた礎石が並んでいた。礎石は大型のもので直径約50cmある。東西方向の塀は『洛中絵図』によると松平家の屋敷と町家の境界付近にあっている。石室の形態はいろいろで、調査区南部の土壇630は東・南・西の3辺を失っているが、北辺で3m以上、深さ0.5m以上ある方形の大型石室である。その北側の土壇627や調査区中央部の土壇569、北部の土壇669も方形の石室で、これらは地下式の貯蔵施設と考えている。第1面と同様の小型の石室も調査区西部で2基検出した。また、調査区北部には浅い穴に握り拳大の石を乱雑に入れた土壇がある。仮に「石敷遺構」と呼んでいるが、機能はわからない。石敷660で東西約3m、南北約1.6mある。土壇は調査区中央部に多く分布する。柱穴からは建物の復元ができていない。

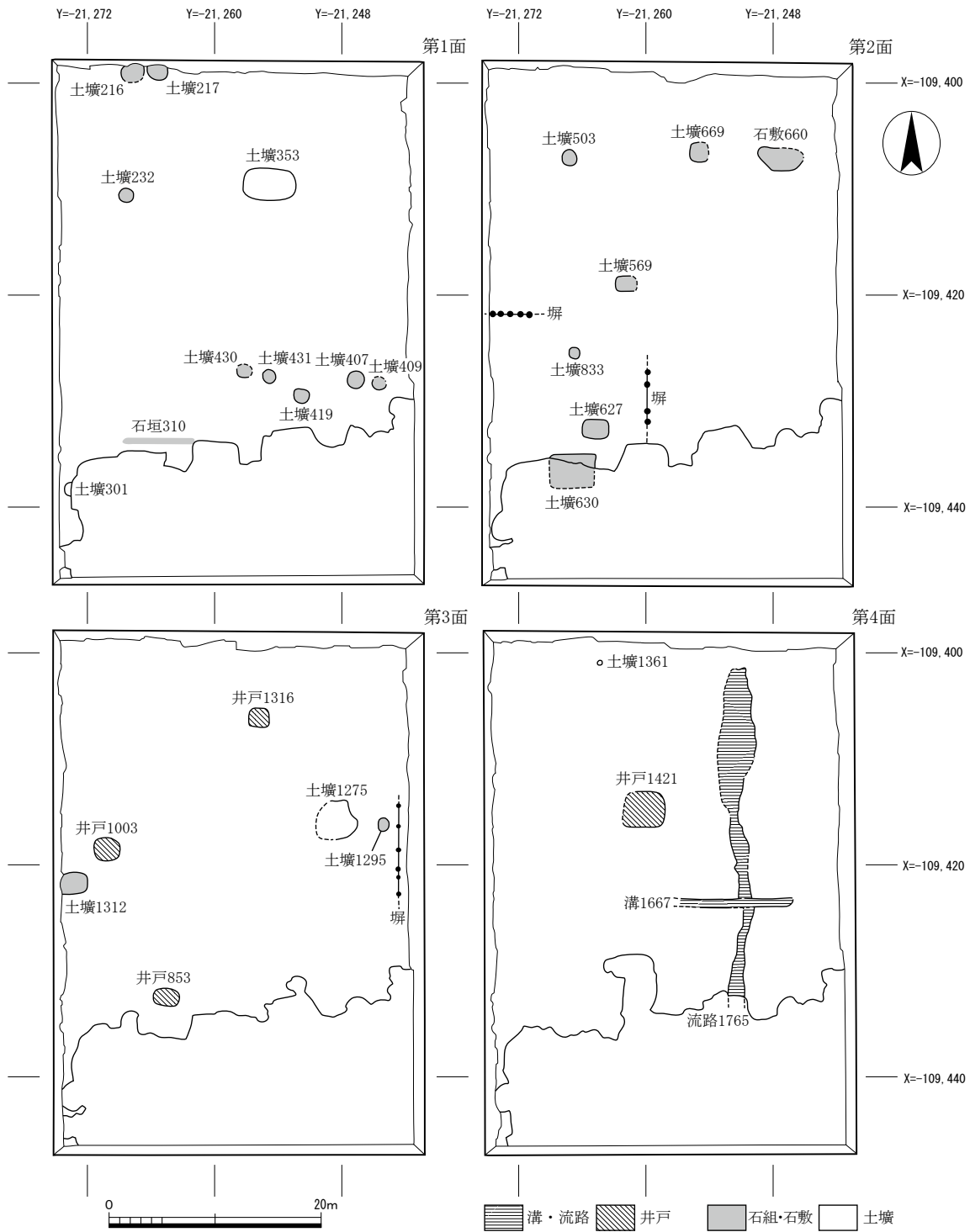


図 23 1区主要遺構配置図 (1:600)

第3面(平安時代後期から室町時代前半)では、塀・建物の柱穴・井戸・土壇を検出した。塀は調査区東端で礎石を据えた柱穴が南北方向に延びていた。遺存状況は悪い。調査区北部の井戸1316は方形に板を組んで井戸枠を造った痕跡が残っていた。底までの深さは当時の地表面から約3mに及ぶ。調査区西部の井戸853・1003は石組みの井戸である。井戸853の石組みは最下部しか残っておらず、上半部の石材を再利用して第2面で検出した土壇627が造られていた。塀の西側の土壇1295は南北約1.1m、東西約0.8m、深さ約0.7mで、握り拳よりやや大きめの石

がぎっしり詰め込まれてあった。そのさらに西側の土壌 1275 では平安時代後期から鎌倉時代の瓦がまとまって出土した。また、調査区西部の土壌 1312 は向かい合わせに石を積み上げた特異な形状をしている。用途は不明である。なおこの面でも柱穴から建物の復元はできていない。

第4面（平安時代前期から中期）では、建物の柱穴・井戸・土壌・土器埋納坑・溝を検出したが、遺構の数はほかの面に比べると少ない。調査区中央部の井戸 1421 は平安時代前期のもので、方形に板を組んだ井戸枠の痕跡が残っていた。底の部分には北西隅の支柱の下に小さな穴が掘っており、中から2枚重ねの状態で作形の土師器の椀が出土した。下側の個体の底部外面には「在」の墨書が読める。さらに井戸内の浅い土壌からは作形の須恵器の蓋が出土した。調査区北部の土壌 1361 では土師器の小皿を3枚重ねて埋納してあった。建物の復元はできていないが、地鎮に關係する祭祀の痕跡とも考えられる。また、調査区東部の東西方向の溝 1667 は区画溝の可能性はある。

平安時代の整地層の下部では南北方向の流路 1765 を検出した。不整形でわずかに蛇行する。1区では最も古い遺構で、飛鳥時代を中心とする遺物が出土した。

2区も1区と同様に4面に分けて調査を実施した（図24）。第1面（江戸時代）では、塀・瓦貼り建物・土蔵・建物の柱穴・井戸・土壌・竈・便所・石室・溝を検出した。調査区西部と東部には南北方向の塀がある。約1.0～1.5mの間隔で柱穴が並び、大部分には底部に礎石が据えてあった。2列の塀の位置は『洛中絵図』に描かれた区画の位置にほぼ一致していることから、東西の塀に挟まれた部分が松平中務少輔の屋敷と推定できる。この面の遺構については屋敷推定地部分・西側・東側の順に概説する。

屋敷内には東部の塀に沿って建物 825 がある。方形に掘り下げた土壌の壁に瓦を並べて貼り付ける特異な構造をとっている。「瓦貼り建物」と仮称する。規模は南北15.5m以上、東西約4.5mの長大な建物で、攪乱を受けた南辺以外は瓦が立った状態で検出することができた。瓦は大部分が平瓦でわずかに丸瓦・甍を混じえている。瓦の遺存状況から掘り下げは瓦1枚分の深さにあたる約0.3mほどとみられる。建物構造の復元にはいたっていないが、南半では礎石が良好に残っていることから、蔵のような収蔵施設であったと推定している。一方、西部の塀の近くには土が赤く焼けた土壌 289 がある。傍らには石が散在しており、これを竈と考えると台所に相当する建物があったことになる。屋敷内ではほかにも多数の柱穴を検出しており、中には直線上に並ぶものもあるが、数が多いこともあって建物の復元はできていない。その他の遺構には、石組みの井戸 805、石をつめた土壌 521、屈曲する溝 611 がある。溝 611 は一抱えもある石を側面に積んでいる。用途は不明で建物 825 の一部を壊しているが、時期は新しく直接の關係はない。

西部の塀の西側では、調査区北西部で南北の塀に直角に取り付く塀を2列検出している。これらに挟まれた部分が、柳馬場通から屋敷への通路と考えられる。井戸 829 は底に曲物を据えた痕跡が残っていたことから井戸と判明した。方形の石組井戸の検出は珍しい。石室には土壌 812・830・223・381・385 がある。土壌 812 は東西約4.5m、南北約1.1m、深さ0.9m以上の内法があり、収蔵施設と考えられる。残る4基の土壌は、1区で検出したものと同様の小型の石室で

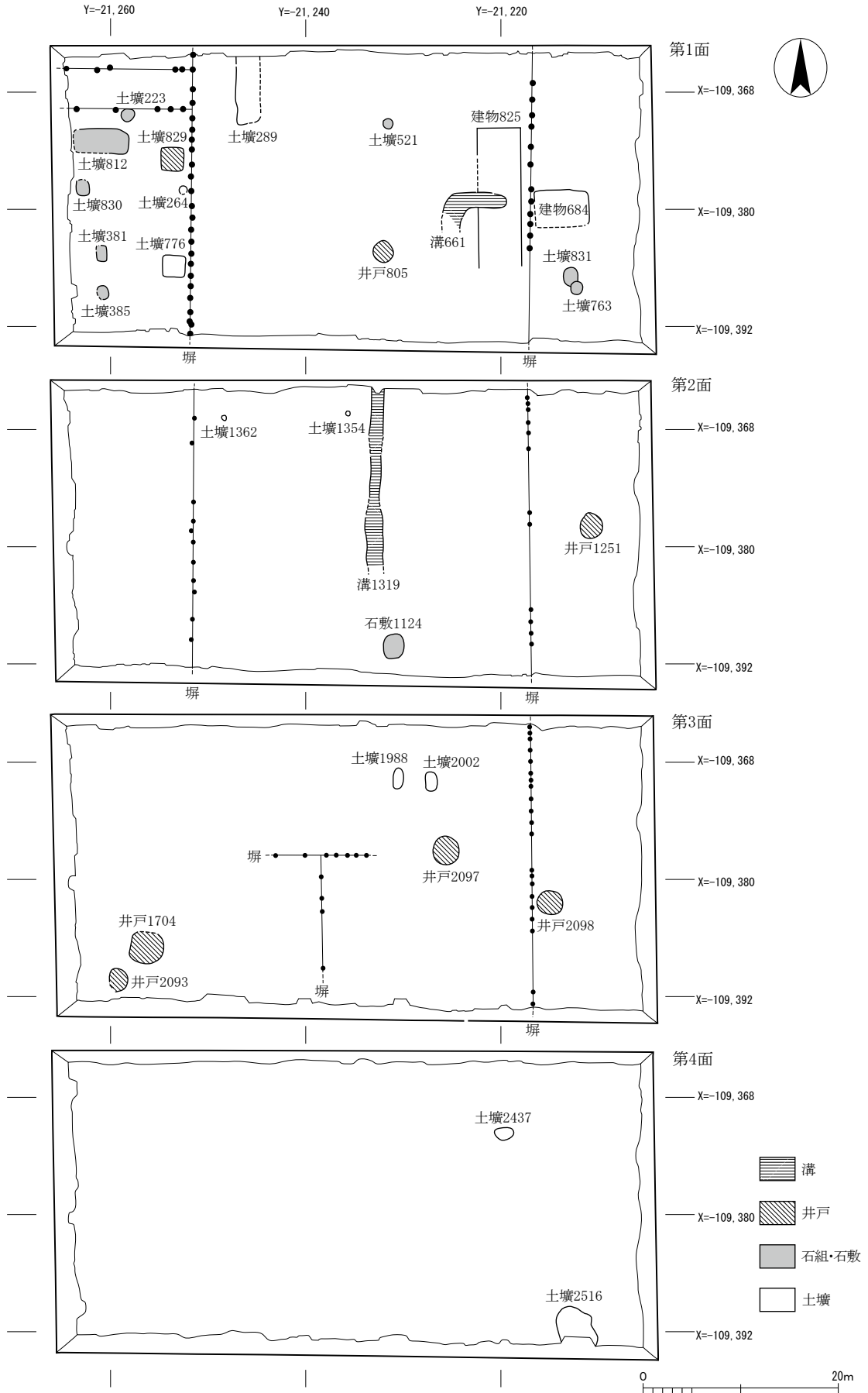


图 24 2区主要遺構配置図 (1:600)

ある。規模がやや大きい方形の土壇 830 以外は、直径約 0.8 ～ 1.0 m、深さ約 0.3 ～ 0.5 m で楕円形に握り拳大の石を積み上げている。土壇 264 には瓦器の大甕が据えてあった。内面には付着物も残っていたことから便所甕であったと考えている。また、調査区南西部の方形の土壇 776 からは江戸時代前期の遺物がまとまって出土した。

東部の塀の東側の遺構には、土蔵の基礎の一部である建物 684 がある。かなり攪乱を受けているが、約 0.8 m の幅で握り拳大の石を密につめていた。全体では東西約 5.5 m、南北 3.5 m 以上の規模があったと推定できる。その他にやはり握り拳大の石を詰め込んだ土壇 763・831 がある。なお、西側・東側部分はともに柱穴の検出は少なかった。

第2面（室町時代後半から江戸時代前期）では、塀・建物の柱穴・井戸・土壇・土器埋納坑・石敷遺構・溝を検出した。第1面ですでに江戸時代前期の遺構が検出されていたので、第2面では第1面でみつかった遺構の補足調査も行っている。その結果、西部・東部の塀では多数の柱穴が切り合っていることから、この区画に沿って塀が何度も作り替えられたことが判明した。第2面で新たに検出した主な遺構には次のものがある。調査区東部の井戸 1251 は石組井戸で、深さは当時の地表面から 3 m 以上ある。調査区南部には石敷遺構 1124 があるが、1区で検出した石敷遺構に比べると石の密度はやや低い。この面でも礎石をもつものを含め、多数の柱穴を検出したが、建物の復元はできていない。調査区北部中央では2基の土器埋納坑土壇 1354・1362 を検出した。ともに直径約 0.3 m、深さ約 0.2 m の小さな土壇で、それぞれ中央に小型の瓦器の壺を据えていた。東西方向に約 13 m の距離に並ぶ。土壇 1354 の東側には南北溝 1319 がある。幅約 1.5 m、深さ約 0.7 m で断面はU字形である。

第3面（平安時代後期から鎌倉時代）では、塀・建物の柱穴・井戸・土壇を検出した。塀は調査区東部と中央部で確認した。東部の塀は、約 1.2 m の間隔で南北方向に柱穴が並び、調査区外へ延長している。柱穴の底部には一抱えほどの礎石を据えている。塀の位置は当時の万里小路と富小路のほぼ中間にあたっていることから、宅地の区画の施設であったことが推定できる。中央部の塀は、東西方向・南北方向のものが交差する形になっており、東部の塀と同様に区画の施設であったと考えている。柱穴は調査区全域に多数分布しているが、まとまりをつかめていないため、建物の復元はできていない。柱穴の中には礎石を据えたものもあった。中でも調査区北部には柱穴が密集しており、建物の建て替えが頻繁に行われたことが想像できる。井戸には木枠のものと石組みのものがある。調査区南西部の井戸 2093 は底部に曲物を残すのみで木枠は完全に腐っていた。その隣の井戸 1704 の掘形には火災で焼けた痕跡を残す多量の瓦が埋められていた。また、調査区東部の井戸 2098 からは銅製の鏡が出土した。調査区北部には土壇 1988・2002 がある。ともに南北約 2 m、東西約 1 m の楕円形の浅い土壇で底には3個ずつ平たい石が並べてある。用途は不明だが、2基が対になって機能していたものと考えられる。

第4面（飛鳥時代から平安時代中期）では、建物の柱穴・井戸・土壇を検出した。1区と同様、遺構の数は少ない。井戸 2097（第3面で検出）は平安時代中期の井戸である。木枠は腐っていて痕跡をとどめるのみであった。調査区南東部の土壇 2516 からは平安時代前期の土器類がまと

まって出土している。

柱穴は数が少なく、建物は復元できないが、生活の痕跡は裏付けられた。

平安時代の整地層の下部では、顕著な遺構は検出していない。しかしながら、調査区北東部の土壌 2437 をはじめとして古墳時代後期の土器を含む土壌を少数ながらも確認することができた。今回の調査で発見した最も古い遺構になる。

遺物 遺物については1区・2区をまとめて報告する。調査では、第1面から第4面のそれぞれの段階で遺物を採集したが、遺構相互の切り合いが多かったため、新しい時代の遺構に、より古い時代の遺物が混入するものがあつた。全体では江戸時代中期から後期の遺物が約4割、室町時代後半から江戸時代前期の遺物が約3割、室町時代前期以前の遺物が約3割の量を占める。平安時代中期以前の遺物は少ない。また、遺物の種類では土器・瓦類がほとんどを占めている。

江戸時代中期から後期の遺物には、土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・動植物遺体などがある。大部分が井戸や大型の土壌から出土した。土器類には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などがある。中でも施釉陶器や磁器の椀・皿・鉢が多くを占め、次いで焼締陶器の鉢・壺・甕、施釉陶器の鍋・土瓶・壺が多い。また、土師器の皿も一定の量を占めている。瓦類には棧瓦・平瓦・丸瓦・甎などがある。瓦はほとんどが棧瓦で、火災の痕跡を示す焼け歪んだ瓦や壁土も多い。甎は漆喰片とともに井戸の構築材に使われていた。土製品には、焼塩壺・埴塙・土人形・泥面子・土鈴などがある。石製品は少ないが、硯・砥石などがある。金属製品には鉄釘・キセル・銅銭などがある。また、動植物遺体には鳥骨・魚骨・アワビ・サザエ・シジミなどの貝殻があり、当時の食生活の一端をうかがうことができる。

室町時代後半から江戸時代前期の遺物には、土器類・瓦類・土製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などがある。これらもほとんどが井戸や土壌から出土した。土器類には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。土師器の皿が多くを占めており、桃山時代以降には、施釉陶器の椀・皿が増加してくる。次いで瓦器の鍋・釜、焼締陶器の鉢・甕が多い。1区第1面土壌 353 や2区第1面土壌 776 からは江戸時代前期の土器類がまとまって出土した。中には織部の茶椀・香合、伊賀の水指などが含まれており、茶の湯の流行を示している。また、2区第1面土壌 264 に据えてあつた瓦器の大甕は口縁部まで復元することができた。高さ70 cm近くもある大型品である。瓦類には、平瓦・丸瓦・甎などがある。この時期の瓦の大部分は1区第1面建物 825 の壁際に貼り付けてあつた平瓦である。ほかの遺構からの瓦の出土は少ない。また、焼けた壁土も出土しており、火災があつたことがうかがえる。そのほか土製品には、焼塩壺・埴塙・つぼつぼ・おはじきなどがある。木製品には井戸杵片・漆膜片などがある。漆膜片は、元の漆器椀の木地が腐食して漆膜のみとなったもので、赤色漆椀・黒色漆椀の断片と考えられる。小片のため文様の詳細は不明である。石製品には滑石製鍋・硯・砥石・印章・五輪塔・石臼などがある。印章は小型の平板な石板に文字が彫刻されているが、判読はできていない。また、石臼は割られて井戸 829 の石組みに転用されていた。金属製品には包丁・鉄鍋・鉄釘・鉄滓・キセル・銅金具・銅銭・鉄銭などがある。銭銘は判読できないが、鉄銭の出土は珍しい。動植物遺体には骨・貝殻

などがあるが、出土量は江戸時代中期から後期に比べるとかなり少ない。

平安時代後期から室町時代前半の遺物には、土器類・瓦類・木製品・石製品・金属製品などがある。井戸・土壇・溝から多くが出土した。土器類には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。土師器の皿が大部分を占めており、次いで灰釉陶器の椀、輸入陶磁器の白磁・青磁の椀、瓦器の鍋・釜、焼締陶器の鉢・甕などが目立つ。土器埋納土壇 1354・1362からは、それぞれ完形の小型の瓦器の壺が出土した。瓦類には、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦などがある。1区第3面土壇 1275や2区第3面井戸 1704からまとまって出土し、軒丸瓦や軒平瓦の割合が多い。木製品は井戸碎片・曲物片などでいずれも井戸の部材の残骸である。遺存状態は非常に悪い。石製品は砥石などで量は少ない。金属製品には鉄釘・銅鏡・銅金具・銅銭などがある。銅鏡は2区第3面井戸 2098から出土した。直径約10cmで背面には花鳥文を浮き出させている。残念ながら一部が欠損していた。井戸 2098からは銅製の髪飾り（笄）も出土した。

平安時代前期から中期の遺物には、土器類・瓦類・土製品・木製品・金属製品などがある。遺構は少ないが、井戸・土壇を中心に出土した。土器類には、土師器・黒色土器・白色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器などがある。土師器の皿類が大部分で、須恵器の杯蓋・杯身、灰釉陶器の椀、緑釉陶器の椀がそれに次ぐ。土師器の甕、須恵器の壺・甕も一定の量が含まれている。1区第4面井戸 1421からは墨書土器とともに平安時代前期の遺物がまとまって出土した。瓦類には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦などがあるが、出土量は少ない。多くはより新しい時代の遺構に混入していた。土製品には井戸 1421から出土した土馬がある。木製品は少量の井戸碎片にすぎない。金属製品には銅錘がある。江戸時代の土壇から出土したが、形態の特徴からこの時期に属することがわかる。全国的にも貴重な類例である。

飛鳥時代以前の遺物には、打製石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などがある。1区第4層下層流路 1765や2区第4層下層土壇 2437を除くと、ほとんどが第4層もしくはより新しい時代の遺構に混入しており、遺構からの出土は少ない。打製石器は安山岩製の小型の剥片石器が、2区第4層から出土した。これ以外は土器がほとんどで、縄文時代晩期、弥生時代中期から古墳時代初頭、古墳時代後期から飛鳥時代にまとまりを看取することができる。それぞれ縄文土器の鉢、弥生土器・土師器の壺・甕・高杯・器台、土師器の杯・甕・須恵器の杯・壺・甕がある。

小結 今回の調査では、調査地の千数百年間の歩みを知ることができた。

2区で古墳時代後期の土壇 2437などを検出したことは、御所南小学校の調査で流路、烏丸丸太町南西角の調査で竪穴住居を検出したことと考えあわせると、近隣に集落が存在したことをうかがわせる。1区の飛鳥時代の流路 1765もこの集落と関連することが推定できる。

調査地が活況を示すようになるのは平安時代になってからである。今回の調査では調査位置の関係で条坊関連の遺構を検出することはなかったが、平安京の造営に合わせて周辺も整備されたと考えられる。第4層はこれに伴う整地層であろう。この時期の遺構は1区第4面井戸 1421や2区第4面土壇 2516などにすぎない。しかし、少数ながら柱穴を検出していることから、建物が造られていたことは間違いないであろう。調査地は平安京東端に近いながらも二条大路の北側

に位置しており、有力な王臣家の邸宅があった可能性も推測できる。特に井戸 1421 の土器埋納坑は井戸を造るときの祭祀と考えられ、注目できる。

平安時代後期から鎌倉時代になると遺構の数が増え、規模も大きくなる。春日殿や大炊御門殿の存在を直接示す痕跡はみつからなかったが、1区第3面土壙 1275 や2区第3面井戸 1704 から出土した瓦はこれらの邸宅と密接な関わりをもっているものと考えられる。

室町時代では、2区第3面で検出した1町を東西に二分する塀が注目できる。邸宅の区画と考えられ、御所南小学校で確認した4分の1町規模の邸宅との関連も興味深い。ほかにも多数の井戸・石室・石敷遺構・土壙・柱穴を検出しており、活況を呈したとみられる。同時にそれらの遺構から多量に出土した土器・瓦類をはじめとする遺物は、当時の生活を物語る資料である。

今回の調査の大きな成果は、江戸時代前期の武家屋敷を良好な状態で検出できたことである。屋敷を区画する塀とともに、收藏施設と考えられる瓦貼り建物 825 や竈 289 などの施設の状況が判明した。『洛中絵図』に記された松平中務少輔は、蒲生氏郷の孫、蒲生忠知のことで、彼は慶長十八年（1613）に中務少輔になり、寛永十一年（1634）に死去している。出土遺物も江戸時代前期の特徴を示しており、検出した遺構が松平屋敷に伴うことを裏付けた。京都市内には桃山時代の聚楽第周辺や伏見城下町など、大名屋敷が集中する地域があり多数の調査が行われている。市街地の各所に点在した江戸時代の武家屋敷については不明な部分が多く残されており、今回の調査は実態解明の手掛かりとなった。また、屋敷に隣接する町屋の遺構・遺物を多数検出することができたことも重要な成果である。

江戸時代中期から後期では、1区・2区の西部で井戸・石室が南北に並ぶ様子や、土間の貼り土・竈 301・敷地境の石垣 310 を検出することができた。これらは通庭を備えた町屋の一部と推定でき、建物の間口や奥行きは復元はできなかったが、柳馬場通に面して戸口を開けた町屋が並んでいた様子を復元できる。現在の京都の町並みに直接つながる遺跡であり、貴重な成果をあげることができた。

なお、現在、今回の調査の報告書を作成中である。詳細については刊行する報告書『平安京左京二条四坊』を参照していただきたい。（山本雅和・上村和直）

- 註1 堀内明博ほか「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 註2 山本雅和ほか「平安京左京二条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年

6 平安京左京六条三坊 (図版1・20)

経過 調査地点は現烏丸五条交差点の北西に位置し、平安京左京六条三坊の中央付近、十町の東辺部にあたる。平安時代後期、十町南半および南隣の十一町には白河・鳥羽・崇徳・近衛の四天皇が御所とした小六条殿（小六条院、北院）が存在した。

ほか、六条三坊では具平親王の千種殿、慶滋保胤の池亭、右大臣源顕房の六条殿、白河上皇の中院、宇多上皇の中六条院、六条・高倉・安徳三天皇の五条内裏など、平安時代中期以降、付近一帯は御所や貴族の大邸宅が建ち並び、政治と文化に華やいた地域であった。

平成2年度、すでに同敷地内では発掘調査が実施されており、飛鳥奈良時代から平安時代前期まで続く自然流路、平安時代中期の邸宅に伴う園池、小六条殿造営により付け替えられた平安時代後期の六条坊門小路、中世以降には小規模な家屋が建ち並んだ町屋が検出され、当地内の景観が変遷する様子を明らかにしている。^{註1}

本調査区は、先の調査区の南側に接して東西34.0m、南北6.0～13.5mで、鉤形に設定した。第1調査面では近代以降の攪乱層を含め、江戸・桃山・室町・鎌倉の各時代から平安時代後期までの遺構を検出し、第2調査面で平安時代中期から前期の遺構を検出した。

遺構 調査区の地表面は標高32.8～33.0mの平坦面で、基本層位は先の調査とほぼ同様である。調査では平安時代前期から江戸時代まで378基の遺構を検出した。以下、各時代別に概述する。

平安時代前期 土壇3基（土壇313・333・365）、落込1基（落込371）を検出した。土壇333は、調査区東端の烏丸小路西築地推定線西側で検出した。内壁回りに須恵器甕の破片を立て並べ、中央には中仕切り状に同様の破片が置かれていた。遺構の大きさは0.7～0.8m、深さ0.5m。落込371は、調査区東半で検出した。この遺構から墨書土器が出土した。また調査区の東端では、烏丸小路西築地の基底部と推測される整地層（灰黄褐色細砂層）を検出した。泥土混じりで、炭破片を含み、祭祀具の土馬が出土した。

平安時代中期 先の調査で検出した園池の延長部（池364）、土壇1基（土壇334）を検出した。池364は、東西両肩がやや幅広くなって調査区を南北に縦断し、さらに南へ広がる状態であった。遺構は全体に浅く、底部付近をわずかに検出したと考えられる。先の調査でみられた肩部から底部の

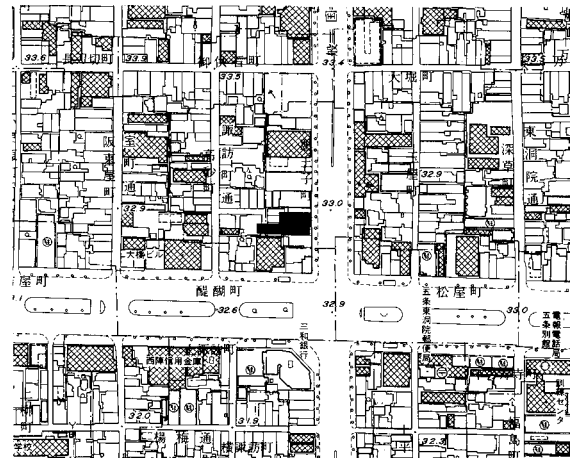


図25 調査位置図 (1:5,000)

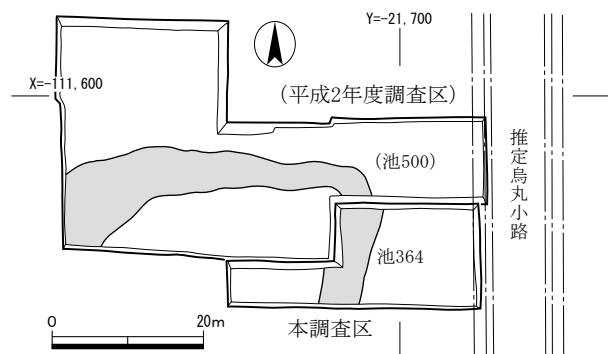


図26 調査区配置図 (1:1000)

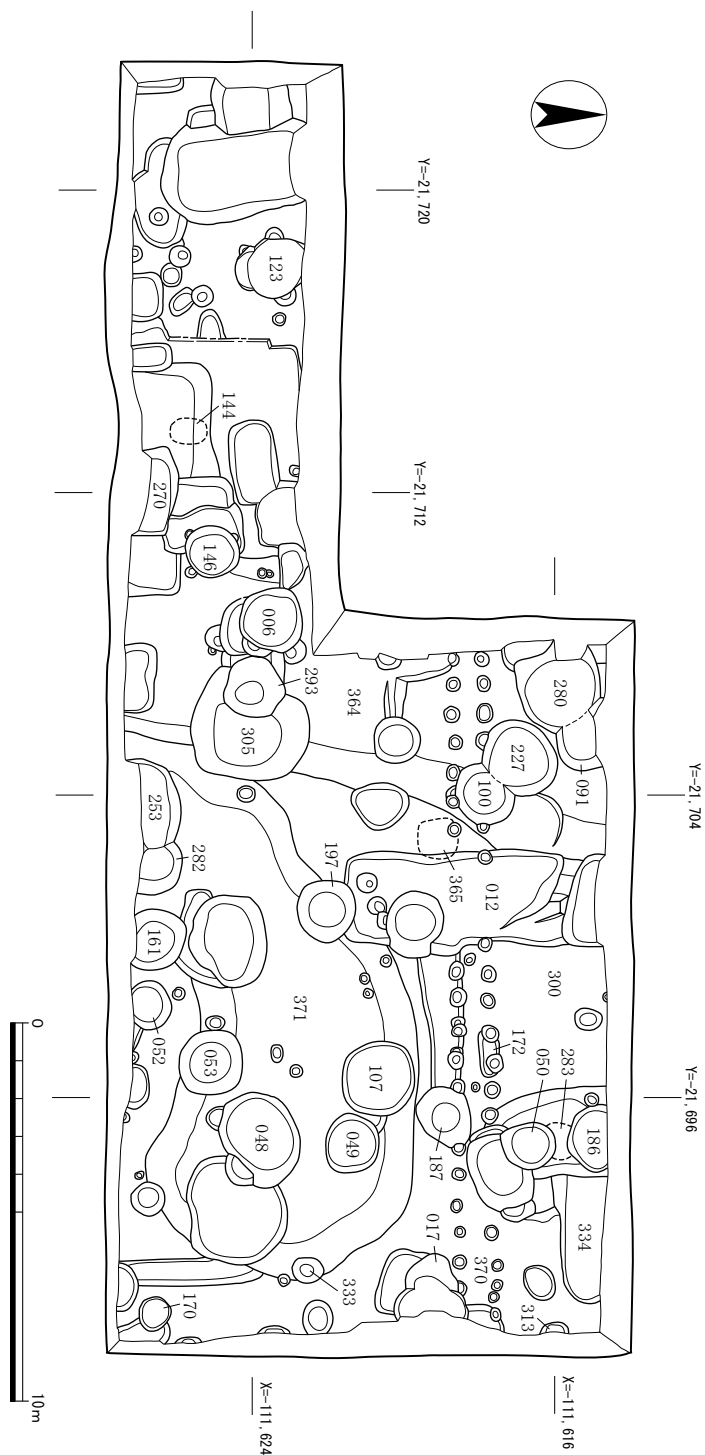


図 27 第 2 面遺構平面図 (1:200)

礫敷きは未検出であった。

平安時代後期 小六条殿造営により付け替えられた六条坊門小路（路面敷 300、築地 370）、井戸 1 基（井戸 305）、土壇 15 基、ピット 18 基を検出した。路面敷 300 は、調査区東半の北端で検出した。移設当初の六条坊門小路の路面南側部分であり、路面敷は径 3～12 cm 大の礫を用いて敷き固められていた。築地 370 は、路面敷から南に約 2 m 離れた位置で検出した。遺構は 0.7～0.8 m 間隔で並ぶ柱穴列が 2 列並行しており、幅は 0.8～1.0 m を測る。柱穴の大きさは径 0.3～0.5 m で、東西約 18.5 m にわたり 38 基を検出した。井戸 305 は、一辺 1.5 m の木枠が設置されており、土器や軒瓦が多量に出土した。

鎌倉時代 井戸 2 基、土壇 9 基、ピット 1 基を検出した。ほか、平安時代末から鎌倉時代初頭の土壇 3 基がみられた。井戸には木枠を伴う井戸 270、曲物を伴う井戸 006 があつた。なお、鎌倉時代から室町時代の時期幅で想定される遺構が、溝 2 条、土壇 65 基、ピット 100 基を数えた。

室町時代 井戸 8 基、土壇 37 基、ピット 4 基を検出した。井戸には

石組みと木枠を伴う井戸 100・280、木枠を伴う井戸 197・253・282、木桶を伴う井戸 091・227・293 - 2 があつた。

江戸時代 井戸 14 基、溝 1 条、土壇 29 基を検出した。井戸には側壁を石組みで造り底部に木枠を伴う井戸 053、石組みだけの井戸 049、底部に木桶を設置した井戸 161 - 2・171、側壁が漆喰で造られた井戸 048・123、側壁が甎組みの井戸 050、素掘りの井戸 017・052・107・146・170・186・187 があつた。井戸 048 と同 050 の埋没は明治以降である。

遺物 古墳時代から江戸時代まで整理箱にして184箱分の遺物が出土した。その内訳は土器類168箱、瓦類15箱、木製品類1箱となり、ほかに銭貨を含む金属製品類が少量ある。

古墳時代 調査地点が弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡に属することから、弥生土器、土師器甕、須恵器甕・杯・杯蓋が自然堆積の黄褐色砂礫層の上部で少量出土した。

平安時代前期 土師器杯・高杯、須恵器杯・壺・甕、黒色土器椀、緑釉陶器椀、土製品土馬、瓦（軒丸）がある。土壙313・333・365、落込371、烏丸小路西築地整地層から出土。落込371出土の土師器杯に明瞭な墨書が認められたが、一部分であるため判読は難しい。土馬は烏丸小路西築地の整地層から2点、調査区北東隅の土壙313から1点が出土した。

平安時代中期 土師器（皿・甕）、須恵器（鉢）、緑釉陶器（椀）、灰釉陶器（瓶子）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦）がある。池364、土壙334から出土した。

平安時代後期 土師器皿・高杯・甕、須恵器鉢・甕、瓦器椀、緑釉陶器椀・皿・壺、灰釉陶器椀・壺、輸入陶磁器の絞胎陶壺、白磁皿・椀・壺、青磁椀・皿、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）、凝灰岩石材がある。絞胎陶は11世紀代の土壙283から壺とみられる小片（縦7.8cm×横7.0cm）が出土。さらに同様の破片（縦3.2cm×横3.8cm）が鎌倉時代の土壙172からも出土した。軒瓦は遺存状態のよい瓦当部の破片が多くみられ、特に井戸305では多量に出土した。内訳は丹波産（5・11・21・22）、播磨産（18・23）、大和産（6・17・19）、讃岐産（12）で、ほかは山城産である。総数129点中、1・3・8・15は各10点前後と出土量が多く、山城産が主流であった。

鎌倉時代から室町時代 土師器皿・高杯、須恵器鉢・小鉢・甕・蓋、瓦器椀・鍋・羽釜・火舎、国産陶器椀・鉢・播鉢・皿・壺・甕、輸入陶磁器の青磁椀、白磁皿・壺、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）、石製品（滑石製小型硯・滑石製羽釜・五輪塔）、小鍛冶関連品（鉦滓）、銭貨がある。輸入陶磁器にはほかに類例をみない蕨手貼花文の白磁がある。小片（縦2.4cm×横3.1cm）だが壺の可能性があり、絞胎陶と同じ土壙172から出土。火舎は土壙144から円形のものが、井戸100から方形のものが出土。鉦滓は井戸197から多量に出土した。これら3基は室町時代の遺構である。銭貨は3点で「太平通寶」などがある。

桃山時代から江戸時代 土師器皿・焙烙鍋・塩壺・小壺、国産陶磁器椀・皿・鉢・播鉢・水滴・水指、輸入陶磁器皿、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）、甌、土製品人形・土鈴、石製品小型硯・砥石、金属製品煙管・釘、小鍛冶関連品埵埵・鉦滓、銭貨がある。国産陶磁器には「乾山」銘の陶器が出土した。出土片は底部（径5.7cm）のみであり、器形は筒型向付か猪口などが推定される。輸入陶磁器皿には明代末の呉須赤絵皿（径25.8cm）がある。瓦には大仏瓦と呼ばれる方広寺大仏殿所用の大型瓦が出土した。同時期の一般的な瓦と比較すると約1.7倍の大きさである。

その他 近代の興味ある遺物に陶磁器製のガスコンロ（瓦斯焔炉）がある。第2次大戦下、



図28 土壙172・283出土輸入陶磁器

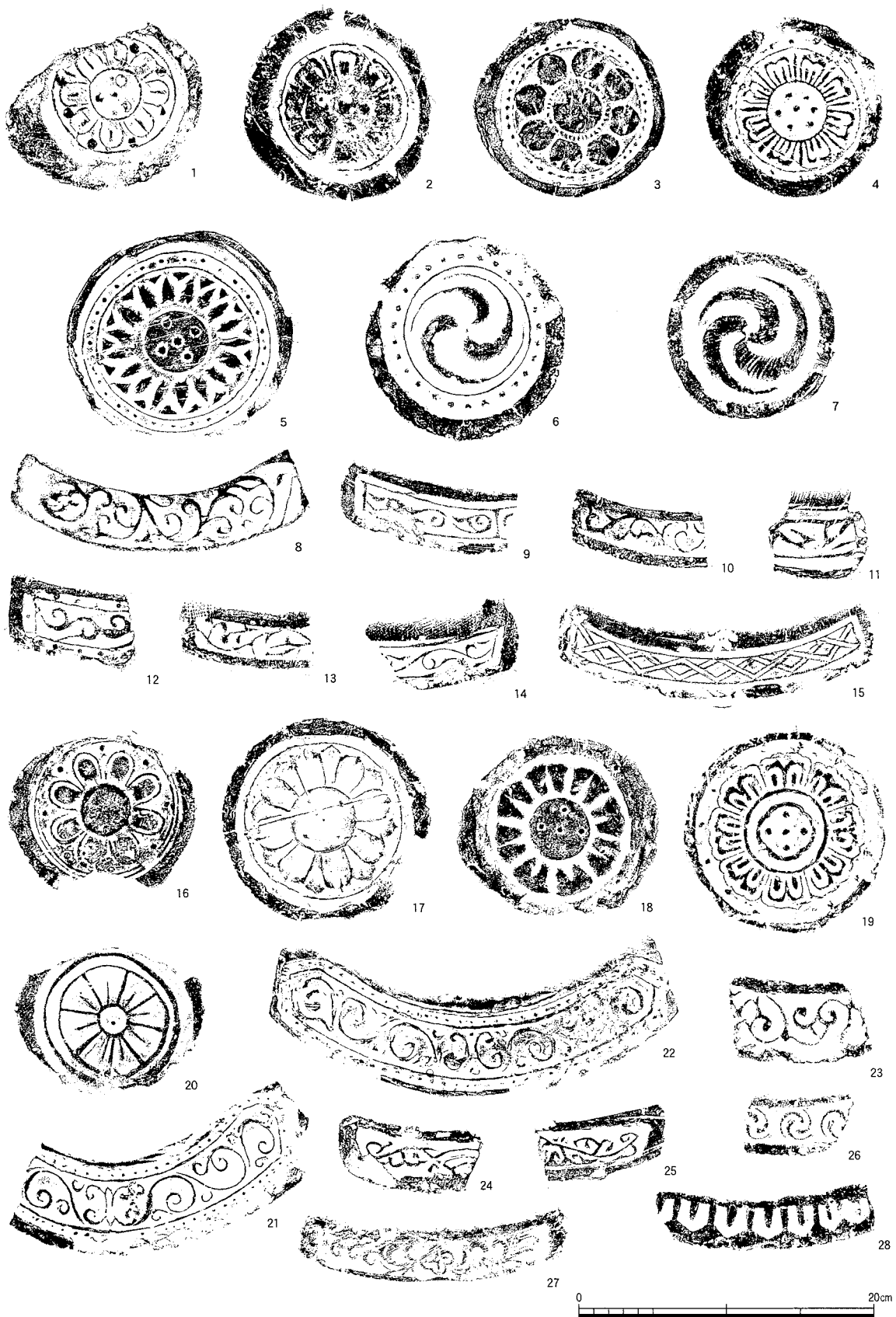


图29 軒瓦拓影 (井戸 305:1~15 土壙 161:16·20·25·27 土壙 028:17 土壙 361:18
土壙 128:21 土壙 177:24 土壙 144:26 落込 185:28 整地層 1-1:19·22·23) (1:4)

金属製品の代用として使われたもので、井戸 048 から出土した^{註2}。

小結 本調査では先の成果を引き継ぎ、平安時代後期の小六条殿関連の遺構検出、同中期の庭園遺構の解明などに焦点を合わせたが、以下のような予想外の成果を得ることができた。

平安時代前期 十町では先の調査での柱穴の検出などを含め、明瞭な遺構・遺物が少なからず認められており、邸宅が存在した可能性が推測されるが、建物関連の遺構は検出していない。須恵器甕の破片を立て並べた土壌 333 は、実用的な生活機能をもつ遺構ではなく、その特異な状態から何らかの祭祀にかかわる遺構と考えられる。烏丸小路西築地基底部の整地層については、明確な遺構が伴ったわけではなく、南北の築地推定線に沿って一定の幅で良質な整地層が検出されたこと、および祭祀具である土馬などの出土遺物から判断した。

平安時代中期 園池の延長部である池 364 は、さらに調査区外の南へ広がることが判明した。しかし、遺構は全体的に浅く、底部付近をわずかに検出したと推測されることや、先の調査でみられた肩部から底部の礫敷きが未検出であったことから、平安時代後期の小六条殿造営時に取り壊された可能性が高い。先の調査での遺構検出位置は路面敷きの下層にあたり、造営時の整地を免れていたと推測される。

平安時代後期 築地 370 は、小六条殿造営当初に付け替えられた六条坊門小路に伴う築地施設の遺構と理解している。井戸 305 は、小六条殿敷地内の北側に置かれた「内膳屋」^{註3} 関連の厨房施設の遺構とみられる。出土した軒瓦には瓦当の遺存状態が良好な各地からの搬入瓦も多くみられ、一括性の高い小六条殿関連の瓦資料として評価できる。絞胎陶は、平安京では8例9点が知られる程度で、当時としても数少ない高級品の部類に入る貴重な資料である。平安時代中期以降、平安京内でも政治文化の重要な位置を占めた左京六条三坊の地域性を反映した出土資料といえる。

(長戸満男・小檜山一良)

註1 内田好昭・丸川義広「平安京左京六条三坊3」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年

註2 瑞浪陶磁資料館『一特別展一戦時下の陶磁器代用品』東濃西部歴史民俗資料館・瑞浪陶磁資料館 1985年

註3 『中右記』嘉承二年(1107)十二月廿一日条



図30 近世土壌出土「乾山」銘陶器



図31 井戸048出土陶器製ガスコンロ

7 平安京左京七条二坊・名勝滴翠園 (図版1・21・22)

経過 西本願寺名勝滴翠園は国宝飛雲閣に伴う庭園で、境内の南東部に位置する。今回の調査は庭園の整備事業に伴い、平成8・9年度に引き続き実施した第3次調査である。

過去2回の発掘調査の結果、醒眠泉は明和年間(1764～1771)の滴翠園整備の際、それ以前から存在した井戸を再掘して池庭の給水および意匠としていたこと、井戸は円形縦板組みであったことなどを確認した。また、醒眠泉の取り込まれている現状の西池および枯れ流れは、

明治以降の造作であり、近現代においてかなり手が加えられていることもわかった。そのため江戸期すなわち明和の整備の際には、醒眠泉の周囲には『滴翠園十勝絵図』にあるような小池が存在したと推定でき、今回はその規模・形状などの確認を目的とした。

滄浪池の本来の入水位置は、池の形態および周辺の地形から北東隅にあったと推定した。平成9年度の調査では同地点で昭和初期の土管を検出したのみで、江戸時代の遺構は確認できなかった。昭和期のものとはいえ、給水施設を検出したことで当初から付近に入水口があった可能性が高いと考え、今年度は隣接する北側に調査区を設置した。

遺構・遺物 現状の庭石の一部を取り外し、醒眠泉の南および北西2箇所に調査区を設定した。南側を「1区」、北西側を「2区」とした。

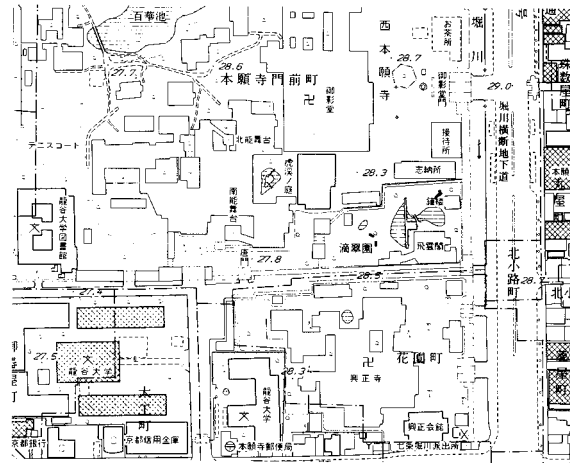


図32 調査位置図 (1:5,000)

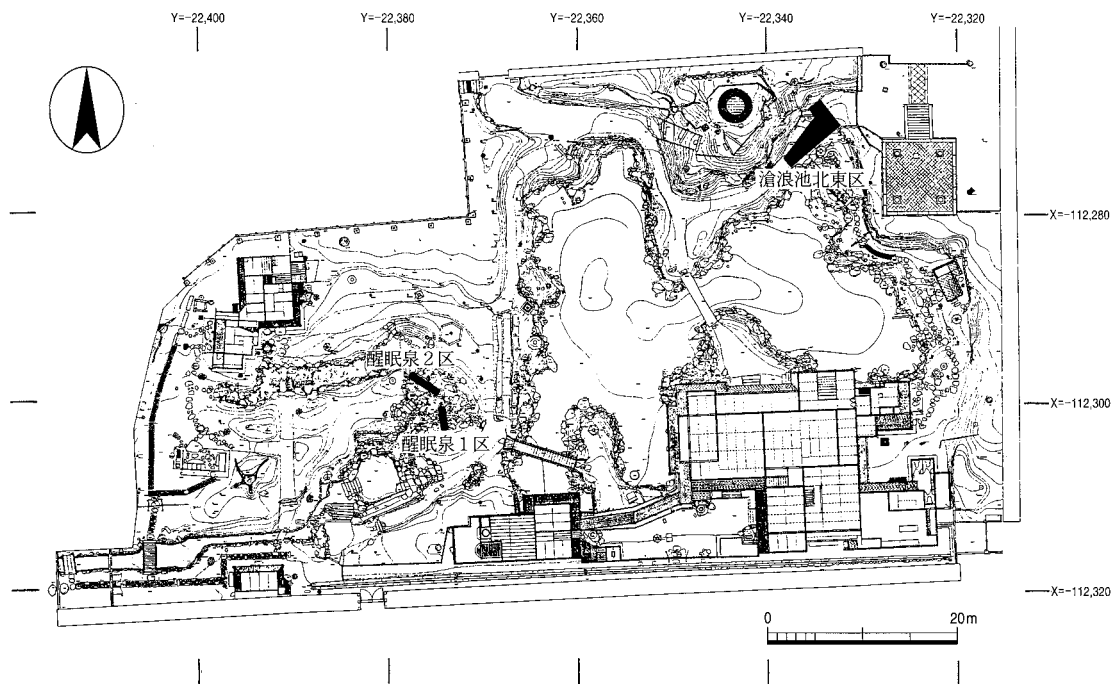


図33 調査区配置図 (1:800)

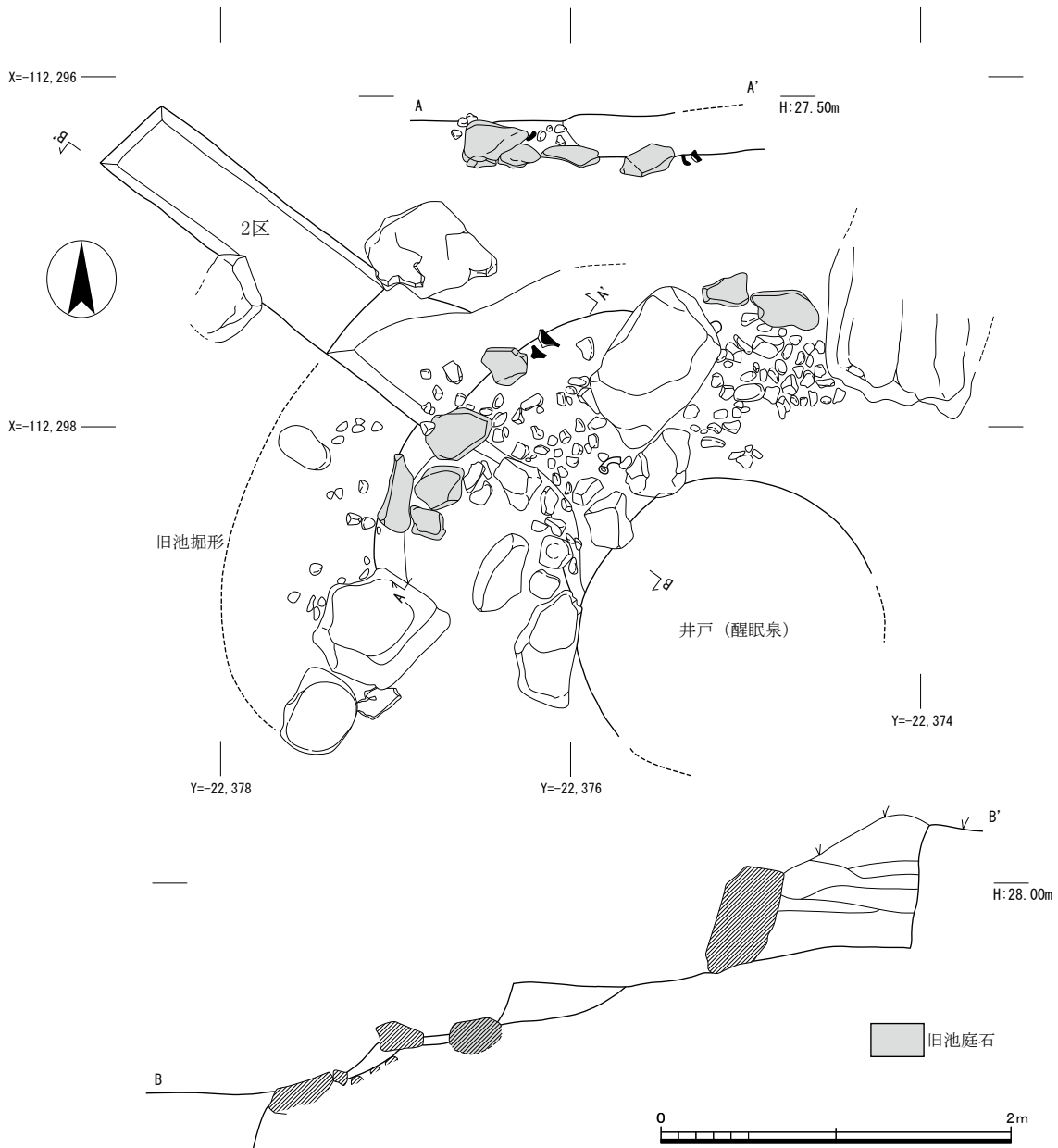


図34 醒眠泉周辺実測図 (1:40)

1区は、現在、径50～120cmほどの比較的大きな庭石を組んだ池南肩口にあたり、醒眠泉井戸枠を据えた池底から約1.5mの高低差がある。調査区部分を断ち割って断面観察を行ったところ、現状の石組みと南側の盛土は江戸時代末期から近・現代の整備に伴うもので、その下層で本願寺移転時の整地層、旧池埋土および庭石1個を確認した。

2区は、現在の枯れ流れへと続く一段高いテラス状の部分と、さらにその北西部の築山部分に設置した。築山とそれに伴う石組みは、江戸時代末期以降に同時に造られたもので、それ以前の遺構面はほぼ現在のテラス部分に相当するとわかった。また、旧池に伴う庭石7個と汀から底部にかけての玉石敷きを検出し、池の掘形も確認することができた。旧池は醒眠泉井戸を中心に直径約4.0mの円形を呈し、検出面からの深さは60～70cmである。池の中央底に石製井戸枠を据え、井戸から池の水を得ていたと考えられるが、排水路は確認していない。なお検出した旧池の

庭石は、いずれもやや脆い花崗岩であった。

滄浪池北東部は平成9年度調査区の北隣に調査区を設定し、漆喰製の方形枳および花崗岩製導水路の給水施設、滝石組など旧池の庭石組を大変良好な状態で検出した。漆喰枳は外法90×60cm、内法58×38cm、深さ約20cmで、西面下方から花崗岩製の導水路に接続する。導水路は長さ約220cm、厚さ20～30cmの花崗岩上面に深さ6～8cmの溝を施したもので、幅は入水部で約38cm、先端部（水落ち口）で約20cmと徐々に細くなるよう加工されている。先端部は滝石組の一部に取り込まれる形で、上部には高さ約50cmの立石を置く。導水路は暗渠であったと考えられるが、蓋となる木製板などは確認できなかった。

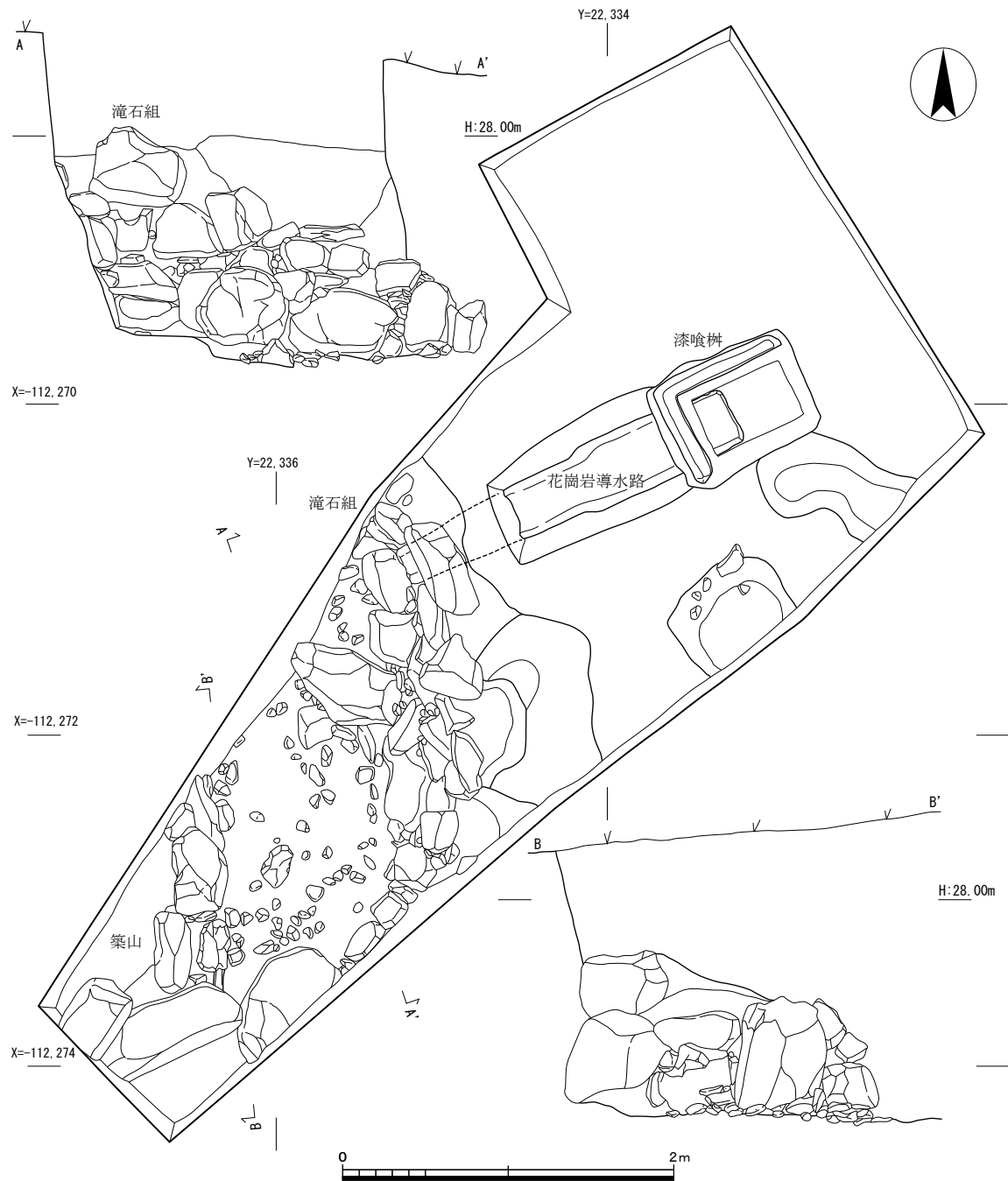


図 35 滄浪池北東区実測図 (1:40)

滝石組は池の東肩口からの高さ約1mで、径20～50cmの石を3～4段組む。花崗岩導水路の先端部から、水受けの平石までの落差は約45cmである。滝口下は数個の石で囲んだ滝壺となり、ここから20cmほどの段差をもって水を落とし込む。さらに不定形に石を囲んだ1.5m四方の部分に再度水を溜め、南西方向に広がる滄浪池本体へと流し入れていたようである。底部は、漏水防止のため拳大の礫を粗く敷く。底には腐植土が約20cm堆積しており、ここから土師器の小片が少量出土したが時期を確定するにはいたらなかった。また池底に据えた石の隙間では、漆喰で目地をした修復の痕跡も確認した。石組みの北側は築山に接続し、調査区よりさらに西側も築山に沿って石が配されていたと考えられる。東側は肩口を検出し、石の抜き取り痕を数箇所を確認した。石の裏込めはなく、掘形も確認できなかったことから、池岸の形成に伴い石を据え付けると同時に、周辺の盛土および整地を行ったことがわかる。

これらの石組みは現状の沿道を設けた際に一気に埋められており、同時に周辺の庭石の移動など大規模な庭園修復がなされたようである。埋没時期は出土遺物からは確定できないが、18世紀以降で早ければ明和期の修復時に埋没したものと推定する。

遺物の大半は瓦類で、大部分は近・現代の盛土および滄浪池北東調査区の旧池埋土から出土した。滄浪池旧池埋土からは、土師器・染付などの国産陶磁器類も少量出土している。池底に堆積した腐植土からは土師器の小片が数点出土したが、時期を決定するにはいたらなかった。

小結 醒眠泉周辺と滄浪池北東部のそれぞれの地点で、江戸時代の池庭遺構を検出し、滴翠園築造・修復に係る貴重な資料を得ることができた。

醒眠泉周辺では、給水源である井戸を中心とする円形池を復元することができた。明和期に滴翠園十勝の一つとして設けられた醒眠泉は、『滴翠園十勝絵図』文化八年(1811)にあるような井戸枠と石碑の周囲を庭石で囲んだ池庭であったことがわかった。

滄浪池北東部では旧池の庭石・導水路などを検出し、滄浪池築造時の入水口付近の様子が明らかになった。今回確認したのは、広大な滄浪池全体のごく一部の旧池の状況であるが、入水位置を確定できたことは大きな成果である。また滝石組は庭園遺構としても検出例が少なく、漆喰桝や花崗岩の切石を加工した導水路についてはほとんど類例のない貴重な資料である。池までの給水施設や経路は不明であるが、堀川の水を引き入れていたとすれば、池に給水するためには堀川の水位は現状の地表面付近までなくてはならない。当時の堀川の水位を示すような資料はないが、継続的に池に給水するために堰を設けるなどしていた可能性も考えられる。また平成9年度の調査で土管を検出したが、築造時から昭和初期まで修復を繰り返しながらも、北東部のこの付近が滄浪池の給水源であったことは興味深い。ところで飛雲閣の聚楽第からの移築説や建築年代については諸説あるが、いずれにせよ本願寺移転後まもない17世紀初頭(慶長から元和年間)に当地に建築され、それに伴う滄浪池が築造されたことはほぼ間違いない。調査で検出した旧池の庭石は本願寺移転時の整地と同時に据えられており、また築山の盛土もこれに近い土層であることから、築造年代はやはり17世紀初頭に限定できよう。(近藤知子)

8 平安京左京九条一坊 (図版1・23)

経過 今回の調査は、京都市立南大内小学校の校舎改築に伴って実施されたものである。調査地は、平安京左京九条一坊四町にあたる。四町は、南を九条大路、西を朱雀大路に面した平安京の玄関口にあたる。調査区は、校舎の攪乱をさけて東西に2箇所を設定した。調査の結果、弥生時代後期の流路、近世の耕作に伴う小溝と柵を検出した。平安時代の遺構・遺物は、ほとんど検出されなかった。

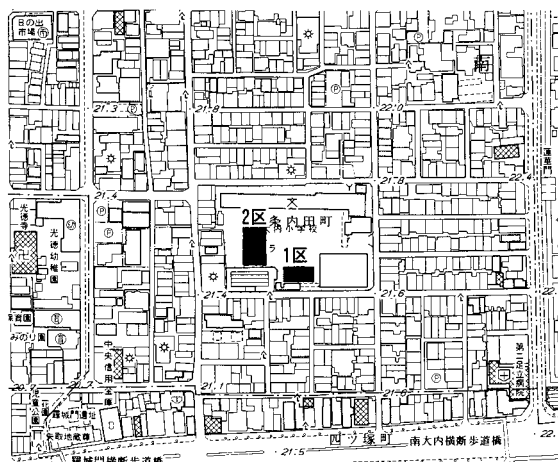


図36 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 調査地の基本土層は、現地表面より0.5mが小学校盛土層、0.7mが近世から近代の耕作土層、0.7m以下が地山となる。地山は、1区では灰色砂泥層とその下層に砂層と砂礫層が互層に堆積し、河川状の堆積を示す。2区では灰オリーブの砂礫層が地山となり、砂泥層の堆積はない。1区地山の灰色砂泥層からは、平安時代の土器や瓦が縦方向に突き刺さるように出土しており、この時期土地が軟弱であったことがうかがわれる。

1区で検出されたSD1は、北東から南西方向の自然流路で幅1.7~2.2m、深さ0.2~0.3mを測り、北東部で浅く南西部で深い。流路内の埋土はすべて砂層である。流路内から出土する土器は、ほとんどが磨滅した細片であるが、弥生時代後期の受け口状口縁を呈する甕が出土している。近世の遺構は、坊城小路西築地推定ライン上で南北方向の柵を検出した。杭の間隔は0.4

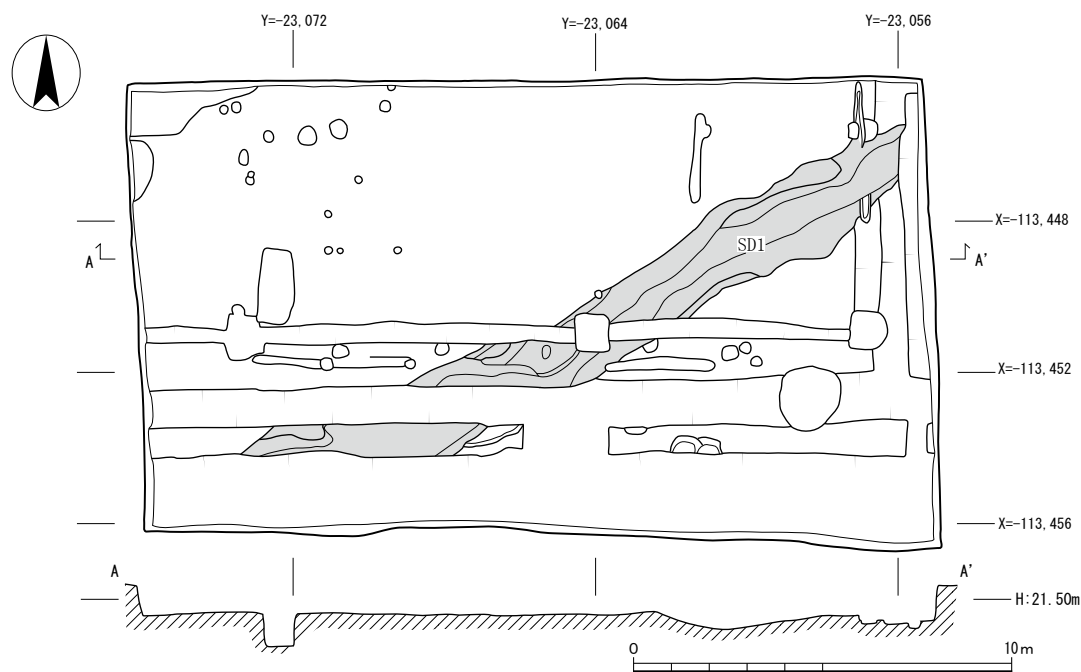


図37 1区遺構実測図 (1:200)

～0.5 m、径は0.1 mを測る。田畑の境界を示したものである。

2区では、近世の耕作に伴う素掘り溝を検出した。素掘り溝は、幅0.2～0.3 mを測る。素掘り溝は、いずれも田畑へ水を供給する暗渠の掘形と考えられる。ほとんどが東西方向である。溝内からは、18世紀代の伊万里椀や土師器が少量出土する。2区西部では南北方向の柵を検出した。柱間は1.8 mで9間分を確認。平安時代の四行八門には乗らない。

小結 今回の調査では、弥生時代後期の流路、近世の溝などが検出された。1区では、坊城小路に関連する遺構は検出されなかった。今回の調査地に条坊制が施工されていたかどうか大きな問題となる。調査地である

左京九条一坊四町は、鎌倉時代以降、東寺に寄進され寺辺水田として東寺の所領になることが『東寺百合文書』によって知られている。この中には建保四年(1216)の手継券文があり、そこには「九条坊城田畑」という表記がされており、この時期には田畑になっていたことと、坊城小路が地割りとして存在していたことがわかる。土器が地山面に突き刺さるような軟弱な地盤であったため、路面などはなく、湿気抜きを目的とした側溝のみであったとも考えられる。

調査地の九条一坊四町は、西を朱雀大路に面し、平安京の玄関である羅城門の北東に位置する。朱雀大路から坊城小路までの町は「坊城」と呼ばれ朱雀大路の景観を維持するため特別な区域であったこのため、律令国家によって直接保持されたのであろう。

南大内小学校の地は、平安時代、国家によって管理された平安京の中の空閑地であった。律令制の崩壊後、次第に田畑などの耕作地になり、この土地利用のされ方は小学校が建設される昭和のはじめ頃まで続くことになる。

(南 孝雄)

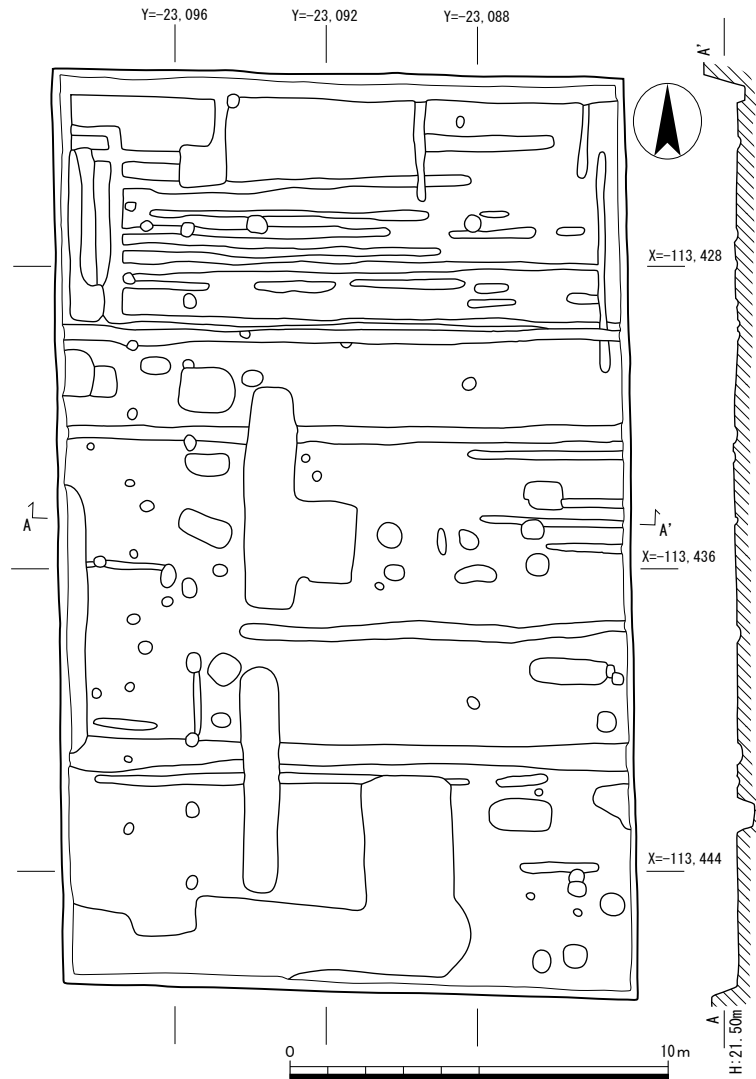


図38 2区遺構実測図 (1:200)

9 平安京左京九条二坊 (図版1・24・25)

経過 調査対象地は、JR京都駅南側脇を東西に走る八条通に面しており、南区西九条鳥居口町に所在する。平安京においては、北側を八条大路、西側を油小路、南側を針小路、東側を西洞院大路に画された、左京九条二坊十六町内の北東部西半に位置する。

平成9年(1997)12月9～11日には、調査地内に2箇所の調査区を設けて試掘調査を実施している。試掘調査の結果、中世遺構面は良好な状態で存在しており、その下層に平安時代前期の遺構が残存していることが明らかとなった。このことで平成10年(1998)3月から本調査を実施することとなり、以後6月3日までの期間実施した。

既建物の北側にあたる敷地北部にA区、南半の既建物の間の敷地にB区とする2箇所の調査区を設定した。調査では、平安時代前期および鎌倉時代の2時期の遺構を中心とする遺構群や包含層を検出した。

遺構 A区では、現地表下0.9～1.0 mまでは近代以降の積土である。この直下に、厚さ20 cm前後の黒褐色砂泥層がほぼ調査区全域で検出されている。この土層は中世から近代にかけての耕作土層とみられる。この土層下1.1～2 mの深さで、鎌倉時代から室町時代にかけての中世遺構面が調査区全体に広がる。鎌倉時代に、南半部分を中心に1～2層の薄い整地土層が入れられる。この整地土層の下は、自然堆積の地山砂礫層である。

B区では、近代の耕作土層がA区よりも厚い堆積を示す。この下の地表下1.2 m前後の深さで検出される江戸時代中期の遺構面は、2～4 cmの薄い黄色味を帯びた泥砂土で形成される。この直下では、0.2～0.3 mの幅の南北方向の暗渠(溝)が、狭い間隔で見られる。この薄い土層については、耕作土の床土ともみられるが、極めて薄く上面にピット(柱穴含む)などが認められることから、民家の土間の可能性もある。この土層直下では、基礎土層とみられる黒褐色砂泥～泥砂層が20 cmの厚さで堆積している。調査区中央部から東側では、この土層下の地山砂礫層上面で平安時代から中世の遺構が検出される。西部の東半は、地山上面が中央部以东より20 cm高くなっている。この部分は、検出状況からは南北方向の小径とも考えられる。

平安時代前期の遺構は、地山上面で検出している。A区の南部では、落差15とした比較的規模の大きな遺構を検出している。北肩部から南方へゆるやかに傾斜し底部にいたるが、南側では底部は少し高くなっている。底部の深い部分は、北北西から南南東方向に延びているが、方向や堆積土(シルト土や微砂を多く含む砂泥土)の様相から、平安時代初めの池状窪地と想定している。

A区の南東部では、北肩に近い緩傾斜面で、乱雑に石積みした掘込(土壌47)を検出している。

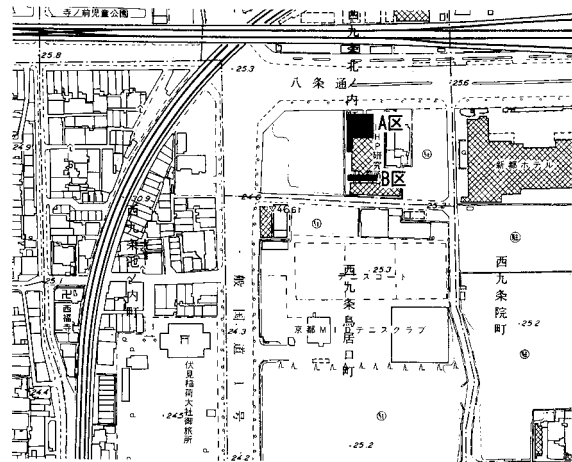


図39 調査位置図(1:5,000)

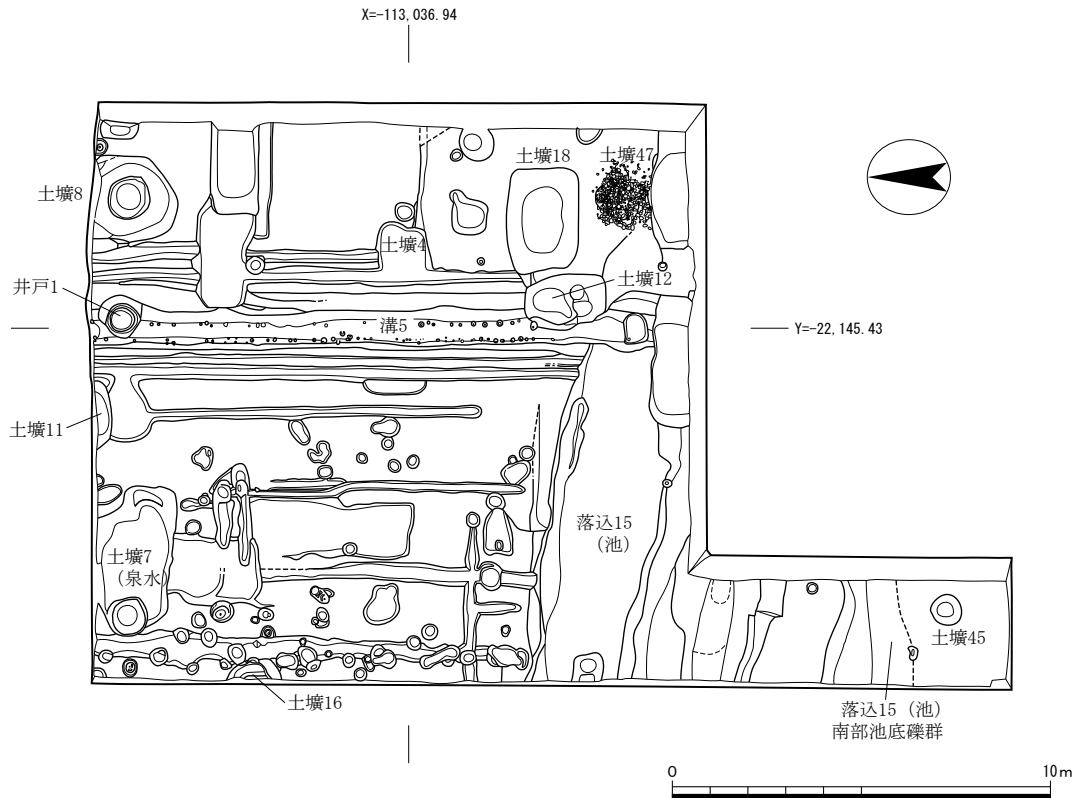


図40 A区第2面-2遺構平面図(1:200)

出土遺物から平安時代初めには設置されている。この遺構は、水際近くに造られた浅い水汲み施設と推定される。

土壇47は、平安時代初めには埋没しており、その上の東南部の緩傾斜面全体に、拳大からやや小さめの礫を敷きつめた遺構が検出され、西半の北肩部や側壁も人工的に造り直されている。東半は、石敷きの汀と理解され、自然地形として存在していた池全体を園池として取り込んだものとみている。

南拡張区の南半では、拳大の礫を敷いて形成された、深部より一段高くなる底部を検出している。西側で肩部へ連続する可能性がある。また、この礫敷きの検出部分は、水面が高ければほぼ水没するが、深部との間の土堤状の高みは完全には水没しない。この高みは出島や小島状の遺構の一部とみることもできるが、現状では想定の域を出ない。

池の北肩部以北の遺構面では、関連する建物などの明確な遺構は検出できなかった。しかし、北肩部から底部へいたる斜面部からは、北側から投棄したとみられる平安時代前期の遺物が数多く出土している。このことや1町内での池の検出位置などを考えると、池の北西部あるいは北東部に建物などの施設があったと想定してよいだろう。

この池は、北斜面部から底部にかけては平安時代前期のうちに埋没が進むが、平安時代後期にも窪地として残存していたとみられる。南拡張区南半部では、石敷きに被る土層面で平安時代後期のピットを複数検出している。これらのピットには、底部に軒平瓦や平瓦を礎板状に設置しているものや、柱当たりが確認できたものがあり、柱穴とみてよいものが含まれている。建物の一

部を検出したものと理解している。

調査区南半部において整地土層とした平安時代末から鎌倉時代初めの遺物包含層が、池内埋土上層に堆積することによって、上述の池はほぼその姿が失われる。

平安時代後期に入ると、A・B両区ともに遺構の増加が認められるようになり、同末から鎌倉時代にかけてはさらに増加傾向を示す。B区では鎌倉時代後半に入ると遺構の減少が認められるが、A区では鎌倉時代後半に入っても発展的に継続する様相を示す。激減するのは、鎌倉時代末以降である。平安時代末から鎌倉時代の遺構には、柱穴を主とするピット群、井戸、土壇、溝、溝状遺構、石積みの小園池（泉水）ほか、各種の遺構がみられる。

A区では、ピットを調査区西部の西壁沿いで多く検出しており、南北方向に心々2 mの等間隔で並ぶものもある。しかし、建物本体は西壁外とみられ、全形を把握できた例はない。A区井戸1は、北部で検出したもので底部に径60 cmを測る曲物が設置されていた。平安時代末にも機能していたとみられるが、鎌倉時代初頭には埋没している。土壇18は、東西方向に長い方形の掘形をもっており、井筒などは残存していないが、井戸とみられる。平安時代末のうちに埋没している。土壇8・11・16も検出時に付した名称を変更していないが、それぞれ円形の掘形をもつ井戸とみられる。土壇16は、鎌倉時代前半に、土壇8・11は後半に埋没し機能を失っている。

B区では、中央部の東側の北壁際で、円形の掘形をもつ井戸1南半を検出している。下部に2段ほど円形石組井筒が残存していた。石材は径20～30 cmの河原石である。底部に木枠が設置されたとみられるが残存していなかった。B区井戸1は、鎌倉時代前半に形成され、前半中に埋没している。河原石を用いた円形石組井戸としては、京域内では古い時期に属する資料である。B区では、井戸1周辺で、建物とみられる柱穴（ピットとしており、礎石をもつものもある）列を複数検出しているが、調査区が狭小なこともあり建物構造を知るにいたっていない。これらの柱穴群も、鎌倉時代前半中にはほぼ埋没している。

A区土壇12は、南東部で検出した掘込であるが、鎌倉時代半ばに炭・灰層によって埋没していた。この遺構内からは、土師器皿、瓦器碗・鍋・盤など日常生活用具類とともに、取瓶や鞆の羽口など鑄造関係の遺物が出土している。上述の土壇8や土壇7（泉水）などでも、埋設土に多量に炭・灰を含む土層がみられた。これらの遺構は、鑄造関係などの火熱を使用する生産活動によって生み出された炭・灰などの処理穴として利用されたものであろう。

A区土壇7は、北西部の北壁際で検出している。平面形は東西約4 m×南北約2 mで東西に長い不定形を呈し、深さは検出面から40 cmを測る。側壁には全体に河原石を用いた石積みが施されている。石積みは2～4段残存していた。石材には、長さ15～20 cm、幅15 cm前後の扁平な河原石を用いている。石の種類は、砂岩やチャートなどの堆積岩が大半を占めており、賀茂川など京都盆地内の河川流域で容易に採取し得る石材である。石積みは、扁平な面を水平にして一段ごとに外方へ少しずつ持ち送って積み上げている。北東部分などはラインを少し変形して積んでおり、意図的に変化をつけたと思われる。遺構の底部では、敷いたとみられる石を少数検出している。残存している底部は、砂礫を締め固めた程度の造りである。石積の様子や遺構内最下層に

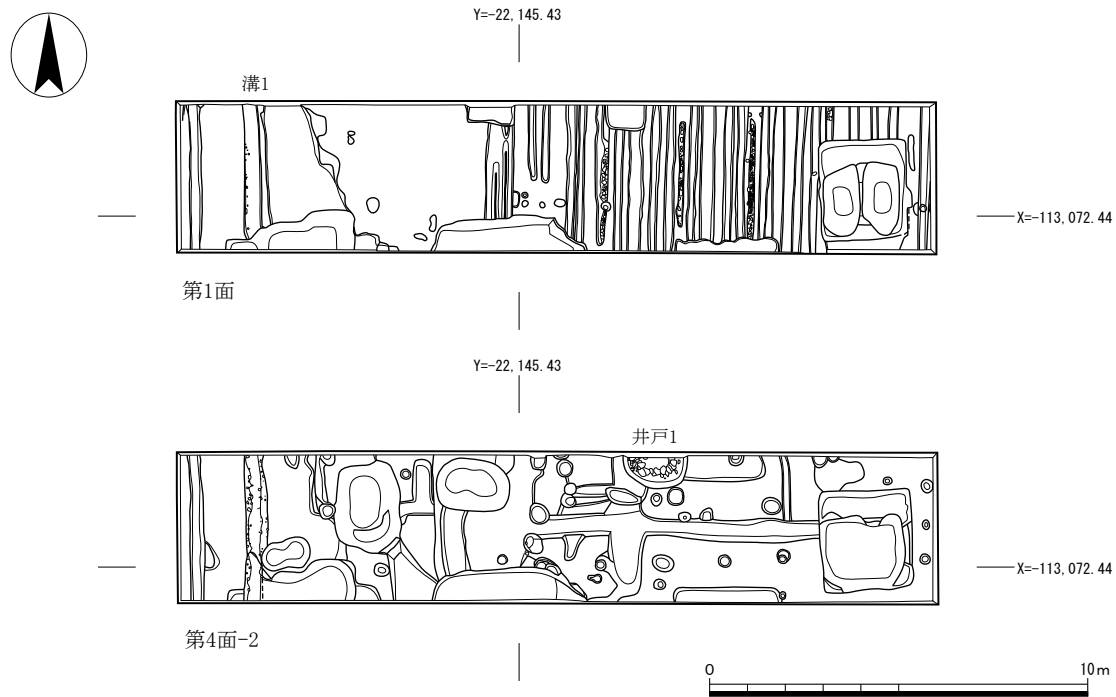


図41 B区遺構平面図 (1:200)

シルト質の泥土が堆積している点などから、小園池（泉水）と考えている。調査区西辺から西側に想定される建物との関係からは、建物の東側庭の北部に造られた泉水とみることができる。中央部北側の精査によって、皿状を呈する遺構の断面を検出している。泉水への導水路とも考えられるが、明確にするには北側の調査が必要である。

土壌7は、鎌倉時代半ばに形成されたとみられ、土師器皿などの遺物を多数含む炭・灰層や黄褐色砂泥土（京域北部の地山土に類似した土）などによって、鎌倉時代後半のうちには埋没し廃棄されている。このような石積みの泉水は、京域内での調査例は知られていないし、ほか地域でもほとんど類例はみられないようである。その意味では、今回の調査によって検出された土壌7は、泉水の歴史を知る上でも貴重な資料となるだろう。

これら平安時代末から鎌倉時代の遺構群は、当町が空閑地であった後に、新たに居住地となったことを示している。これらの遺構群は、A区では継続していたとみられるものを含むが、平安時代末から鎌倉時代初め、鎌倉時代前半、鎌倉時代後半の3小期期に区分できる。柱穴群とその関連遺構の変遷からは、平安時代末に成立した建物が、鎌倉時代に建て替えられたものとみられる。

A区では鎌倉時代後半まで続いた遺構群も、同末頃になると急速に減少する。溝と溝状遺構の一部に埋没年代が室町時代前期まで下がるものがみられるが、A・B両区ともに鎌倉時代末以降から江戸時代前期までの長い期間にわたり、遺構といえるものはほとんどみられなくなる。耕作土層とみられる土層があり、鎌倉時代以降には当町全体で耕作地化が進行したと理解している。再び遺構が増加するのは、江戸時代中期に入って以降である。しかし、A・B両区ともに井戸や土壌、柱穴などはほとんどみられず、溝および溝状遺構が中心である。これらの遺構群は、耕作

に関連するものとみている。しかし、B区の溝状遺構群は性格が異なる。A区溝5およびB区溝1は、杭で横板を留めた護岸が施されており、両溝ともに敷地境を走る用水路とみられる。溝5は近代にまで踏襲されており、近代には溝と重なるラインに東側敷地の西限の石垣が築かれている。その他の溝と溝状遺構は、畑などの湿気抜きとされる暗渠が大半を占めている。B区の溝状遺構群は、先にも記したが上面の張り床状の薄い土層の理解と大きく関係する。現段階では、張り床下の湿気抜きという推定を記しておく。解明が必要な遺構群である。

当町が再び都市化するのには、近代に入って北側隣接地に鉄道路線が付設され、京都駅が建設されて以降である。近代に入って以降の耕作土層の上面に厚い整地土層が積み上げられ、その上面が宅地となり現代にいたっている。

遺物 地山砂礫層の上層から、弥生時代から古墳時代にかけての土器類が出土している。磨滅したものも含まれており、いわゆる流れ堆積した遺物とみられる。北東方向の比較的近接地に同期の遺跡が存在している可能性を示している。

平安時代以降では、A区の土壙47や落込15（池）内から、平安時代前期に比定できる土器・陶器類が数多く出土している。出土遺物は、土師器の食器類、煮炊具の甕、黒色土器A類の食器類、煮炊具の甕、須恵器の食器類、鉢・壺・甕など調理具と貯蔵具、緑釉陶器、灰釉陶器の食器類、貯蔵具の壺など、京域内で一般的な生活用具類が出土している。このほかに、須恵器円面硯や土馬など一般的な宅地跡では出土例の少ないものや特殊なものが、少数ではあるが共伴出土している。これら平安時代前期の出土遺物は、土壙47出土資料が京都I期中の新相～I期新の古相（9世紀初頭）、落込15（池）内からの出土資料は京都I期新～II期古（9世紀前半から半ば）に比定できる。

A区では、平安時代後期の11世紀後半以降に出土量が増加傾向を示し、同末の12世紀後半から鎌倉時代の遺物は各種の遺構や包含層から多量に出土している。B区でも、平安時代後期に入ると同様の傾向を示し、鎌倉時代後半代には出土数は減少していく。

平安時代後半から鎌倉時代初め（11世紀末から12世紀末）に比定できる遺物では、土師器皿類が多く出土している。ほかに瓦器椀・盤、須恵器鉢・甕、輸入陶磁器白磁椀・壺、青磁椀・皿なども多い。白色土器皿・高杯、輸入青白磁小壺や瓦類も出土するが多くはない。

鎌倉時代（13世紀代）に比定できる遺物は、A区井戸1や土壙7・8・11・12・16などから、量も多くまとまって出土した。土師器皿類、瓦器椀・皿・鍋・釜・盤、須恵器鉢・甕、輸入陶磁器青磁椀・皿、褐釉盤・壺などがあり、出土量に差はあるものの基本セットともいえる出土状況を示す。組成上は、烏丸四条あたりより以北の京城中心地域出土資料と比べて遜色はないが、瓦器椀が多く輸入陶磁器が少ないという傾向がある。

鎌倉時代の遺物は、土壙12などから取瓶や鞆羽口などの鑄造作業に関連する用具類の出土がみられる。緑青が付着しているものがあり、銅関係の鑄造作業に使用したものであろう。ほかの土壙や落込からも少量ながら出土がみられる。出土量は多くはないが、多量の炭・灰とともに処分されている出土状況などからみても、当町内に銅の鑄造工房などが存在していた可能性を示す

資料とみてよいだろう。

これらの平安時代末から鎌倉時代の資料は、A区では、土器型式の面からみると京都V期新(12世紀後半)から京都VII期古まで一括資料を中心に途切れることなく出土している。遺跡の理解に必要な資料にとどまらず、土器、陶磁器の研究にとっても重要な資料となろう。盛期といえる鎌倉時代も、末期になると遺物の出土量は大きく減少していく。室町時代初め(14世紀代)は、少数ながら出土がみられるが、以降はほとんどみられなくなる。このような状況は、A・B区ともに江戸時代前期(17世紀)まで継続している。これは、当町を含むこの地域が耕作地帯と化した結果であろう。

A・B両区ともに再び出土遺物が増加傾向を示すのは、江戸時代中期になって以降である。溝や溝状遺構(暗渠)群からは、伊万里の染付磁器や白磁、青磁、京焼風肥前陶器、唐津刷目手や三島手の陶器、京焼系陶器、鉄釉陶器などの国産陶磁器を主体とする日常雑器類、棧瓦類などの遺物が出土している。江戸時代中期、同後期および近代にいたる時期のものが出土している。

しかし、それぞれの溝状遺構からの出土遺物には、強く磨滅しているものが含まれており、その他の遺物も二次的移動後に埋没したものが多い。これらの遺物は、耕作土層の湿気抜きを目的とした暗渠を構築する瓦礫材として集められ、入れられたものと考えられる。当町の遺跡の様相を直接反映した遺物ではないものとみられる。こののちの、A区溝5上層やB区溝1から出土している近代の遺物類は、当町が再び居住地化し、都市域の一面となったことを示したものと理解される。

小結 当調査地が位置する平安京左京九条二坊十六町は、関連する平安時代の文献史料はほぼ皆無のようであり、様相はほとんど知られていなかった。

しかし、当調査対象地の南隣りの松下興産所有地内では、(財)京都市埋蔵文化財研究所によって平成元年度から平成5年度にわたり一連の発掘調査が実施されている。この一連の調査で、町の南側を走る針小路沿いの当町南辺部にあたる地区で、計4箇所(3区)の調査区が設けられ発掘調査が行われている。このうちの第2次調査の3区では、平安時代前期の建物が検出されており、4箇所(3区)の調査区を通じて平安時代末から鎌倉時代の町屋跡とみられる井戸や柱穴を含む遺構群が検出されている。この結果、当十六町の南辺部の平安時代から中世以降の遺跡の様相がほぼ明らかとなっている。

今回実施した発掘調査においても、園池とみている池状の遺構や、その北岸に造られた石敷きの汀、それに先行する池北岸近くに設けられた小井戸状の水汲み施設など、平安時代初めから前期の遺構を検出した。また平安時代末から鎌倉時代の町屋と泉水を含む遺構群も検出し、中世以降についても耕作地化して近代へいたることを、調査によって把握することができた。

平安時代前期に比定し得る石敷きの汀を伴う園池や、鎌倉時代の宅地の庭に設けられていたとみている石積みの小規模な泉水などは、個々の遺構として注目してみても、京域内において既調査例が少ないか、もしくは初出といえる資料である。日本の庭園史に対する認識を深める意味でも貴重な資料といえる。

今回の発掘調査によって得られた成果は、既調査成果と総合することによって、文献史料では知りえなかった当町の歴史を解明する重要な資料となり、平安京の歴史の変遷を理解する基礎資料になろう。

(小森俊寛)

10 平安京右京三条一坊1 (図版1・26)

経過 二条駅地区土地区画整理事業に伴い、二条駅西通が新設されることになった。1995年に1期調査を実施しており、今回は2期目にあたる。調査地は、平安京右京三条一坊三町の西坊城小路東側築地心と六町の宅地内に位置する。調査区は、1期の調査で平安時代前期から後期の園池を検出した東側の地点に4区、西坊城小路東側築地心の地点に5区を設定した。4区では園池に関連する建物の検出が期待された。

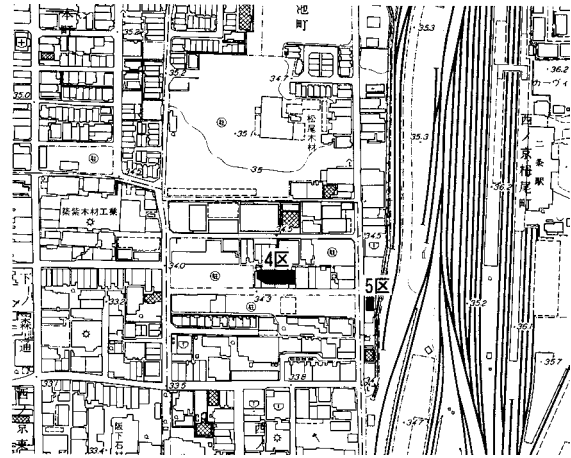


図42 調査位置図 (1:5,000)

遺構 4区の基本層序は、盛土層 (0.3～0.6 m)、耕作土層 (0.2 m)、地山となる。地山の標高は33.50 mである。

近代・近世の遺構は、井戸・溝・土壇・柱穴などがある。井戸は石組みのもの、上部が石組みで下部が桶のもの、漆喰のものがある。溝 (SD1) は幅1 m、深さ0.2 mを測る東西溝であり、板によって護岸されているところもある。土壇 (SX3) は、調査区西側で検出した大型のものであり、埋土より多量の遺物が出土した。

平安時代の遺構としては、柱穴25基を検出した。東端で検出した柱穴157・153は一辺約1 mの方形を呈するが、同様の柱穴は調査区内には検出されず、調査区外に建物 (SB1) があるものと推察される。柱穴153では柱の抜き取り痕が認められた。ほかに1.8 m間隔で東西方向に延びる柵列と考えられる遺構 (SA2) や、柱根の残るもの (柱穴150)、平瓦片を重ねて礎石の代わりにしたもの (柱穴154) などがある。しかし、建物を復元するまでにはいたらなかった。

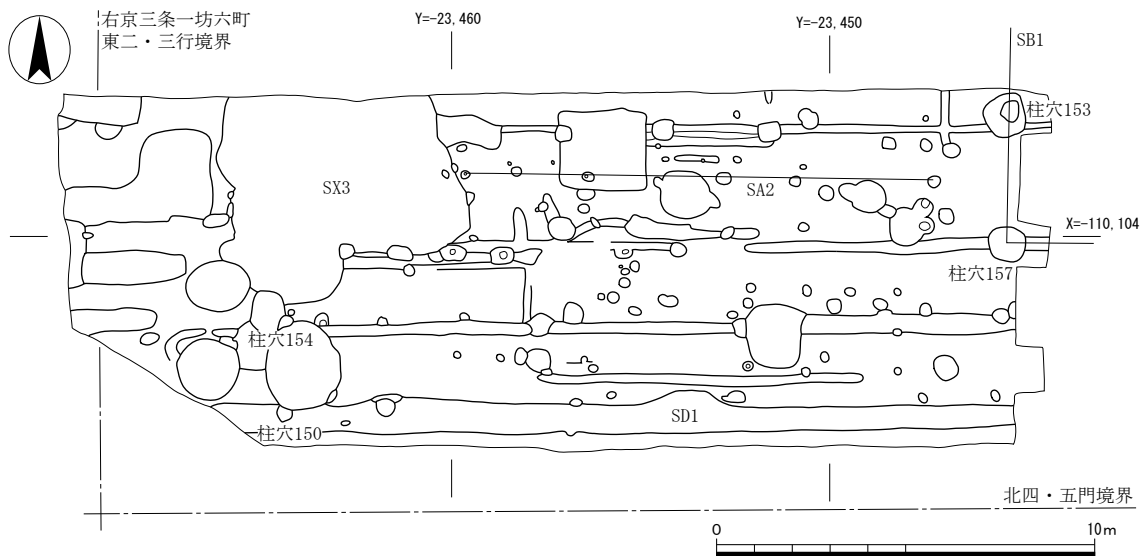


図43 4区遺構平面図 (1:200)

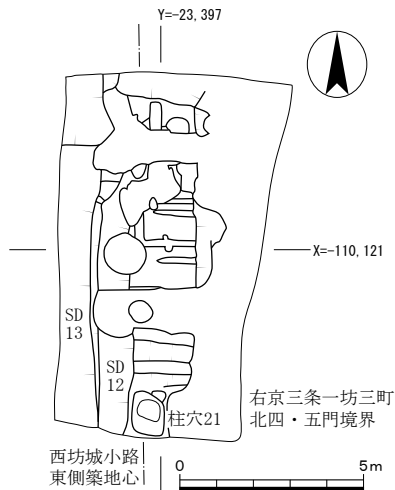


図 44 5区遺構平面図 (1:200)

5区は重量鉄骨建物が建っていたため著しい攪乱を受けており、残存状況は非常に悪く、遺構面は島状に残っている程度である。地山の標高は33.50mである。

近世の遺構としては、上部が漆喰で下部が12角形の板組み井戸がある。

平安時代の遺構としては、溝・土壇・柱穴がある。溝(SD12)は幅0.7m以上、深さ0.1mを測る。埋土からは、瓦片以外土器類は少量出土しているのみで、時期を決定することはできない。調査区西端で検出した溝(SD13)は幅1.5m以上、深さ0.45mを測る。埋土は3層に分層できるが、ほとんどが2層目まで攪乱により削平されている。

3層から平安時代後期の土師器が出土した。調査区南端中央部で1m前後の隅丸方形の掘形を有する柱穴21を検出した。

遺物 4区の遺物は整理箱で19箱出土した。近世の遺物はSX3などから、土師器・陶器類・漆器類・木製品類が出土した。陶器類には墨書が認められるものがある。

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦など9～10世紀代の遺物が柱穴内より出土したが、いずれも小片であり全形を知りうるものではない。柱穴150からは柱根が出土した。弥生時代の遺物は中期の土器片やチャート製の打製石鏃が近世の遺構に混入して出土している。

5区の遺物は整理箱で5箱出土したが、ほとんどが平安時代の遺構から出土した土器・瓦類である。平安時代後期(12世紀)の土師器皿類がSD13最下層より出土した。

平安時代前期の遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦など9世紀後半代の遺物が土壇、柱穴などから出土した。柱穴21からは、面取りした径35cmの柱根が出土した。なお、攪乱土内からは9世紀前半の土師器類が出土している。

小結 調査地は平安京右京三条一坊三町および六町に位置する。「拾芥抄」西京図によれば、三町が右京職、六町が西三条第に比定されている。

三町内の調査では、西坊城小路東側溝を検出した。また、推定西坊城小路東側築地心の北五・六門の境界付近で柱穴21を検出した。調査区内で対になる遺構が検出されなかったため、埋め戻し時に南側を一部拡張したが、攪乱されており認められなかった。

六町の調査では、1期の調査で平安時代前期から後期の園池を検出しており、それに関連する建物の検出が期待された。調査区北東端で、建物(SB1)と考えられる柱穴2基を検出した。柱穴内からは平安時代前期に属する土師器・須恵器細片が少量出土したのみであり、建物の時期は決めかねる。

今回の調査は調査面積も狭く、建物の一部を検出したのみで、園池との関連は明らかにすることができなかった。

(伊藤 潔)

11 平安京右京三条一坊2 (図版1・27・28)

経過 中京区永本町・船塚町地内で七本松一御前通間の御池通拡幅工事が計画され、それに伴い発掘調査を実施した。調査区は現道の北側の買収地に、A～C区の3箇所を設定した。調査地は平安京右京三条一坊十・十五町にあたり、A区は皇嘉門大路西側築地心、B区は十町の宅地内、C区は西櫛笥小路西側築地心、および十五町の宅地内に位置する。

遺構 A区の基本層序は、盛土層(0.5 m)、旧耕作土層(0.1 m)、床土層(0.1 m)、地山となる。地山の標高は、34.00 mである。遺構は地山面で検出した。

近世東西2間×南北3間以上の総柱建物1棟を検出した。

平安時代後期の土壌2基と皇嘉門大路西側溝および路面を検出した。築地心推定線付近では何の痕跡も認められなかったが、西側から側溝上層にかけて瓦が一面に出土した。側溝は幅1～1.2 mを測るが、兩岸とも修復の痕跡が顕著に認められる。埋土も窪み部以外は砂礫層であり、流れが速かったことを物語っている。

B区の基本層序は、盛土層(0.3～0.4 m)、旧耕作土層(0.1 m)、床土層(0.08 m)、地山となる。地山の標高は34.40 mであるが、東へいくほど低くなり、SG 108西肩部付近では34.10 mである。遺構はすべて地山面で検出した。

近世幅1.2 m、深さ0.6 mを測る断面逆台形状を呈する南北溝(SD 62)1条と、耕作に伴う小溝群がある。

平安時代調査区東端で拳大の石や瓦片を貼りつけた園池状の遺構の西肩部(SG 108)を検出した。SG 108は右京三条一坊十町の南東隅に位置し、調査地の南端から三条坊門小路北築地心まで3.7 m、東端から皇嘉門大路西築地心まで9.7 mの距離しかなく、小園池と推定される。埋土は3～6層に分層でき、下層より9世紀末から10世紀前半の遺物が出土した。園池の西側では、9世紀から10世紀前半の遺物を含む径40～60 cmの柱穴約100基を検出したが、調査範囲が狭いため建物の復元にはいたっていない。

C区の基本層序は、東端では盛土層(0.05～0.1 m)、地山となるが、西側にいくに従い耕作土層(0.05～0.1 m)、床土層(0.08 m)、遺物包含層、地山となる。地山の標高は、34.20～34.30 mである。現表土から地山までが0.05～0.3 mと浅く、遺構の遺存状態は良くない。

近世C-1区で2間×3間に復元できる礎石建物1棟を検出した。C-2区で土壌4基を検出した。

平安時代西櫛笥小路西側築地心推定位置に1.8 m間隔で柱穴が並ぶ(P 102・90・108)。その

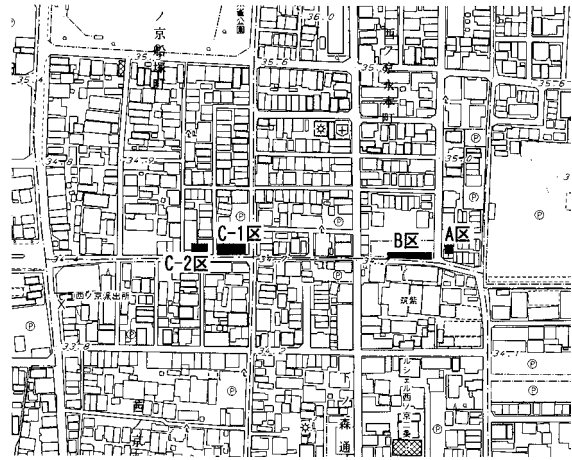


図45 調査位置図 (1:5,000)

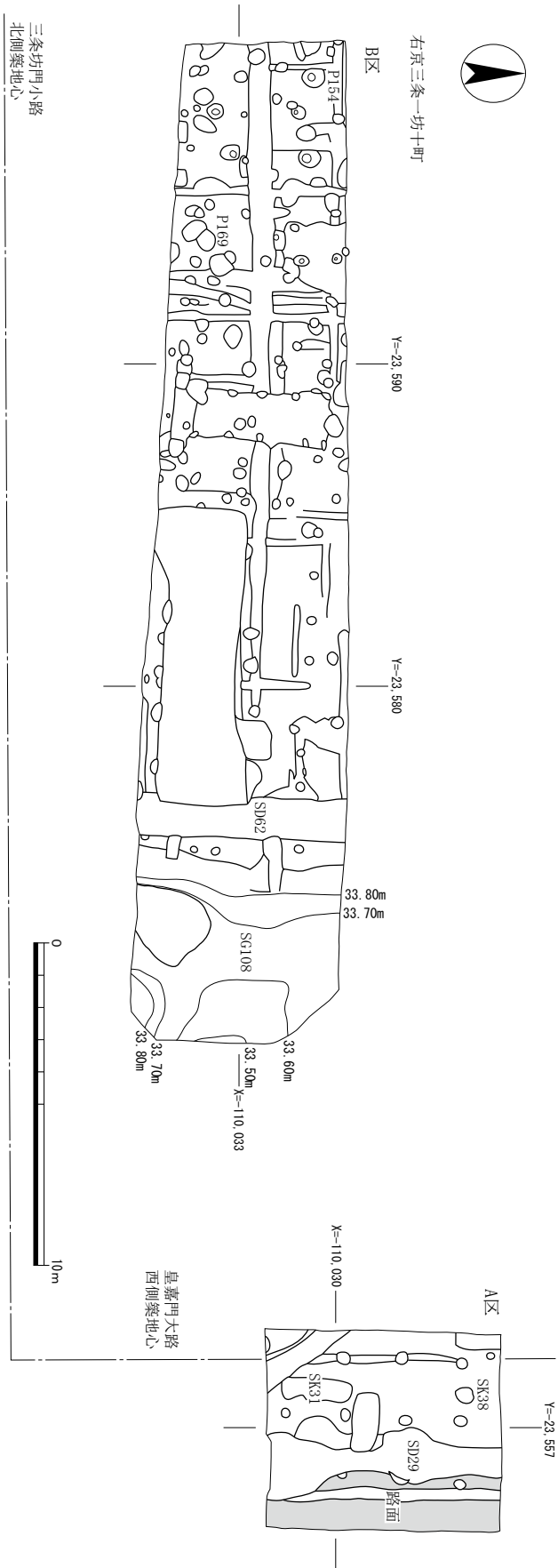


图 46 A·B区遺構平面図 (1:200)

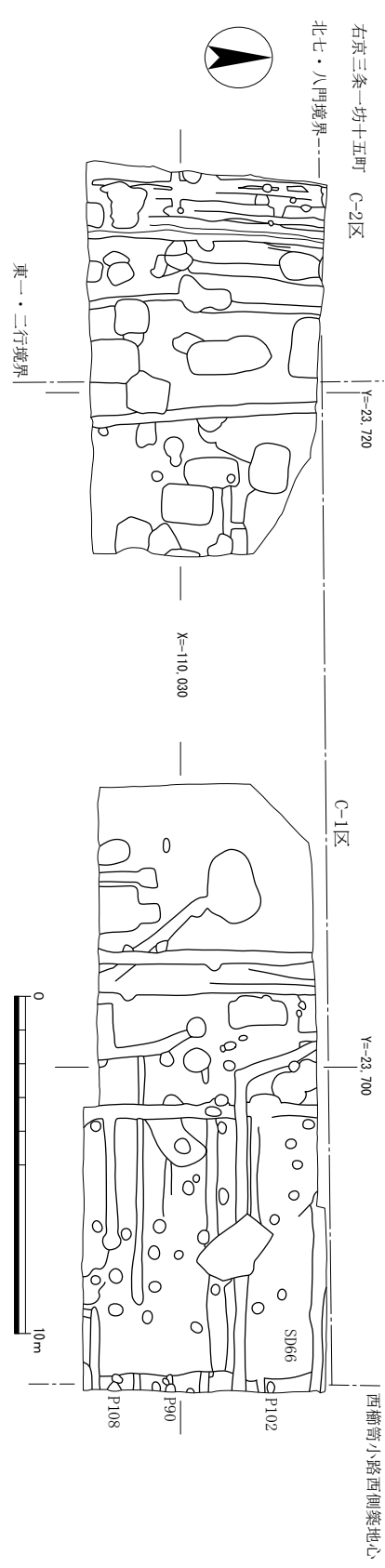


图 47 C-1・2区遺構平面図 (1:200)

西側に大半が削平されているが、幅2m前後の溝（SD 66）と考えられる痕跡の一部を確認した。埋土内より平安時代前期の遺物が少量出土した。ほかに土壌や柱穴を検出したが、建物などを復元するにはいたっていない。

遺物 遺物は整理箱に110箱出土した。半数以上がA区SD 29上面、およびB区SG 108から出土した瓦類である。遺物の時期は古墳時代から近世に及ぶが、平安時代前期から中期に属するものが多い。

平安時代後期から中世各調査区から土器類が出土しているが、その量は極めて少ない。平安時代後期の土師器皿がA区土壌（SK 31・38）より数個体ずつ出土した。

平安時代前期から中期土師器は、大半が9世紀後半から10世紀前半の遺物であるが、A区SD 29の凹部泥土層中や側溝修復土内からは9世紀初頭の遺物が出土した。SD 29出土の須恵器杯底部外面には「上」の墨書がある。硯はA区SD 29から風字硯、C-1区遺物包含層より円面硯の破片が出土している。ほかに緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器などの器種がある。B区からは緑釉陰刻花文陶器片が数点出土した。

瓦類は、A区、およびB区SG 108より多量に出土した。緑釉丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦のほかに「右坊」「右坊城」「右坊口」などの文字瓦が出土した。

木製品はB区SG 108から下駄、曲物底板などが出土した。B区P 154・169からは柱根が出土している。

銭貨はA区SD 29より「承和昌寶」が1枚出土した。

小結 今回の調査では、条坊関係の遺構としては皇嘉門大路路面、および西側溝を検出した。十町の地内では、小園池と考えられる遺構を検出した。園池の西側では建物を復元するまでにはいたらなかったが、平安時代前期の柱穴群を多数検出している。9世紀の越州窯青磁碗や陰刻花文を施した緑釉陶器碗などの優品も出土している。この園池は邸宅に伴う遺構と考えられる。

(伊藤 潔)

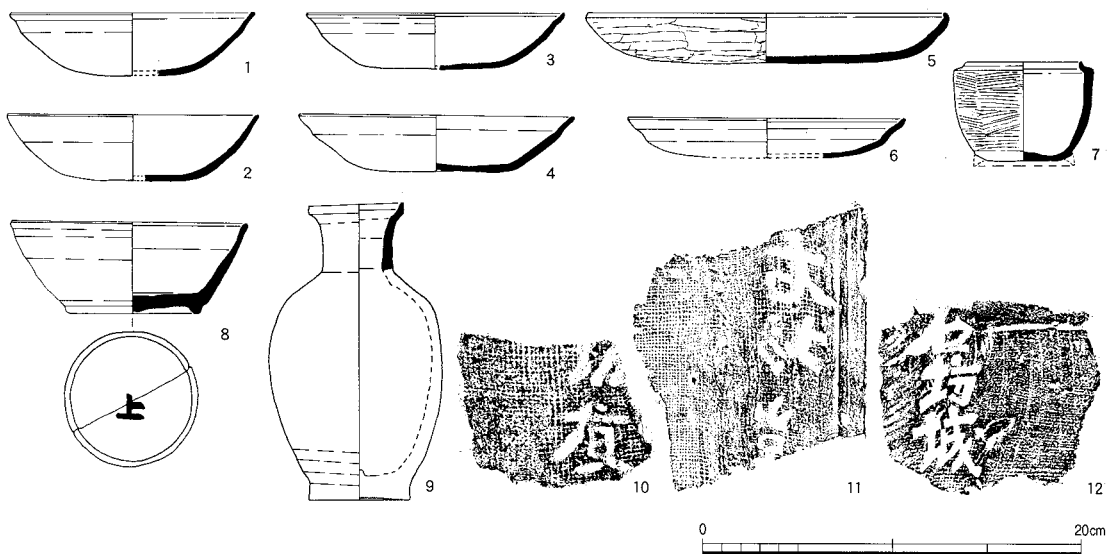


図48 A区SD 29出土遺物実測図(1:4)

12 平安京右京三条二坊 (図版1・29)

経過 この調査は、会社社屋建設に伴って行われたものである。調査地は平安京三条二坊十四町の北西部に位置する。調査地の北西部では道祖大路東側溝と三条坊門小路南側溝の交差点の検出が予想された。調査の結果、9世紀中頃以降に河川化する道祖大路と三条坊門小路南側溝、その内溝などを検出した。また、3時期にわたる建物を確認することができた。

遺構 調査地の基本土層は、トレンチの北端では地表面より0.6mが盛土層、0.6～0.9mが近世天神川の堆積による砂礫層、0.9～1.0mが中世包含層、1.1mで平安時代遺構面となる。平安時代の遺構はA～C期の3時期に分かれる。

A期は、SB1～5の5棟の掘立柱建物とSA1・2の2条の塀とSE195・400の2基の井戸からなる。この時期の条坊に関連する遺構は、次のB期に側溝などが拡幅されており確認できない。SB1は、調査区南端に位置するA期の中心的な建物。桁行3間(柱間2.4m)以上×梁間2間(柱間2.4m)、南庇付き(2.7m)の東西棟。SB2は梁間2間(柱間2.25m)×桁行3間(柱間2.25m)の南北棟。SB4は、桁行3間(柱間1.8m)×梁間3間(柱間は2.4mと1.8mの不等間)の北庇付き(1.8m)東西棟。SA1は、十四町の北限および東限を区画する塀。道祖大路に伴う部分は、後世の削平のためか断続的にしか残っていない。SA2は、SE195の南側に位置する宅地内の区画塀。SE400は掘形のみを検出。方形で1辺4.5m、深さ0.9mを測る。井戸枠はなく、抜き取られたものと考え。掘形は1辺4.5mと巨大であるのに対して、深さが0.9mと浅いことから横板の井籠組の井戸枠が存在したものと考えられる。SE195は小型の井戸。掘形径1.2m、深さ0.8mを測る。井戸枠は確認されていない。この井戸はSB5の覆い屋をもつ。

B期は、SB6・7の2棟の掘立柱建物とSA3～5の3条の塀がある。この時期に道祖大路東側溝と三条坊門小路南側溝が拡幅される。SB6は桁行3間(柱間2.4m)以上×梁間3間(柱間2.4m)、南庇付き(2.4m)の東西棟。SB7は、桁行3間(柱間2.4m)×梁間2間(柱間2.1m)の東西棟。SB8は、SA4(柱間2.7m)に取り付く門。SB9は、SB8を改修した門(柱間1.5m)。SB9の2つの柱の抜き取り穴から出土した須恵器壺の体部は、接合することができる。SA3・4は、道祖大路東側溝が拡幅に際して造られた宅地の西端を区画する南北方向の塀である。SA3は、南北10間以上、南側は調査区外へと続く。SA4は南北4間。SA5は、SA4とつながる東西方向の塀。東西4間。柱間は、西から3間分は1.2m、東端の1間は2.4m。SA3とSA4の間は、3.6mの空間があり宅地内への出入り口となっている。SD120は、

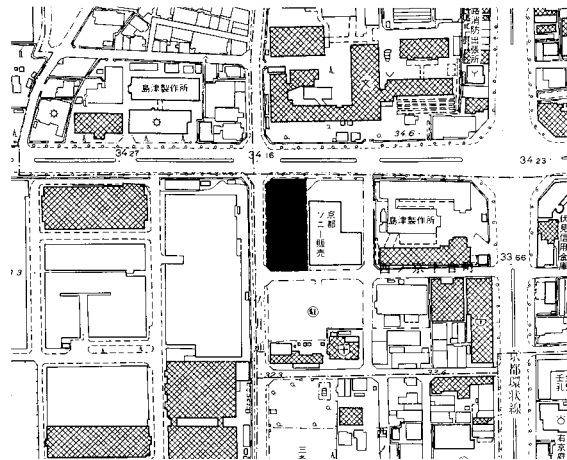


図49 調査位置図(1:5,000)

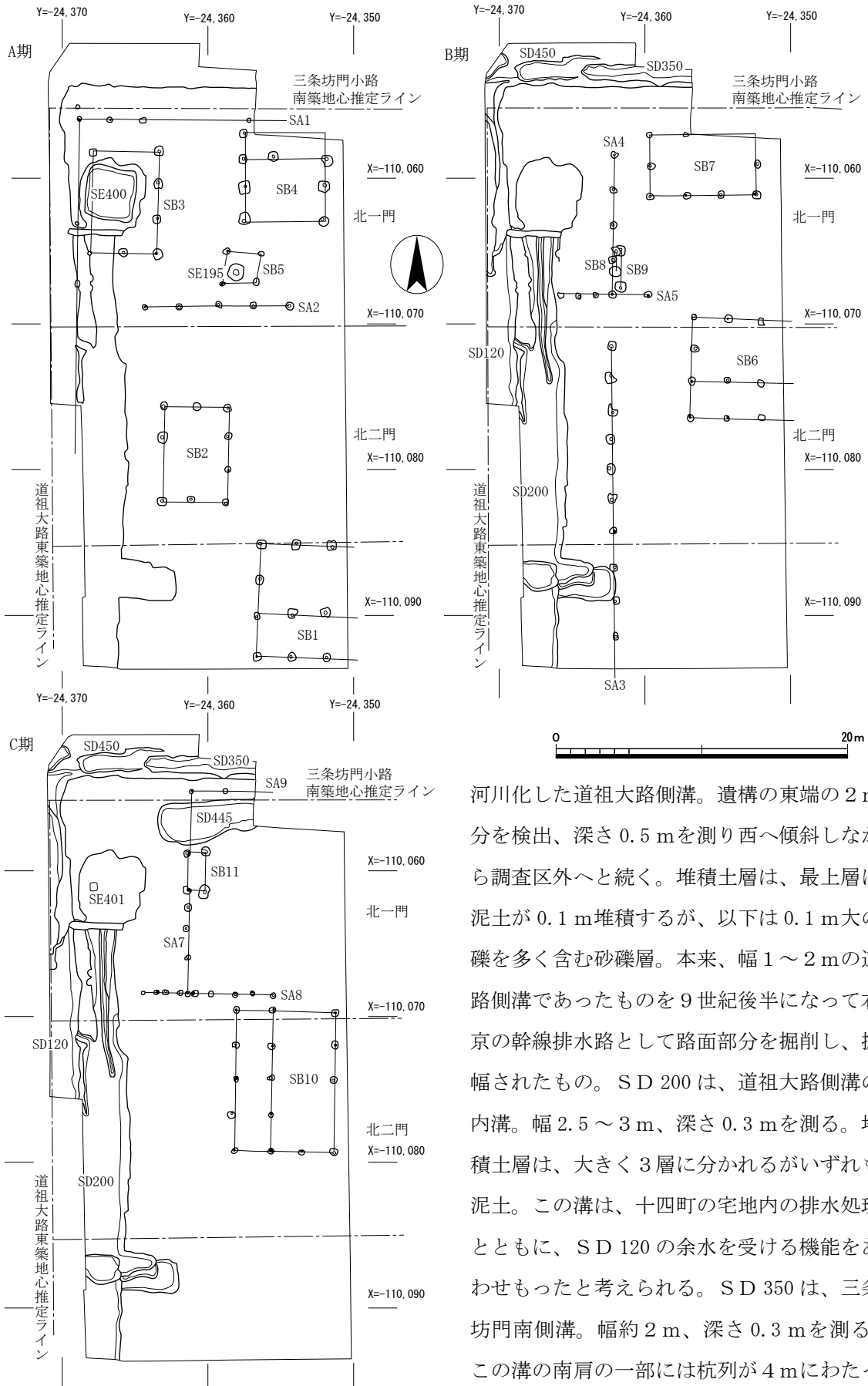


図 50 遺構変遷図 (1:400)

河川化した道祖大路側溝。遺構の東端の2 m 分を検出、深さ 0.5 m を測り西へ傾斜しながら調査区外へと続く。堆積土層は、最上層に泥土が 0.1 m 堆積するが、以下は 0.1 m 大の礫を多く含む砂礫層。本来、幅 1~2 m の道路側溝であったものを 9 世紀後半になって右京の幹線排水路として路面部分を掘削し、拡張されたもの。SD 200 は、道祖大路側溝の内溝。幅 2.5~3 m、深さ 0.3 m を測る。堆積土層は、大きく 3 層に分かれるがいずれも泥土。この溝は、十四町の宅地内の排水処理とともに、SD 120 の余水を受ける機能をあわせもったと考えられる。SD 350 は、三条坊門南側溝。幅約 2 m、深さ 0.3 m を測る。この溝の南肩の一部には杭列が 4 m にわたって検出され、橋の護岸と考えられる (S X

466)。S D 120 と S D 350 の合流部は S D 350 の方が深くなっている。

C 期は、掘立柱建物 S B 10、門 S B 11、井戸 S E 401 と塀の S A 7～9 からなる。この時期の終わりに S D 120・200・350・450 は埋没する。S B 10 は、桁行 4 間（柱間 2.4 m）×梁間 3 間（柱間 2.1 m）の東西棟。西庇（2.4 m）が付く。S B 11 は、宅地北西の門。柱間は、西側の桁行が 2.4 m、東側の桁行が 2.7 m、梁間は 1.2 m。S A 7 は、S B 11 に取り付く塀。南北 3 間。南端で S A 5 に取り付き平面 T 字形をなす。S A 8 は、東西 6 間の塀。柱間は 1.5 m。S E 401 は、十四町の北西部、S A 7・8 などの塀の外側に造られた井戸。井戸枠には、長方形の曲物の櫃を利用している。この櫃の内側 4 隅に径 0.1 m の杭を打ち、櫃の外側に幅 0.1 m、現存長 0.5 m の板を縦方向に並べて補強している。

遺物 平安時代の遺物は、瓦、土器、木器、石製品、金属器などがある。

瓦は少量出土。軒丸瓦は 2 点、いずれも搬入品。軒平瓦は 3 点、西賀茂産。

土器は、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器、白磁がある。時期的には、9 世紀前半のものは少なく、9 世紀中頃から 10 世紀前半までのものが大半を占める。

金属器には、銅製の蛇尾がある。長辺 2.7 cm 以上、短辺 2.3 cm。裏面には着装のための鋌足 3 つのうち 2 つが残る。

木製品には、S E 400 出土の折敷の底板に馬の絵が墨書されたものがある。絵は、墨書で両面に描かれており、わずかに朱らしきものがみられる。折敷としては裏面となる方が鮮明である。馬の頭部には、儀礼用の馬具

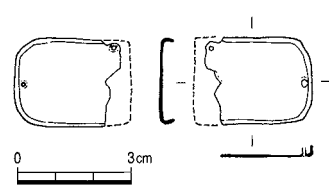


図 51 銅製蛇尾実測図 (1:2)

セットである「唐鞍」の一つの銀面（馬面）が描かれ、頂部には菖蒲形と思われる飾りもある。頭部にはこのほかに銀面の留め紐や引き綱・手綱がある。胴体部は鞍などではなく裸馬である。

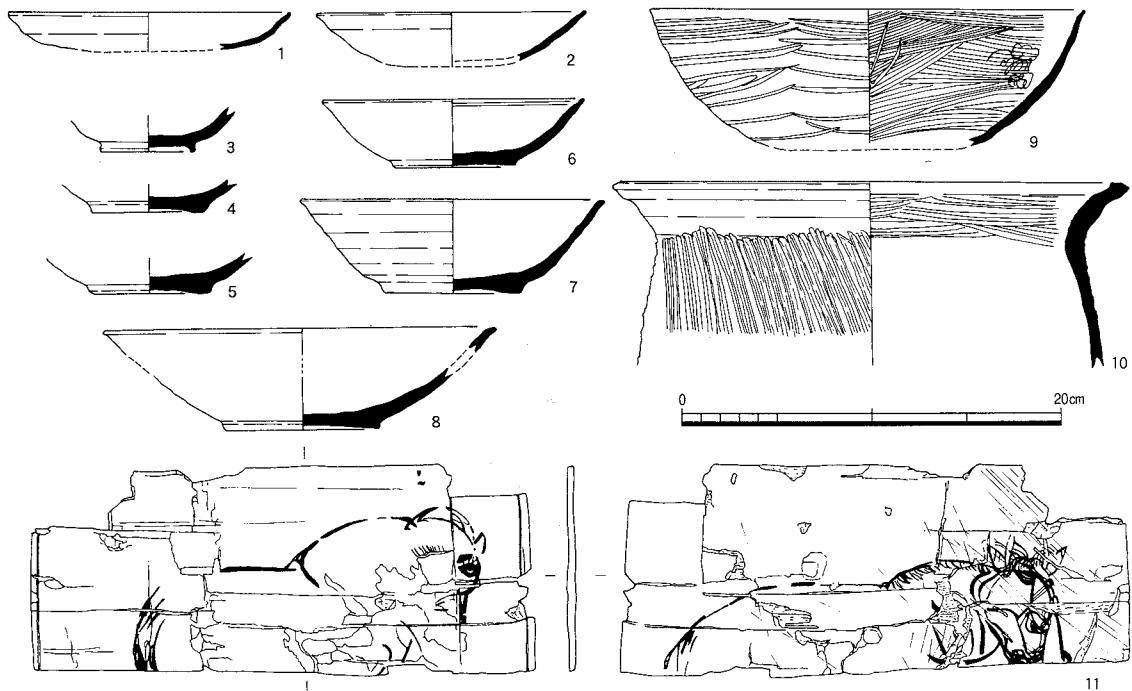


図 52 S E 400 出土遺物実測図 (1:4)

足の部分は欠損している。この馬の絵が描かれた目的は、絵馬として描かれた、何らかの練習のために描かれたなどが考えられる。

小結 右京三条二坊十四町内の調査は、昭和58年(1988)の調査に続いて2回目となった。今回の調査では、条坊に関連した遺構のほかにも、掘立柱建物や塀などの区画施設が確認されており、平安時代前期から中期、大きく3期に分かれる具体的な十四町内の宅地利用の変遷が明らかとなった。以下に平安時代の遺構についてA～Cの3期に分けて述べてみたい。

A期(9世紀中頃)井戸の覆い屋を含めて5棟の掘立柱建物が確認され、8分の1町、あるいは4分の1町程度の宅地規模が想定される。宅地の利用のされ方としては、SA2を境として北と南で機能が分かっていたと考える。SA2の南側では、SB1を中心とした居住空間。SA2の北側では、大小2基の井戸が配置されていることから、厨房に関連した施設のある空間が考えられる。SB1は、今回検出したA期の建物の中では、規模が大きく中心的な建物である。建物規模は、庇を含めて5間×3間と想定される。SB3は、SE400の覆い屋と考えられる。

B期(9世紀後半)道祖大路側溝が拡幅され、右京の幹線排水路の佐井川となる。道路が幹線排水路、河川となる例は、道祖大路以外にも西大宮大路、野寺小路、宇多小路などの南北方向の道路が知られている。これらの河川が独立したものとして平安京の北から南までを流れていたとは考えがたい。東西方向の道路の側溝を通じて、水を隣の河川、あるいは天神川などの自然河川へ流していたものと考えられる。三条坊門小路南側溝も幅2mに拡幅される。これが南北方向の排水路を東西につなぐものと思われる。道祖川の幅は今回の調査では不明であったが、道祖大路の路面の大部分を潰して道祖川としていると思われる。内溝のSD200(新)とSA3・4の間には3mの幅があり、宅地への通路になる部分と考えられる。そして、SA3・4の間の空間が宅地内への出入り口となる。つまり本来、道路路面であった部分が河川となり、宅地であった部分が通路に変化したことになる。

C期(9世紀後半から10世紀前半)宅地内への出入り口は、C期と同じく北西隅にSB11が造られる。建物はSB10以外には調査区内にはなく、宅地の中心はより東側と考えられる。SE401は、SB11の西側、宅地の外側になりC期としたが若干の時期差も考えられる。道祖川(SD120)・三条坊門小路南側溝(SD350)とそれぞれの内溝SD200・445は、ともにこの時期に埋没する。SD120の検出部分は、その全体の東端にすぎないが、深さ0.5mの内0.4mに砂礫が堆積しており、大雨に伴う土砂の流入によって短期間の内にその機能を失ったものと考えられる。これと同時にこの地に人が居住することもなくなるようである。

今回の調査では、道路が河川化するという右京特有の事象とともに、それに影響を受けた宅地の変遷をたどることができた。一般に、平安京右京は早い時期に衰退したとされる。調査でも、10世紀の中頃には人が住まなくなったことがみてとれた。このような平安時代前期から中期にかけての変遷の過程に、右京衰退の要因とその実態が浮かび上がっているといえよう。

(南 孝雄)

13 平安京右京六条一坊1 (図版1・30-1)

経過 本調査はJR丹波口駅周辺の再開発に伴う15次調査である。今回の調査対象地は、平安京右京六条一坊三町の北側部分に該当する。

周辺の調査は、調査区西側で昭和62年(1987)に発掘調査が行われ、平安時代前期の建物や鎌倉時代前半の井戸、池、柱穴などを検出している。

調査地区の南側部分は鉄筋建物跡のコンクリート基礎が深くあるため、北側部分に調査区を設定し調査を行った。

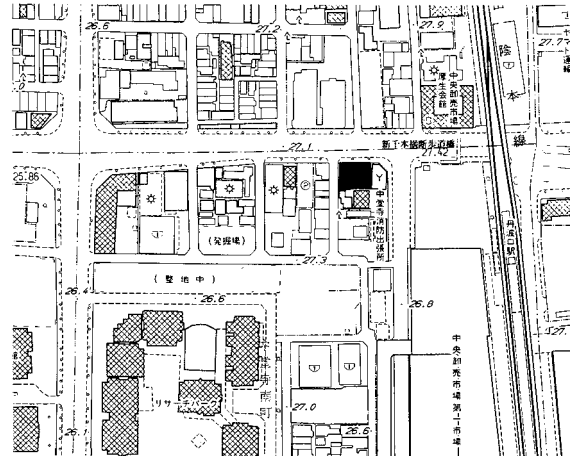


図53 調査位置図(1:5,000)



図54 SE 20 (北から)

遺構 調査区のお大半が中・近世の土取穴であった。平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構には、井戸SE 20がある。SE 20は直径約2mの方形の掘形で、一辺が1mの木組み方形横棧支柱型構造である。縦板は残存長約1.8mで、各辺幅約15~20cm、厚さ約2cmの部材5~6枚を使用し、縦板の接合部外側には幅約10cm、厚さ約5cmの添板を2~3枚重ねてあてる。4段の横棧木は目違いホゾで組み、横棧の間には支柱を入れる。

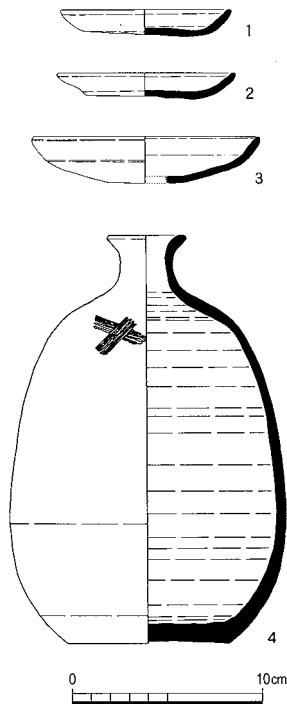


図55 土器実測図(1:4)

遺物 遺物は整理箱で27箱出土した。遺物のほとんどが土器類で、ほかに井戸枠部材と少量の木器類がある。平安時代後期から鎌倉時代を主体に土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、青磁、白磁、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、骨などが出土したが、出土遺物の多くは中・近世の土取穴埋土に含まれていたものである。備前焼の壺(4)は、調査区南西の土取穴出土のもので、高さ21.5cm、胴径14.5cmを測り、ロクロ挽きで小さな口が付く。土師器(1~3)はSE 20出土で、口径9~12cm、高さ1.4~2.5cmを測る。木製品はSE 20から出土したもので、内容は縦板、横棧木、添板、曲物、加工痕のある木材がある。

小結 今回の調査では、調査区のお大半が中・近世に粘土を採掘するために掘られた土取穴によって攪乱されていたため、平安時代から鎌倉時代の遺構は井戸SE 20を検出したことにとどまり、それ以外の遺構の検出にはいたらなかった。(永田宗秀)

14 平安京右京六条一坊2 (図版1・30-2)

経過 本調査はJR丹波口駅周辺の再開発に伴う14次調査である。今回の調査対象地は平安京右京六条一坊六町の南東隅に該当する部分で、調査の目的は西坊城小路西側溝と揚梅小路北側溝の交差部分の確認である。

調査区北側の平成9年(1997)の13次調査では西坊城小路の西側溝を検出している。

遺構 平安時代の遺構は、調査区中央部で、南北方向の西坊城小路西側溝SD30を確認した。南側では明確に検出できたが、部分的に浅

くなったり深くなったりする構造で、揚梅小路と交差する辺りでは特に浅く不明瞭になり、別の土壌に攪乱され検出できなかつた。揚梅小路北側溝SD23は、調査区の中央部西壁際で検出したが、約90cmほどの検出にとどまり、東側に延びずに終わっていた。

室町時代から桃山時代の遺構は井戸SE10を検出した。SE10は直径約1.5mの円形の掘形で、最下段に曲物を据え、その上に方形木枠、さらにその上に河原石を積む構造であった。曲物は径70~80cmで縦35cmを測る。方形木枠は幅約12cmで、両端が鉤状に同方向に切り取られ、それをお互いに組み合わせて固定されており、四隅は石が木枠を隠すように置かれ、その上部には河原石が円形に組まれていた。

遺物 遺物は整理箱で17箱出土した。遺物のほとんどが土器類で、少量の木器類がある。土師器は平安時代後期から鎌倉時代のものが主体で、平安時代前期の土師器が混入する。しかし遺構に伴う遺物はSD30からのもので、大半の遺物が中世に整地された包含層に含まれていた。土壌SX15からは萬年通寶が出土した。木製品はSE10から出土した木枠と曲物、SK18から出土した加工痕のある木材がある。

小結 調査範囲が限られていたが、西坊城小路西側溝SD30と揚梅小路北側溝SD23を検出した。交差する部分の様子は攪乱され明確にはわからないが、遺構のレベル勾配から西坊城小路西側溝は揚梅小路北側溝に分流されていたとも考えられる。

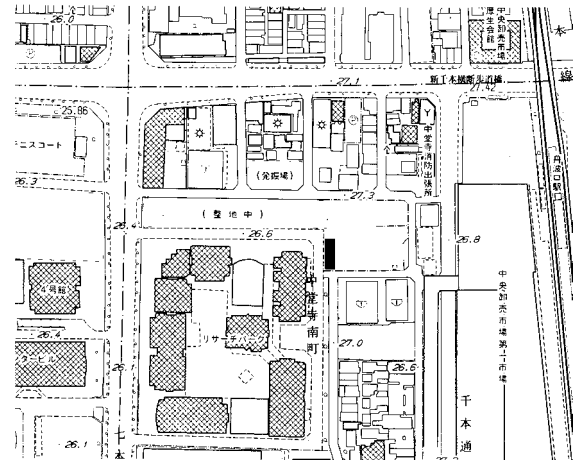


図56 調査位置図 (1:5,000)

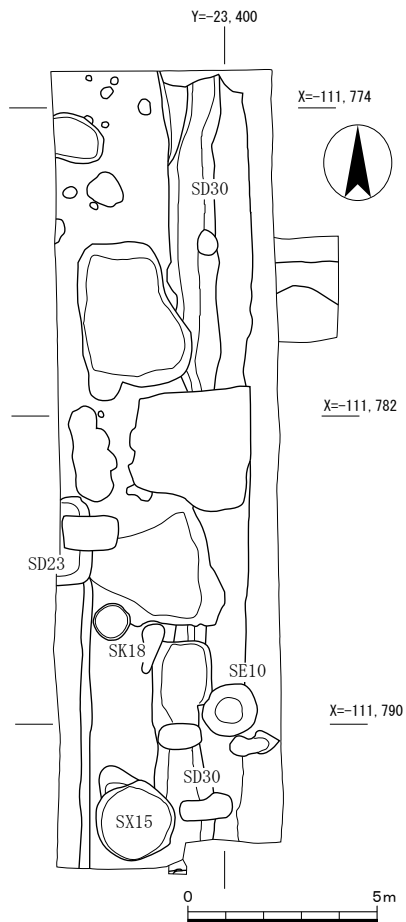


図57 遺構平面図 (1:200)

(永田宗秀)

Ⅲ 中臣遺跡

15 中臣遺跡 77 次調査 (図版 2-4・31~33)

経過 今回の発掘調査は、中臣遺跡の東部を縦断する南北道路、西野道の拡幅工事に伴うものである。調査対象地は、京都市立勸修小学校東門前から府道勸修寺今熊野線と交差するまで、西野道の東側に沿った幅 10 m、全長約 230 m の区間である。

調査地は、東側の市営住宅への進入道路が 2 本横断しており、現状ではその道路を掘削することができないため調査区を 4 区に分けて設定した。北側の勸修小学校前の対象地 (4 区) は

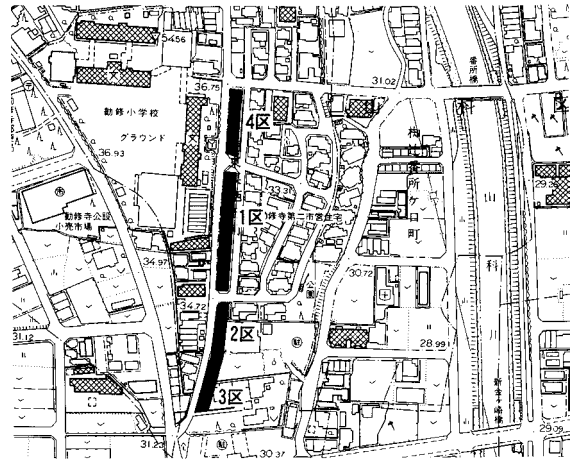


図 58 調査位置図 (1:5,000)

立木が十数本あり、その伐採許可が下りるまで調査にかかれなため、南側の両進入路にはさまれた地区を 1 区として発掘調査を開始した。また、調査対象地南端から北へ約 35 m の範囲 (3 区) は遺存状況が危ぶまれるため、試掘調査を先行し様子を見ることとした。なお調査にあたっては、多量の排土が見込まれるため、1 区の重機掘削による排土はすべて場外搬出とした。

遺構 調査対象地は、東西方向が西側の現西野道路路面と同じ高さを保つために、東側を盛土してブロックの擁壁が築かれている。そのため、市営住宅内路面と比較すると 1 m 前後の段差がみられる。南北方向は南下がり、勸修小学校前の 4 区と南端の 3 区では、地表面で 3 m に近い標高差がある。また、1 区から 4 区を通じて西壁の層序観察が可能であるため、西壁を基準として基本層序を述べる。

4 区および 1 区北半部は 0.6 ~ 0.8 m の盛土がなされ、次いで畑の耕作土層が 0.1 ~ 0.3 m で堆積する。直下が黄褐色砂泥層からなる奈良時代以前の遺構面であるが、中世から近世の堆積層とみられる暗褐色から黒褐色砂泥層が部分的に残る。遺構面の標高は 4 区の北端で 35.9 m、1 区の遺構面の途切れる中程で 35.3 m を測る。1 区の南半分は 3 段に造成された段々畑の影響で耕作土層・遺構面ともに消失しており砂礫層が露出している。盛土層も 1.5 m を超える部分がある。

2 区は中程が道路建設に伴い移動した民家の跡地であり、コンクリートの擁壁と厚い盛土があり、西野道の路面より高くなっている。擁壁以北の約 10 m の区間が 1 区北半部と同様の堆積状況を示す。遺構面の標高は 34 m を測る。擁壁内は厚さ 0.2 m の耕作土層が残る。耕作土層直下の褐色から暗褐色の小礫が混じる砂泥層上で少数の遺構を検出した。以南では、厚さ 0.2 m の耕作土を取り除くと砂礫層となる。

1 区 2 面の調査を実施した。遺構を検出できたのは北半部と南端部である。

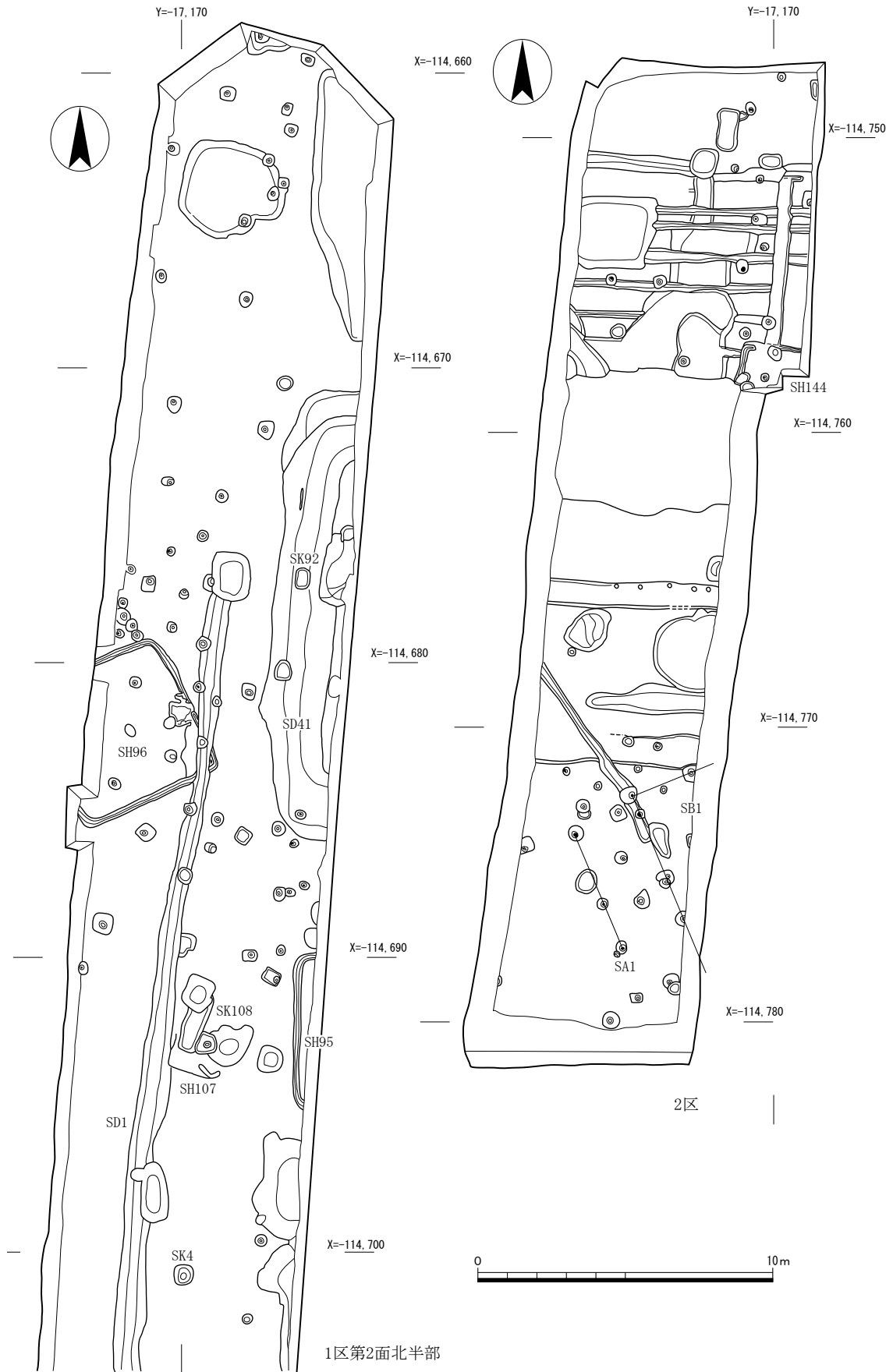


図59 1・2区遺構平面図(1:200)

第1面では西野道の東側溝(SD1)と路面の一部を確認した。東側溝SD1は幅0.7～1.2m、深さ0.1～0.35mを測る。2区南半部および4区でも検出しており、およそ148mにわたって確認することができた。路面は1区の中央で一部を確認した。黄褐色砂泥上に小礫を敷き、硬く叩き締めてあった。SD1を境にして東側は急激に下がる。約1m東側に、長さ約12.5m、幅0.4～0.8mの浅い南北溝が並走する。溝内から礎石ないしは根石をもつ柱穴を4基検出した。これらに対応してSD1西肩に礎石をもつ柱穴もみられることから、門などの存在も考えられる。

第2面では竪穴住居3棟(SH95・96・107)および古墳の周溝(SD41)、土壙(SK4)、土壙墓(SK108)、溝(SD103)が主要な遺構としてあげられる。

竪穴住居SH96は北西辺が調査区外にある。平面形は一辺4.5mのほぼ正方形をなすとみられる。検出面から貼り床面まで約5cmと遺存状況は悪い。貼り床はほぼ全面にみられ、厚さ5～15cmで小礫を混ぜて固めている。柱穴は3基検出した。柱間は南北が約2.8m、東西が約2.2mを測る。竈は東辺の中ほどに据えられる。ほとんど基底部分のみであるが、それでも両袖は認めることができる。主軸の傾きは北に対して約28°西である。

竪穴住居と同時期の遺構にSK4がある。南北0.7m、東西0.65m、深さ0.15mの方形の土壙で、南端近くに須恵器の杯蓋・身が、蓋が逆向きに身の上に重ねた状態で出土した。

古墳は西辺の溝と北と南の屈曲部まで(SD41)を検出した、方墳であると考えられる。南北長約16mで最大幅2.1m、深さ0.7mを測る。屈曲部が浅い。堆積土中から鉄刀1振りが出土した。また、西辺の溝の中央よりやや北寄りの溝底で、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.15mの土壙SK92を検出した。土壙内に須恵器の杯蓋・身のセット・高杯、土師器の壺が納められていた。

土壙墓SK108は南北約2m、東西約0.8m、深さ0.37mの長方形で、壁面はほぼ垂直である。底部中央から鉄製の刀子1本が出土した。SH107を完掘後に検出した。

1区の南端では、SD41に類似の溝SD103を検出長約5m、幅1.2m、深さ0.4mで認めた。しかし古墳の周溝とみるには根拠に乏しい。

2区 1区北半でみられた第1面がほとんどなく、第2面相当層上で調査した。検出した遺構は、近世から現代の耕作に関連する溝が大部分である。竪穴住居(SH144)、掘立柱建物(SB1)、柵列(SA1)が主要な遺構としてあげられる。

竪穴住居SH144は、北西隅を南北1.6m、東西2m分確認した。西辺に竈、北辺に貯蔵穴をもつ。柱穴は1基を検出した。竈は、住居を廃棄する際に壊され原形を失っている。穴を掘りそこへすべて投げ入れており、その中央に口縁を欠いた土師器の長胴甕を逆さに据えている、いわゆる竈終い作法であろう。主軸の傾きは北に対してやや東へ振ると考えられる。

掘立柱建物SB1は建物の北西隅の東西1間(柱間2.2m)×南北3間(柱間1.5m)分を検出した。西側に約2.1m離れて柵列SA1が同じ傾きで見られる。主軸の傾きは北に対して23°ほど西に振れている。

3区 2箇所を試掘調査を行い、3本のトレンチを設けた。結果は、いずれも盛土層直下が茶

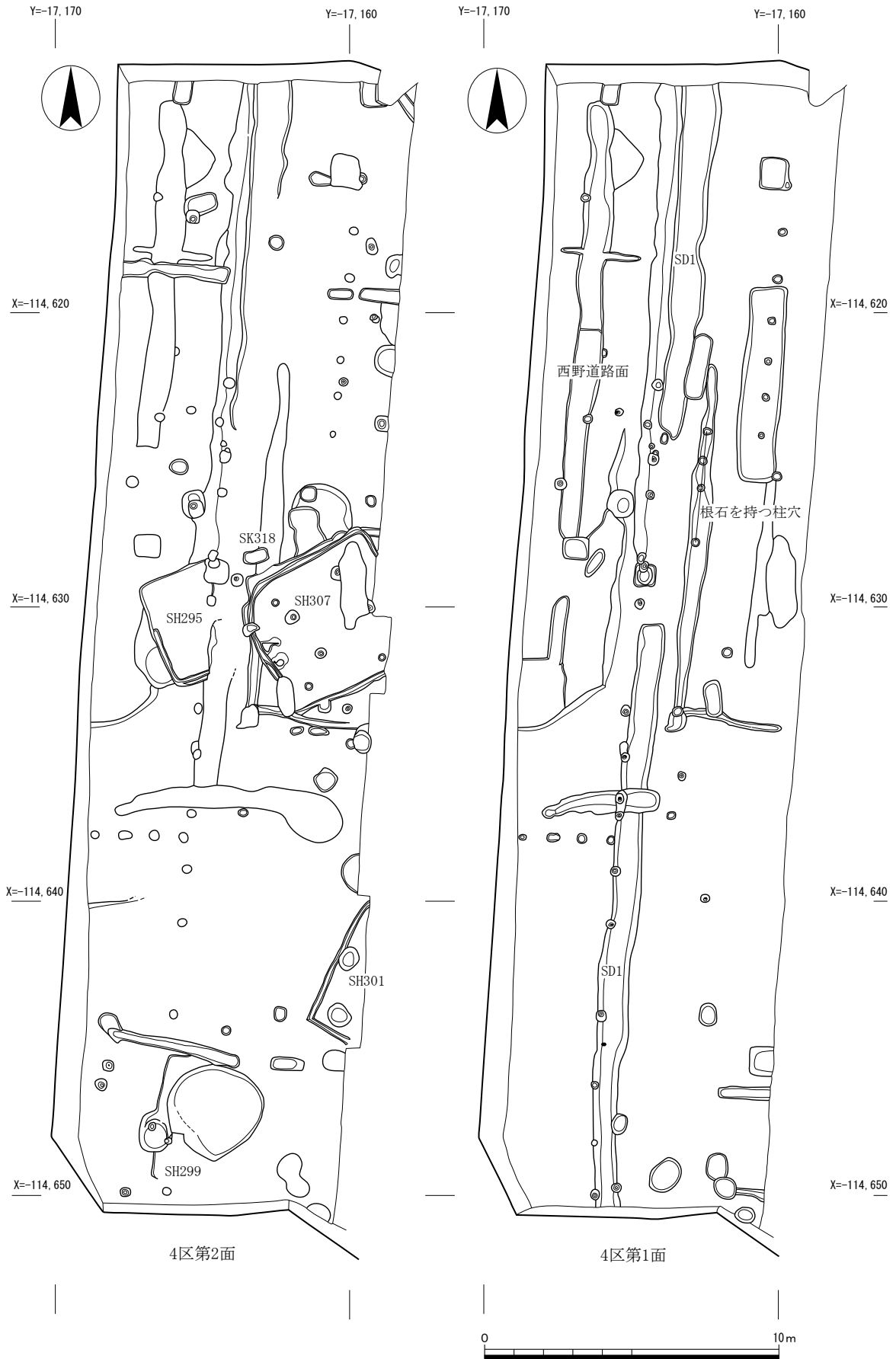


図60 4区遺構平面図 (1:200)

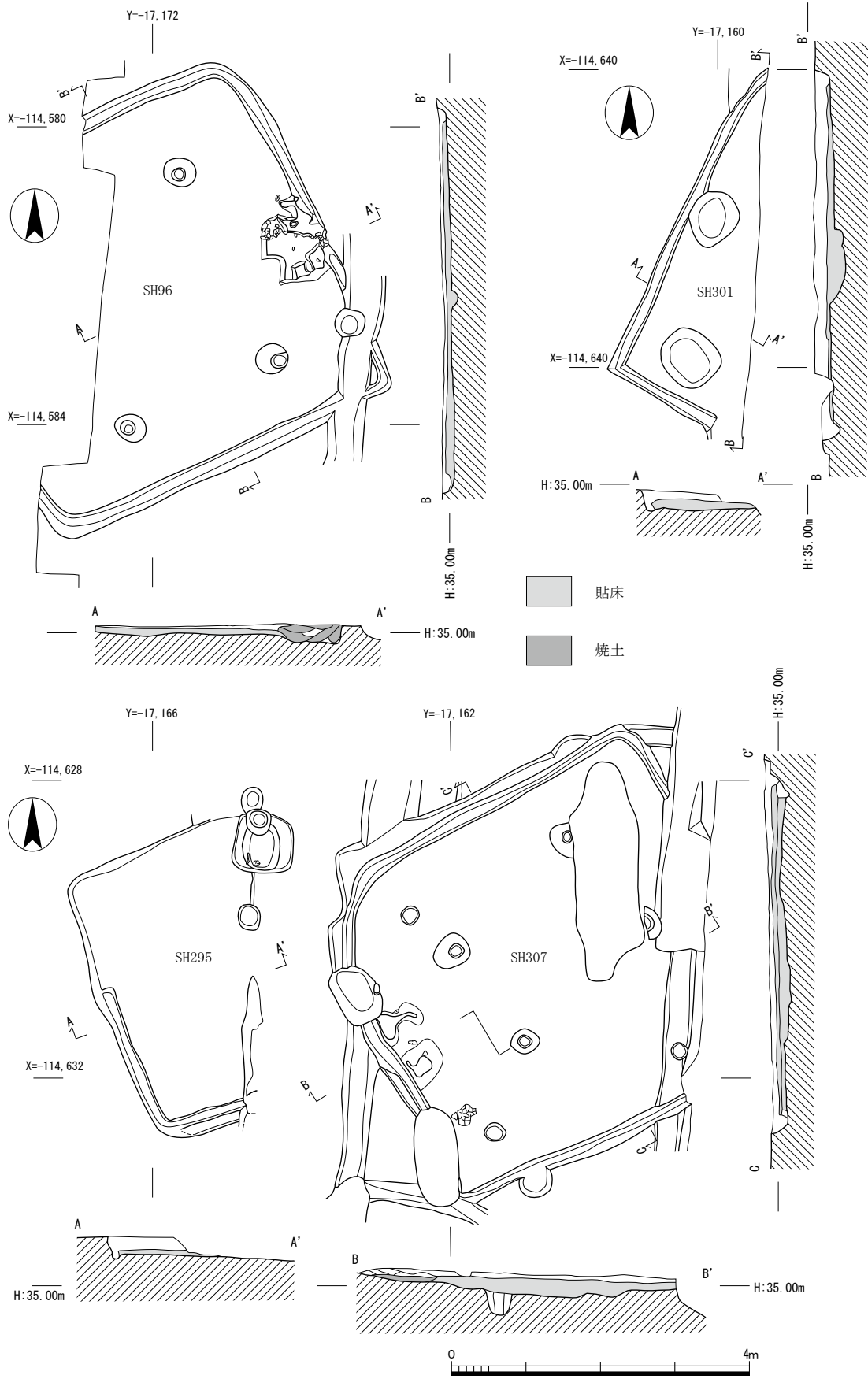


图 61 竖穴住居实测图 (1:80)

褐色の砂礫層であった。この砂礫層は1区の断ち割りなどで確認した遺構面下の砂礫層に類似しているため、遺構の検出は望めないものと判断した。遺物もまったく出土しなかった。

4区 二面の調査を実施した。第1面については、SD1と重複するため割愛する。

第2面では竪穴住居4棟（SH 295・299・301・307）、土墳墓（SK 318）などを検出した。

竪穴住居SH 295は西野道敷設の際に削り取られた可能性があり、西半分のみである。南北約3.9 m、東西は北辺で2.6 m、深さ0.22 mを確認した。方形をなすものと考えられる。床面の凹凸を均す程度の小礫混じり貼り床がみられる。柱穴は、貼り床をすべて取り除き、黄褐色砂泥面で精査を行ったにもかかわらず、確認できなかった。竈は北辺で検出した、2区のSH 144同様に竈終いをしており、ここでは甑を穴の南西寄りに据えている。主軸の傾きは北に対し20°西である。

竪穴住居SH 307は南北5.2 m、東西5.1 m、深さ0.12 mを確認した。平面形は方形と考えられる。貼り床は周辺の堆積土と同じ黒褐色砂泥を用いている。柱穴は明確にはできなかった。竈は西辺の中央で検出した。遺存状況は良好でないが、両袖・炉床が遺存する。主軸の傾きは北に対し約30°西である。また、貼り床を取り去った後に4柱を検出したが、柱間が東西約2.2 m、南北約1.5 mで長方形をなし、壁溝四周の北西部に偏り、屋根を支えるには不安定な位置にある。このことからSH 307は住居内拡張の可能性を考えている。

SH 307の北西部に隣接して検出したSK 318は土墳墓とみられ、東西0.8 m、南北0.45 m、深さ0.27 mを測る。東端部から土師器の甕が出土した。

1区北端部と4区南端部にかけて、黄褐色砂泥層が途切れ黒褐色砂泥層が厚く堆積する部分がある。断ち割りをを入れて確認したところ、砂礫層が大きく落ち込んでおり、東向きに下がる小さな谷があったことが判明した。

遺物 今回の調査で出土した遺物は整理箱で25箱である。出土した遺物の大半は古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器で、土師器甕の出土が圧倒的に多い。これは調査区一帯が7世紀段階で集落になっていたためと考えられる。時代別に遺物を概観すると、まず、方墳の西辺と考えられるSD 41の下層から古墳時代の遺物が多く出土している。この中で注目すべき遺物は、須恵器杯のセットとともに鉄製の直刀が出土していることである。直刀は全長84.6 cm、刀身68.2 cm、茎16.4 cmで刀身部から茎部にかけて木質が若干残っていた。これらの遺物は、後世に主体部が削平された結果、墳丘上から転落したものと考えられる。また、溝の底には葬送に伴う供献土壇と考えられるSK 92が設けられており、須恵器杯が4セットと無蓋高杯を被せた有蓋高杯、土師器小型壺が整然と据えられていた（図63-1～11）。これらの遺物の年代は、須恵器の型式から5世紀末から6世紀初頭の末年代が与えられるが、胎土・焼成などから和泉陶邑産以外の可能性もある。なお、第4区南端部の整地層からSK 92の土

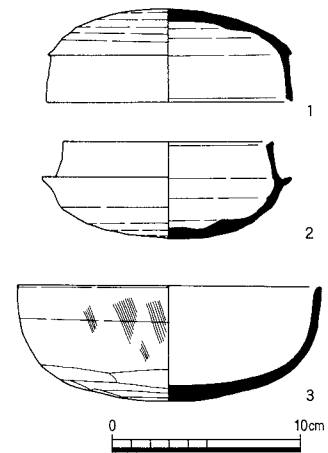


図62 整地層出土土器実測図
(1:4)

器群よりも型式的に古い遺物がまとまって出土しており（図 62 - 1 ~ 3）、調査区西側の丘陵上に 1 形式ほど古い古墳の存在を示唆している。

SD 41 は 7 世紀段階でも完全に埋められておらず、上層では 7 世紀から 8 世紀初頭の土器が出土する。7 世紀段階では古墳周辺に竪穴住居が多く営まれており、これらの竪穴住居に伴う生活不用品が、古墳の周溝に廃棄されたものと考えられる。中にはほぼ完形の小型甕などがあり（図 63 - 12）、同様の甕は 2 区 SH 144 から出土している（図 63 - 17）。竪穴住居は遺存状況が悪く出土遺物も少ないが、須恵器蓋杯や小型甕・長胴甕などが出土している。特に 4 区で検出した SH 307 からはまとまって遺物が出土しており、これらは土器型式から 7 世紀第 2 四半期が当てられる（図 63 - 15・16・18・19）。また、1 区で検出した SK 4 も竪穴住居の貯蔵穴の可能性が高く、須恵器杯 H とともにつまみを欠いた杯 G 蓋が重ねて据えられていた（図 63 - 13・14）。これらの竪穴住居は丘陵東斜面の堆積土層で埋められ、この土層の下層から 7 世紀から 8

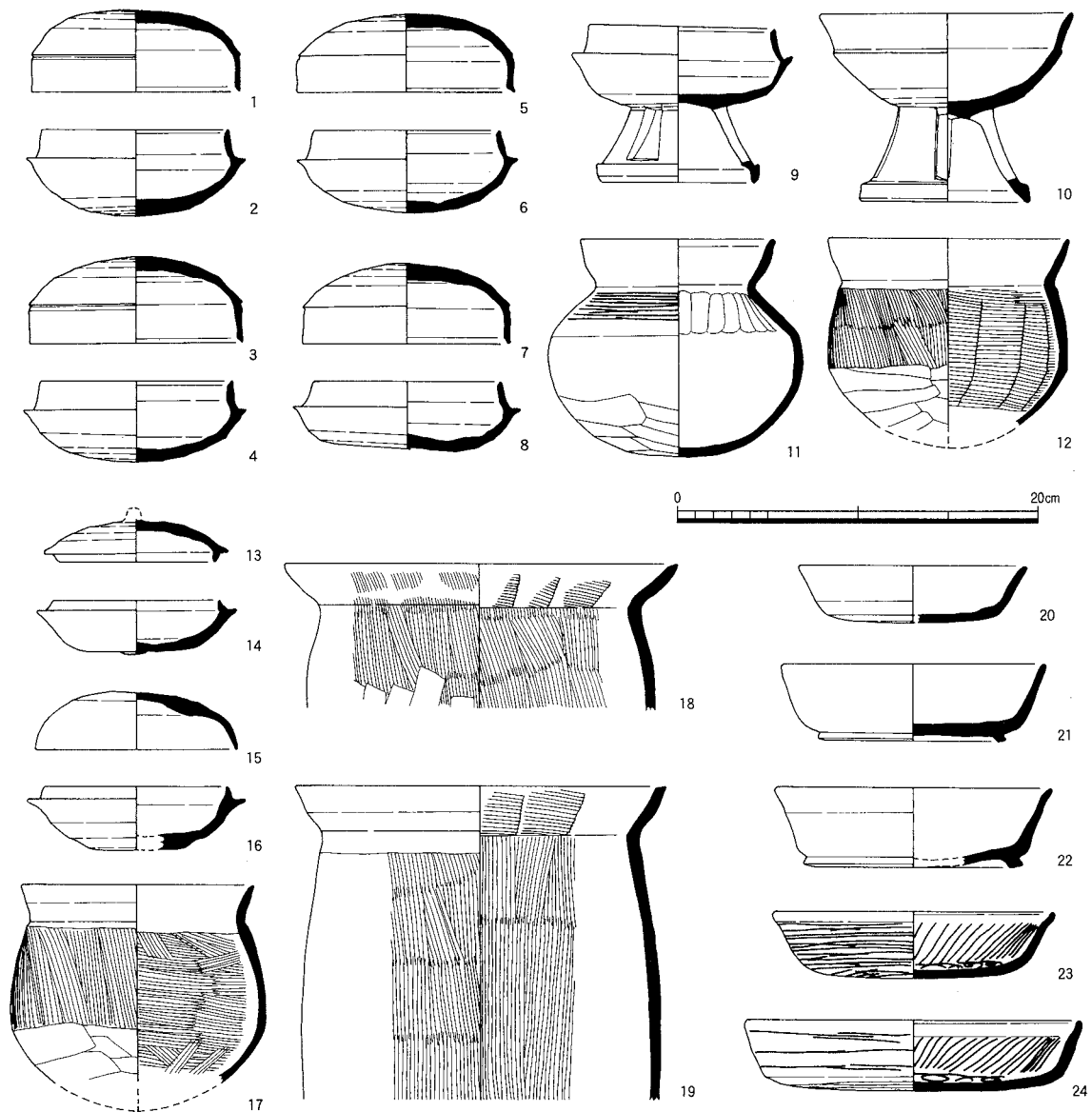


図 63 土器実測図（SK 92 : 1 ~ 11 SD 41 : 12 SK 41 : 13 ~ 14
SH 307 : 15・16・18・19 SH 144 : 17 整地層下層 : 20 ~ 24）（1:4）

世紀初頭の土器群（図 63 - 20 ~ 24）が、上層からは中世の土器群が出土している。戦国時代には西野道が整備されたらしく、東側溝と想定できる溝から江戸時代初期を中心とする遺物が少ないながら出土する。

小結 今回の調査の最大の成果は、栗栖野丘陵の東斜面に5世紀末から6世紀初頭に古墳が営まれたことが明らかになったことである。今回検出した古墳は方墳の西側溝だけであるが、東接する勸修市営住宅建て替え地の調査では同様の古墳4基、土壙墓を2基を検出している。これらが属する古墳群は、築造時期に幅があり、栗栖野丘陵の高い位置に最初の古墳が造営され、順次下方に古墳が営まれていった様子がみてとれる。前述したように4区南端の土層からも須恵器蓋杯のセットと土師器杯が上から転落したように出土している。さらにこの西側の丘陵上にも古墳が存在する可能性がある。注目できるのは、勸修小学校の北側に存在する坂上田村麻呂墓である。現在墳丘が整備されて方墳状になっているが、この墳丘は江戸時代から残っており、江戸時代の考証学の高揚に伴ってこの墳丘を坂上田村麻呂墓に比定したことが知られている。坂上田村麻呂墓の真偽は明らかではないが、古くより墳丘状に残っていたのであれば古墳であった可能性を想定できる。今回検出した古墳や古墳群との関係も視野に入れて考察する必要がある。

今回の調査区では堅穴住居が少なくとも8基あることが明らかとなり、やはり勸修市営住宅建て替え地の調査で多くの堅穴住居を検出していることから、古墳が造営されなくなってから丘陵東斜面が集落になっていたことがわかる。古墳周溝から出土した土器の観察によれば、下層は古墳時代の土器を包含するが、上層は7世紀から8世紀初頭の土器を含んでおり、堅穴住居と古墳群は併存していたと考えられる。堅穴住居の傾きも真北に対してすべて西あるいは東に大きく振っており、中臣遺跡の調査で少数ながら検出していた真北方向の奈良時代の掘立柱建物は検出できなかった。ただ、整地層下層に奈良時代の土器が包含されており、調査区西の丘陵上に奈良時代の遺跡があった可能性は残る。

最後に西野道に関する知見を述べておく。蓮如は文明十年（1478）正月より山科本願寺の造営を開始しているが、『蓮如日記草案』によれば「山城国宇治郡小野トイフ荘山科ノ内野村ノ西中路ニ輦輿ヲタテラレ」云々とあり、「道俗参入ノ便」が最も良いこの地に本願寺を建立したという。ここで注目できることは「西中路」に本願寺が造営されていることで、旧西野路もこのころに整備されたと考えられる。発掘調査の所見によれば、中世包含層を切り込んで西野路東側溝と考えられる南北溝（SD1）が穿たれており、時期的に対応する。この溝は包含する遺物から江戸時代まで機能しており、おそらく近代まで路の機能が残っていたと推測できる。この路は明治期に一旦機能しなくなり、段々畑として

再開されたが、後にはまた路として復活し現在の西野道となったようである。

（鈴木廣司・網 伸也）

16 中臣遺跡 78 次調査 (図版 2-4・34)

経過 山科区勸修寺西栗栖野町で住宅建設に伴う宅地造成が計画された。隣接する 76 次調査では方形周溝墓が調査されており、発掘調査を実施する運びとなった。方形周溝墓は今回の調査によって 4 基が接続して確認されたことになる。東から順に 1 から番号を付している。

遺構・遺物 調査地は、大きく攪乱されていた。層序は、表土層が 0.3～0.8 m、江戸時代層が 0.1～0.3 m あり、地表下 0.6～0.9 m で無遺物層にいたる。本調査では方形周溝墓 2 基、竪穴住居 1 棟、溝 1 条、土壌 2 基などを検出した。ここでは方形周溝墓の概要のみを記す。

3 号周溝墓は 2・4 号周溝墓の溝が埋まった後に構築されている。平面形は隅丸長方形をなす。規模は周溝内法で北西-南東間約 7.1 m、北東-南西間はおおよそ 8 m ほどになると考えられる。周溝は平均して 1 m 前後の幅がある。検出面からの深さは 0.3～0.5 m あり、北西側周溝の西隅はさらに 0.1 m ほど深くなっている部分がある。遺物は壺形土器が北西溝中央西寄りから正位置の状態ではほぼ完形のまま出土した。

4 号周溝墓は 3 号周溝墓と北西隅で重なり合う。平面形は隅丸長方形をなす。規模は周溝内法で東西約 6.7 m、南北約 5.4 m あり。周溝の幅は北側で 0.6～0.75 m、西側で 1.1 m あり。検出面からの深さは北側で 0.3 m、西側で 0.5 m あり、北西隅はさらに 0.2 m ほど深くなっている。遺物は小型の壺形土器が北溝中央、溝底から横向きに押し潰された状態で出土した。また周溝北東隅では、埋土上位から甕形土器片が散在する状態で出土した。

小結 本調査では弥生時代中期の方形周溝墓 2 基、7 世紀中葉の竪穴住居 1 棟、7 世紀以前と考えられる大型の溝 1 条などを検出した。大型溝の性格は不明であるが、古墳周溝の可能性が考えられる。方形周溝墓は今回の調査によって接続する状態で 4 基確認したことになる。周辺地域では 1 次調査で方形周溝墓 1 基、壺棺墓 1 基、27 次調査で方形周溝墓 1 基、44 次調査で土壌墓 1 基を検出しており、弥生時代中期を中心とした墓域を形成している。

1～4 号墓は周溝から出土した土器からみて、4 号→2 号→1 号→3 号の順に築造されたと考えられる。3・4 号墓には周溝の中に一段深く掘り窪められた箇所があるが、76 次調査の 2 号墓と同様に、周溝内における埋葬施設の可能性を考えたい。これが正しければ、この時期の中臣遺跡における方形周溝墓の特徴としてとらえることができるだろう。

(高 正龍)

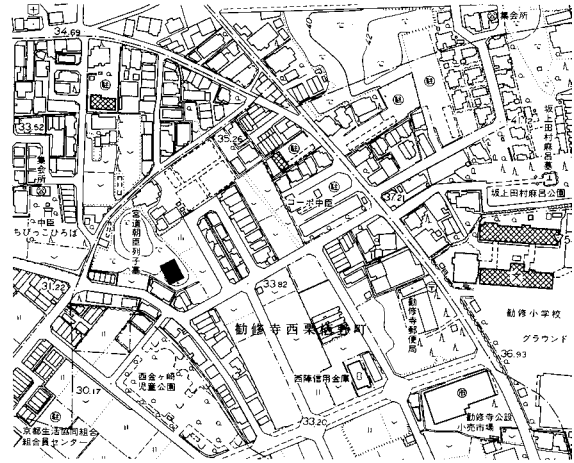


図 64 調査位置図 (1:5,000)

IV 長岡京跡

17 長岡京左京一条三坊1 (図版1・35・36)

経過 調査地点は、弥生時代から古墳時代の東土川遺跡と、長岡京左京一条三坊十一町にあたる。また、中世の戌亥遺跡に隣接している。

周辺では、左京 361～363・384・385 次調査(名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う調査)や、西羽束師川河川改修工事に伴う左京 139・177・401 次調査などが行われている。左京 361 次などでは、弥生時代から平安時代後期に及ぶ各時代の遺構が検出されている。弥生時代の遺構は、中期の方形周溝墓や水田が検出さ

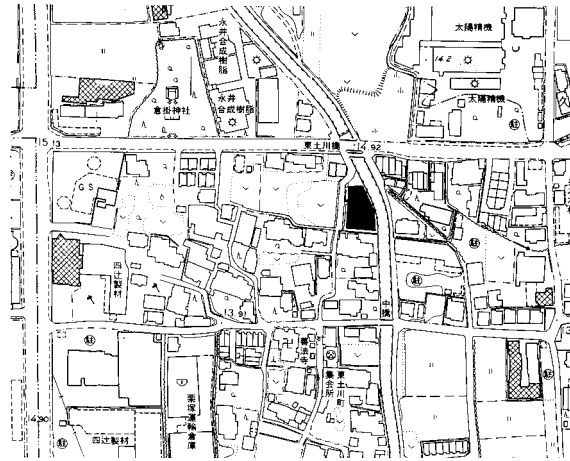


図 65 調査位置図 (1:5,000)

れた。また、左京 203 次調査^{註1}では多量の木簡が流路から出土し、左京一条三坊八・九町とその周辺には、長岡京造営にかかわる物資を陸揚げした津が存在したことが明らかとなった。津は西羽束師川旧流路の周囲に存在していると推定され、今回の調査地が西羽束師川に隣接することから、関連する遺構の検出が期待された。また、中世の土川城が東土川集落内に推定されており、今回の調査が集落の東辺に南北のトレンチを入れることになり、村の成立から現在までの変遷をたどることができると考えられた。

調査は、付近に残土処理場がないため反転して行った。敷地の南側 (C-1A区) を当初調査し、次に北側 (C-1B区) に移った。

遺構 検出した主要な遺構について時代順に記述する。

近代 池・流路などを検出した。SX 79 はB区で検出した池状遺構で、南北 9 m、東西 11 m、南東部に排水用の小溝が付く。近代の遺物が多量に出土した。この北側にも同時代の池があり、「袖岡」銘の陶器が出土している。

江戸時代 溝・土壇・柱穴などを検出した。SK 9 は径 0.6 m の桶を据えた遺構で、トイレと考えられる。SK 14 は長さ 4.3 m、幅 0.9 m、深さは 0.7 m の長方形の土壇で、底部には草を敷き詰めている。後期の遺物が少量出土した。SK 47 は楕円形の土壇で、北肩は近代の土壇で破壊されている。南肩は急斜面をなす。SK 14 と同様底部には腐食土層が堆積した。

室町時代後期から江戸時代初期 河川・柱穴・井戸・土壇などを検出した。調査地点の多くの遺構が当該期のものである。並行して流れる 2 本の河川 (SD 1 南北溝・SD 2) と、ほぼ東西方向に流れる SD 1 東西溝を検出した。南流する河川はトレンチの北部では北西から南東方向に流れるが、やがて向きを正南北方向にとる。SD 1 の斜行部は浅くて狭く、2 時期の付け替えが認められる。SD 1 B は幅が 0.7 m ほどで、15 世紀の遺物が出土し、やや古い。これに対し、

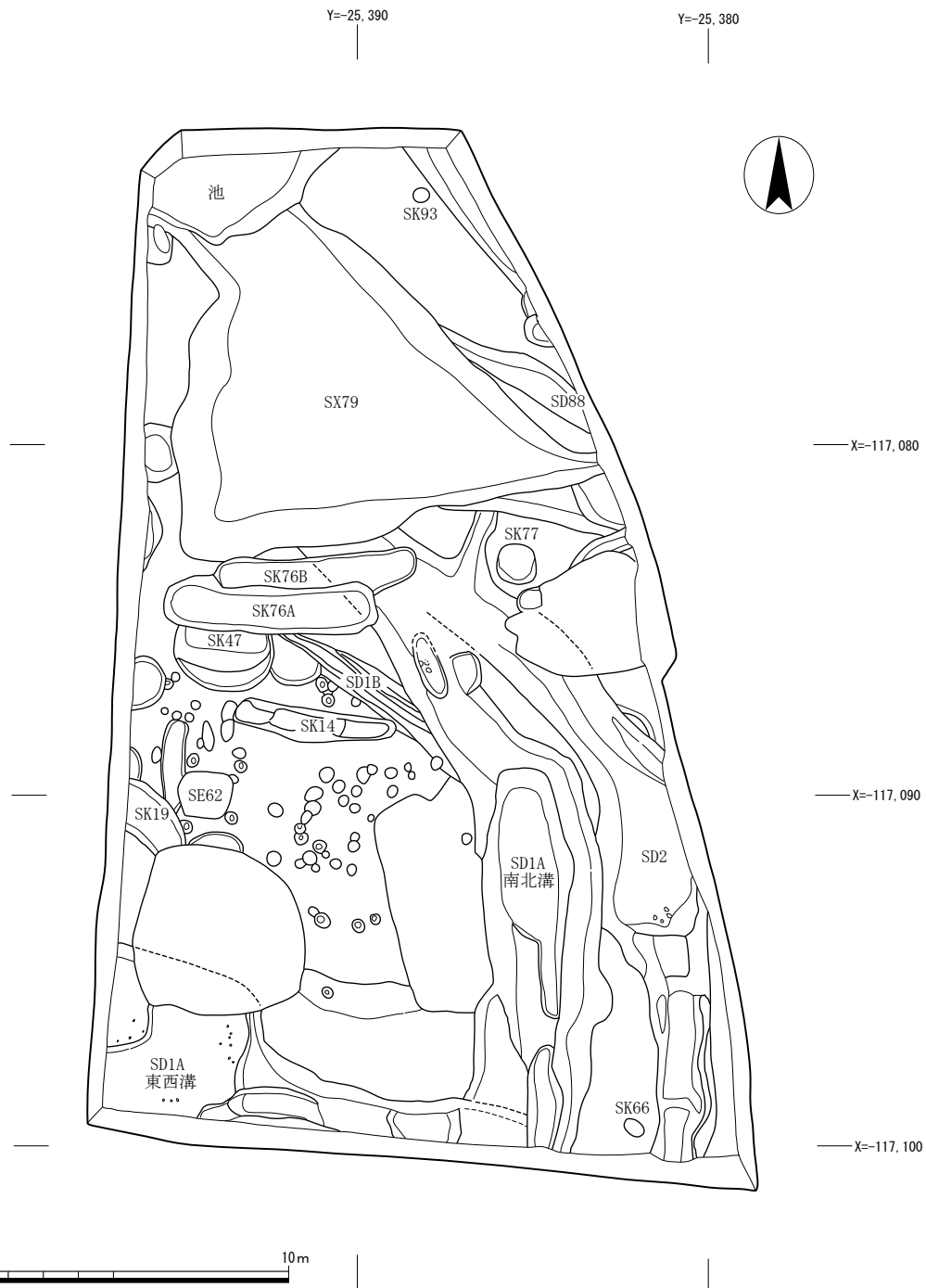


図 66 遺構平面図 (1:200)

南流部はSD1南北溝が幅3.5m、深さ1.0m、SD2は幅3.0～2.0m、深さ1.0mと幅が広い。土師器皿、瀬戸・美濃皿、胎土目の唐津陶器碗・皿などが出土し、戦国期から江戸時代初期まで機能していた。また、東西溝の上層からは京焼・伊万里焼などが出土し、南流する河川の埋没後まで機能していたことがわかる。なお、この溝は現在の敷地境と一致している。

SD1南北溝・SD2の上層埋土からは、真竹の根株が多く出土し、付近の竹藪土で意図的に埋め戻されている。これは、近世における村の規模拡大に関係して、埋め戻されたものと理解される。

河川の西部には井戸・掘立柱建物群がある。井戸 S E 62 は一辺 1.4 m の方形掘形で、深さ 1.8 m、最下層には皮付の丸太松材で方形に組み、その上に石垣を組んで井戸枠としている。方形の上に円形の石垣を組んだために、石積みが不安定になり上部は崩壊している。井戸の四隅には柱穴があり、井戸覆屋と推定できるが、埋土が異なるものもある。また、西部には礫敷きの洗い場状の遺構、S K 19 が付設されている。井戸からの出土遺物は少ないが、土師器・信楽焼播鉢などが出土し、戦国期の遺構である。

柱穴は小さな根石をもつもの、柱だけを立てたものがあり、古代以来の構造で造られている。柱の径は 10 cm 以下で細く、間隔は 2.1 m 前後あり、京間の 2 尺 5 寸よりはやや長い。建物の全体構造がわかるものは検出できていないが、2 間×3 間ほどの小規模なものが推定される。

弥生時代から長岡京期 長岡京期の遺構は検出できなかった。同時期の出土遺物もわずかである。S X 93 は調査区の北東部で検出した土壇状遺構で、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を主体とするが、1 点縄文時代晩期の船橋式土器が含まれていた。S K 66 は南東部で検出した畿内第Ⅱ様式の壺棺を埋納した遺構。壺 1 個を横たえて土壇に納めている。内部の堆積層は 2 層あり、下層には灰が含まれていた。

遺物 遺物の中心は、室町時代後期のものであるが、中でも戦国期から江戸時代前期のものが多い。戦国期から江戸時代初期の遺物には、土師器皿、備前焼壺・播鉢、丹波焼播鉢、信楽焼甕・播鉢、唐津焼椀・皿、瀬戸・美濃焼皿・椀・天目椀などがあり、各生産地の遺物が過不足なく出土しているが、京都市内の遺跡との違いは出土量の過多にみられる。また、漆器椀・曲物・羽子板などの木器も、出土している。

その他、中国製陶磁器白磁Ⅳ類椀・皿、青磁椀・盤、伊万里焼椀・皿、京焼椀・鉢などの陶磁器が出土している。弥生土器や古墳時代土師器、長岡京期の土器などもあるが、量は少ない。

小結 今回の調査は、東土川集落の成立期を知る絶好の機会であったが、推定どおりの遺構を検出することができた。遺構の成立期は室町時代後期で、溝・河川、井戸、土壇、柱穴などがある。河川は、トレンチの北部で北西から南東に斜行し、やがて南流している。現在の西羽東師川も同様の方位をたどることから、室町時代と基本的には同一方位の河川が流れていたことがわかる。この河川は、「山城国下久世庄絵図」『東寺百合文書』レ函 384 (年月未詳) にも描かれており、用水路として古くから機能していたことがわかる (図 67^{註2})。

また、井戸・柱穴などの集落関係遺構の検出により、土川集落が室町時代に成立していることが判明した。当地点には D-4 区同様に水田痕跡がないことから、周囲に比較し相対的に微高地のため水田開発ができず放置された土地を、14 世紀段階 (13 世紀後半までさかのぼる例も想定できる) に集落として開発し、その後も集落地として継続維持されたとみてとれる。

旧乙訓郡域における中世集落は、弥生期の集落に対比すると数が少なく、中世後期までには耕地として大半が開発されていることがわかる。後背低地に展開する中世遺構は大半が耕作溝で、12・13 世紀の遺物を出土する。このことは、遅くとも鎌倉時代には暗渠排水をもつ耕作地が広範囲に広がり、秋から春先までを乾田化して裏作を行うことが、この時期から広範囲に行われた

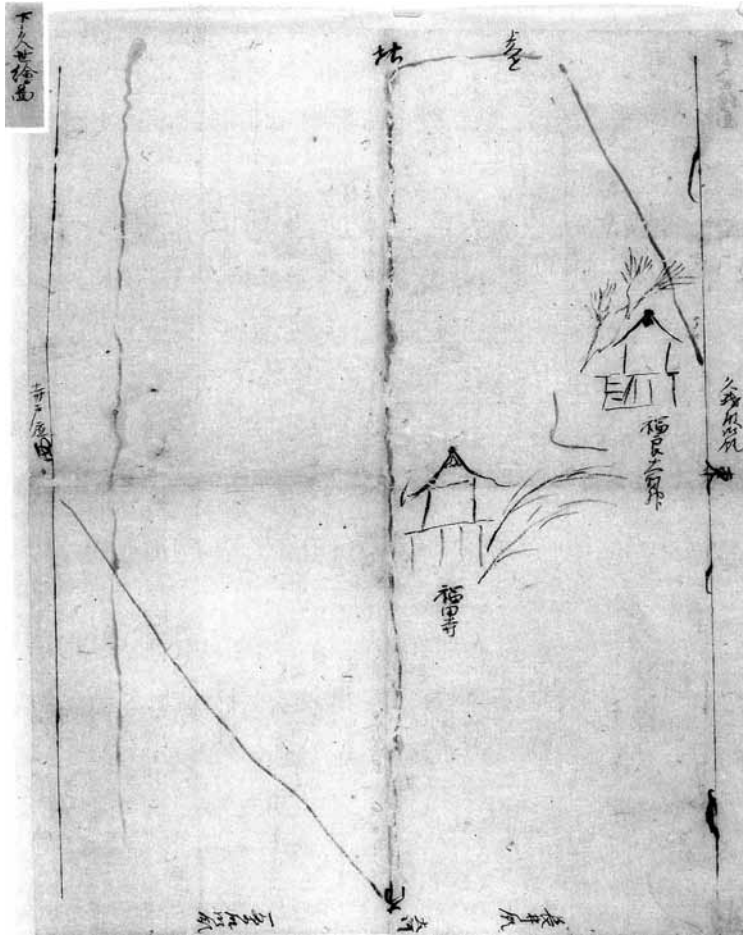


図 67 山城国下久世庄絵図

ことがわかる。近世村の景観が描かれている『洛外図屏風』で、各集落の周囲にきまって竹林があり、竹に囲まれた村落として表現されている。その機能は、後背低地での水害防止や防御機能などが考えられる。東土川遺跡でも、近世初期に東限流路を竹根株で埋めた痕跡があり、絵図の景観が戦国期に遡ることが確認できる。これは、東土川の周囲には未開地が存在したことを示す資料でもある。

さらに付近の調査では、大規模旧河川跡の耕地化が戦国期から近世に行われたことが知られ、低湿地の開発・旧集落の耕地化、藪地などの相対的に標高が高く、水田耕作が行われな

かった微高地の集落化や耕地化が行われ、土地利用の高度化による社会基盤の整備が計られた。このような低地での動きに連動して、段丘部の開発も集落として進み、また畑地や草刈り場などとして利用された。その結果、点在する集落が再統合され、明治の仮製地形図にみる集落景観が14・15世紀を経て確立したことが窺える。

なお、現地での調査は、仁木宏（大阪市立大学）、玉城玲子（向日市文化資料館）から教示を得た。

（百瀬正恒・鎌田泰知）

註1 『長岡京左京出土木簡一』 京都市埋蔵文化財研究所 1997年

註2 「山城国下久世庄絵図」『東寺百合文書』レ函384 京都府立総合資料館蔵

18 長岡京左京一条三坊2 (図版1・37)

経過 この一連の調査は西羽束師川の河川改修工事に伴うもので、昭和55年度より継続して実施されている。今年度は、南区久世東土川町地内において平成10年(1998)6月より長岡京左京418次調査としてC-1区、C-3区、D-1区、D-4区、E-1区の調査を行っている。ここでは、平成10年12月から平成11年3月5日にかけて、西羽束師川にかかる中橋西詰め北側で行ったC-3区の調査について述べる。

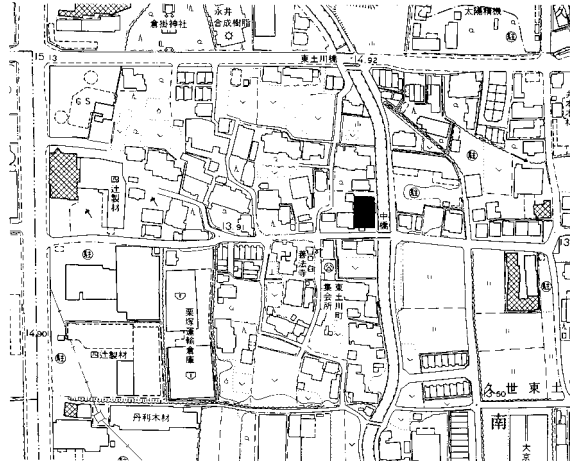


図68 調査位置図 (1:5,000)

本調査地点は、弥生時代から古墳時代の東土川遺跡と、長岡京東三坊坊間東小路および一条条間南小路の交差点部推定地にあたる。

遺構 現表土(標高約13.9m)から地山面までは調査区北側では0.8m、調査区南西部分では1.4mを測る。地山上面は北東から南西にかけて緩く傾斜する。低みとなる調査区南西部分には弥生土器を含む土層が堆積し、全体に緩く南東下りの地形となって長岡京以降の遺構群が成立する。地山は黄褐色系の粘質土層、あるいは粘土層で、下層では青色に変化する。これらの粘土層は約1.5mの厚さで堆積し、その下は砂礫層となる。検出された井戸群はいずれもこの砂礫層をさらに掘り込んで底部が形成されている。

弥生時代の遺構は、調査区南西部分に堆積していた包含層(SX445)の排土後、SX449・451、SD450などを検出した。SD450は、調査区南部のほぼ中央でやや東に振る南北方向の溝である。検

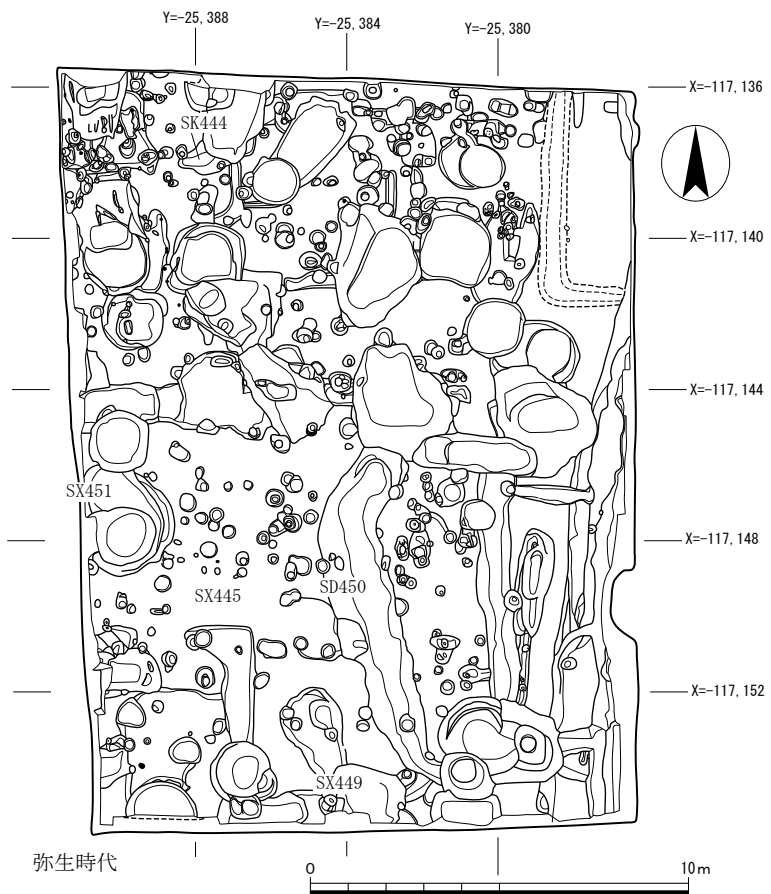
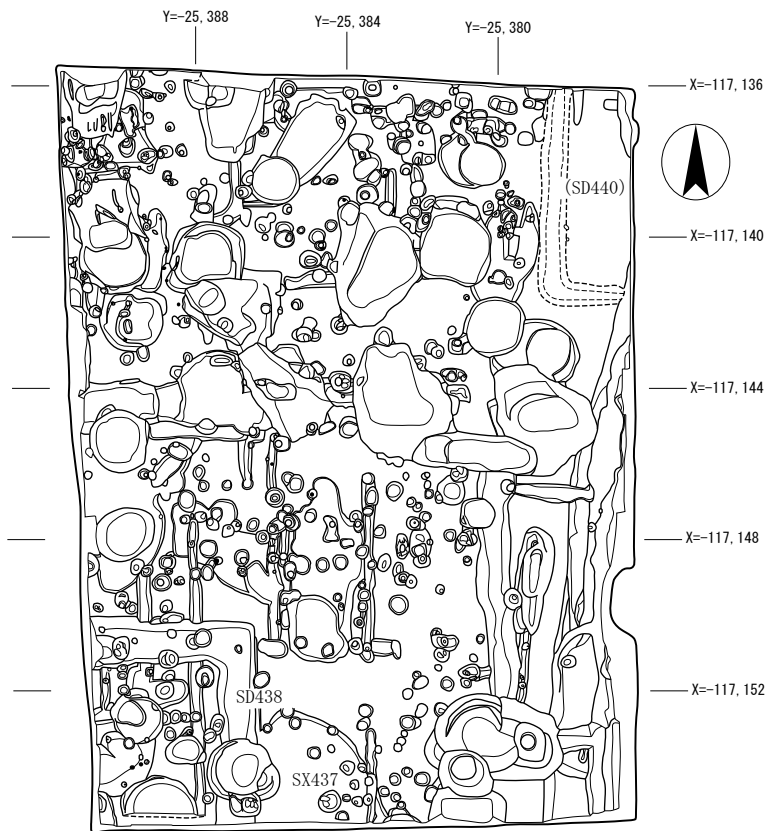
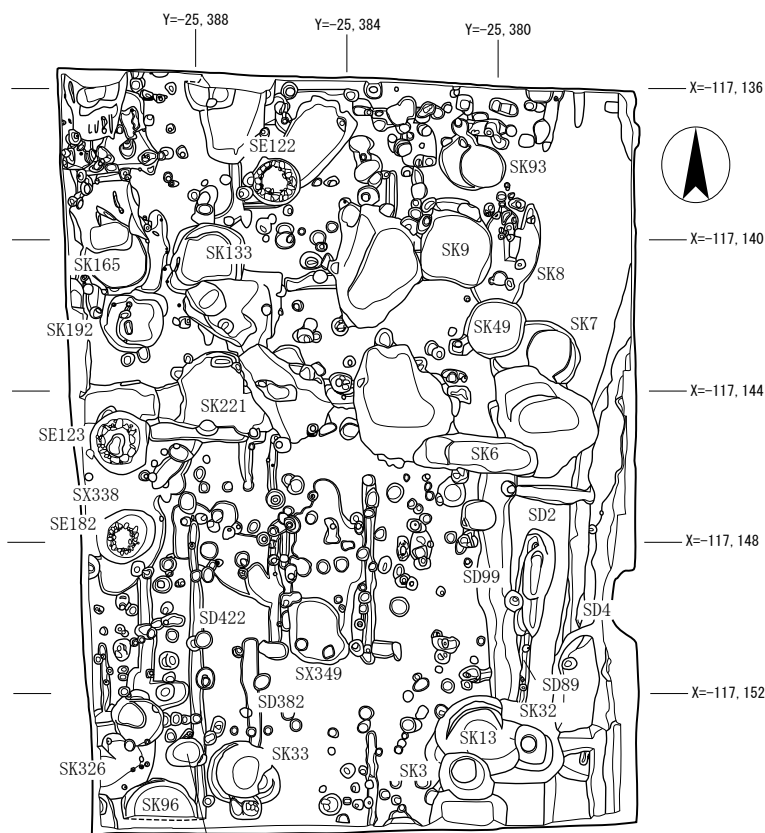


図69 遺構平面図 (1:200)



奈良時代末期（長岡京）～平安時代



平安時代以降

図70 遺構平面図 (1:200)

出部分北端部と南端部でそれぞれ東に曲がるようにもみえるが、北側・東側ではこの溝の続きを確認することはできなかった。溝内からは弥生時代中期後半とみられる土器群が出土している。古墳時代の遺構は未確認である。

長岡京の時代の遺構はSD 438を確認した。条坊関連の遺構と思われ、東三坊坊間東小路西側溝と一条条間南小路の南側溝がL字形につながる部分と想定できる。灰白色系の粘質土層、砂層などが深さ20cm前後で堆積し、同期の遺物も出土している。長岡京左京一条三坊十二町の北東コーナー部にあたる。SD 440については同十四町の南東コーナー部、東三坊坊間東小路東側溝と一条条間南小路の北側溝のL字形の取り付け部分と思われる。しかし検出状況が不明確（土の違いが不明瞭）で、堆積土層もSD 438とは異なり、ベースの地山とほとんど変わらない。7～8cmほど掘り下げたが、遺物も出土せず、条坊関係の遺構ではない可能性が高い。削平されて地山に残ったしみこみを溝と誤認した可能性を考えるのが一番理解しやすい状況であり、今後の検討が必要である。

十一町の南東部および十三町の北西部についてはその痕跡を確認することはできなかった。

平安時代の遺構は、総数で30基前後確認している。大半はS X 349・437などのピットで、多くは京都IV期の遺物を含んでいる。11世紀代の遺構であるが、12世紀代に入るものも少数ながら認められる。分布傾向は調査区西半に偏る傾向があるが、配置の規則性などは認められない。

鎌倉時代の遺構は、確実なものを確認していない。

室町時代以降の遺構は、土壌のほかピット多数が確認できる。京都VII期新に比定できる遺物群を含むS X 338が古く、京都VIII期に比定できる遺物を含む遺構が多くなる。以後途切れなく、室町時代後半期の16世紀代、17世紀前半代まで続く。ピットの中には並びを確認できるものもあるが、建物の復元は今後の検討課題としたい。以降は耕作土が入れられ、現代に続くと思われる。

S E 122・123・182はいずれも底部に2～3段の河原石を用いた石組みが残存する井戸で、埋没は16世紀代中頃である。成立については、ピット群が盛行する時期の後半期に伴うものである。S D 4はその頃に造られ、17世紀前半には完全に埋没している。本調査区南側のD-1区の調査で検出したS D 4につながる溝である。江戸時代前半代の特色として、S K 7・8・19・32・133・165・192・221など、円形の掘形に桶を据えた痕跡が認められる遺構があり、注目される。

遺物 弥生時代以前の遺物はない。弥生土器は壺・甕・高杯・鉢などがある。いずれも弥生時代中期後半に収まるものである。古墳時代の遺物はきわめて少なく、土師器甕の体部片、須恵器杯Hを確認した。須恵器杯Hは7世紀代のものと思われる。京都I期中に比定できる遺物群が条坊側溝S D 438の堆積土よりまとまって出土している。土師器は器表面が脆く、手法痕跡の確認できるものは少ないが、長岡京期のものと考えられる。平安時代前半代の遺物は少量である。平安時代後半代の遺物は京都IV期の土師器皿、瓦器椀などがS X 349・437などから出土している。輸入陶磁器白磁も少量出土する。京都V期に比定できる遺物は京都IV期に比べると少量である。鎌倉時代の遺物も少量を検出した。

室町時代には、遺構の増加に伴って飛躍的に出土量が増える。土師器皿とともに瓦器椀や瓦器羽釜・鍋が目立つ。S X 338より京都VII期新、S K 9より京都VIII期中のまとまった遺物が出土している。16世紀代の遺物はS D 4などからの出土があり、17世紀前半代の遺物はS K 6からの出土がみられる。

調査終了時に、調査区北壁の2箇所、断面図に基づく各土層の遺物採集を行った。結果は表2に示したとおりである。遺構面に近い東拡張区画第4層、西拡張区画第5層では土師器と瓦器の出土量がほぼ同等となり、中世の都市近郊集落の様相をとらえることができよう。

小結 弥生時代中期に溝や、不整形な掘込や落込が形成され

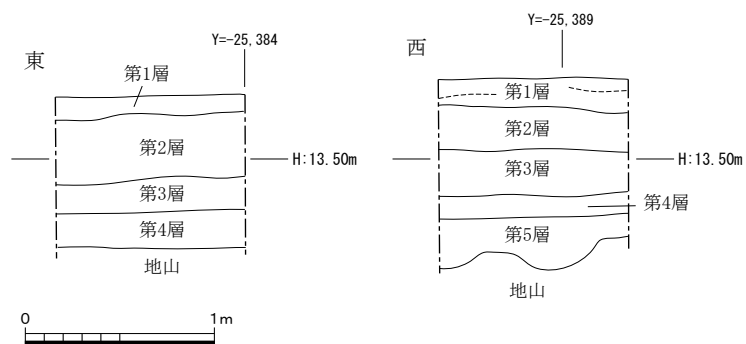


図71 拡張区画断面図 (1:40)

表1 拡張区画出土遺物集計表

		弥生 土器	土師 器	須恵 器	緑釉 陶器	灰緑 陶器	山茶 椀	白色 土器	黒色 土器	瓦器	輸入 陶器	焼締 陶器	瀬・ 美系	唐津 系	肥前 系	京焼 系	産地 不明	土 製品	瓦	石 製品	金属 製品	その 他	合計	
東 拡 張 区 画	第1層	1 8	20 41	3 16	0 0	0 0	1 7	0 0	0 0	7 15	0 0	2 23	0 0	0 0	1 8	0 0	2 12	0 0	5 229	0 0	4 64	25 710	71 1133	
	第2層上面	0	9	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	4	0	17	0	19	14	67	
	落込	0	14	0	0	0	0	0	0	3	0	1	4	0	1	0	131	0	673	0	126	1030	1983	
	第2層	2 8	69 85	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	36 101	0 0	1 13	0 0	1 7	4 6	1 22	13 25	0 0	8 294	0 0	4 105	3 4	142 670	
	第3層上面	0	24	5	0	0	0	0	0	22	0	2	0	0	1	0	3	1	3	0	1	5	67	
	北落込	0	39	22	0	0	0	0	0	67	0	14	0	0	1	0	6	5	9	0	4	11	178	
	第3層	1 2	39 45	1 3	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	27 53	0 0	1 24	0 0	2 7	3 4	0 0	2 14	0 0	2 13	0 0	0 0	0 0	4 7	82 172
	第4層	0 0	121 223	12 102	1 1	1 3	0 0	0 0	0 0	127 328	1 1	2 4	0 0	0 0	1 3	0 0	0 0	0 0	0 0	2 94	0 0	1 12	7 11	276 782
	合計	4 18	282 447	21 143	1 0	1 3	1 7	0 0	0 0	220 567	1 1	9 79	1 4	3 14	11 23	1 22	1 188	24 5	1 1312	37 0	29 311	58 1773	705 4918	
	西 拡 張 区 画	第1層	2 10	24 36	1 15	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	14 24	0 0	1 8	1 3	0 0	1 17	0 0	12 152	0 0	48 1977	0 0	7 59	122 4654	233 6955
第2層		0 0	32 73	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	18 46	0 0	0 0	0 0	0 0	5 7	0 0	13 39	1 29	4 120	0 0	1 5	30 17	104 336		
第3層上面		0 0	15 45	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	2 6	0 0	0 0	0 0	0 0	5 25	4 14	1 9	0 0	1 27	0 0	0 0	0 0	28 126		
第3層		0 0	34 64	3 22	0 0	1 0	1 1	0 0	16 39	2 4	3 54	0 0	0 0	4 5	0 0	8 15	0 0	14 330	1 11	7 65	7 302	100 912		
清掃		0 0	3 2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	0 0	1 0	5 0	0 0	2 3	0 0	1 2	0 0	2 338	0 0	0 0	1 1	11 352		
1～3層		0 0	32 68	2 7	0 0	0 0	0 0	0 0	23 74	0 0	0 0	2 5	1 2	2 3	1 1	5 20	0 0	2 0	0 0	0 0	1 1	71 181		
第4層		0 0	66 140	3 371	0 0	0 0	0 0	0 0	63 201	1 2	2 117	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 113	0 0	2 2	1 0	138 946		
第5層		0 0	66 140	3 371	0 0	0 0	0 0	0 0	63 201	1 2	2 117	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 113	0 0	2 2	1 0	138 946		
合計		2 10	206 428	9 415	0 0	0 0	1 1	0 0	0 0	137 391	3 6	7 184	3 8	1 2	19 60	5 15	40 237	1 29	73 3905	1 11	16 131	161 4975	685 9808	

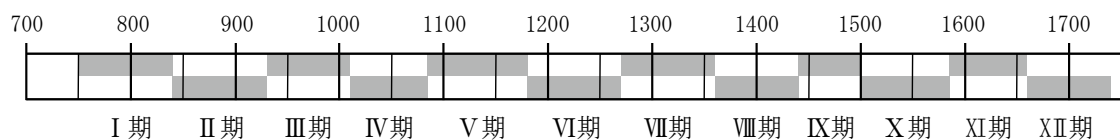
※ 上段は破片数、下段ゴチックは重量 (g)

て以降、長岡京が成立するまで地中に残された痕跡は確認されない。

長岡京の条坊遺構（左京東三坊坊間東小路西側溝と一条条間南小路南側溝とのL字形の取り付き部分）を検出し調査した。当地点では東三坊坊間東小路と一条条間南小路の交差点部分が推定されていたが、南西コーナー部を検出したにとどまり、南東、北西、北東のコーナー部については確実な遺構を検出することはできなかった。各側溝の設定時の深さが本来的に浅く、かなりの削平を受けた結果とみることができよう。

平安時代の前半代の遺構は未確認である。平安時代後半期に一定の遺構数が確認でき、ピットなども存在することから、集落があったものと推定できる。室町時代に入ってピット、土壌などの数が増加する。遺構は17世紀前半代まで続くようである。（上村憲章）

表2 土師器杯皿類形式と推定年代対照表



19 長岡京左京一条三坊3 (図版1・38)

経過 この一連の調査は西羽東師川の河川改修工事に伴うもので、昭和55年度より継続して実施されている。今年度は、南区久世東土川町地内において平成10年(1998)6月より長岡京左京418次調査としてC-1区、C-3区、D-1区、D-4区、E-1区の調査を行っている。ここでは、1998年9月から11月末日にかけて、西羽東師川にかかる中橋西詰め南側で行ったD-1区の調査について述べる。

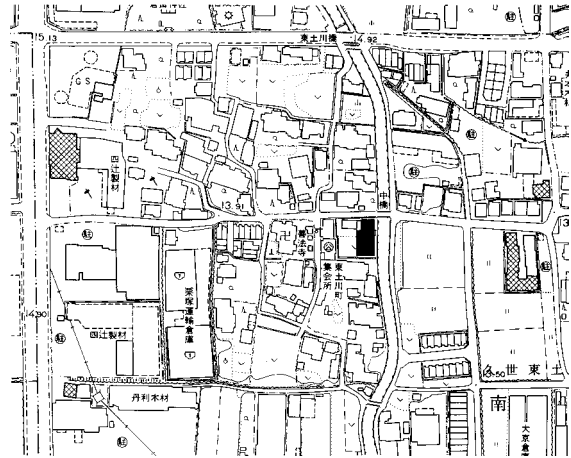


図72 調査位置図 (1:5,000)

調査地点は、弥生時代から古墳時代の東土川遺跡と、長岡京左京一条三坊十二町および東三坊坊間東小路の推定地にあたる。また、中世の戊亥遺跡に隣接し、東土川城も推定されている。周辺では左京361～363・384・385次調査(名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う調査)、西羽東師川河川改修工事に伴う左京139・177・401次調査などが行われている。

遺構 近世層である第6層と第7・8層の一部まで、重機によって掘削した(現表土は標高約13.8m)。地山(上面は標高12.8m)は第22層とした黄褐色系の泥砂層で下層は青灰色の砂層となる。

弥生時代の遺構はSD202、SX203～205・207・208がある。SD202は北西から南東に延びる溝で、幅約1.2m、深さ約0.5mを測る。SX203～205・207・208は204を除き形状が不整形で、遺構性格は不明。SX203からは弥生土器高杯・甕などが出土している。

SX200は調査区西部で検出した落込で、南北で12m以上を測り、東肩を検出している。北限、南限、西限は調査区外にあり、全体の規模は不明である。深さは0.9～1.0mを測る。下層はシルト層と砂層の堆積がみられ、弥生土器が多く含まれる。中層から上層では砂層、泥砂層の堆積が主体となり、c手法を用いた土師器皿・杯・椀類が出土する。長岡京造営以前に半分ほど埋まっていたものを、同期に完全に埋め戻したものと理解できる。

他に長岡京期の明確な遺構は確認できなかった。平安時代の遺構も未確認である。

鎌倉時代後半から室町時代前半期にかけての遺構は、SD33・84・94などの小溝、ピット112・136などがあるだけで量的にはわずかである。

室町時代後半以降の遺構はピット群などが中心となるが、15世紀後半代から増え始め、16世紀代が中心となり、17世紀前半代まで続く。しかし、並びの確認できるものは現在のところ未確認である。SE12は径15～20cmの河原石で組んだ井筒を有する井戸で、掘形からは京都X期新に比定できる土師器皿が出土している。また石組内からも同期の遺物出土し16世紀後半代に機能し、埋没したことがわかる。SD4はほぼ南北方向にのび、その堆積は上層と深い下層

に分けることができる。下層部分は幅約 2.5 m、深さは検出面より約 0.8 m を測り、シルト層が堆積し、土器や漆器椀などの木製品も出土している。京都 X 期後半から京都 X I 期前半の土師器皿が出土する。16 世紀後半代に開削され、17 世紀初頭には埋没したと思われる。上層部分も 17 世紀前半代には埋没するようである。SE 11 は井筒などは残っていないかった。SE 12 より新しいが、17 世紀前半代には埋没している。いずれも SD 4 が機能していた時期に対応するものである。

江戸時代中期から後期の遺構は検出されていない。SE 1、SK 5 は SD 4 を切って成立しており、明治に入って埋没している。SE 1 は井筒などの施設は残存せず、「息抜き」の竹筒の痕跡を確認している。SK 5 は、南北約 4 m、東西約 1.5 m、南東隅で南北 1.0 m、東西 0.4 m の切り欠きをもつ鉤形のプランを持ち、深さ 0.6 m を測る。切り欠き部分を除いた 4 面に横板を杭でとめて護岸を施している。北東コーナーから北東方向に竹筒を 2 本並べ導水管とし、南辺の護岸板上端に切り欠きを設け、南方向へ竹筒を 2 本並置して排水管としている。西羽東師川から導水し、水を溜めていた施設である。

遺物 弥生時代以前の遺物はない。弥生土器は壺・甕・高杯・水注などがある。いずれも弥生

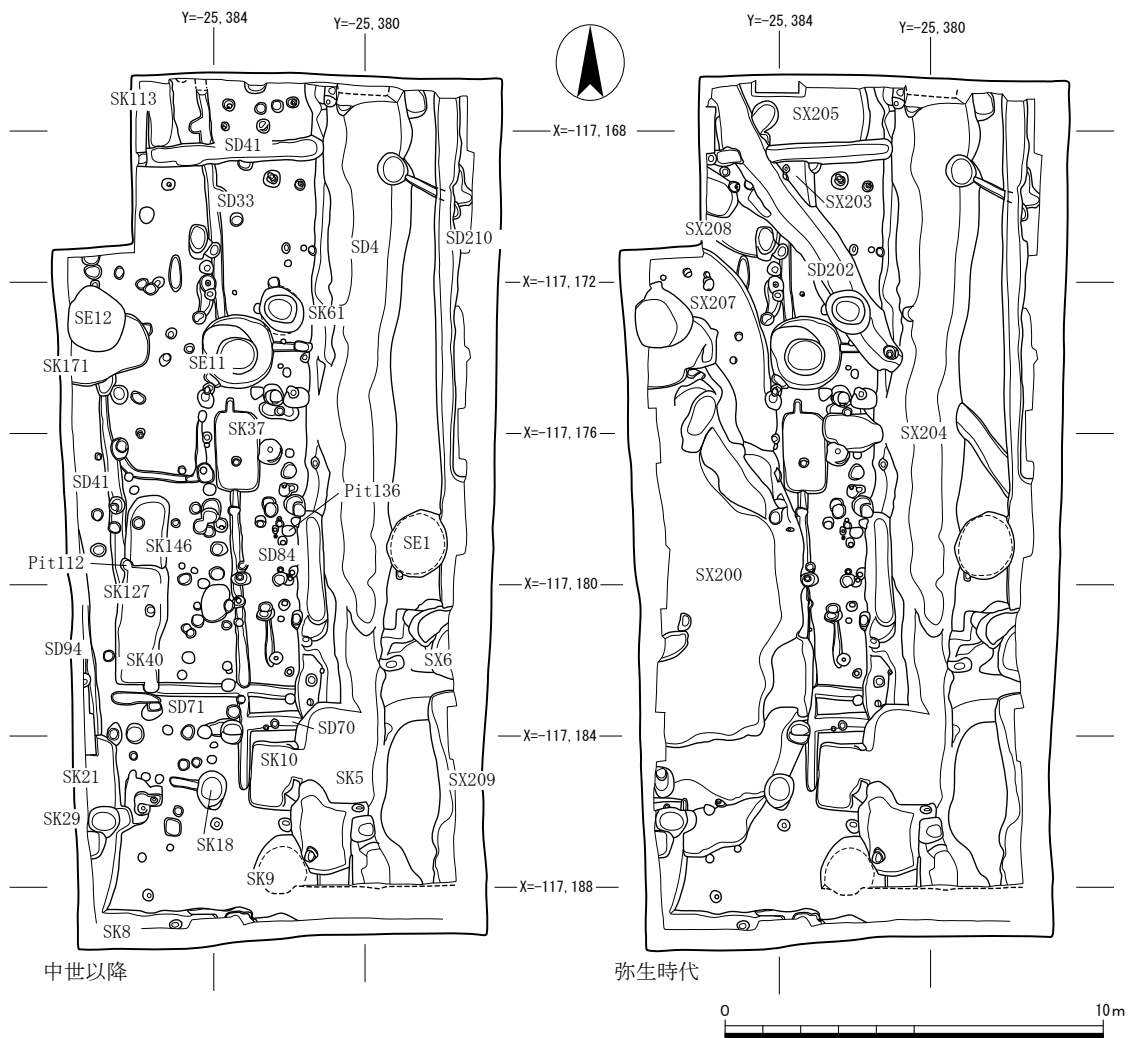


図 73 遺構平面図 (1:200)

時代中期に収まるものである。古墳時代の遺物はきわめて少なく、甕の体部片などで庄内式・布留式併行期とみられる破片が認められる程度である。古墳時代の須恵器もみあたらない。

京都 I 期中に比定できる遺物群が S X 200 の中層から上層より比較的まとまって出土している。土師器は器表面が脆く、調整痕の確認できるものは少ないが、長岡京期のものと考えられる。須恵器も杯 A 類など、焼成不良のものが多い。

平安時代から鎌倉時代の遺物は、土師器、輸入陶器の小片が後世の遺構に混入して出土している。

14 世紀代と思われる遺物は、土師器、瓦器が主体であるが、全形の知れる遺物は少ない。

15 世紀後半から 17 世紀前半までの遺物が、この調査区では主体をしめる。S D 4 の上層からは五輪塔の水輪、火輪など（花崗岩製）、S E 11 より一石五輪塔（花崗岩製）などの石製品も出土している。

小結 弥生時代中期に溝、掘込、落込が形成されて以降は、長岡京が成立するまで、遺構は確認されない。長岡京期に地表に残る窪みが埋められ平地となる。長岡京の条坊遺構（左京東三坊坊間東小路の西側溝）の推定位置を調査区内に含んでいるが、検出していない。以後 14 世紀初頭くらいまでは遺構が確認されない状況が続く。14 世紀代の遺構は南北方向の小溝が中心である。平安時代から鎌倉時代の遺物はわずかに出土している。15 世紀後半に入ると爆発的に遺構が増える。16 世紀代後半には南北方向に溝が開削され、井戸、ピットなどが確認できる。17 世紀後半以降は遺構は少なくなる。

以上が、本調査区で得られた知見であるが、長岡京の条坊遺構の問題や、中世集落跡として認識できるピット群の分析など、今後に残された課題は多い。

（上村憲章）

20 長岡京左京一条三坊4 (図版1・39・40)

経過 調査地点は、弥生時代から古墳時代の東土川遺跡、長岡京左京一条三坊十二・十三町および東三坊坊間東小路と一条大路の交差点部にあたり、昨年度の左京401次調査(97NG-SD13)で一条大路南側溝が検出されたことから、今回は北側溝が期待された。

周辺では左京361～363・384・385次調査(名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う調査)などが行われている。ここでは、弥生時代から平安時代後期の各時代の遺構が検出され

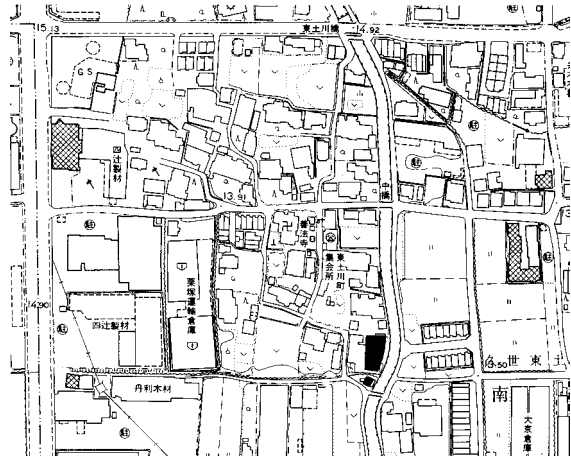


図74 調査位置図 (1:5,000)

た。左京二条三坊十五町の調査では1町規模の宅地が検出され、造長岡京使の佐伯宿禰今毛人の邸宅と想定された。

また、今回の調査地点は、東土川集落の東南部で、集落の南限に水路があり、その水路が環濠の名残ともみられて注目された。調査は進入路の関係から、北側をC-4区として先行し、その後、E-1区を行った。なお、E-1区の遺構だけ本文中に地区名を示した。

遺構 基本土層は、D-4区西壁の南部(X=-117,267mライン)で見ると、1～3層は盛土層と近世の整地層である。4層はにぶい黄褐色泥砂層(10YR5/3)、5層は暗褐色砂礫層(2.5YR3/4)、6層は褐灰色泥砂層(10YR6/1)、7層は黄褐色泥砂層(10YR5/4)であった。各層ともに水田耕作土や床土に関係した層は存在しないことから、各時代とも水田耕作は行われなかったことがわかる。以下、検出した主要な遺構について時代順に記述する。

近代 水車施設に付帯する用水路・土壠などを検出した。

SD5水車に動力を送る水路で幅2～3m前後、延長20m検出した。西羽東師川の取水部から



図75 SD5桐木検出状況(東から)

から10mは北東から南西に斜行するが、その先は南に流れる。南流する部分の溝肩部には平行して護岸石積み基礎の桐木が敷かれ、その間隔は1.7m前後であるが、護岸石はトレンチの南端部以外はすでに撤去されていた。また、桐木に対応して、水路底に一边0.3～0.5mの敷き石を施す部分

もあるが、この石も北部では抜かれていた。胴木は西肩の一部で二時期を確認した。なお、上層の胴木下部には部分的にコンクリートが使われていた。

S D 5 の東肩は、西羽束師川の堆積層である褐色砂礫層を粘土で覆って構築されていた。これは、S D 5 西肩が現河川の護岸と接する X=-117, 252 m ラインから北部にかけて旧流路を検出していることから、流路埋土の掘削や盛土などを行って水路を造ったためとみられる。旧流路からは近世の遺物を少量採取した。

S K 65 底部を石敷きした水路の西部で検出した径 1.6 m の土壌、深さは 1.2 m ある。水車の西側軸柱を建てた遺構と推定されるが、外周部の 0.3 m ほどは堅く叩き締めているが、中心部には軟らかい灰色泥土層が堆積していた。時期的には、二時期ある胴木の下層に対応する土壌である。ただ、部分的な破壊があり軸柱遺構や臼を据え付けた痕跡は検出できなかった。

S D 1 (E-1 区) 南北方向の西羽束師川の旧流路である。近代の遺物が出土している。

江戸時代 溝・土壌などを検出した。

S D 27 幅 0.3 m の取水口で、東には幅 2.5 m、延長 5 m 以上の池 S K 34 が広がるが、全体は水車施設に関する S D 5 で破壊され不明である。池部の南肩は傾斜が緩やかであるが、北は急で、深さは約 1.0 m ある。池内の北と西には杭が打たれ、護岸板も一部に存在したことから、農作業に伴う池と考えられる。近世後期の遺物が出土した。

S D 30 東西方向の溝で、幅 1.0 ~ 2.5 m、深さ 0.7 m。西から東に流れ、東部は S D 5 に破壊されている。堆積層は上層が暗灰黄色泥砂層 (2.5Y5/2)、中層は黄灰色泥砂層 (2.5Y1/5)、下層はオリーブ黒色泥土層 (10Y1/3) で、下層は植物遺体が混じる腐植土層である。近世の遺物が少量出土した。標高の高い西部から西羽束師川に落とす排水施設である。

S D 16 C-1 区からほぼ南流する集落の東限水路であるが、D-4 区ではクランク状になっている。幅は 2 m 前後、深さは 0.5 m 前後で、S D 30 に切られている。

中世 土壌・柱穴・溝などを検出したが数は少ない。また、遺物も少量であることから、当該地点は集落の縁辺部と推定される。

S D 50 東西方向の流路で、延長 8 m 検出したが、北肩の一部だけで、規模は判然としない。埋土は褐色砂礫層が主体で、一部に灰色砂層が混じる。下層には自然木などの有機物が出土する部分もあるが、土器や木製品は出土していない。このように埋没過程を示す遺物が出土しないことから、成立時期の詳細は不明だが、切り合いなどから中世に属し、西羽束師川とは別の自然流路と判断される。

平安時代 土壌・柱穴などを検出したが、中世と同様に数は少なく、同じ景観と推定される。

S K 45 西羽束師川の旧流路に東部を破壊されている土壌。円形で南北 2.5 m、東西は 1.0 m 分検出した。11 世紀の土師器皿と輸入陶磁器白磁碗Ⅱ類が少量出土した。

長岡京期 溝・土壌を検出した。

S D 51 一条大路北側溝で、幅 0.8 ~ 1.3 m、深さ 0.4 m、延長 11 m 検出したが、大部分は S D 30 で破壊されていた。溝埋土は Y=-25, 383.4 m ラインでは、第 1 層は暗褐色泥砂層 (7.5YR3/3)、

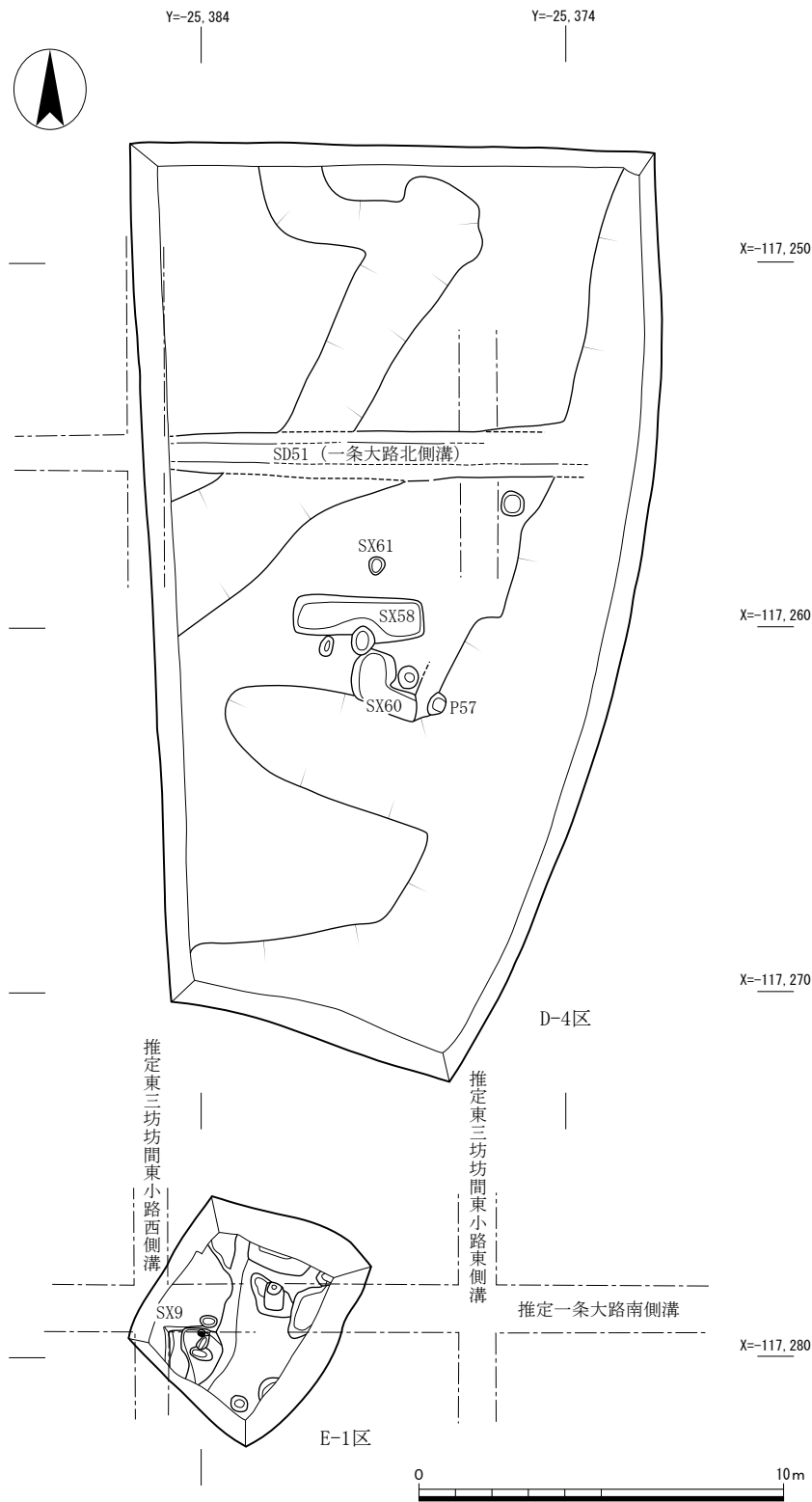


図 76 長岡京期遺構平面図 (1:200)

土壌で、古墳時代前期の土器が出土している。S X 61 は径 0.9 m の円形土壌で、庄内式期の壺がほぼ完形で埋まる。

遺物 遺物の中心は近世・近代のもので、その他の時代のものは少ない。

近世から近代の遺物には、土師器皿・焙烙鍋、伊万里焼碗・皿、京焼碗・鉢などがある。

第 2 層は黒褐色泥砂層 (10YR3/2)、第 3 層は黒褐色砂礫層 (7.5YR3/1) である。長岡京期の土師器・須恵器が出土している。

S X 9 東西溝・南北溝 (E-1 区) 東西溝は、幅 2.6 m 以上、深さ 0.3 m で、北肩は未検出である。南北溝も一連の溝として検出したが、調査範囲が狭く詳細は不明である。長岡京期の遺物が少量出土している。この東西溝は、一条大路の南側溝と考えることもできるが、東側で検出した昨年度の左京 401 次調査 (97 N G - S D 13) の溝とは南肩が約 2 m 北にずれる。南北溝は、左京 177 次調査 (87 N G - S D 8) のデータから、東三坊坊間東小路西側溝と推定できる。

古墳・弥生時代 土壌・柱穴を検出した。S X 58 は東西 3.6 m、南北 1.0 m の長方形の

鎌倉時代から戦国期の遺物には、土師器皿、瓦器椀・皿、唐津焼椀・皿、信楽焼播鉢、中国製青花椀・白磁椀・青磁椀などがある。

平安時代の遺物には、土師器皿、瓦器椀、輸入陶磁器白磁椀Ⅱ・Ⅳ類などがある。

長岡京期の遺物には、土師器杯・皿・椀、黒色土器杯・鉢、須恵器杯・皿・壺、土馬などがある。

弥生時代から古墳時代の遺物には、弥生土器壺・甕・高杯、庄内式壺、古墳時代前期甕・壺、6世紀の須恵器杯身・杯蓋などがある。

その他、近代の砥石、鉄製品、宋銭の元祐通寶と明銭の洪武通寶が出土している。

小結 今回の調査区は、河川幅を拡張する事業に伴う調査で、現集落内を調査することができた。したがって、東土川集落の成立期を知る絶好の機会であった。現在まで桂川右岸の低地では、弥生・古墳時代の遺跡や長岡京の調査に関して、中世の遺構が多数検出されているが、その多くは鎌倉時代後期が廃絶期であり、室町時代の遺構・遺物の出土は少なかった。そのため、現集落の下層が遺跡候補地として有力視されたが、実証できる機会が少なかった。

今回の調査では、室町時代後半の遺構を推定どおりに検出することができた。D-4区を初めとして各調査区とも水田の痕跡がないことから、桂川右岸に点在する高地のために水田開発が困難で放置された土地を、14世紀段階（13世紀後半までさかのぼる例も想定できる）に集落として開発し、現代まで継続する集落地として利用したとみることができる。

長岡京の遺構は、一条大路北側溝SD 51、S X 9（E-1区）を検出し、昨年度の左京401次調査（97 NG-S D 13）で検出したSD 3との距離を測ることができ、大路の幅を確定することができた。大路幅はSD 51との関係では24.8mで、南で検出している二条条間大路の数値と等しい。また、二条条間北小路の道路幅は9.3mであり、左京二条三坊十六町の宅地幅は107m前後になる。これにより、桂川パーキングの建設に伴って検出した宅地幅が、大路の南側宅地は南北幅が狭いのに反し、北側は広いことと同様の地割りが、周辺部に展開していることがわかる。これは、小路幅の道路センターを中心に宅地を区画したため、大路に面する北側宅地は、大路に小路幅の宅地を占有されたからで、北京極大路から宅地区画をしたことが推測される。このような条坊設定がどの範囲まで及んでいるのか、今後データを収集して検討する必要がある。

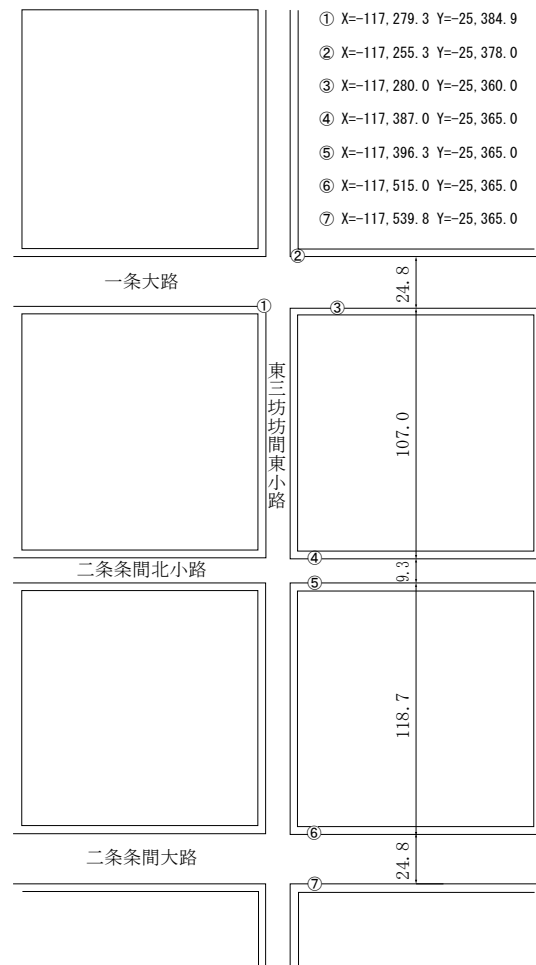


図 77 条坊検出地点とその数値

近世の水車遺構は、元の地主である山崎利雄氏から話を伺っており、また、所蔵される明治35年（1902）9月の「水車用水路及堰新設」と、同年10月の「精米製造場新設」許可証をみせていただいた。このため、全容の検出に意を尽くしたが、思いのほか攪乱があり、全体像の把握はできなかった。しかし、幅3mの水路が敷設されていることから、規模の大きな水車が設置されていたことが判断され、西羽束師川沿岸には他にも幾つかの同様な遺構が存在したことが推定できる。なお操業期間は、京都府の許可証から、明治35年から大正初年（1912）までで、電気モーターの普及で廃止された。

弥生時代から古墳時代の遺構は、土壌・柱穴などを検出したが、数は少なく散発的で、竪穴住居は検出できていない。また、遺物も少量である。ただ、庄内式期から古墳時代前期の壺棺と推定されるものがあり、東土川遺跡が多様な埋葬主体部で構成されていることがわかった。

なお、現地調査では元の地主である山崎利雄氏から有益な助言を得た。記して感謝します。

（百瀬正恒・鎌田泰知）

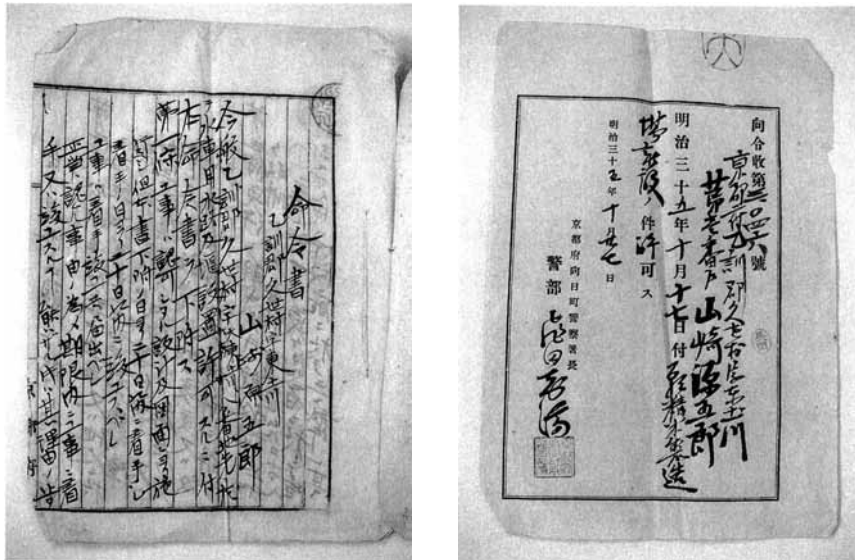


図 78 水車設置許可証

V その他の遺跡

21 鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地（図版2-2）

経過 左京区鞍馬二ノ瀬町の民家裏で石垣工事を行っていた際、多量の銭貨が出土したとの通報があった。現場へ到着した時点では、すでに銭貨と曲物の底板がとりあげられており、出土した箇所は石垣工事の施工中であった。この時点での調査は困難であるとの判断から、後日、発掘調査を実施することとなった。なお発見時の銭貨の枚数は38,148枚であった。

遺構 土壌は2基検出した。土壌SK1は銭貨が埋蔵されていた箇所と思われるもので、銭貨発見時にスコップなどで掘りあげられたため、土壌の肩口は明確ではない。曲物の痕跡は確認できなかったが、埋土より銭貨が出土した。SK2は径0.3mの円形で、形状からみれば曲物を据えるのに最適であると思われたが、その痕跡は確認できず、埋土からも銭貨は出土しなかった。

遺物 発掘調査で出土した銭貨の枚数は314枚で、初鑄の最も古いのは「開元通寶」（621年・唐）、新しいのは「咸淳元寶」（1265年・南宋）である。SK1から23枚出土した以外は、石垣裏込め土中や攪乱された土中に散在していた。その他に室町時代の土師器皿、平安時代前期の火膨れをおこした釉薬を施す前の素地と思われる須恵器椀、陶器甕、瓦器などの破片が出土した。

小結 今回の調査では、明確に遺構の確認はできなかった。しかし、室町時代の遺物の混入や初鑄が1265年という出土銭貨からも、銭貨は13世紀から14世紀頃に埋められたものと推定できる。

なお、当該地は周知の遺跡には当てはまらない場所であったが、直線距離にして25mほど北東側の山中には「二ノ瀬廃寺」と称される遺跡が存在し、現在も2～3mの石垣が残存している。この遺跡は調査事例もなく、寺院の沿革なども不明で、今回発見した埋蔵銭貨との関係については今後の検討課題である。1点ではあるが、窯跡の存在をうかがわせる須恵器椀の出土があり、改めて周辺での調査の必要性を感じさせる。

（近藤章子）

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成10年度 1999年報告



図79 調査位置図（1:5,000）



図80 SK1（北から）

22 六波羅政庁跡 (図版1・41～45)

経過 調査対象地は京都国立博物館の敷地内にある既存の新館周囲で、新館建て替え計画により発掘調査を行った。この地は平安時代後期の法住寺殿跡、鎌倉時代の六波羅政庁跡、桃山時代以降は方広寺などの遺跡の推定地にあたる。平成9年(1997)3月には試掘調査が実施され、遺構の残存状態が比較的良好であることと、4面の遺構面が確認されている。法住寺殿・六波羅政庁・方広寺に関連すると思われる遺物も出土している。また、同年に京都国立博物館

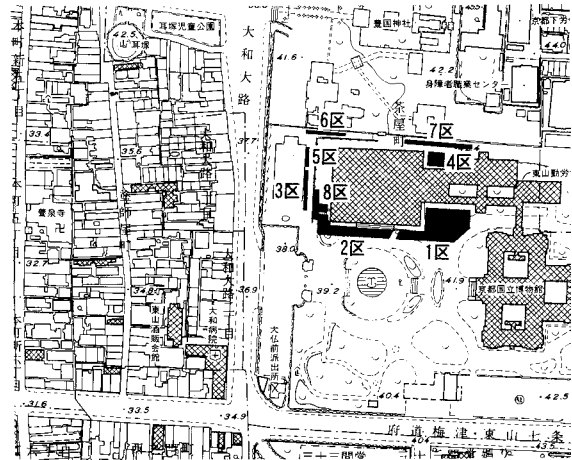


図81 調査位置図(1:5,000)

が構内埋蔵文化財残存状況試掘調査を行っており、新館南側の方広寺石塁の延長部分にあたりとされる箇所では高さ1.5m以上の巨石が確認されている。事務棟玄関脇のトレンチも、遺構は良好に遺存するものと考えられた。これらのことから発掘調査は新館を挟んで1～8区の調査区を設定し調査を実施した。調査は2区、1区の順で行った。

調査の結果、1・2区(新館南側)から「国指定史跡方広寺石塁」の延長にあたる石垣をはじめ方広寺に関連する多くの遺構を検出した。これらの遺構は現地で全面保存されることが決まり、検出した遺構は土嚢で上面を保護し埋め戻した。このため下層遺構の調査はしていない。3・5・6区では方広寺の整地層、中世遺物包含層を確認した。

遺構 各調査区ごとに調査成果の概要を示す。

1区 基本的な層序は、北半で博物館新館建設時の積土層が厚さ0.2～0.4m、近代積土層が厚さ0.9～1.0mあり、その下層が方広寺の遺構面となる。南半は博物館新館建設時の積土層が厚さ0.6～1.0m、近世の積土層が厚さ0.2～0.4m、その直下が遺構検出面となる。遺構は、南門・回廊・溝・石組溝・石垣・路面・鑄造遺構などを検出した。

南門 南門の根固めを10箇所検出した。1つの根固めの規模は、検出面で直径約1.8m、深さ約1.0mで、その中に拳大の礫と粘土を詰められたものである。根固めの断面を観察すると、根固めの石は3回に分けて詰められていることがわかる。根固めの並び方から、門は門扉の付く中央柱列の前後にそれぞれ4本の柱をもつ八足門であることを確認した。規模は桁行中央一間が18尺(約5.4m)、東西各一間が13.5尺(約4m)、梁間一間が13.5尺(約4m)となる。

回廊 南門の東側では、門のものよりやや小さい根固めを8箇所検出した。根固めの規模は検出面で直径約0.9m、深さ約0.5mで拳大の礫とともに

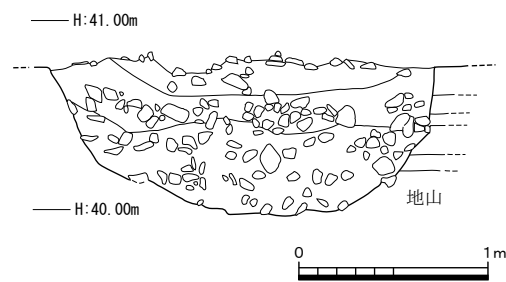


図82 1区南門根固め断面図(1:40)

瓦の破片が入っているものもある。門の東西方向の柱列に並ぶことからここに回廊が取り付いていたこと、また根固めの並び方から複廊であることを確認した。柱間は桁行、梁間共に12.5尺（約3.75m）となる。

溝 回廊の南側、調査区の西端で、回廊の柱列に平行して幅約1.4m、深さ0.35mの溝を検出した。回廊に伴う雨落溝と考えられ、多くの大仏瓦が出土した。

石垣 巨石を用いた石垣は2区から延び、調査区西寄りから南に曲がり、調査区外に延長する。石垣が南に曲がる位置は南門の西端延長線上にあたり、石垣のあった部分と以東では2mもの段差を生じることになる。調査区西側の石垣があった部分は、一部石垣を埋めて石組溝に造り替えている。

石組溝 南面石垣の延長上で、東西方向の石組溝を検出した。石は一部抜き取られていたが東端まで続き、調査区外へ延長している。規模は幅約0.8m、深さ約0.5～0.8mで、西側が深くなり、石垣が南へ曲がる地点で2区の素掘り溝に接続している。石組みは1段から3段で、地山を布掘りして小礫を入れて石を据え、裏込めにも小礫を入れている。溝の西端では幅0.3m、長さ0.7m以上の板が底に据えられており、排水の誘導に使用されたと考えられる。

鑄造遺構（土壌200） 土壌200は南面の巨石石垣が南へ延長するところ、すなわち南北石垣に接する地点で検出した。遺構は、石垣築造後まもなく行われた整地層上に成立するため、石垣築造時の遺構面より約60cmほど高く、遺構成立時には石垣は埋まっていたことになる。

18世紀代の整地層を掘り下げたところ、東西約1.8m、南北約2.8mの範囲に組まれた部材を確認した。部材は東西3本の角材と、この上に南北方向に並べた数本の材である。東西の材は約1mの等間隔で平行に並び、直径約20cmの杭の上にホゾ組みで固定される。検出した東西の材は長さ約1.8mだが、西側端部にホゾが付くため、さらに西方へも部材があったと推定する。南北の材は板あるいは角材だが、形状や長さは不均一で、転用材も用いたようである。これら南北材は、東西材の上に乗

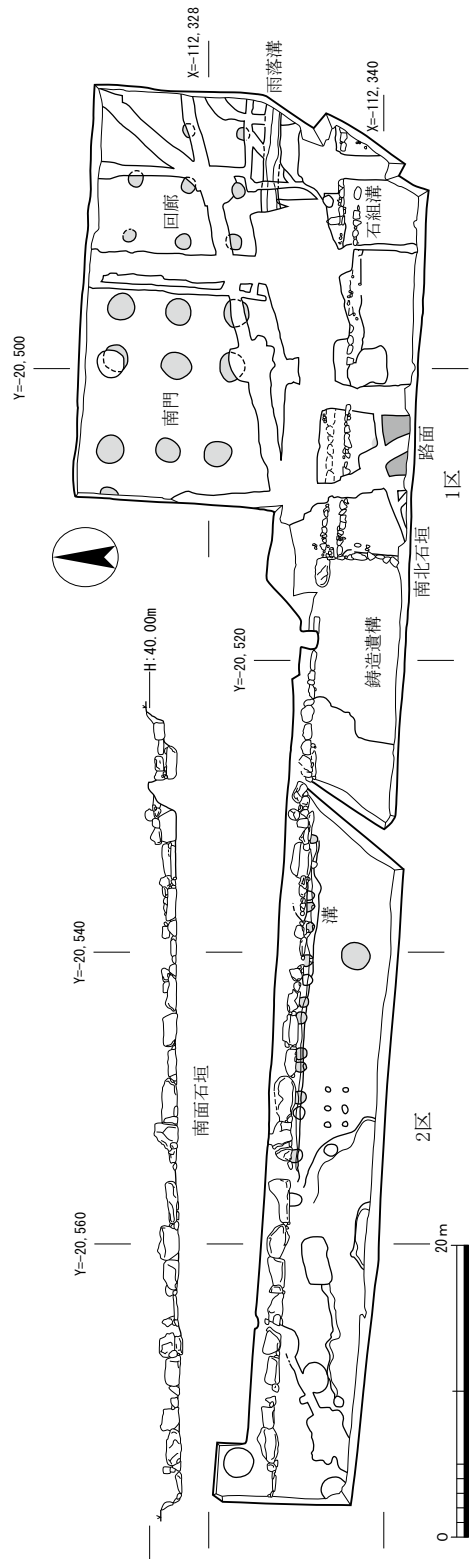


図83 1・2区遺構平面図 (1:500)

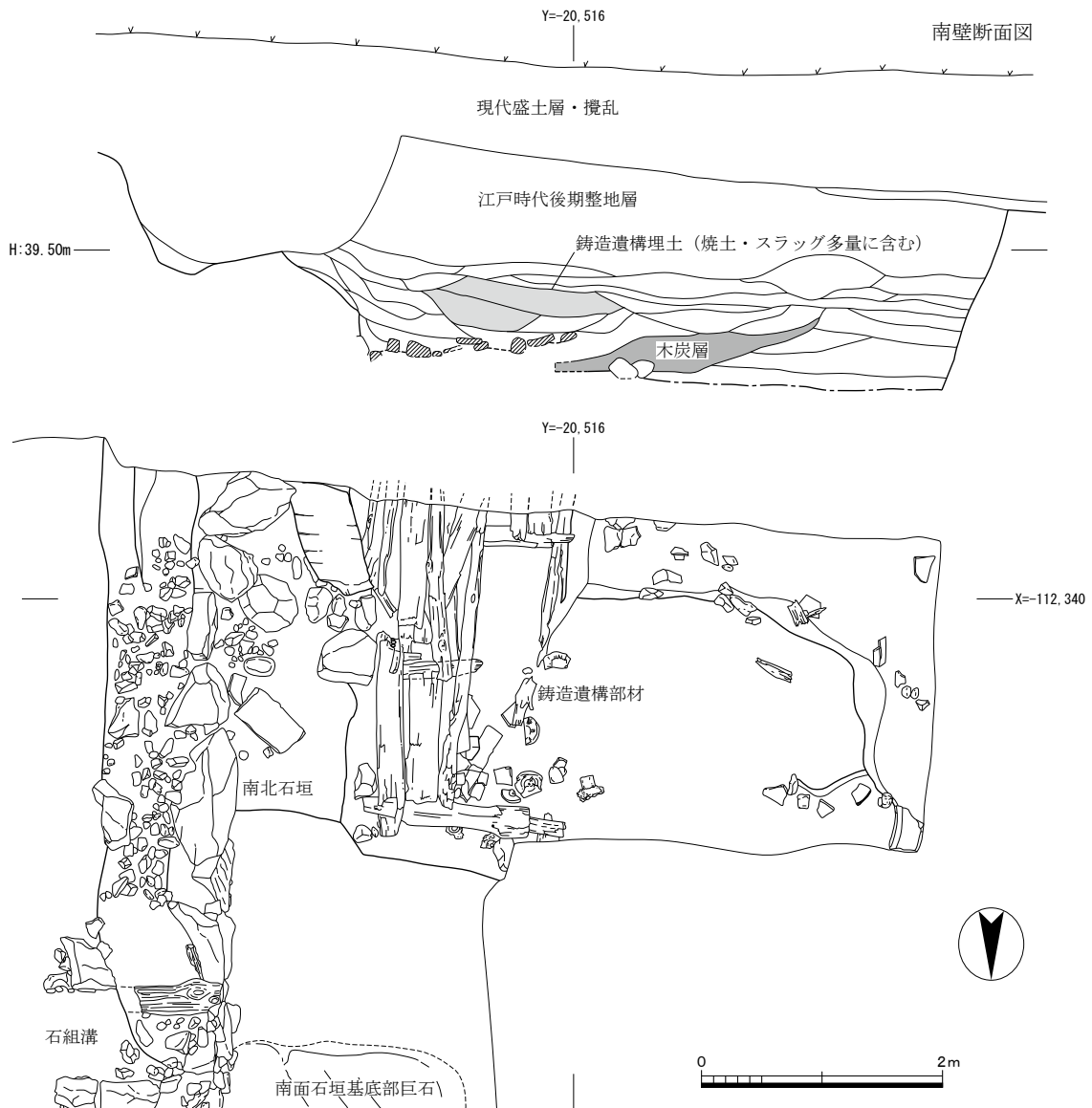


図84 1区铸造遺構実測図 (1:60)

せて渡すか、あるいはホゾで生まれ、さらに数箇所を銅釘で固定していた。南側は調査区外に延長するため、規模は不明であるが、埋土の堆積状況と断面観察から、東西は4mほどの規模であったと推定する。部材の上層は炭と焼土を多量に含む土で埋まり、埋土からは多量の金属滓(スラッグ)が出土した。部材の下は一部平瓦を敷き、その下層には細かい木炭が詰まる。この木炭層は遺構よりさらに西へ広がっていた。これらのことから、この遺構は铸造に関係すると考えられ、その規模と形状から梵鐘など大型铸造品の铸型を設置する定盤の基礎部分に相当する可能性がある。定盤は残存していなかったが、部材の構造は東大寺戒壇院出土の梵鐘铸造遺構とよく似ている。さらに当遺構の立地する地点は南北石垣に接し、石垣を境に一段段差があり、铸造過程のなかで設置した铸型の上から溶金を流し込む際、この段差を利用したのかもしれない。またここから西へ向かって緩やかに傾斜していることも、铸造時に排出する炭や灰を掻き出すのに適していたであろう。

埋土からは多量のフィゴの羽口とスラッグ、このほか鉄・銅釘が数本と土器小片が出土した。

しかし鑄型や溶解炉の破片などの鑄造に係る遺物は1点も確認していない。部材の下に堆積した木炭層は、礫もほとんど含まず遺物も出土しなかったことから、防湿のための工夫と考えられる。なお部材にはマツ、ヒノキ、スギ材を用いている。

2区 基本的な層序は、博物館新館建設時の積土層が厚さ0.7～2.5 m、近代積土層が厚さ0.9～1.0 m、方広寺造営時の積土を含む近世積土層が厚さ0.4～1.7 m、現地表下2.4～2.7 mで地山に達する。調査区西寄り旧地形が南西に低くなっている。また方広寺造営後は、湧水のため、石垣南側の土層が湿地状の堆積となっていて、南東部では礫や瓦を敷き詰めて整地が行われている。方広寺の瓦や石塔も見受けられる。遺構は、現存する方広寺石塁の延長にあたる石垣や溝・柱穴を検出した。

石垣 調査区の西端から東端まで48 mにわたって検出、西側は調査区外に延長している。石垣は1段あるいは2段目まで遺存しており、1段目に使用した巨石は隙間を埋める小さな石を除くと20石あり、大きさは幅約1.8～2.7 m、高さ0.5～1.6 m、厚さは0.6～1.5 mである。2段目は幅0.5～1 m、高さ0.4～0.7 mと1段目より小振りな石を用いている。また1段目の石には石割り痕（長さ3～7 cm、幅5～14 cm、深さ2～9 cm）が残るものが多く、道具を使って表面を調整している石もある。使用している石の種類は、ほとんどが石英斑岩・花崗閃緑岩・黒雲母花崗岩で、他にフォルムフェルスなどがある。裏込めには礫とともに石塔・石仏・石碑類が多数出土している。

溝 調査区の東端から石垣に伴う溝を検出した。検出面での規模は幅0.5～1 m、深さ約0.2 mで、調査区中央あたりまで確認しており、西へ連続するかどうかは不明である。排水のために造られたもので、底部に炭の混入した土が堆積していた。桃山時代から江戸時代の遺物が出土している。

柱穴 溝の下層から検出した14基の柱穴は石垣の石の際に掘られ、約1～2 m間隔に2～3基がまとまって並んでいる。規模は直径0.5～0.8 m、深さ0.2～0.5 mあり、根石を据えるだけのものや穴の周囲に10～25 cmの石が多数入るものがあり、大仏瓦が混入している柱穴もある。これらの柱穴は石垣成立後の事業のためのものと考えられる。調査区中央では1間（約1.2 m）×2間の建物を検出した。

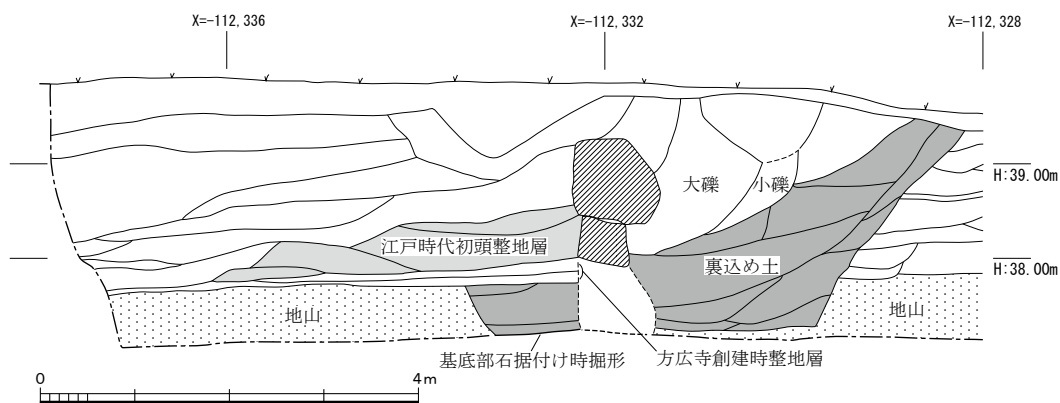


図85 2区石垣断ち割り断面図 (1:80)

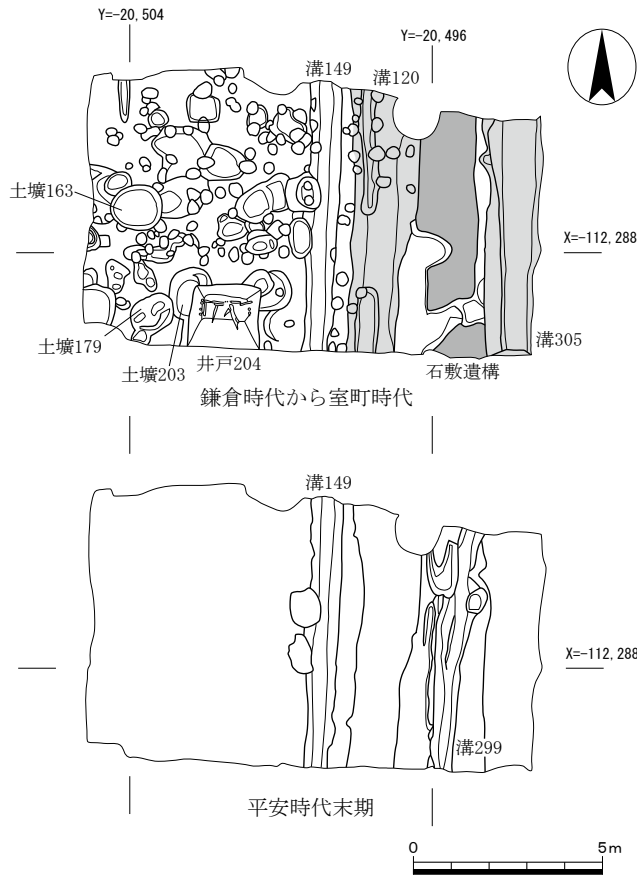


図86 4区遺構平面図(1:200)

また、調査区西壁沿いを南北に断ち割り、石垣の裏込めの状態を観察した。残存状態は非常に良く、石垣の構築方法がよくわかる。まず1段目を据えるために地山を深さ0.4～0.5m、幅3.4mを布掘りし、石垣裏側に土盛りを行う。次に布掘りの上に径15～25cmの根石を敷き、石を据えて、石と土盛りの間に土を入れる。その上から小礫を入れ、石の裏側には大礫を詰めている。小礫と大礫の層には石のみで埋土は含んでいない。

4区 基本的な層序は、博物館新館建設時の積土層が厚さ0.7m、方広寺整地層が厚さ0.6～0.7m、中世遺物包含層が厚さ0.1～0.2mあり、地表下1.4mで地山となる。特に4区では、鑄造に使われたと考えられる多量の砂・焼土・銅滓が方広寺の整地に用いられ、その下層

で溝・柱穴・土塙・石敷遺構・井戸・埋甕などの遺構を検出した。

桃山時代から江戸時代 調査区中央西寄りの方広寺境内の路面と考えられる小礫を敷いた面を検出した。1区の南側で検出した路面と同時期のものと考えられるが、検出面は1区より0.5mほど高くなっている。

鎌倉時代から室町時代 溝・柱穴・土塙・石敷遺構・井戸・埋甕などを検出した。溝120は規模は幅1.7～2.0m、深さ0.2～0.3m、溝305は西肩口から幅1.5m以上、深さ0.7mのともに室町時代後期の南北溝で、調査区外に延長する。中央から西部では鎌倉時代後半から室町時代前期の柱穴を多数検出した。素掘りと根石を据えるものがあるが、建物や柵の復元はできない。また西壁際からは須恵器の甕を埋めた鎌倉時代後半の埋甕遺構を検出した。掘形の規模は幅0.6m、高さ0.7～0.8mあり、甕は口径約35cm、高さ約60cmである。甕の中からは特に顕著な遺物は出土せず、埋土と共に土師器などが出土したのみである。土塙179は長径1.2m～短径0.9m、深さ約0.2mで鎌倉時代後期の遺物が出土した。土塙163は長径1.4m～短径1.2m、深さ約0.1mで鎌倉時代中頃



図87 4区埋甕遺構(西から)

は長径1.4m～短径1.2m、深さ約0.1mで鎌倉時代中頃

から後半の遺物が出土した。土壌 203 はそれらより古い鎌倉時代前半の遺構で、規模は長径 1.4 m～短径 1.1 m、深さ約 0.4 m あり。井戸 204 は調査区南端で検出した鎌倉時代の方形縦板組み井戸で、土壌 203 よりやや新しい遺構である。木枠の規模は東西の一边が約 1.0 m で、南北方向の横材はそれぞれ調査区外南に延長している。また、鎌倉時代の南北方向の石敷き遺構とそれに対応すると考えられる溝 149 を検出した。規模は石敷き遺構が幅 1.3～1.5 m で 2 時期あり、溝は幅 0.6～0.8 m、深さ 0.25 m である。溝 149 から平安時代末期から鎌倉時代前半の遺物が出土している。

平安時代末期 石敷遺構の下層から溝 299 を検出した。南北溝で、規模は幅 0.7～0.8 m、深さ 0.35 m で、埋土からは溝 149 の遺物よりやや古い平安時代末期の遺物が出土している。溝 299 と溝 149 は成立時期がほぼ同時期であるが、溝 299 は石敷遺構が造られる際に埋められている。

7区東部 基本的な層序は、博物館新館建設時の積土層が厚さ 0.7～0.8 m、方広寺の整地層が厚さ 0.1～0.5 m、中世遺物包含層が厚さ 0.4 m あり、現地表下 1.2～1.9 m で地山となり、旧地形は西に低くなっている。中央より東は上面が削平されているため地山の直上 5 cm で博物館新館建設時の積土層となる。東部では溝・石敷遺構・柱穴・土壌を検出した。

鎌倉時代から室町時代 溝 14・溝 15 は 4 区の溝 120・溝 305 に連続する室町時代の南北溝で、北は調査区外へ延長する。規模は溝 14 が幅 1.4 m、深さ 0.2 m、溝 15 は幅 2.5 m、深さ 0.8 m あり。石敷き遺構も 4 区で検出した南北方向の石敷き遺構に連続し、調査区の北へ延長する。規模は上面で幅 0.8 m、底面で幅 1.5 m、地山を掘り込んで小礫が敷き詰められている。一方、4 区で検出した溝 299 に連続する溝は 7 区では確認できなかった。調査区の東側では鎌倉時代から室町時代の柱穴・土壌を検出した。

平安時代末期 調査区の西端で検出した溝 26 は 4 区の南北溝 149 に連続し、北は調査区外へ延長する。検出面の規模は幅 0.7 m、深さ 0.1 m で、平安時代末期に成立したと考えられる。

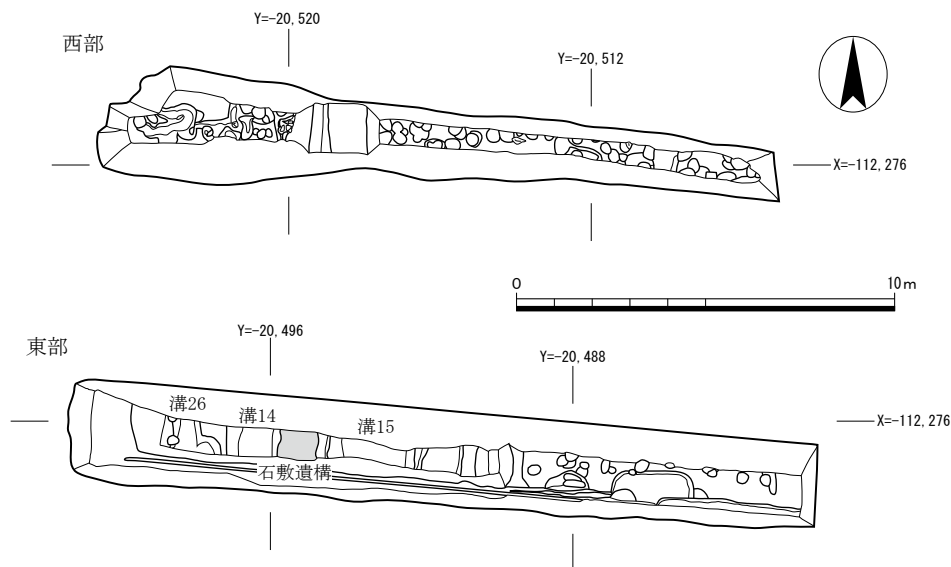


図 88 7区遺構平面図 (1:200)

7区西部 基本的な層序は、博物館新館建設時の積土層が厚さ0.8～0.9m、近世積土層が厚さ0.1～0.2m、方広寺整地層が厚さ0.7～0.8m、中世遺物包含層が厚さ0.3～0.4mあり、現地表下1.2～2.2mで地山となり、旧地形は西に低くなっている。西部で室町時代から鎌倉時代と考えられる柱穴を多数検出している。素掘りや根石を据えるものがあるが、建物などの復元はできない。

8区 北から北部、中央部、南部と分ける。基本的な層序は、博物館新館建設時の積土層が厚さ0.4～0.5m、方広寺整地層が厚さ0.2～0.7mで北部は削平されている。中世遺物包含層が厚さ0.4～1.2mあり、現地表下1.2mで地山となる。柱穴・路面・溝・池状遺構・土壇などを検出した。

鎌倉時代から室町時代 北部、中央部、南部の西側で池状遺構を検出した。池状遺構の肩口から径20cm前後の玉石を用いて埋めた層を2層検出している。そのまま西に落ち込み、調査区西端では地山を0.8m掘り込んだ状態で南へ続いて調査区外へ延長する。堆積層が厚さ0.6～0.8m、その上層に埋めた層が厚さ0.3mある。この池状遺構や肩口からは室町時代の土器類が出土している。径1cm前後の小礫を敷き詰めた路面を南部と中央部で検出した。検出面での規模は南部で幅1.3～1.4m、中央部で幅1.0～1.1mあり、南北方向の路面でそれぞれ調査区外へ延長している。中央部の路面は3面確認している。路面の東側では幅0.4～0.5mの轍と考えられる

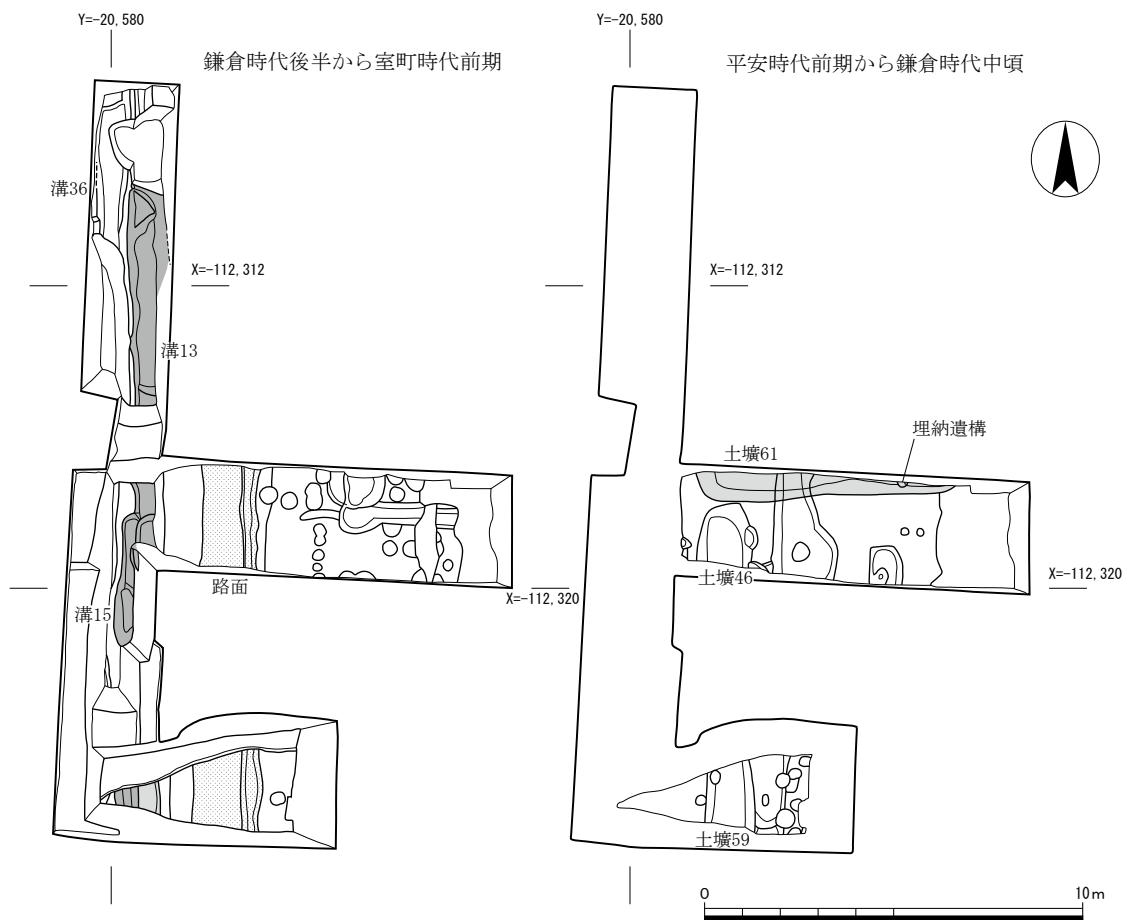


図 89 8区遺構平面図 (1:200)

窪みを検出した。また、溝は3条検出した。路面西側の埋め立て整地層の下層では鎌倉時代後半から室町時代初期の南北溝13・15を検出している。溝13は路面に伴う溝で、規模は幅0.6～0.8m、深さ約0.15～0.4mあり調査区北部から中央部、南部にかけて検出している。路面・溝13はともに調査区外へ延長する。溝15は規模が幅0.5～0.7m、深さ約0.15mあり、中央部から始まり南へ続き調査区外へ延長する。北部ではそれらよりやや古い南北溝36を検出している。規模は幅0.7m以上、深さ約0.25m、長さ3.9m以上で、北は調査区外へ延長し南は池状遺構の肩口に切られている。中央部・南部では鎌倉時代の柱穴を検出した。根石を据えるものもあるが建物などの復元はできない。土壌46・59は上層の路面の直下で検出、それぞれの規模は土壌46は幅約1m、長さ1.5m以上、深さ約0.4mで南に延長する。土壌59は幅約1m、長さ1.5m以上、深さ約0.4mで、上層の路面の範囲と重なり南北に延長する。ともに鎌倉時代中頃以降の土器類が多く出土し、同一の遺構と考えられる。

平安時代前期 調査区中央部北壁付近で、平安時代前期の土師器皿が2枚重なった遺構を検出した。埋納遺構と考えられる。また、その下層から地山を切って土壌61を検出している。規模は東西6.8m以上、南北0.2～0.7m以上で北に延長し、深さ0.3～0.55mである。

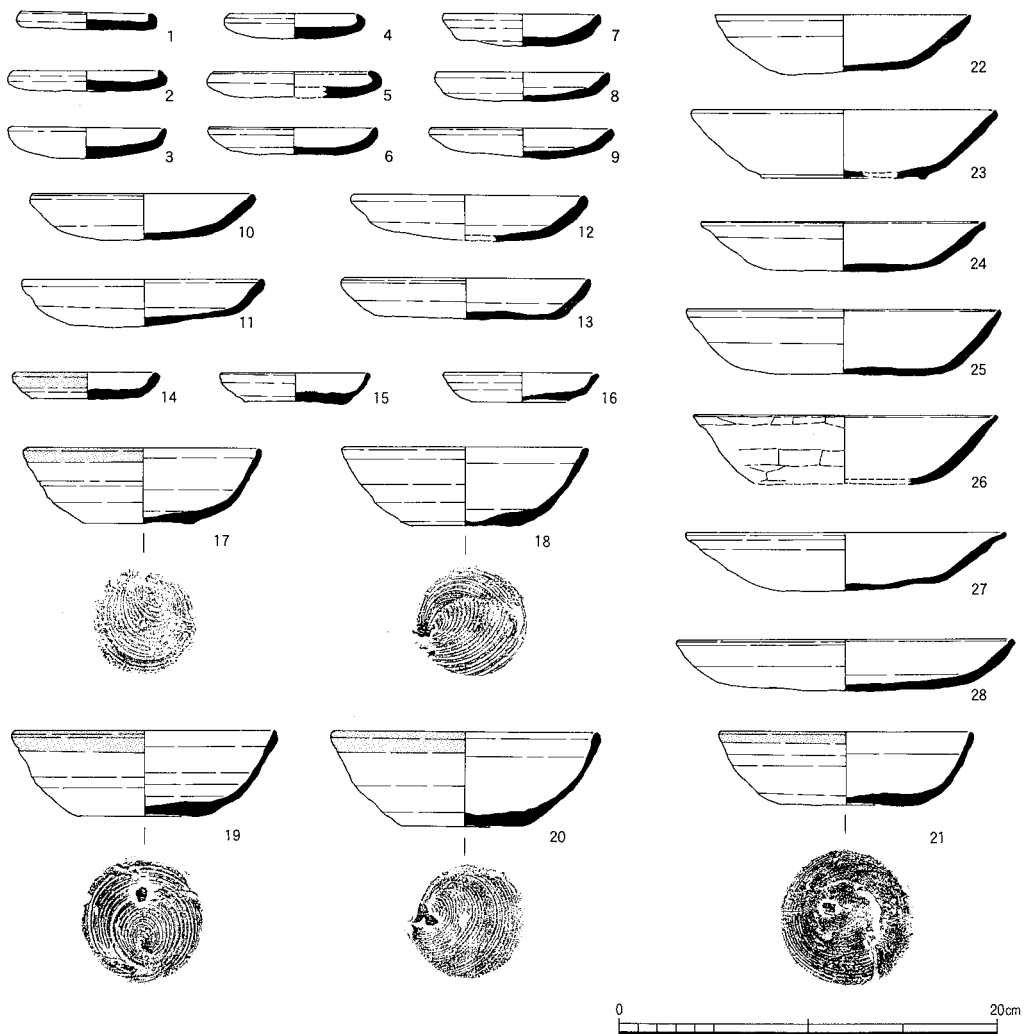


図90 8区出土土器実測図（土壌46：1～21 埋納遺構：22・23 土壌61：24・25 土壌61：24～28）（1：4）



図 91 2区出土銅製錫杖頭部

遺物 遺物は整理箱に 302 箱が出土した。方広寺の瓦類が多く他に、土器・木製品・金属製品・鑄型・鞆の羽口・鉾滓などがあり、ほかに石製品 101 点出土した。

江戸時代から桃山時代の遺物は 1 区、2 区から出土した土師器、須恵器、焼締陶器、染付、施釉陶器、輸入陶磁器などがあり、4 区の方広寺整地層から唐津の椀が出土している。瓦類は方広寺の大仏殿に葺かれたと考えられる大型瓦などが大部分を占める。大型瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、平瓦でその大きさは幅 26 cm、長さ 50 cm、厚さ 4 cm ほどである。軒平瓦の瓦当は桐文が多く「五七の桐」「五三の桐」などがあり、花や葉も形状が異なるもの、両端に唐草を配するものなど多種に

のぼる。軒丸瓦は桐文や巴文がある。また刻印瓦も多くあり「大工」「大」「山」「五」「上」「吉」「大一」などの文字や記号が約 33 種ある。石製品は石垣周辺から裏込めに使われていた石塔、石仏、石碑など計 101 点出土している。石仏の多くは破碎され、磨滅しているものも多い。石塔は一石からなる五輪塔や、水輪と火輪が一石で造られているもの、五輪塔の各部位などがそれぞれ出土している。金属類は石垣裏込めの間からは銅製の錫杖頭部が、石垣周辺や方広寺整地層からは楔や銭が出土した。4 区では方広寺の整地層から銅銭や金属片が出土している。また方広寺の整地層から出土した鑄型の破片がある。かなり大きな鑄型で方広寺の大型製品を鑄造したと考えられる。鑄造遺構からは鞆の羽口・鉾滓が出土している。

室町時代の遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦などがある。各調査区の遺物包含層や各調査区の溝、柱穴、8 区の池状遺構や肩口から出土した。李朝の象嵌青磁の破片が池状遺構から出土している。

鎌倉時代の遺物は土師器、瓦器、焼締陶器、古瀬戸、輸入陶磁器、瓦、銭貨、木組み井戸枠などが、各調査区の遺物包含層や遺構から出土した。4 区の埋甕遺構からは東播系の須恵器甕が出土した。8 区の土壌 46 からは土師器(図 90-1~13)と共に備前系の軟質須恵器の小皿・椀(14~21)がまとまって出土した。

平安時代末期の土器類は、4 区溝 149・299 から土師器、瓦器、瓦が、白色土器は溝 299 から出土している。平安時代前期の土器類は 8 区の埋納遺構から土師器皿(22・23)が 2 枚、土壌 61 から土師器(24~28)、須恵器などが出土している。

小結 今回の発掘調査では、新館南側の調査区で、方広寺の石塁の延長にあたる南面の石垣や南門、それに取り付く回廊の根固めなど、方広寺に関係する遺構を多く検出した。このことにより、方広寺の南面石垣や南門付近の様子、境内の規模など多くの資料を得た。また南西部に東西方向の南面石垣が現存しているものの、その延長がどうなっているのか、これまで方広寺を描いた絵画資料では不明であった。調査の結果、南面石垣は南門付近で南に曲がり延長し、これより東は

創建当時から石垣がなかったことを確認できた。石垣は1区・2区合わせて東西約65m確認し、現存する石垣も含めると128mになる。

また、南門は絵画資料に描かれている四足門より格の高い八足門、回廊は単廊ではなく複廊であることがわかった。文献資料によると、秀吉が方広寺を創建した当初の寺域に廻らせた築地塀は慶長元年（1596）の地震で崩壊してしまい、慶長五年（1600）に秀頼が再建した際、回廊としたとされる。調査では築地塀の痕跡は確認していないが、回廊は秀頼の再建時のものと考えている。また調査地点の南には、現在も蓮華王院の南大門があり、蓮華王院の西・南に現存する「太閤塀」は秀頼が慶長四年（1599）に築いたものである。検出した南門は蓮華王院南大門の南北線上に並び、蓮華王院周辺を含めた方広寺再建に伴う仕事として、南門と回廊が築かれたと考えられる。石垣が南に曲がる西側で検出した鑄造遺構は、遺構の立地する整地層との関係などから、方広寺創建後間もない時期のものといえる。さらに南面石垣前を大規模に整地するような事業を行ったのは秀頼再建時と推定でき、その時期は慶長五年（1600）から大仏の完成した同十七年（1612）頃に限定される。この間、方広寺に関する多くの銅や鉄製品が製造されており、今回の鑄造遺構の検出で、生産が寺に隣接する調査区付近で行われていたことを示唆することができた。方広寺に関する大型鑄造品として、現地で鑄造する大仏とは別に、慶長十年（1614）に鑄造された「国家安康」銘の梵鐘が有名である。絵図などから鐘樓は寺の南西部にあったことがわかり、調査地点に近接していたと推定できる。検出した鑄造遺構は規模や構造から大型製品を造ったものと考えられ、梵鐘を鑄造した可能性もある。しかしこのほかの鑄造に関連する溶解炉、作業場などは未確認で、さらに鑄型も確認していないことから、鑄造した製品の内容は断定できない。また、南面する石垣が南に曲がる地点より西側は、江戸時代後期（18世紀代）に一部埋められ、石組溝に造り替えられている。

4区、7区の一部では、鑄造に使われた多量の砂・焼土・銅滓などを埋めて方広寺の整地層としているのを確認した。鑄造遺構は検出されなかったが、細かい鉍滓が多量に出土していることなどから、1区とは別にこの近くに鑄造遺構が存在したと思われる。

鎌倉時代の各地区から検出した多くの遺構は六波羅政庁との関係が考えられる。とくに東播系の甕や備前系軟質須恵器などがこの地に流通していたことは興味深い。平安時代後期の遺構では、4区の溝2条が挙げられるが、法住寺殿北殿に関するものか否かは不明である。

また平安時代前期の遺構は住居と関係する遺構ではないが、この付近の調査が進めば、藤原為光が法住寺を建立する以前のこの辺りの様子が解明できるであろう。

（田中利津子・近藤知子・大立目 一）

23 山科本願寺跡 (図版2-4)

経過 調査の位置は、山科区西野左義長町23-1・23-4で、山科本願寺全体では南西のコーナーあたりに、敷地面積は619.17㎡であった。現状は竹林となっていた。遺構は土塁とこれに付属する堀、土塁を貫通する石組の暗渠が対象である。付近では2回の調査が行われており、寺内町の一部が検出されている。

遺構・遺物 土塁は東西方向と南北方向に屈曲する部分にあたる。その構造は、東西方向が先に造成され、その後に南北方向が造成された

ことが断面観察によって確認できた。土塁は、砂礫を核とした基底部に南から北へ砂礫と粘土を交互に積み上げた堆積が認められた。完全な版築とはなっておらず、粗雑ともみられる積み方といえよう。堀は、地山の堅い面まで1mほど掘り込んで、湧水層に達していた。底部の泥土層から、江戸時代の陶器片が少量出土した。本願寺が焼失した後、堀が「オチリ池」として改修され、用水に利用されていたことがわかる。本願寺内部から堀の西岸へ水を排出したと思われる石組暗渠は、石の周囲を粘土で巻いた構造となっており、その機能は現在にまで保たれていた。暗渠の底部には3cmほどの灰と焼土が堆積していた。また、地表下2m下に焼土の入る土壌があり、これを地山土で整地しており、寺内で最も低いこの地区に盛り土が行われ、防御機能を補完していたことも判明した。

小結 今回の調査では、寺内町からの水を排出する暗渠施設、および本願寺の南西端の防御施設である土塁と堀を明らかにすることができた。 (吉村正親)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成10年度1999年報告

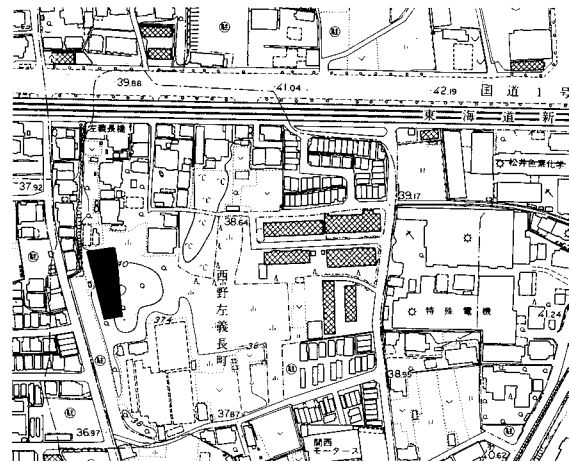


図92 調査位置図 (1:5,000)



図93 暗渠 (北西から)



図94 土塁 (北から)

24 大藪遺跡 (図版1・46～50)

経過 今回の調査は、街路建設工事(向日町上鳥羽線)に伴うものである。この周辺は、縄文時代から室町時代に至る中久世遺跡とその南東の大藪遺跡の範囲に含まれ、また中世居館の下久世城跡推定地にも近いことから発掘調査を実施することとなった。道路は国道171号線から東の桂川方面へ延びる予定であるため長大な調査地となることが予想された。そのため、調査成果を整理する都合上、予定地を現有の道路や水路を目安に区切り、アルファベット順に地区名をつけ、各地区内を分割して調査する場合は地区名の後にアラビア数字で調査番号をつけた。

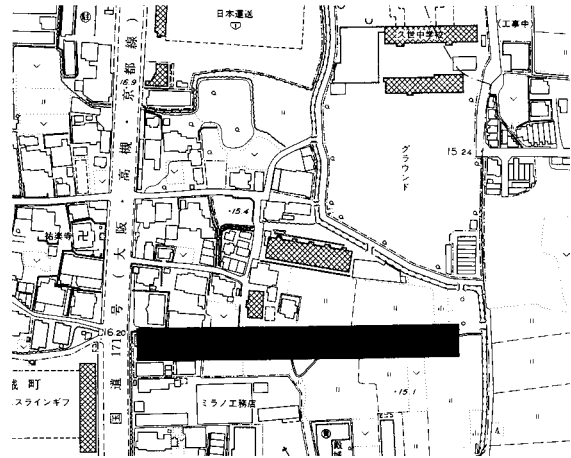


図95 調査位置図 (1:5,000)

今年度は171号線から東へ約230m付近にある南北方向の水路までを対象地とし、これをA区とした。道路施設付帯工事の進捗状況とあわせて1～6区までの調査区を設定し(図96)、順次発掘調査を実施した。なお、この調査に先行して道路の側溝部分を調査しており、これもA区に含めている。

遺構 当地は、調査前は水田で、基本層序は耕作土層直下に黄褐色砂泥層(10YR5/6・地山)があり、遺構の大半はこの上面で検出した。検出した主な遺構には、弥生時代後期、長岡京期、室町時代のものがあり、その他に平安時代後期の遺構と近世の遺構が少数存在する。以下、各時代ごとに遺構を概説する。

弥生時代後期 遺構は1・2・3・5区で検出している。

1区の東端では南流する河川の西岸の一部が認められ、これは平安時代まで存続する。また、1区のほぼ中央には北から南東方向へ湾曲しながら延びる溝(SD1)と、南西方向へ湾曲しながら延びる溝(SD2)があり、SD2の西側では、隅丸方形の大型竪穴住居(SH4)と円形の竪穴住居(SH5)、大型竪穴住居に切られる円形の竪穴住居(SH6)を検出した。さらにこれらの竪穴住居の東側、および西側の3区では方形周溝墓(SX3・SX8)を検出している。こうした状況から竪穴住居のある部分は集落、SD2は集落の周りを取り囲む環濠、方形周溝墓が存在する部分は墓域と考えることができる。以下、大型竪穴住居SH4の検出状況について概説する。

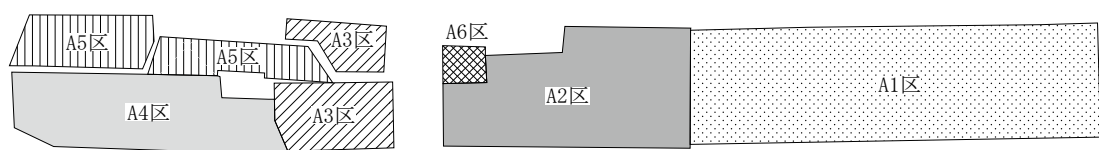


図96 調査区配置図

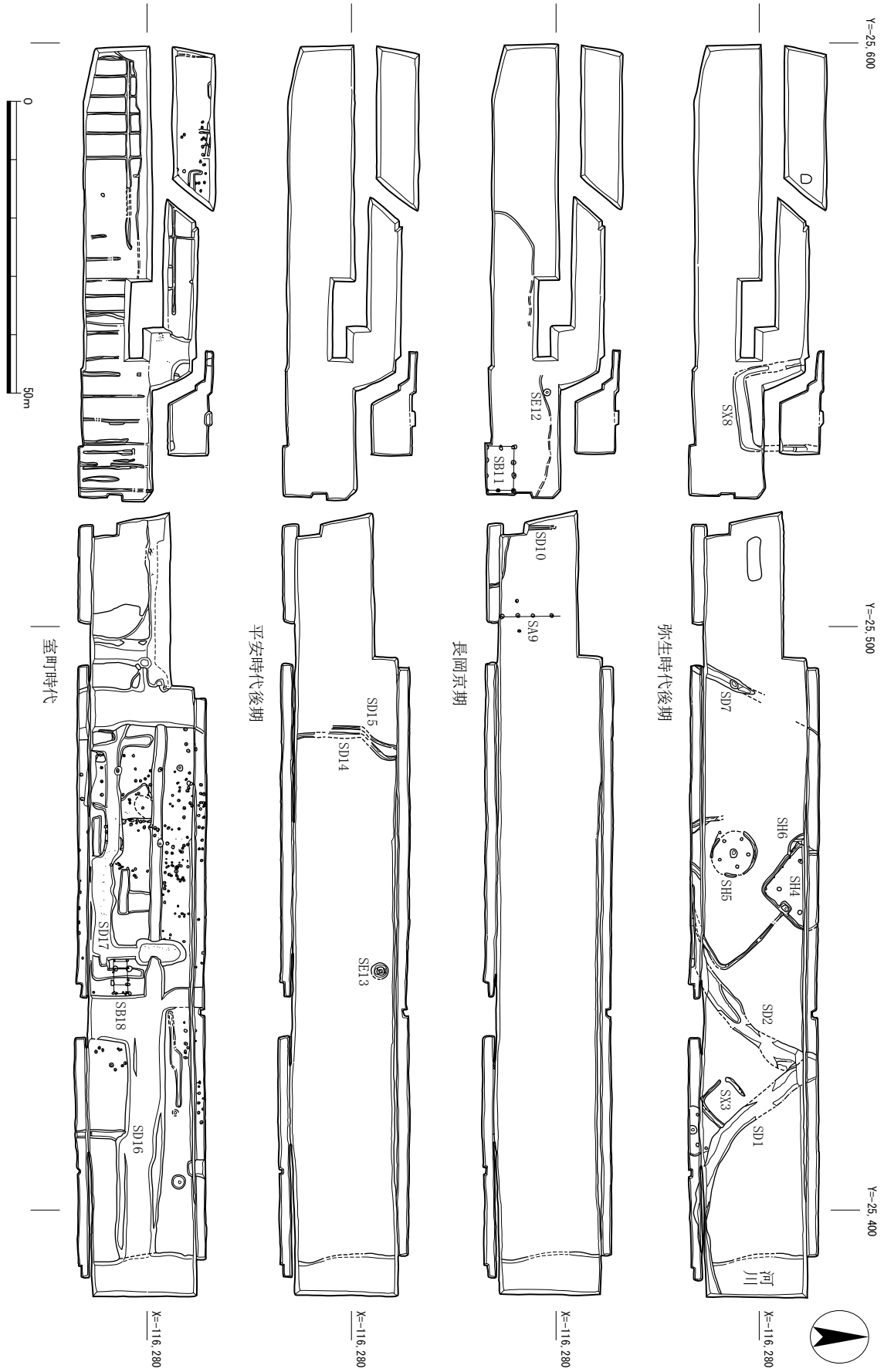


図 97 遺構平面図 (1:1000)

SH4は一辺の長さが約11m、床面積120㎡に及ぶ極めて大型の竪穴住居である。支柱穴は4本と考えられ、検出した3箇所の柱穴のうち2箇所には、直径30cmを越える支柱の柱根が残存していた。壁際には側柱のものと考えられる柱列が認められることから、この竪穴住居は周囲に壁のある特殊な構造であると考えられる。また、住居の周囲にめぐる壁溝には埋め込まれた板材の一部が残存しており、壁面の崩れを防ぐために板を当てていた状況が確認できた。さらに南東辺のほぼ中央の壁際に土壌があり、その土壌からは溝が住居の外側に延びている。この溝は底に丸太を半裁にして内側を削り貫いた幅30cm、長さ約4mの木樋が埋め込まれていることから暗渠であると考えられる。

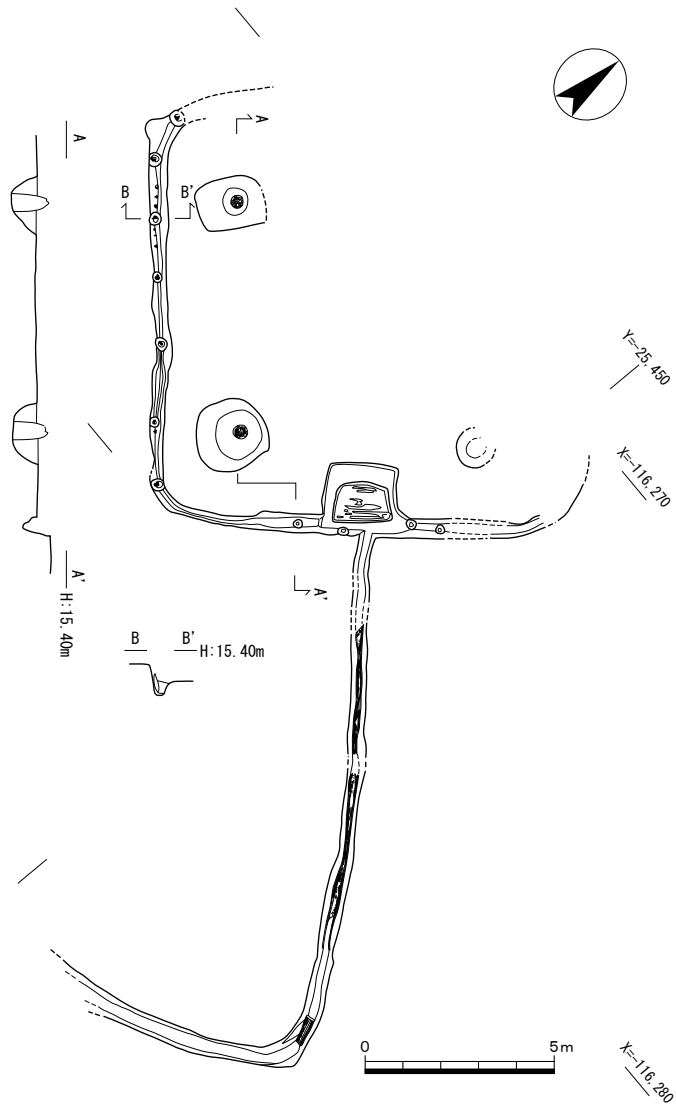


図98 SH4実測図(1:200)

SH4については、支柱穴の位置はそのままに、周囲を拡張している状況も確認することができた。

長岡京期 遺構は2・3・6区で検出した。

2区西端部では南北方向の柵列(SA9)を検出した。柱穴4箇所を確認し、間隔は各々約2.7mである。

3区では掘立柱建物(SB11)と井戸(SE12)を検出した。2区西端から4区東部にかけては北から南へ緩やかに傾斜するが、これを灰白色泥砂で整地しており、SB11はその上面で検出した。SB11は2間×3間の東西棟で、柱間間隔は2.4~2.7mである。SE12は掘形が円形で、内部には上側にほぼ同じ大きさの曲物を2段に、底には一回り小型の曲物を据える。埋土からは須恵器片耳壺・ミニチュア平瓶、櫛などが出土している。SB11の北西に位置する。

6区では南北溝(SD10)を検出した。幅0.8m、深さ0.2m

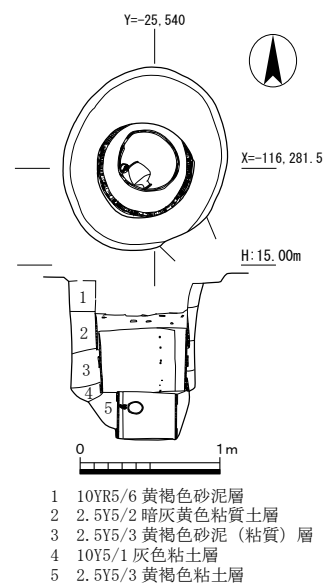


図99 SE12実測図(1:50)

の断面U字形で、北端は近世の堀に壊されるが、さらに北に続くと思われる。埋土は2層に分かれ、上層からは人面墨書土器の破片が出土した。この溝については、建物や柵列などとの位置関係から道路の側溝の可能性もある。

平安時代後期 1区で井戸、2区で溝2条を検出しているが、この他に平安時代として明確な遺構はない。

井戸（S E 13）は掘形が円形で、底は播鉢状に狭くなる。底には横桟と思われる丸太材がコの字に残存し、その中央に直径50 cmの曲物を据えている。遺存状況は極めて悪く、他に縦板の痕跡などは認められなかった。溝（S D 14・15）は2条がほぼ平行し、クランク状に向きを西寄りに変えながら2区中央付近を南流する。幅0.4～0.8 mで、調査区北端と南端での底面の比高差は約0.2 mである。

室町時代 遺構は1～6区のほぼ全体で検出しているが、特に1・2区に集中している。

1区のほぼ中央で東西方向の堀（S D 16）を検出した。この堀は1区で南側に屈曲して調査区外に延び、再び2区で北流して西へ屈曲し、東西方向となる。また、1区西部から2区東部にかけての南側には東西方向の堀（S D 17）があり、これは両端が北側に折れ曲がりそれぞれ調査区中央付近で途切れる。このS D 16とS D 17の間は幅6 mほどの空間となっており、そこに礎石建物（S B 18）がある。調査区の北西部には、掘立柱の柱穴や礎石が多くあり、復元できなかったが数棟の建物があったと考えられる。また、調査区東部やS D 16の北側にも、掘立柱建物や井戸などが整然と並んでいる。このような状況から、S D 16は外堀、S D 17は内堀、その間にある礎石建物（S B 18）は門と推定でき、居館の一部と考えられる。

また堀（S D 16）は、幾度か補修されながら使用され、近世以降は水路として、一部は現代に踏襲されている。

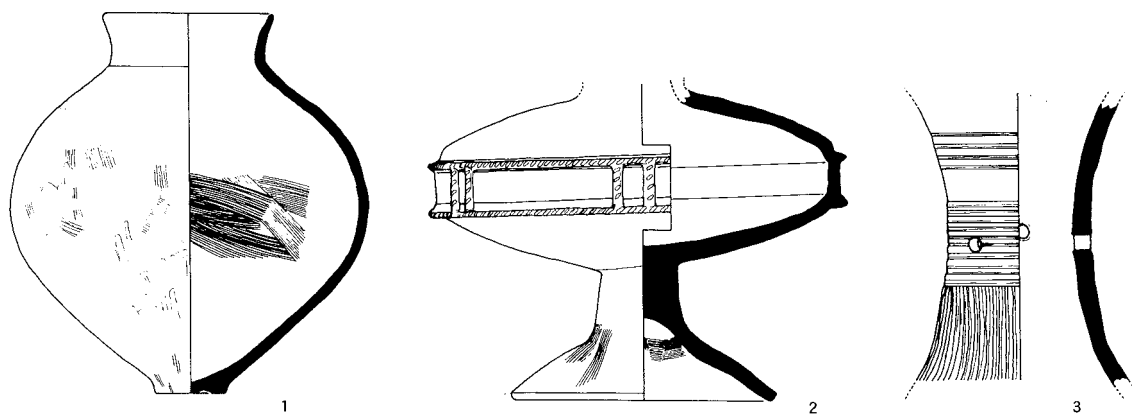
遺物 今回の調査では、弥生時代後期、長岡京期、平安時代後期、室町時代、近世の遺物が出土している。出土した遺物には土器類、瓦類、木製品などがあり、土器類が最も多いが、中世から近世にかけては木製品の出土量も多い。以下、時代ごとに概説する。

弥生時代 主に後期の土器類が竪穴住居、溝、方形周溝墓の埋土から出土している。特に方形周溝墓（S X 3）からは壺、器台（図100－1～3）が出土している。吉備系土器の影響を受けたと考えられる壺（2）が含まれており注目される。また、溝からは土器のほかに鋤などの木製品も出土している。このほかには、大型竪穴住居（S H 4）内の土壌から、ガラス小玉が2点出土している。

長岡京期 井戸、溝、柱穴、整地層から出土している。土器類（土師器・須恵器）が大半で、他に瓦類（軒平瓦・平瓦）、木製品、獣骨などがある。特に井戸（S E 12）からは、須恵器の壺とミニチュアの平瓶がほぼ完形で出土したほか、片耳壺・四耳壺・蓋、土師器皿・羽釜などが出土している（図100－4～12）。土器以外では櫛、馬の顎骨なども出土している。

室町時代 柱穴、井戸、堀、溝、土壌などの遺構から、土器類（土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁）などが多く出土しており、量的には最も多い。堀からは土師器、瓦器などが良好な状態で出土し

SX3 出土土器



SE12 出土土器

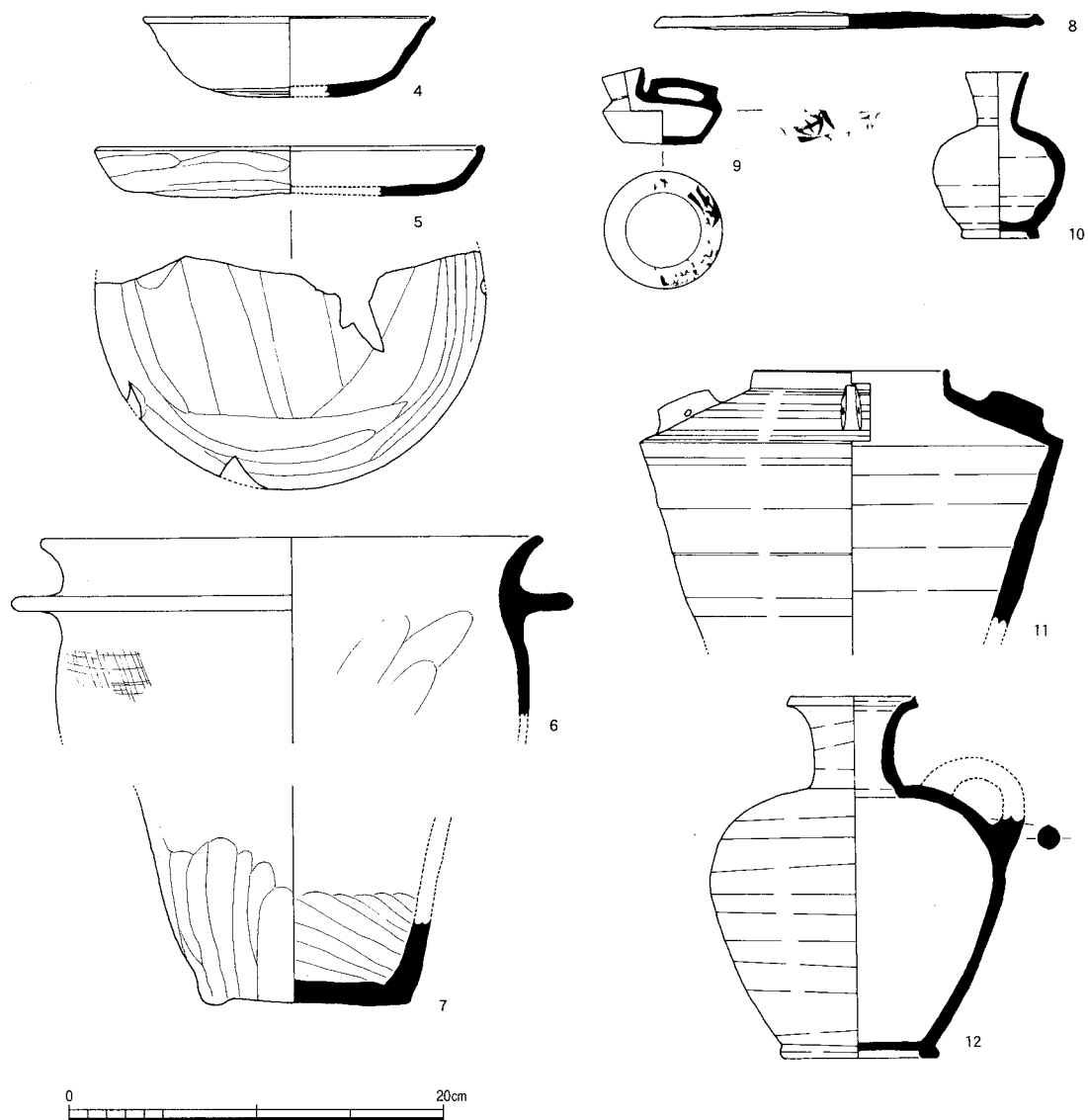


図100 SX3・SE12出土土器実測図(1:4)

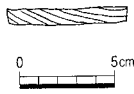
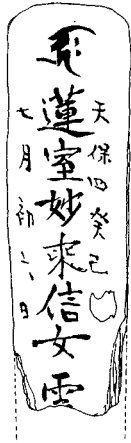


図 101 位牌実測図
(1:4)

ている。また堀や井戸からは、木製品（曲物・折敷）もかなり多く出土している。

近世 近世の遺物は井戸、溝、土壌などから出土しており、土器類（土師器・陶器・磁器・染付）、瓦類、木製品（下駄・杓・曲物・折敷・位牌（図101）・漆器）などがある。特に木製品は種類も多く、堀や土壌などからまとまって出土している。

小結 今回は道路施設関連の工事などと期間的に競合していたため、調査区を細かく設定しなければならないなど、多くの制約があった。しかし、おおむね全域を調査することができ、弥生時代後期、長岡京期、および室町時代の各遺構に関して大きな成果を得られた。

弥生時代の遺構は、環濠集落と墓域の一部と推定できる遺構を検出しており、当時の集落の状況を解明する重要な資料である。中でも、一辺11mを越える大型の竪穴住居は、周囲に壁が存在すると考えられることや、住居内の土壌から暗渠の排水溝が延びるなど、通常の住居とは異なった特殊な構造を持つ。また、ガラス小玉が出土しているが、土器類などの遺物がほとんど残存しない。この建物の性格は不明だが、いずれにしても一般の住居とは異なる性格を想定する必要がある。

長岡京期の遺構は、建物、井戸、溝、柵列を検出している。近年の研究で、長岡京の条坊が2町分北へずれる案が提唱されており、それによると当調査区も長岡京城に含まれる可能性がある。今回長岡京期の遺構が検出されたことで、当該期の条坊施工状況などを明確にする上での新たな視点が得られた。したがって、周辺の調査にあたっては今後注意が必要である。

室町時代の遺構は、建物や井戸が堀に区画されて整然と並んでいる様相が確認できた。こうした状況から、これらの遺構は堀に囲まれた居館の一部であると推測できる。また、堀は調査区内でほぼ連続して検出され、その一部が、近世から現代に至る水路として踏襲され利用されていることもわかった。

調査地を含む殿城町周辺は、室町時代には東寺領に含まれる荘園が成立していたとされ、これまでの調査でも同時期の遺構が確認されている。今回検出した居館跡は外堀のほか内堀、門などを持つことから、外敵に対する防衛的な側面も考えられ、室町時代から戦国時代に続く往時の集落の変遷を考える上で興味深い遺構といえよう。下久世城については、なお不明な部分が多いが、今回の遺構や遺物の出土状況をみれば、それとの関連性がうかがえる内容ともいえる。今後の調査成果に期待したい。

（西大條 哲・出口 勲・吉崎 伸）

25 下三栖遺跡 (図版1)

経過 本調査は、1996年以來継続的に立会・発掘調査が行われている油小路通共同溝敷設工事に伴う事前調査である。調査地は宇治川北岸にあり、西側に国道1号、北側には府道大津淀線(大手筋通)、南側に外環状線などの主要幹線道路が走り、東側を東高瀬川、濠川などの河川が南流する。宇治川北岸域には、近代まで横大路沼と呼称された大きな湿地があったことが古地図から知られる。また周囲には、横大路三栖池田屋敷町・木下屋敷町・山城屋敷町などの

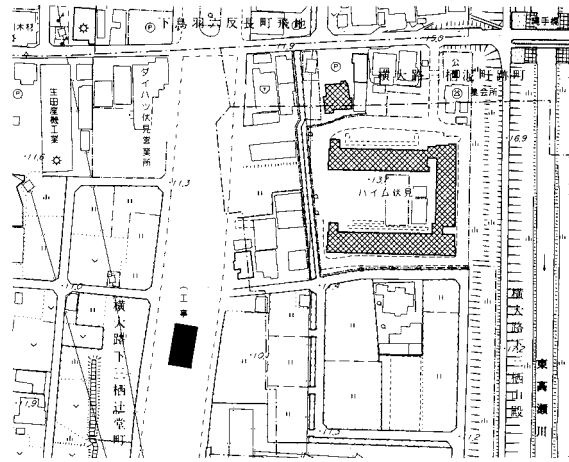


図102 調査位置図 (1:5,000)

近世大名屋敷の存在を示す町名や横大路下三栖山殿・城ノ前町・東ノ口などの中世城郭との関連も推測される町名を持つ集落が現存している。

これまでの調査で鎌倉時代とされる建物・井戸・溝、奈良時代の竪穴住居などの遺構が出土している。さらに、古墳時代に属する土師器や須恵器、弥生時代の土器類などの遺物が出土している。また中世城郭跡として登録されている下三栖城跡に隣接していることから、関連する遺構や遺物の出土も予想された。調査は重機を用いて盛土・耕作土層を排土し、中世の遺構面から調査を開始した。その結果、中世遺構面、平安時代遺構面を調査し、以下の遺構面と層については断面精査を主にした調査を実施し、飛鳥・奈良時代、古墳時代後期の遺構面を確認している。

遺構 遺跡の基盤をなす原地形は、河川の堆積作用によって形成された自然堤防状の微高地と自然河川の一部である。基本層序を調査区北部で代表させると、現代盛土層、近世・近代耕作土層、褐色砂泥層(鎌倉時代から近世初頭)、褐色泥砂層(平安時代)、黄褐色砂層(飛鳥・奈良時代)、褐色砂泥～泥砂層(古墳時代後期)である。それら以下の層は、河川による砂礫の堆積である。

第1面は、表土下0.8～1.1mの深さで検出している。この面で形成されている遺構には井戸、溝、柱穴、土壇、落込などがある。井戸1・2は調査区南部で検出された。井戸1は、横棧止め縦板組み井筒を持つ井戸で、底部に曲物が設置されていた。井戸2は、井筒は残存していなかったが、底部で曲物を検出している。両井戸ともに鎌倉時代に機能していたとみられるが、掘形からの出土遺物には時間差が認められ、井戸2が先行して設置されていたと考えられる。調査区南部で検出した東西方向に延びる溝4とした遺構は帯状の浅い窪みであり、東側は不明瞭である。溝としての機能は井戸1より西側に限られていたと考えており、成立時期は鎌倉時代である。この溝を境として南側が低くなっており、そのうちでは南東部落込8が最も低い。落込8は室町時代初めまで残存していた自然河川の痕跡と考えている。西壁際で落込9としたものも北側へ広がる窪地の一部と考えている。溝1～3および5は南北方向の溝群である。湾曲する溝5を除く溝1～3は、ほぼ真北方向を向く。出土遺物からみれば溝1・5は鎌倉時代から室町時代初頭に

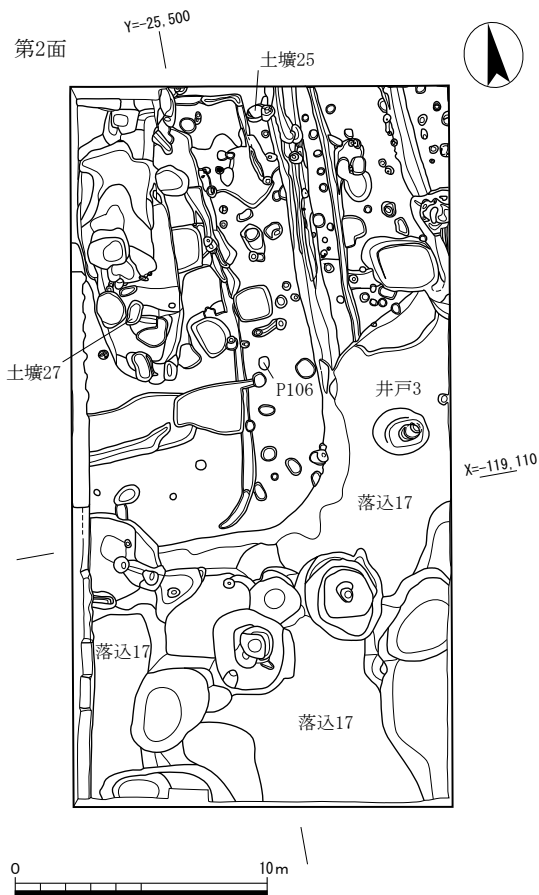
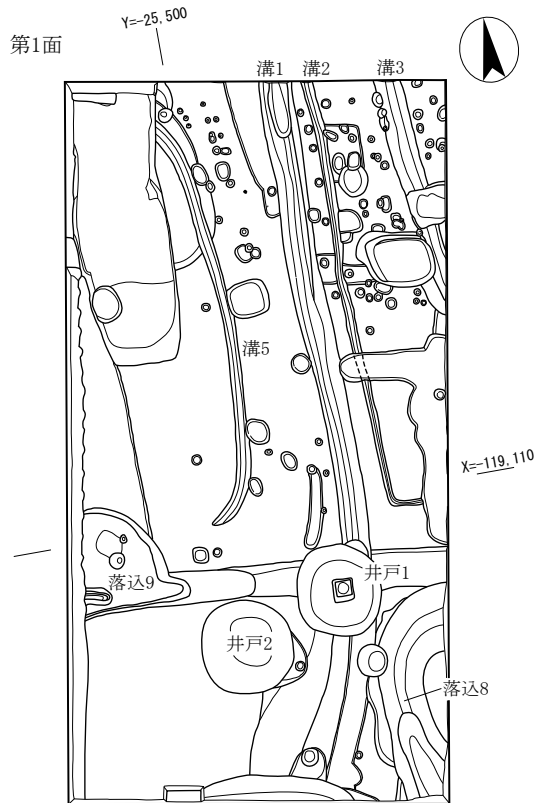


図 103 遺構平面図 (1:300)

は造られた可能性が高く、溝3は溝1に替わって新たに設置された同じ性格を持つ溝と考えられる。溝2・3の2条に関しては室町時代後半代に造られたものとみられる。これらの溝は耕作に伴ったものと考えられる。しかし、位置は所有者が異なる敷地の境界に設置されたものと考えられる。柱穴群は北部を中心に展開しており、東から北方向への広がりを示す。このように、居住と直接関連したとみられる遺構を多く検出している。他には噴砂を確認している。この砂の詰まる数条の溝状のものは、北西方向から南東方向に斜めに延びる。慶長年間にこの地域を襲った地震の痕跡とみられる。

第2面では、井戸、土壇、柱穴、落込など平安時代後半代のものを中心とした遺構を検出している。遺構面は平安時代以降に形成され、鎌倉時代前期までは存続したとみられる。遺構面が形成された初期には、中央部東半から南部にかけて、落込17とした自然河川の一部が残存している。しかし、平安時代中期には中央部東半は整地され、井戸3などの平安時代中期後半代の遺構が形成されている。

第2面で検出した遺構群は、井戸3や柱穴が多くあり、その大半は居住に関連するものと考えられる。第1面と同様に、これらの遺構群は集落の一部を形成していると推測される。なお、井戸3は上部が土壇に削除されており不明であるが、下部は残存していた。下部では径0.4～0.5mの曲物を2段据えている。平安時代中期の10世紀末から11世紀前半には設置されており、11世紀代のうちに埋没して機能を喪失したとみられる。

第3および第4面は、一部で面を検出しているが主に断面観察によって確認している。第3面は飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構面と

みられ、西隣の既調査地で竪穴住居などが検出され、第3面に連続するものと考えられる。今回の調査地でも竪穴住居やあるいは溝となる可能性が高い遺構を確認している。

第4面は、微高地側では地山上面であり、第3面同様に竪穴住居や土壇とみられる遺構を確認しており、遺物もまとまって出土している。確認できた遺構は、古墳時代後期の6世紀代を中心とするものである。

遺物 今回の発掘調査では、遺構および遺物包含層から弥生時代から近・現代までの各時期の遺物が出土している。出土遺物は、土器・陶磁器類が大半を占めているが、平安時代の瓦類の他、木製品、石製品、銭貨なども少数ながら出土している。

河川による堆積層とみられる砂礫層からは、弥生時代全般わたる土器片が出土している。古墳時代前半に比定できる土器片も少数出土しているが、混入品として出土したものである。これらの弥生土器や土師器類には、残存状態の良いものもあるが、角がとれて器表が磨滅しているものもみられ、流れ堆積した遺物と判断している。同時期の遺跡が北東方向の近地点に存在しているものと推測される。古墳時代後半期から飛鳥・奈良時代の土器類は、新しい時期の遺構や土層への混入品としても出土しているが、主に第4および第3面の竪穴住居とみられるものを含めた遺構からまとまって出土している。これらの土器類には土師器、須恵器の食器類(杯・皿・高杯など)、土師器の煮炊具(甕・甑など)、須恵器の貯蔵具(壺・甕など)がある。使用痕がみられる日常生活用具類が主体である。この時代幅におさまる土器群は、古墳時代後期の6世紀代に中心を持つ土器群と、飛鳥時代から奈良時代の7世紀後半から8世紀前半頃に位置する土器群は大きく2時期にわかれ、間に位置する土器類は少数の出土にとどまる。集落としての土地利用は6世紀代には始まるが一度途絶え、7世紀後半から8世紀前半代に再び集落としての土地利用があったものとみられよう。8世紀後半期以降には再び断絶している。このような古墳時代後半期から飛鳥・奈良時代にかけての土器類に類似した様相を持つものは、西側と北側に隣接する既調査地(平成8・9年度実施)や、500mほど南方に位置する既立会調査(平成8年度実施)でもまとまりを持った土器群が出土している。当地域には、両地点を含めた範囲内に同時期の遺跡が存在していたと理解すべきであろう。

8世紀後半代の遺物は、混入を含めて少数がみられる。平安時代前半期には、まとまって出土した土器類もみられ、混入として出土している例も少なくない。遺構に伴った遺物の出土量が増加をみせるのは、10世紀末から11世紀初頭以降の平安時代後半代である。11世紀代以降は、遺物量・遺構数とも増加傾向を示しつつ、14世紀代の室町時代始めまでは空白期がなく連続したものとして把握できる。この間、遺物出土量が増大するのは、13世紀から14世紀前半代の鎌倉時代中期から室町時代初頭である。14世紀後半代に入ると明確に減少傾向を示す。

平安時代後半代から室町時代初頭までの各時期の遺物は、井戸、溝、土壇、柱穴などの居住に係る遺構群から出土している。土師器や瓦器の煮炊具などには、煤が厚く付着しており、他の食器類や貯蔵具類を含めて生活用具類が主であるとみてよいであろう。11世紀前半代では、土師器(杯・皿・甕)、黒色土器(B類椀)、須恵器(鉢・甕)などが出土遺物の主要な位置を占

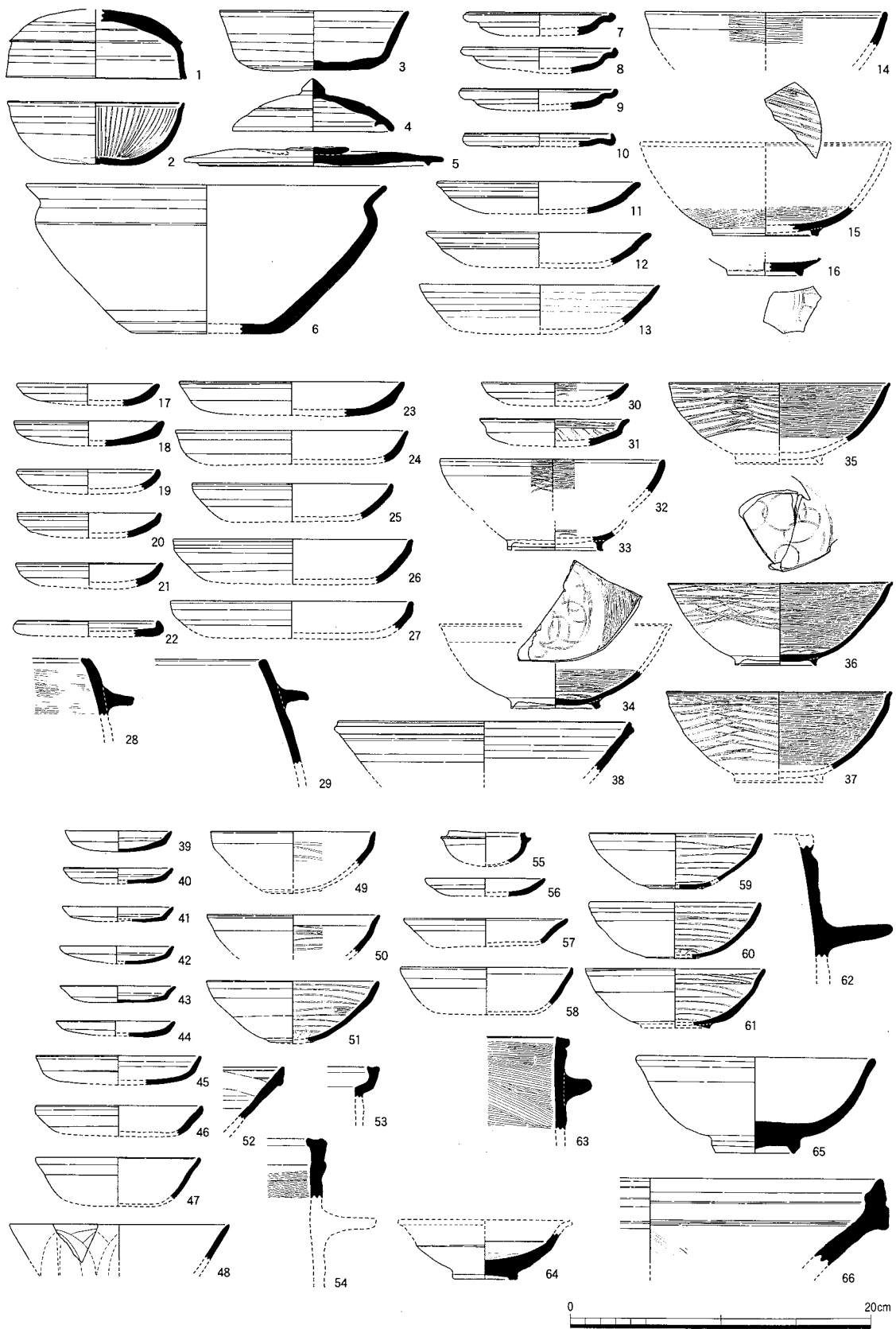


图104 遺物実測図(土壙27:1 褐色砂泥層:2・3 黄褐色砂泥層:4 第1遺構面直上:
 5・63・64 ピット106:6 井戸3:7~16 土壙25下層:17~38 落込8:39~54
 井戸1:55~62 溝3:65 溝1上面:66)(1:4)

めている。11世紀後半から12世紀代の平安時代後期に入ると、黒色土器B類碗はみられなくなり、替わって瓦器碗（皿も少数伴う）の出土例が多くなり、白磁碗などの輸入陶磁器類も少量ではあるが出土例がみられるようになる。瓦器碗は食器類では大きな位置を占めるようになっており、輸入陶磁器の少なさなどと共に京域内で一般的にみられる土器群との様相差を作り出している。この段階では数量的には土師器食器類を上回る例はないようである。

鎌倉時代の13世紀代は、土師器（皿・羽釜）、瓦器（碗・皿・羽釜・鍋・盤）、須恵器（鉢・甕）、焼締陶器（甕、常滑が主）などが主要な出土遺物となっており、出土量全体も多くなる。輸入品の白磁（碗）、青磁（碗）などが共伴出土する例もみられ、なかでも瓦器碗・鍋・釜は、出土量が大きく増加し、どの土器群でも量的に主体となっている。輸入陶磁器類の出土量は前代と変わらず少量にとどまっており、京域内との様相差は顕著になっている。このような土器様相は、出土量の減少が明確となる14世紀代後半代まで継続している。

室町時代の14世紀後半以降は、遺物出土量が大きく減少しているが、室町時代も後半期に入る15世紀後半から16世紀前半代の遺物は、溝内堆積土などからまとまって出土している。桃山時代から江戸時代初めの16世紀末から17世紀前半代に比定できる土器・陶磁器類が、溝最上層などから少量ずつではあるが出土している。両期以外の時期の遺物類はごく少数である。14世紀後半代の内には、居住地が移動し、既調査地を含めた当地域は耕作地化したものと考えられる。再び資料が大きく増加するのは、近代に入って以降で現代に近い時期である。

小結 今回実施した調査成果を述べる。古代以前、古墳時代後期の調査地の景観は、自然堤防の微高地に集落が形成されており、その集落の南側には北東から南東方向へ流れる河川の一部が存在していた。このことは、断面調査を主とした調査によって堅穴住居あるいは土壌と考えられる遺構を確認したことによる。河川からは、弥生時代から古墳時代前半期に属する遺物が出土している。この遺物は良好な状態のものを含みながらも磨滅して出土するものがあることから、調査地の北から北東方向の近辺に集落が存在したことを予想させる。

この調査地内で確認した古墳時代後期の集落は一時的に途絶え、再びこの地に集落を形成するのは飛鳥時代から奈良時代の7世紀後半から8世紀前半であったことが、遺構・遺物の出土状況から窺える。このことは、当調査地の西隣の調査でも同時期の堅穴住居が確認されていることからいえる。当地が、平安時代以前から集落としての土地利用があったことは明らかであるが、盛んに開発されたのは10世紀末から11世紀初頭以降の平安時代後半代から中世前半代である。井戸や土壌、ピットなどが多く検出され、また河川であった個所を整地して居住域や耕作地を拡大させる積極的な土地利用があったことが窺える。

平安時代後半代以降の遺物の出土傾向が示す特徴は、瓦器碗が食器類のなかに占める比率が高いことである。この特徴は輸入陶磁器の少なさと相まって、京域内との大きな様相差を示している。遺構に伴う遺物の出土傾向は、時期が降るにつれて出土量が増加し、鎌倉時代中期から室町時代初頭にピークを示し、室町時代前期の14世紀後半代からは明瞭な減少傾向を示している。

14世紀後半以後については、遺物の出土が減少してくる傾向からみれば、集落の中心地が移り、

本調査地および既調査地を含めた地域は耕作地化したものと考えらる。

今回の調査では、既調査で得られた成果に加え、これまで明確ではなかった弥生時代の集落が周辺に存在する可能性を示すことができ、一帯が弥生時代から断続的に人々の生活が営まれていたことが明らかになった。

この下三栖遺跡の調査は、これまで油小路通共同溝関係の調査のみであったが、今後は発掘調査対象地を周辺地域に広げ必要があると考える。 (南出俊彦・小森俊寛)



図 105 第2面全景（北から）

26 伏見城跡 (図版1・51～53)

経過 調査地は、伏見区桃山最上町・桃山町永井久太郎の上板橋通、伊達街道に面した地点である。当地の両道路が拡幅されることとなり、工事に先立って試掘調査を行った。その結果、伏見城城下の大名屋敷の石垣、石組溝、路面などが良好に遺存していることが確認され、発掘調査を実施することになった。

調査対象地は、上板橋通に沿った、JR奈良線の西から東へ農林省森林総合研究所の敷地内の東西約300mである。この地点は、江戸時代に作成された絵図によれば、大名屋敷に推定されている。今回の調査では、屋敷の規模など、城下内の区画を明らかにすることを主眼に行った。

遺構 調査は工事との関係から6区7分割(西から東へ1～6区)の調査区で実施した。

1区 調査地で西端の調査区に位置し、上板橋通と伊達街道の南東交差部にあたる。層序は盛土層、耕作土層、路面、地山である。検出遺構は東西石垣1・石組溝(SD1)、南北石垣2・石組溝(SD2)、路面を検出した。

石垣1は1段目を3石で、基底には2段の根石が地山を掘り込んで据えられていた。高さは基底から0.8mである。SD1は石垣1に並行して東西方向に検出した。規模は幅0.5m、深さ0.4mで、掘形は1mである。さらに0.8m前後の蓋石が2石検出された。溝は路面部を横断して西へ延びている。路面部では石組みは検出されなかったが、拳大の石が散乱しており、流出したものと思われる。溝の底石として石仏1個体が使われていた。

石垣2は1段から2段目を9石検出した。基底には1段の根石が据えられていた。高さは0.8～1.2mである。石材は0.4mから1mを越えるものが使われ、いずれも花崗岩である。北西隅角石垣の上段石は欠損していたが、基底の根石1石は検出された。SD2も同じく、石垣2に並行する溝で、石組みの石も残存状態が悪く、蓋石は定位置を保っていなかった。幅0.8m、深さは0.5mで、掘形は1.6mである。

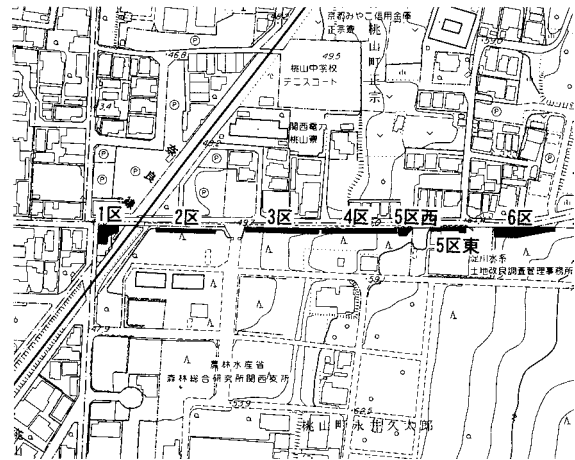


図106 調査位置図 (1:5,000)

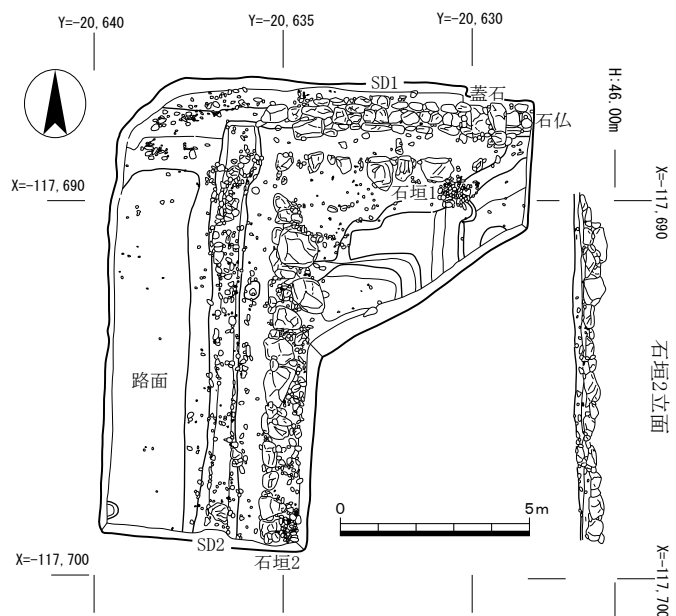


図107 1区遺構実測図 (1:200)

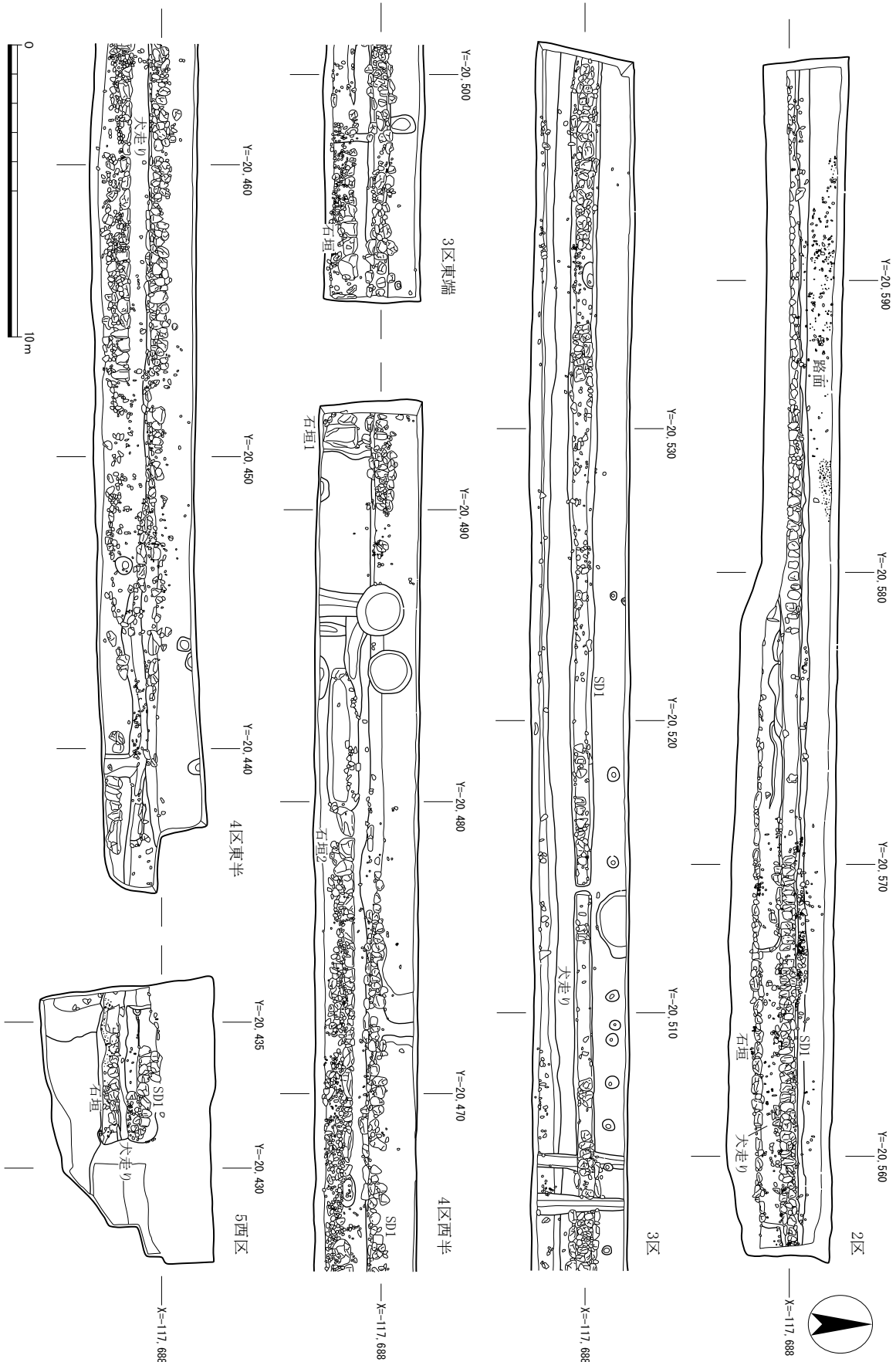


図 108 2 ~ 5 区遺構平面図 (1:200)

北と南の高低差は0.2 mで北へ下がり、SD 1に直交して合流する。両溝とも底部に底石を敷き、両端に側壁石を据え上に蓋石を乗せた暗渠の構造である。路面は南北方向に検出した。検出幅は2 mで、現在の伊達街道と重複している。路面は砂や小礫で堅く締められ、3～4面が確認された。南から北へ緩やかに傾斜している。

2区 層序は盛土層、耕作土層、整地層、石垣の裏込め層、地山である。検出遺構は東西石垣・犬走・石組溝（SD 1）・路面、下層で溝（SD 2）を検出した。

石垣1は1区石垣1の延長にあたる。石垣は東壁から西へ16 mの範囲で1段目部分を検出した。基底には1段の根石が据えられていた。高さは基底から0.2～0.6 mである。石材は0.3～0.7 mの大きさで比較的小さな石が使われていた。犬走りは幅0.7 mで、石垣の基底根石が据えられてから整地されていた。SD 1は石垣に並行してほぼ全域で検出された。幅は約0.5 m、深さ約0.3 mである。掘形は幅1.3 m前後、深さ0.4 mで、掘形内には焼土や瓦が含まれていた。石組は底部に1石ないし2石を敷き、石の間は小さな石で隙間を充填して、両端に側壁石が組まれていた。蓋石などは検出されず暗渠の構造ではないと思われる。石垣、SD 1とも石材は花崗岩が主である。路面は、西端部の一部で検出された。1～2 cm大の石が敷き詰められ2面を確認した。

SD 2はSD 1の下層で検出した。SD 2は2層に分かれ、幅1.2 m、深さ0.7 m前後である。

3区 層序は2区と同じである。検出遺構は東西石垣1・石組溝（SD 1）・犬走、下層で東西溝（SD 2）である。

石垣は調査区の2/3で抜き取られており、東半の一段高い部分で検出された。石垣は1段の5石が残存していた。基底は1段の根石が据えられていた。高さは基底から1 mである。石材の大きさは0.3～1.1 mの花崗岩である。SD 1の石組は東半と西半の一部のみ残存していた。幅0.6 m、深さ0.3 mである。掘形は1.2 m、深さ0.7 mである。掘形内には焼土や瓦が多量に含まれていた。犬走は、幅0.5 mで、SD 1掘形の上面に整地して造られている。調査区は3.6 mの比高差で東へ上がる傾斜はあるが、西端から45 mまでは緩やかな傾斜面を形成している。45 m地点では0.5 mほどの段差をつけて東へ平坦面が延びる。溝のこの部分では底部石を斜めに据えて傾斜がつけられていた。

SD 2は2区で検出した溝の東延長にあたる遺構で、3箇所を断ち割りで確認した。幅0.8～1.4 m、深さは0.8～1.5 mである。埋土の上層には、石垣溝の掘形と同様に焼土や瓦と焼けた石材が堆積する。下層には砂礫が堆積していた。

4区 3区の東隣の調査区である。検出遺構は、東西方向の石垣1・2・石組溝（SD 1）・犬走、下層で東西溝（SD 2）である。

石垣1は、3区から続く石垣で、西壁から1.5 mで北東隅角の上段の2石が検出された。基底は1段が据えられていた。高さは基底から0.6～1.1 mである。1.2 m大の花崗岩が使われていた。石垣2は石垣1から7.2 m隔たり、1段部分が調査区のほぼ全域で検出された。高さは基底から0.6～1.0 mである。石材は0.4～1.2 m大のものが使われていた。調査区の比高差は5.4 mで、東端から5 m西の地点では、3区と同じく1.6 mの段差で東へ高く傾斜している。

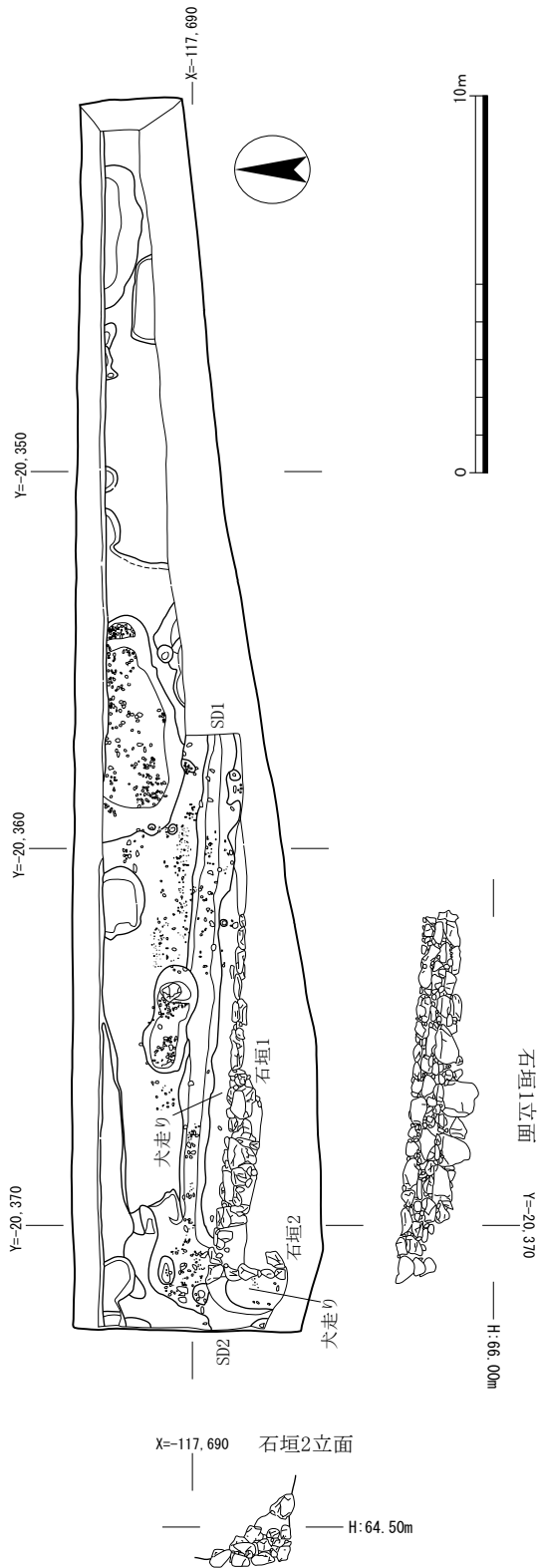


図 109 6区遺構実測図 (1:200)

SD 1は調査区の全域で検出されたが、北側壁石は攪乱を受け残存していなかった。規模、構造は2・3区と同じである。東端の傾斜部では石垣2に沿って傾斜している。

SD 2は25 mの範囲で検出した。幅は1～1.2 m、深さは0.3～0.7 mである。傾斜面を流れているため蛇行していた。埋土の上層には焼土、石材、瓦が含まれ、一部で金箔軒瓦を含む瓦が多量に出土した。また、南側壁石とみられる石材が3石、溝の底石と思われる2石が検出された。

5西区 4区東隣の調査区である。検出遺構は石垣、石組溝 (SD 1)、下層で東西溝 (SD 2) である。

石垣は、基底部の石を5 m検出した。1石が石垣の石で他は割栗石と思われる。SD 1は南側壁と底石が検出された。

SD 2は4区から続く溝で、幅0.9 m、深さは0.2～0.5 mである。

5東区 検出遺構は石組溝 (SD 1) の一部と東南側の拡張区で石垣の掘形を検出した。

SD 1は、南側壁石を1石と底石3石で、規模は不明である。石垣の掘形は上部は削平されているが、南北に1 m、東西は1 m以上、深さ0.4 mである。

6区 東端の調査区である。調査区の西半側の7 m四方の範囲は、擁壁などで攪乱を受けていた。検出遺構は東西方向の石垣1・犬走り1・溝 (SD 1)、北西隅角の南北方向の石垣2・犬走り2・溝 (SD 2)、路面である。

北西隅角の一段目の石は欠損していたが、石垣1は北西角から東へ9.9 m、石垣2は南へ2.2 mの範囲で1～2段と基底部は2～3段を検出した。

高さは基底部から1.8 mで、0.4～1 m前後の自然石が使われ、石の隙間は石垣の割り石で充填されており、花崗岩はなく他の区とは様相を異にしている。犬走1は、北面石垣に伴うもので2面確認された。1面は、幅0.5 m、厚さ0.1～0.4 mである。2面は小礫を叩き締めた路面

状を呈する。幅は0.4 mで、石垣が据えられた後に整地されている。犬走2は、西面石垣に伴うもので同じく2面確認された。1面は幅0.7 m、厚さ0.5 m、2面には顕著な路面状の礫は確認されなかった。SD1は石垣1に並行して東西方向に検出された。溝は2期に分かれる。1期の溝幅は0.6 m、深さ0.3 mで犬走1の1面に対応する。2期は、幅0.9 m、深さ0.4 mで広く、路面状の2面に対応する。SD2は、南北方向で幅は0.5 m、深さ0.2 mである。両溝とも石組みは検出されなかったが、SD1・2と交差する西側の一部で底石と思われる2石が検出された。路面は東西方向に幅約3 mで2面確認された。第2面は犬走1（2面）まで広がっていた。



図110 軒平瓦拓影(1:4)

遺物 整理箱で瓦類が78箱、土器類が3箱、石仏1体、銭貨などがある。桃山時代から江戸時代前期が主で、古墳時代の埴輪、須恵器なども出土している。遺構としては石組み溝の掘形からの出土が大半を占める。内容は瓦類では軒丸瓦が巴文12点（金箔2点）、菊文3点、家紋と思われるものが1点である。軒平瓦は唐草文6点（金箔1点）、家紋の竹か笹文のものが2点である。鬼瓦類も数点出土している。土器類では国産陶器の黄瀬戸・志野・織部・備前・信楽・唐津、輸入染付、土師器皿・羽釜などが出土した。銭貨は聖宗元寶・開元通寶・熙寧元寶・寛永通寶で、石仏は阿弥陀如来で、最大長44 cm、幅24 cm、厚さ12 cmである。伏見城の石組み遺構から出土したのは今回が初例である。

小結 調査地は、伏見城の北西部で、東西で18 mの比高差のある伏見丘陵西斜面に位置する。『伏見城と大名屋敷配置図』によると、西から山内土佐守、松平伊豫守、永井右近太夫の屋敷が記載されている。調査で東西方向の築地に伴う石垣、石組み溝を約170 mにわたり検出した。その中で、石垣は北西隅角が3箇所、北東隅角が1箇所含まれている。さらに、現在の上板橋通と伊達街道に重複する路面や絵図で、永井右近太夫と松平伊豫守の屋敷の間に描かれている南北方向の道も5東区と6区間の立会調査で確認された。これらの遺構から屋敷の規模を推定すると、1区北西隅角から2区と3区の石組み溝の高低差から、段差を付けて4区の石垣1の北東隅角まで143 m。4区の石垣1と石垣2との間には絵図に記載はないが、7.2 mの空闲地ないし小道が設けられて次の敷地になる。東は4区石垣2から4区東部で段差を付けて5区東まで約108 m。南北の道を隔てて6区北西隅角から東側が屋敷となる。また、宅地は傾斜地に立地しているため雛壇状に造成されている。区画の振れは上板橋通の東西はE 0° 44' Sで、伊達街道の南北は昭和63年(1988)の調査で検出した地点からN 1° 12' Eである。今回明らかになった区画はほぼ絵図に描かれものと一致しているが、記載されている屋敷名を確定する資料を得ることはできなかった。遺構は、石組み溝の掘形に投棄された瓦や焼土と遺物などから、慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦以後、慶長七年(1602)徳川家康よって再建された伏見城のものと考えられる。今回、狭い調査区ではあったが、大名屋敷の規模や区画割りなどの一端を明らかにすることができた。(小松武彦)

註 久世康博「伏見城跡(FD 32)」『京都市内遺跡試掘立会調査概要』昭和63年度
京都市文化観光局 1989年

第2章 試掘・立会調査

I 平成10年度の試掘・立会調査概要

平成10年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査が7件、確認調査1件、立会調査が4件、計12件である。これらの件数の中には、継続調査のため次年度の調査概要で報告予定のものがある。その他、文化庁の国庫補助事業である京都市内一円の立会調査(12)が1件あるが、これらは平成10年(1998)4月から12月分は『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度で、平成11年(1999)1月から3月分は平成11年度の概報で報告されている。ここでは京都市内一円の立会調査については、概略の記載にとどめた。

平安宮・京跡 平安宮正親司・漆室跡(1)の試掘調査では、平安時代以来の区画を踏襲した溝を検出している。

左京三条二・三坊(2)の立会調査では、鎌倉時代初頭の遺物包含層を検出し、左京六条一坊(3)の試掘調査では、近世の土取穴を検出した。

東寺講堂須弥壇(4)の確認調査では、現代から桃山時代に至る須弥壇の状況を確認した。

右京五条二坊(5)の立会調査では、現在の佐井通のほぼ全面が平安時代の道祖川であったことが判明した。右京七条三坊(6)の試掘調査では、平安時代は湿地状の土地条件であったことを示す層位を確認した。

その他の遺跡 長岡京左京九条四坊(7)の試掘調査では、巨椋池につながる湿地状の堆積層を確認するにとどまった。

史跡賀茂御祖神社境内(8)の試掘調査では、鎌倉時代の石敷、石列、鎌倉時代以前の土壌状遺構を検出した。

特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園(9)の試掘調査では、北山殿の北御所中枢部の建物、東限を明らかにすることができた。北山殿については、調査が重ねられてきており、しだいに全体像が見え始めている。

法性寺跡(10)の立会調査では、中世の遺物包含層を検出している。

伏見城跡(11)の試掘調査では、桃山時代の根石をもつ柱穴や溝状遺構を検出した。

以上が原因者負担による試掘・立会調査の概要であるが、今年度も別に、京都市内遺跡(12)では、京都市内一円の遺跡を対象に国庫補助事業で412件の立会調査を行っている。京都市内の遺跡の全体像を把握するには、こうした調査がますます重要になっているといえよう。

(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮正親司・漆室跡（図版1）

経過 上京区御前通一条下る東堅町132-1に所在する京都市立仁和小学校で、改築工事が計画された。当該地は平安宮正親司・漆室に比定されている。このため、遺構の遺存状況を把握し、今後の調査の要不要を判断する資料を得る目的で、試掘調査を実施した。調査区は南北方向から東西方向の鉤形に設定した。

遺構 検出した遺構は、桃山時代の溝SD1、江戸時代の土壌SK2がある。

SD1は東西方向で幅1.5m、深さ1mを測る。位置的に、漆室南面築地推定ラインに沿っている。平安時代の宮内区画を踏襲した可能性もある。SK2は調査区中央から南側に広がる土壌で、深さ1m以上、平面規模は調査区外に広がる。大規模な粘土採取土壌とみられる。

遺物 出土遺物は、平安時代前期の須恵器杯、瓦、平安時代中期の土師器皿・甕、緑釉陶器碗、平安時代後期に属する青磁蓮弁文碗、桃山時代の土師器皿、江戸時代中期以降の土師器皿、染付磁器碗・皿がある。いずれも小片である。量は整理箱に1箱分が出土した。

平安時代の遺物は、SD1と上層の江戸時代の堆積土層から出土したもので、同時代の遺構に伴うものではない。

小結 調査地は平安宮跡の北西隅付近に位置し、正親司と漆室の境界通路にあたる。SD1は漆室南面築地側溝の位置に近接する。しかし、SD1は堆積土層中に桃山時代の遺物を含むため、桃山時代の終わりには埋没し、機能を停止した溝といえる。ただ東西方向であり、築地側溝位置とほぼ合致するため、平安時代以来の区画を踏襲してきた可能性は高いといえる。

（長戸満男）



図112 全景（南から）

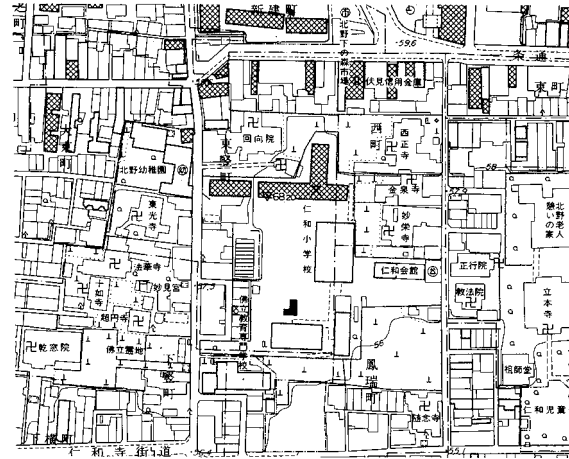


図111 調査位置図（1:5,000）

2 平安京左京三条二・三坊（図版1）

経過 御池通の、堀川通から烏丸通間の歩道電線共同溝埋設に先立って、既埋設管確認掘削に伴う立会調査をNo. 5～9、No. 12～19地点の合計13箇所で行った。平安京右京三条二坊十・十一・十五町、三坊二・七・十町に該当し、平均掘削は地表下1.7～2.0 mである。そのうち

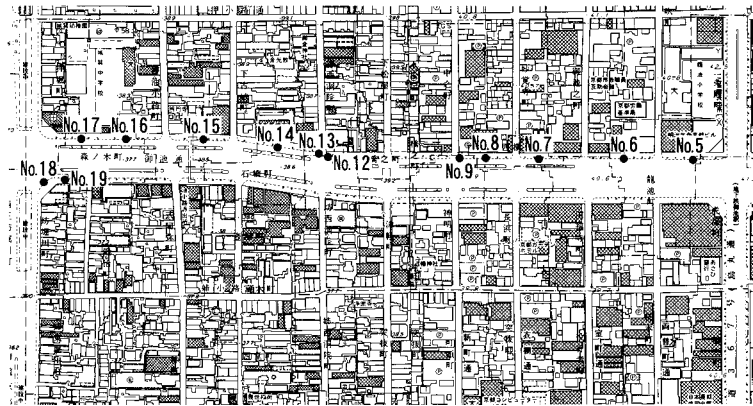


図 113 調査位置図 (1:7,500)

二坊十一町に該当するNo. 18・19地点の2箇所だけは堀川御池交差点南東側歩道で、その他は御池通北側歩道および車道北端である。調査地である北側歩道は三条坊門小路と、この小路北側に造営された藤原家邸宅が含まれ、西から順に堀河院・閑院・東三条院・鴨院などの南端に推定されている。とりわけ前三者は内裏焼失以降、歴代の天皇の里内裏となっており、代表的な寝殿造庭園が存在していたとされている。しかし、西洞院通以東 (No. 5～13) および堀川御池交差点南東側歩道 (No. 18・19) は平均地表下2.0 mから配水管が検出され、すべて攪乱であった。したがって、遺構・包含層を検出できたのは西洞院通以西のNo. 14～17地点だけである。

遺物・遺構 No. 14 地表下0.9 mから13世紀初めの土師器を含む厚さ0.1 mの包含層。地表下1.0 m以下は自然堆積による礫層。

No. 15 地表下0.9 mで13世紀初めの土師器皿の詰まった幅1.8 m、深さ0.15 mの土壌を検出。遺物は整理箱2箱分。表をヘラミガキで調整した直径6 cmのツマミ付き土師器蓋1片と輸入白磁皿2片、須恵器捏鉢2片、灰釉椀1片を含むが、大部分が土師器皿である。土師器皿は直径9 cmと14 cmを中心に分けられ、コースター型土師器皿（直径9 cm）も少量ながら混在する。これらの遺物の年代は13世紀初めを想定している。土壌の下は砂層。

No. 16 地表下0.9 mから無遺物の砂層を検出。この砂層を切る幅0.4 m、深さ0.3 mのピットを東壁で検出し、10世紀半ばの土師器皿6片と黒色土器A椀1片が出土。現地表下1.2 mから自然堆積の礫層。

No. 17 地表下0.4 mで無遺物砂層。地表下0.7 mで自然堆積の礫層。現地表下0.3～0.7 m間で地山を切る13世紀の土師器を包含する落込を検出。

小結 今回の調査は既埋設管確認のための立会調査であり、油小路通以东については攪乱のため特筆すべきことはない。しかし、油小路通以西は現地表下0.4～0.9 mで平安時代・鎌倉時代の遺構面に達する。また、自然礫層直上に堆積する砂層の性格については明らかにできないが、砂層の広がる範囲や位置によっては溝・池などの可能性もある。 (東 洋一)

3 平安京左京六条一坊 (図版1)

経過 本調査は、京都市立光徳小学校校舎の全面建て替えに伴う試掘調査である。調査対象地は平安京左京六条一坊二町のほぼ中央部から東部にあたる。調査位置は現建物・施設などの制約と、建築建物予定位置などを考慮して、現グラウンド南部に東西20m、南北2mの試掘トレンチを設定した。なお、調査終了段階で地山直上から現代面までの遺物の定量的なデータを得るために、1㎡の調査をA・B地点の2箇所で行った。

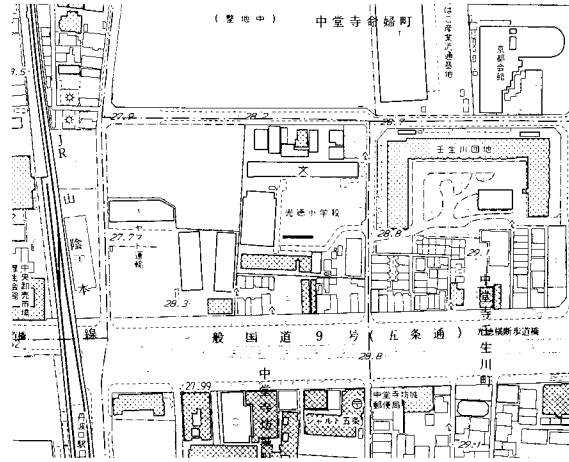


図114 調査位置図 (1:5,000)

光徳小学校敷地内では、昭和52年(1977)に給食室、昭和53年(1978)に体育館建設に伴う事前の発掘調査が実施されている。また同二町内においては、平成5年(1993)に小学校西隣の日本タバコ産業跡地でも調査が実施され、朱雀大路に関連する遺構を検出している。

遺構 表土(標高約28.5m)から基本的に7層を確認。最上層の第1層から第4層までは学校のグラウンド建設の入れ土で、第5層は学校建設時に入れられた整地土層と思われる。第6層は学校建設直前まで機能していた耕作土層で、特に下面(標高約27.9m)はほぼ水平である。第7層は地山の黄褐色系の粘質土を採取した土取り跡に入れられた土層で下面は一定でなく、砂礫層(上面は標高約27.4~27.6m)に達するまで掘り下げられている。

今回検出した遺構の大半は、地山砂礫層の高みにあわせた重機掘削の結果、それより深く達している土取りの底部を検出したもので、地山砂礫層と地山粘質土層の堆積状況が一様でないことから土取りの深度にバラツキが生じた結果である。ただ調査区の東部で検出した土壌11については、形状が土取りの不整形なものとは違って長方形で、堆積土も地山の粘質土ブロックが多いなどの相違点をあげることができる。土取りもこの部分は避けている。出土遺物は少ないが、室町後半代の土師器が出土しており、同期くらいに埋没した遺構と思われる。

遺物 総計で2870点の遺物を採取した。このうちA・B地点で1537点の遺物を採取している。平安時代以前に遡るものはなく、平安時代前期から小学校のグラウンドになる直前の遺物まで多様である。全体の30.90%が土器以外の瓦や、その他の遺物である。土師器が40.50%を占め、須恵器・

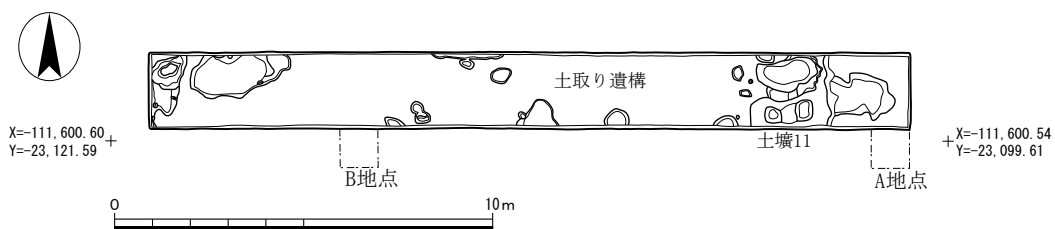
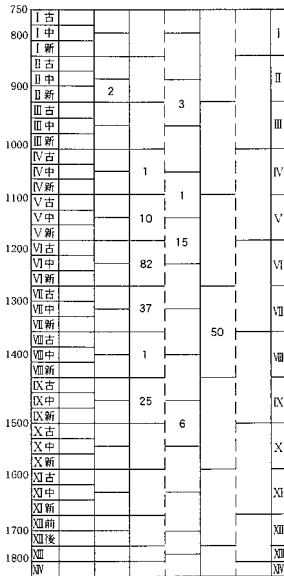


図115 遺構平面図 (1:200)

表3 出土土器破片数一覧表

	土師	須恵	緑釉	灰釉	黒色	白色	瓦器	中近世国産陶磁器										輸入陶磁器					瓦	他	合計
								焼締	瀬美	唐津	伊万	京系	白磁	青磁	鉄釉	他施	白磁	青磁	青白	褐釉	染付	他			
清掃など	111	8	2	0	0	0	4	2	0	1	40	18	12	0	17	49	3	4	1	0	0	0	22	16	310
土取り遺構	672	33	5	6	7	5	14	16	3	0	0	0	0	0	1	2	7	13	0	2	0	0	34	51	826
土壌 11	80	2	0	4	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	5	4	107
合計	818	43	7	10	7	5	21	18	4	1	40	18	12	0	18	51	11	24	1	2	0	0	61	71	1243
A地点	56	6	1	0	0	0	1	2	2	1	71	3	11	1	48	72	2	1	0	0	0	1	40	103	422
B地点	252	17	3	0	2	3	7	20	3	0	53	2	21	5	40	99	2	1	1	0	0	0	271	313	1115
合計	308	23	4	0	2	3	8	22	5	1	124	5	32	6	88	171	4	2	1	0	0	1	311	416	1537
総計	1126	66	11	10	9	8	29	40	9	2	164	23	44	6	106	222	15	26	2	2	0	1	372	487	2780

表4 出土土師器杯皿類形式分布表



(853片中240片の分布を推定)

緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・白色土器・瓦器で4.78%、残りの23.82%が陶磁器類で、このうち輸入陶磁器類は1.66%という内訳となった。

当調査地での主要遺構である江戸時代の土取り遺構（第7層）について、それに含まれる土師器皿・杯類の型式分布をみると、9世紀末からあらわれ始め、13～14世紀に大きなピークがあり、15世紀後半にも小さなピークが認められる。江戸時代の大規模な土取りで遺構が破壊されている状況にありながらも、こうした分布傾向は当地の歴史変遷の一端を物語る物証となっている。

小結調査地付近一帯は、過去の調査例からも近世の土取りが広範囲に行われたことがわかっている。「土木・建築資材採掘遺構」といえる「土取り」は、近年、江戸時代の町屋・公家屋敷などの調査が注目されており、遺構としてのの重要性を増したといえる。「土取り」は、その屋敷地内で採取される場合と、こうした生産遺跡で採取されるケースがあると考えられ、土が資材として商品化され流通していたことが、これらの調査によって証明できるものとみられる。また、少数ながら室町時代の遺構も確認され、土取りによって破壊をされながらも、井戸や深い柱穴などが遺存している可能性は十分に高く、より精細な調査が必要であろう。

(上村憲章)



図116 北壁断面(南東から)

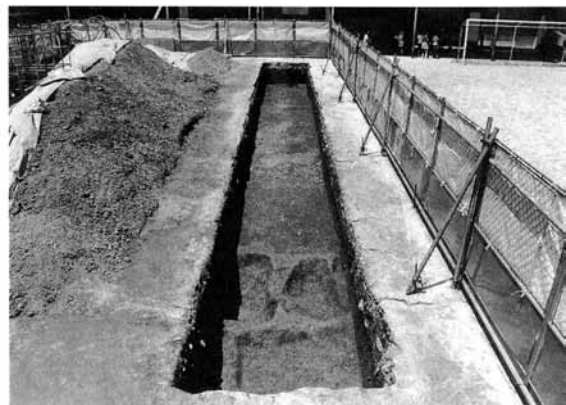


図117 全景(東から)

4 東寺講堂須弥壇（図版1・54）

経過 東寺では、文化庁の補助事業による講堂内安置諸佛の解体修理が平成9年度から始められた。最初に着手されたのは、講堂中央に安置されている大日如来坐像とその周囲の四佛である。ところで、大日如来坐像は昭和39年度に実施された講堂の解体修理時にも移動されなかった。しかしながら、今回数百年ぶりに移動されることになった。そのため、大日如来坐像が安置されていた場所が、数百年ぶりに観察できるようになった。

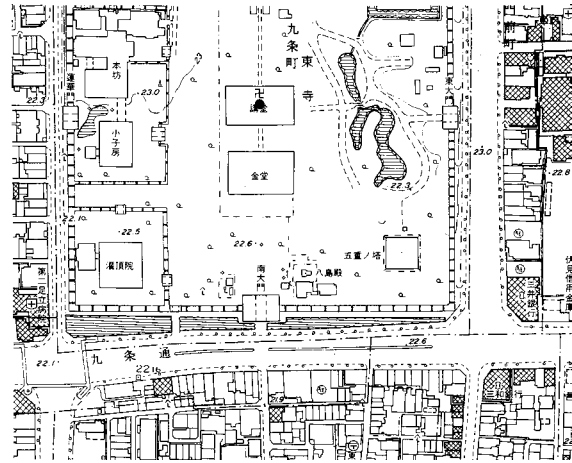


図118 調査位置図（1：5,000）

今回の調査は、大日如来坐像が解体修理される期間内に、据えられていた場所の下を試掘調査して、須弥壇の実態、変遷、埋納遺物などを確認することを目的とした。

遺構・遺物 大日如来坐像以外の諸佛像が据えられていた位置は、昭和の解体修理時に漆喰で塗り固められたが、大日如来坐像はそのままであった。大日如来坐像が安置されていた下方の状況は、花崗岩の切石が坐像の台座と同様に八角形に並べられていたが、その内側は拳大の河原石や花崗岩の破片が無造作に敷かれていた。また、玉石の間には、大日如来像を支えるため大小の礎石が据え付けられていた。

試掘調査に先行して、須弥壇の地下を科学的に探査するために奈良国立文化財研究所によって地下探査を実施していただいた。地下探査に先行して現状を記録保存するために写真測量ならびに写真撮影を行った。その後、探査成果に影響をあたえる金属製品の取り上げ作業を行った。特に、銭貨や釘などを極力採取するように努めた。

地下探査の結果、遺構の存在を示すデータが得られた。この事前調査成果を参考にしながら、須弥壇最上層にみられる玉石の除去から作業を始めた。玉石を除去すると、江戸時代に須弥壇を修築した際の版築構築痕（突き棒痕）が良く残った堅い面が現れた。この面を少し掘り下げると、土壌や亀裂の痕跡が基壇面に現れた。さらに、下層の面にも土壌が検出されたが、鎮壇などを行った痕跡は認められなかった。

遺構は、大日如来坐像の南東部と北半でそれぞれ土壌を検出した。南東部で検出した江戸時代の土壌は、直径約30cm、深さ40cmを測る。底部近くから、鉄製の鋸が1点出土した。その下方からは、箱を想定させる方形で木目をとどめた痕跡を発見したが、実態を明らかにするまでに至らなかった。北半部も同じく江戸時代の土壌を検出した。土壌は新旧2時期認められた。特に、埋納遺構を思わせるような遺物は出土しなかった。

調査地の性格上、出土遺物は極めて少なかった。出土遺物には、銭貨、瓦、土師器、釘、鋸、搏、瓔珞などが認められた。最も点数が多かったのは、須弥壇上面に敷かれていた玉石の間から出土

した寛永通寶である。

小結 今回の調査では、現代から桃山時代に至る間の須弥壇の状況を知ることができた。

①大日如来坐像直下にみられた拳大の玉石は、江戸時代中頃から後半に敷かれたものである。玉石との間からは、現代から江戸時代までの銭貨がみられた。

②玉石および表層の土を除去すると、仏像礎石の一部が取り上げられた。

③表土層の下には、漆喰片を含む比較的堅い版築土がみられたが、これは江戸時代半ば前後のものと考えられる。中央にみられた方形の礎石は、この面にしっかりと固定されていた。上面には、版築した際の突き棒の痕跡が鮮明に観察された。

④漆喰片を含む層を取り除くと、下層面には蜘蛛巣状の亀裂が縦横にみられた。この面は、層位の関係から桃山時代に近い時期と考えた。

なお、この面から下については、今回調査を行わなかった。

今後調査が進展すれば、須弥壇の変遷のみならず、教王護国寺中心建物の歴史の変遷が明らかになるであろう。

発掘調査に先立つ地下探査は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの西村康氏にお願いした。

(鈴木久男)



図 119 銭貨出土状況（北から）



図 120 礎出土状況（西から）

5 平安京右京五条二坊（図版1）

経過 右京区佐井通の四条通から高辻北通間において、京都市水道局により配水管の布設替え工事が計画された。対象地は、既往の調査から、ほぼ道祖川および道祖大路に比定されるが、佐井通西側は平安京右京五条二坊十四・十五・十六町にあたる。

調査は試験掘り、仮設管埋設、本管工事に伴いNo. 1～42の地点で断面観察を主に実施。適宜、写真撮影・遺物採集を行った。なお、四条通と阪急電鉄間は通行量が多く、夜間工事となったため、立会調査は実施していない。

遺構・遺物 調査地の大半は、道祖川の流路または埋土と思われる堆積を示していた。佐井通東側No. 3地点で道祖川東肩部と考えられる西向きの落ちを確認でき、またNo. 34地点では、西肩と思われる落ちを確認できた。No. 23・24地点では、道路面下1.2mで噴出地は不明であるが、地山層中に火山灰ブロックの堆積を確認した。

採集した遺物は平安時代前期のもので、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦があり、土師器では杯・椀、須恵器は甕・鉢、緑釉陶器は椀、灰釉陶器は椀の器形がみられる。

小結 出土遺物は極端に少ないが、平安時代の土器類で占められる。今回の立会調査では、現在の佐井通のほぼ全面が、平安時代は道祖川であったことが推定できた。（菅田薫）

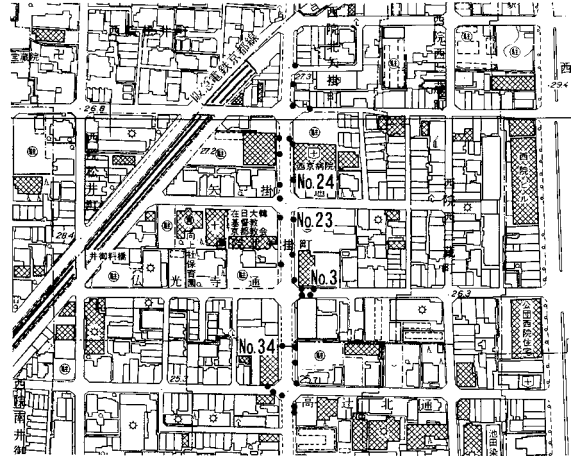


図121 調査位置図（1：5,000）



図122 No. 3地点調査風景

6 平安京右京七条三坊 (図版1)

経過 調査地は、平安京右京七条三坊二町の北西部に該当する。約200m北方の右京六条三坊四町では、これまで3件の発掘調査を実施しているが、いずれの調査でも平安時代前期の遺構群を良好な状態で検出している。

このような調査成果から、今回の調査地でも同様の状況が予測されたが、試掘調査ではその予測をまったく裏切るものであった。

調査区は、既存建物および埋設管を避けて、敷地中央部に南北方向(1区)、南に東西方向(2区)の試掘トレンチを設定した。

遺構・遺物 1区では表土下約1.4m、2区は2mまで湿地状の堆積を確認。1区の地山面と思われる灰色粘質土層上面で遺構検出を試みたが、自然流路とみられる暗灰色粘質シルト層が堆積した落込の肩部のほか、遺構は検出できなかった。近隣の既往の調査では表土下0.5m前後で平安時代の遺構面が検出されている。当該地の地山面は1~1.5mほど低く、周辺は湿地の状況を呈していたとみられる。

出土した遺物は少ない。灰色シルト層出土の土師器は小片で、平安時代以降のものと思われる。その上部の耕作土層はそれより新しく、室町時代以降に下る。最上層の耕作土層上面からは近代の陶磁器類が出土している。

小結 試掘調査の結果、当地の地形が北方に比べてかなり低く、平安時代には低湿な土地条件であったことが明らかになった。平安京内の調査では、このような条件をもつ池や湿地、川などでも、その岸に近いところでは遺構、遺物が多量に検出される事例があるが、今回の調査区内では遺構、遺物ともに検出されず、この付近の土地利用を推測させる情報が得られなかった。

(平尾政幸)

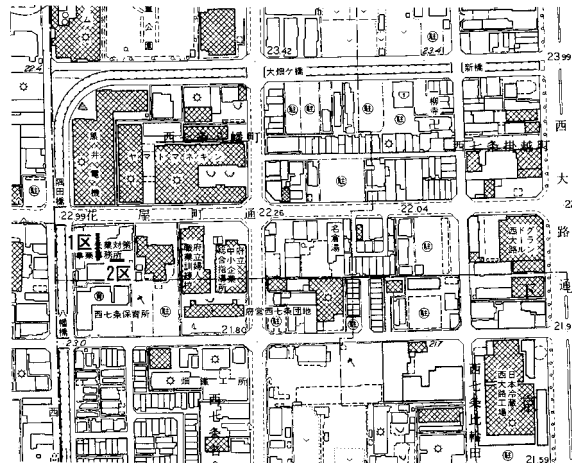


図123 調査位置図 (1:5,000)

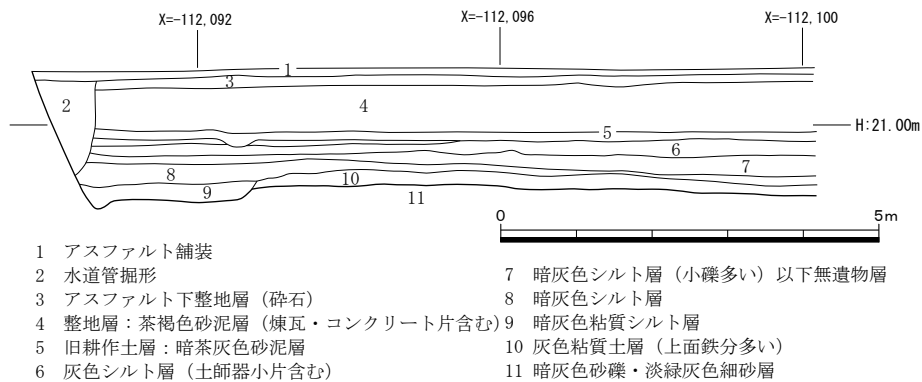


図124 1区東壁断面図 (1:100)

Ⅲ その他の遺跡

7 長岡京左京九条四坊（図版2-3）

経過 この調査は、京都競馬場スタンド増設工事に伴うものである。当地は長岡京左京九条四坊の推定地にあたる。桂川左岸域で実施されたこれまでの調査では、長岡京期の遺構がまだまだ発見されておらず、この時期の遺構の確認を主な目的として試掘調査を実施した。

調査は、スタンド北側に2箇所（北1・北2トレンチ）、南側に5箇所（南1～南5トレンチ）の調査区を計画した。

スタンド南側については、先行して東西両端および中央の3箇所（南1・南3・南5トレンチ）を実施し、必要があればその間に南2・南4トレンチを設けて調査を行うこととした。しかし、いずれの調査区も明確な遺構が認められなかったため、先行した3箇所の調査にとどめた。したがって、本調査では計5箇所の調査を行ったこととなる。

遺構・遺物 調査地は現状では更地、あるいは芝生地になっており、ほぼ平坦である。標高は地表面で12.0 m前後である。いずれの調査区も競馬場建設時の盛土層が2.0 m前後あり、以下は灰色粘土層や腐植土層を中心とした湿地状の堆積となる。南1トレンチでは、地表下約5.0 m（標高7.0 m）までを確認したが、やはり湿地状の堆積であった。北1トレンチで近世の溝状の遺構を確認したが、そのほかでは明確な遺構・遺物は認められなかった。

小結 今回の調査では、その目的であった長岡京期の遺構・遺物はまったく確認できなかった。周辺には、近世に築城された淀城の遺構が現存しているが、これに伴う遺構も検出できなかった。いずれの調査区も、盛土層の下は湿地状の堆積層が認められることから、比較的最近まで、当地周辺は湿地であったと考えられる。湿地状の堆積は標高10.0 m以下であり、1942年に干拓された巨椋池の水面の標高がほぼ10 mであることから、これに伴う堆積であると考えられよう。

（吉崎 伸）

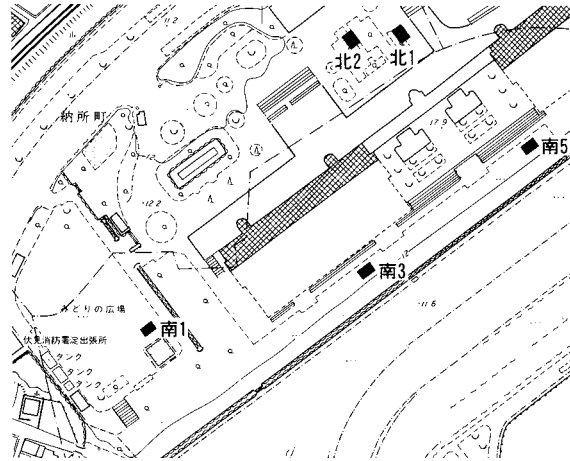


図125 調査位置図（1:5,000）

8 史跡賀茂御祖神社境内 (図版2-1・55)

経過 今回の調査は、左京区下鴨泉川町に所在する賀茂御祖神社（下鴨神社）境内・糺の森の一面に齋院御所が再建されることになり、その建設工事に先立って実施した試掘調査である。

齋院御所内には、弘仁元年（810）に齋王の制が施かれてから、文明二年（1470）に焼失するまで、御所・北面屋・務部屋・寶蔵・西御蔵・御者宿などの諸建物が存在していたことが、『鴨社古図』などによって推定されている。。しかし、

所在した正確な場所は明らかではない。今回の試掘調査は、齋院御所の建設予定地内に齋院御所、ならびに賀茂御祖神社に関する遺構の有無を確認することを目的として、2本のトレンチ（1トレンチ：南北16m×東西2m、2トレンチ：東西13m×南北2m）をL字に設定して調査を開始した。

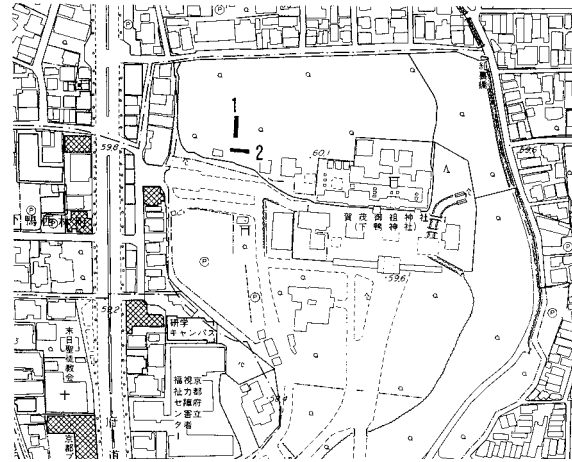


図126 調査位置図 (1:5,000)

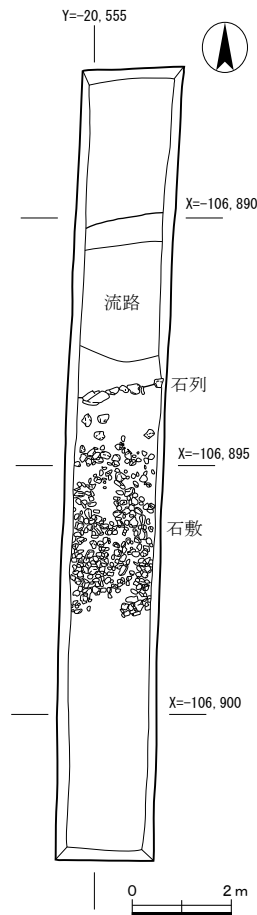


図127 1トレンチ遺構平面図 (1:150)

遺構 調査区の基本層序は、上層から現代盛土層（50～60cm）、昭和40年代以前の表土層（10cm）、江戸時代の遺物を含む層（10～20cm）、その下が鎌倉時代から室町時代の遺構面となる。

1トレンチ トレンチ中央部で鎌倉時代の石敷きを、南北5m、東西2mの範囲で確認した。10～20cm前後の川原石が敷かれる。

石敷きの北端には、やや大振りの石を東西方向1列に、北側の面を揃えて並べている。最西端の石は、上面が平坦で約50cmの大きなものであった。この石列は、トレンチ西から東に向かい、少し北に振っている。

石列から北側は落ち込んで砂地になる。出土遺物から江戸時代の流路と考えられる。

2トレンチ トレンチ東側で検出した石列は、約20cm前後のや

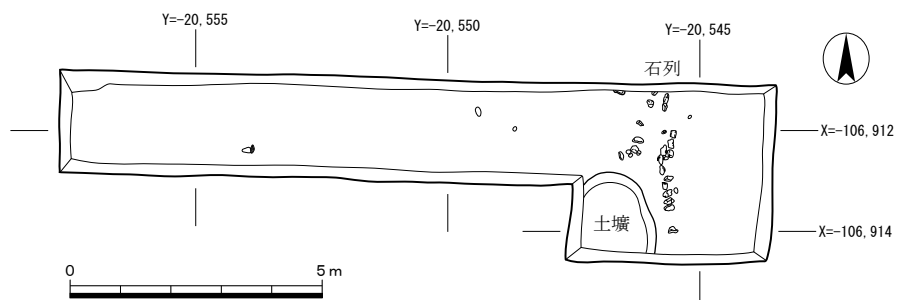


図128 2トレンチ遺構平面図 (1:150)

や長細い河原石を東西の面を揃えて南北方向に並べている。南端の3石は、長軸を東西方向に変えている

拡張部南西隅で検出した土壌は、底部に炭の堆積が認められ、出土遺物から江戸時代の遺構と考えられるが、性格については不明である。

拡張部南端で行った断ち割り断面の観察では、石列の続きと考えられる同種の石と、その下層で土壌状遺構を1基確認した。この土壌状遺構は、地山を掘り込んでいる。

遺物 出土遺物は、整理箱に1箱であった。1・2トレンチとも鎌倉時代の遺構面までは、近世の瓦類の出土が多い。

1トレンチ 石敷きの北端の石列の直上で、寛永通寶が4枚出土した。石敷きの直上では、直径約30cmの円形

状に、鎌倉時代の土師器片がまとまって出土した。(図129-5)は、口径8.4cm、器高1.2cmで、体部は外反する。(6)は、口径9.8cm、器高1.8cmで、口縁端部は上方にナデて仕上げる。

2トレンチ トレンチの西半部分から、陶磁器が多量に出土した。石列直上とその東側では、鎌倉時代の土師器片がまとまって出土した。石列の直上では、寛永通寶が1枚出土した。江戸時代の土壌からは、近世瓦と土師器片が出土した。(図129-1~4)は、口径5.2~6.5cm、器高約1.5cmの小型の皿で、内面に布目痕、外面には指圧痕が残る。木野窯で焼かれたもので、江戸時代後半のものと考えられる。

小結 1トレンチの鎌倉時代の石敷きは、この地が高野川と賀茂川の三角洲という土地の性格から、地盤強化のための地業であり、過去の調査で集積遺構として報告されているものと同じと考えられる。

2トレンチの石列は、L字に曲がる可能性を考えたが、同種の石を南壁断面で検出したことから、南に続くものと考えられる。その形状から、建物に伴う雨落溝の一部である可能性が考えられる。

鎌倉時代の石列の下層で検出した土壌状遺構は、掘立柱建物の柱穴の可能性を考えることができる。遺物の採集ができなかったので、時代の確定はできないが、層序から鎌倉時代以前の遺構と考えられる。

以上の調査結果から、鎌倉時代以前から江戸時代に至る間の遺構が存在していたことを確認した。しかし、これらの遺構が『鴨社古図』にみえる建物に直接関係するものであるは、確認することができなかった。

(桜井みどり)

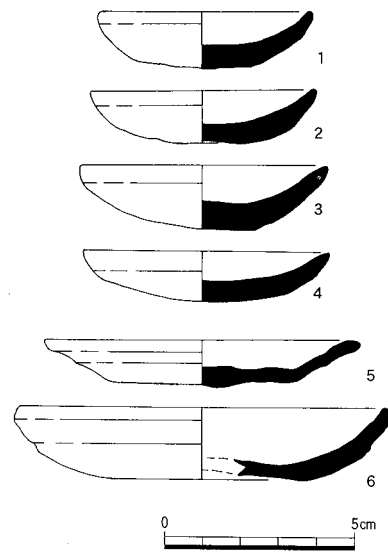


図129 土器実測図(1:2)

9 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 (図版2-1・56)

経過 本調査は、客殿建設および庫裏北方の土蔵移築に伴って行われたものである。調査区は、庫裏北側の客殿建設予定地に1・2・3トレンチを、土蔵移築予定地には4・5トレンチを設定した。調査の結果、室町時代と江戸時代の各時期の建物、溝、池などを検出した。

遺構 1～3トレンチの基本土層は、地表下0.3mまでが近現代の盛土層、0.3mで近世の遺構面、0.3～0.5mが17世紀前半の遺物を包含する整地層。0.5～0.6mが16世紀後半の遺物を包含する泥砂層、0.6～0.7mが腐植質の砂泥層となり、以下が地山の室町時代の遺構面となる。室町時代の建物遺構は、すべて礎石建物であるが、多くは根石のみが遺存する。また、複数時期の建て替えが認められるが、調査面積が限られ規模は明らかではない。

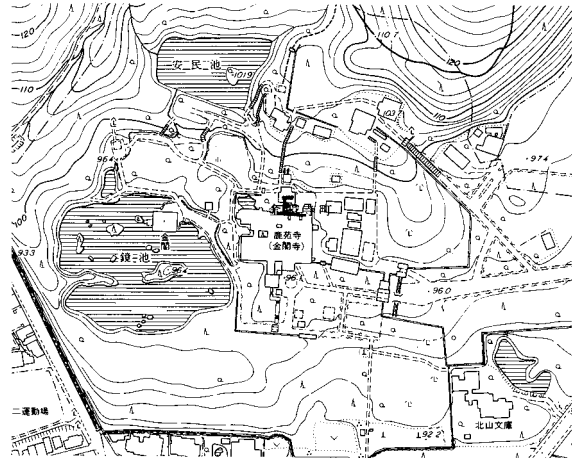


図130 調査位置図 (1:5,000)

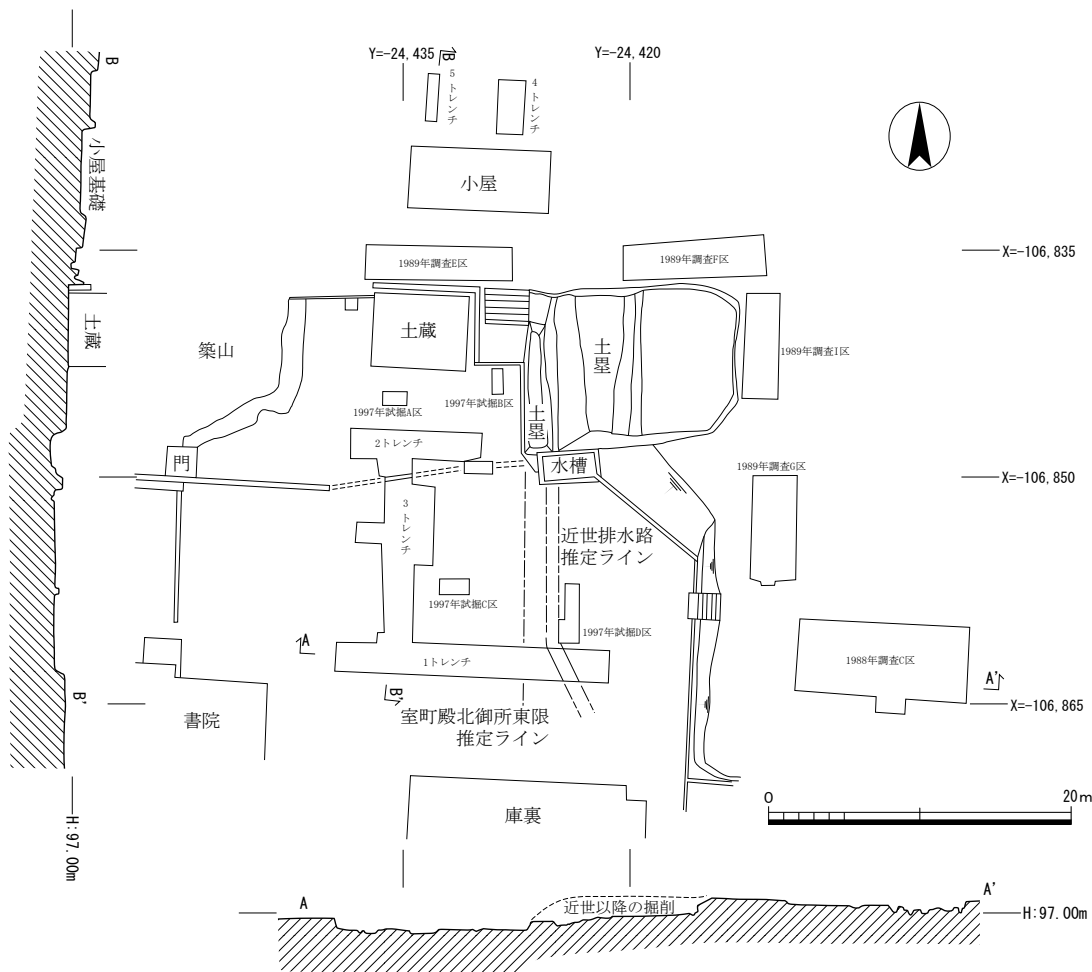


図131 調査区配置図 (1:500)

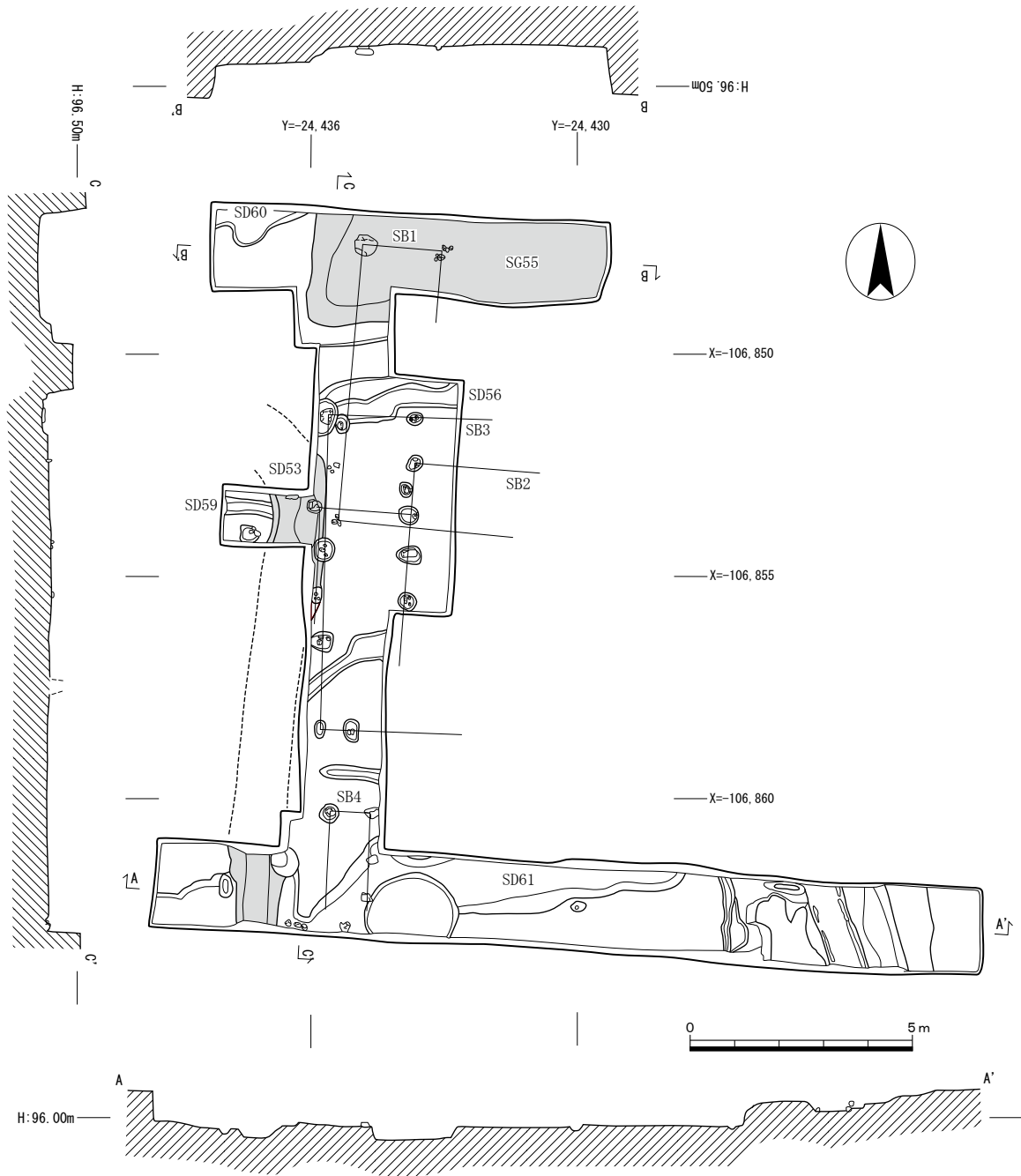


図 132 遺構実測図 (1:150)

SB1は、2トレンチで検出された池の中に、一部が張り出す礎石建物である。柱間は、南北の柱筋が北から4.08m、2.04m。東西は1.8m（6尺）となる。南北筋の北側1間の間には礎石が存在したと考えられ、その場合南北の柱間は2.04m（6尺8寸）となる。建物の方位は、舎利殿（金閣）や防災工事に伴う調査で検出されている北山殿の建物と同じである。池の中からは、平瓦と共に屋根材と考えられる薄い板が出土しており、この建物が棟を瓦で飾る板葺きの建物であったことがわかる。

SB2は、南北2間以上×東西1間以上の礎石建物である。柱間は、南北が北から1.2m（4尺）、1.97m（6尺5寸）で、東西が2.1mと柱間が長い。

S B 3は、南北3間×東西1間以上の礎石建物である。柱間は、南北の柱筋が北から3 m (10尺)、1.97 m (6尺5寸)、1.97 m (6尺5寸) となり、東西も1.97 m (6尺5寸) となる。西から2列目の柱筋の北1間の中央に東石を置く。S B 4は、東西1間×南北3間以上の礎石建物で、柱間は東西・南北共に0.98 m (3.25尺)。S B 3に取り付く廊の可能性はある。

S D 53は、建物群の西側の南北方向の溝。池 S G 55の南側で西へ曲がる。幅1.2 m、深さ0.3～0.4 m。この溝も真北に対してやや東に傾いている。山際に位置する北山殿は、このような溝によって区画と排水が行われたと考えられる。溝内より出土する土器類は土師器が多く、15世紀前半のものである。S D 56・59は、3トレンチで検出した。幅0.3～0.5 m、深さ0.2 mを測る。規模形状から建物雨落溝が考えられるが、対応する建物は不明である。共にS D 53に流れ込む。S D 60は、2トレンチ西側で検出した東西方向の溝だが、北側への落ちを確認しているのみで、溝でない可能性もある。腐植土が堆積しており、S G 55への導水施設の可能性もある。S D 61は、1トレンチで検出した幅約1.5 m、深さ0.2 mの流路状の溝で、1トレンチ中央で南へ曲がる。出土遺物が少なく時期は特定できないが、層位関係から義満の北山殿以前と考えられる。

S G 55は、2トレンチ中央で検出した1辺約7 mの方形を呈する池で、深さ0.4 mを測る。池底には漏水防止の白色粘土が薄く貼られている。汀は、厚さ約0.3 mの白色の砂が陸部から池

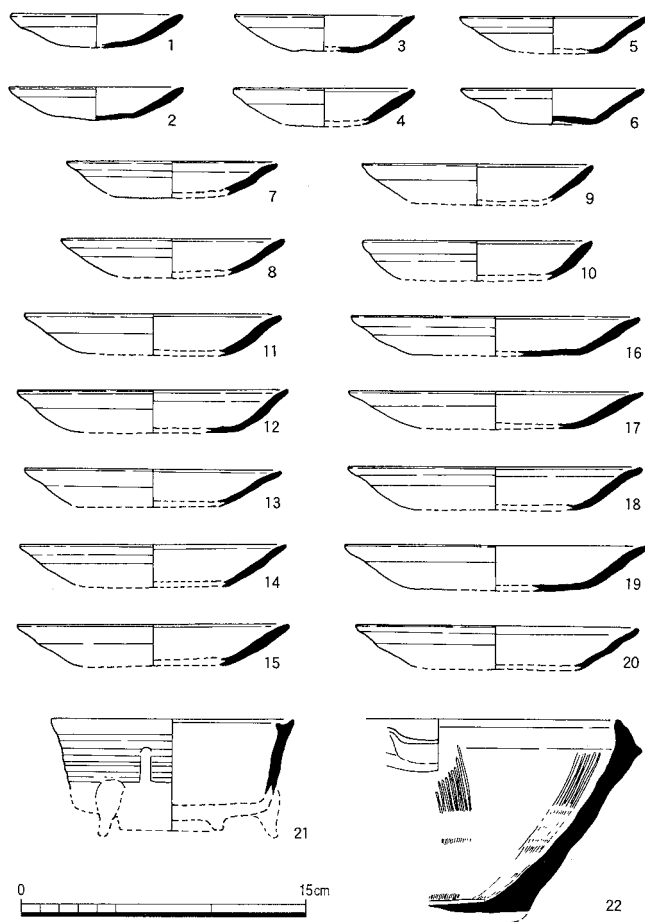


図 133 S G 55 出土土器実測図 (1:4)

底にかけて堆積しており、白砂で化粧したと考えられる。この砂には、植物遺体や土器が含まれており、適時盛り直していたようである。調査地周辺の平坦地は、北から南へ下がる斜面をカットして造られている。池はこの平坦地の北端に位置し、山側からの水を受けられる機能もあったと考えられる。

4・5トレンチでは、地表下0.3～0.5 mで北西上がりに傾斜する地山面を検出した。調査区の西側には、夕佳亭から南側にのびる土塁は、調査区で確認した地山の傾斜から、尾根筋の自然地形を利用して造られたことがわかる。

遺物 15世紀初頭から18世紀までの遺物が出土する。量的に最も多いのは、北山殿から鹿苑寺に

なつてからのもので、15世紀後半から16世紀後半の土器類である。供膳形態では、土師器の皿が最も多く、中国製の青磁・白磁が少量伴う。調理具である播鉢は、備前焼、信楽焼のものがある。しかし椀・皿・播鉢などが出土する一方で、煮沸具である鍋・釜類は一切みられない。調査区が狭く遺物の出土が偏った可能性もあるが、調査地は現在の庫裏のすぐ北側である。庫裏の所在地が当時から大きく変わっていないとすると、この遺物の様態は一定の傾向を示しており、寺院における鉄製煮沸具の利用がその理由にあげられよう。

小結 今回の調査によって、室町時代から現代に至る庫裏北側の土地利用の変遷が明らかとなり、いくつかの重要な遺構を確認することができた。

S B 1とS D 53の方位は、真北に対してわずかに東に振っている。これは金閣（舍利殿）や、昭和63年（1988）調査のD区で確認された会所とされる建物とほぼ同じ方位であり、北山殿全体が統一された地割りをもつて造営されたことを窺わせる。1トレンチの東端では比高差約0.6mの垂直の段差が検出されており、東から西への傾斜面を雛壇状に造成した結果と考えられる。堆積状況と出土する遺物から、この削平は室町時代に行われたことがわかる。過去の調査において、段差の東側では掘立柱建物や室町時代の井戸などが検出されており、雑舎が点在する空間といえる。これらのことから、調査地周辺の平坦地は、義満の北山殿造営によって造成されたものであり、今回の調査で、義満の北御所の北東端が明らかになったといえよう。室町時代の遺構面は、16世紀後半の遺物を包含する腐植質の泥砂層に覆われており、この時期、調査地周辺が湿地になっていたと思われる。江戸時代の建物は、湿地の堆積土の上に、0.2～0.3mの土を盛って建てられている。整地層は、出土した遺物から17世紀の前半に行われたことがわかり、『隔・記』の著者、鳳林承章が鹿苑寺の住職となった時期と重なる可能性が高い。

今回の調査によって、北山殿の北御所中枢部の東限が明らかとなり、建物などを検出した。各遺構の全容は、調査区が狭く明らかではないが、現在の鹿苑寺の中で、北山殿の区画の一部が明らかとなったのは大きな成果であり、今後、北山殿復元における定点の一つとなる。

（南 孝雄）



図134 1トレンチ全景（東から）



図135 SG 55（東から）

10 法性寺跡（図版1）

経過 今回の工事にかかる遺跡は、北から法性寺跡、番神山古墳、貞観寺跡などである。工事は旧東海道線軌道敷きを削平、あるいは掘り下げて実施されたため、盛土部分については十分な調査はできなかった。

また、継続事業であるため、詳細については次年度に報告する。

遺構 法性寺跡地区（京都市東山区福稲岸ノ上町南地先）では、東側斜面の擁壁工事があったため、法面のカットが実施され、良好な状態で断面観察ができた。主に中世から近世にかけての遺物が出土したほか、弥生土器や8世紀代の須恵器なども採取することができた。

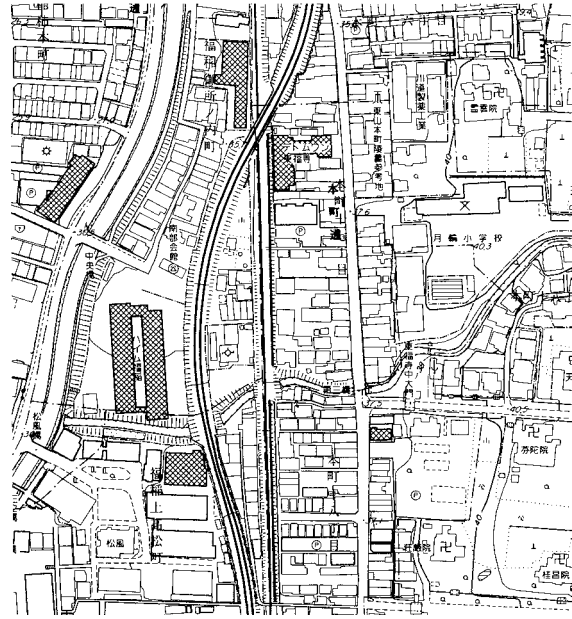


図 136 調査位置図（1:5,000）

遺物 弥生土器は、底部をタタキで丸めた小片で、畿内第V様式に属する甕とみられる。須恵器は甕の破片で、8世紀代のものである。土師器皿片は、14世紀から15世紀のもので、小片であった。五輪塔は、「風・空」の部分で、近世に属する。

小結 法性寺跡は、江戸時代まで東福寺旧境内地内にあり、大規模な開発から免れていたため、法性寺に関する遺構・遺物が良好に遺存すると期待された。工事の進行に合わせて断面や土層を観察した結果、中世の土師器を含む遺物包含層が広がっていることが確認できた。また、近世の遺構に混入して布目痕を有する瓦がみられ、法性寺に関連した遺物とみることができる。

（吉村正親）



図 137 調査風景（南から）

11 伏見城跡（図版1）

経過 今回の調査は、仮称桃山特別養護老人ホームの建設工事に先立って実施した試掘調査である。調査地は、古絵図によると武家屋敷の一部にあたる。南西側に隣接するマンション建設に伴う発掘調査において、武家屋敷と町屋を区画する築地を検出していることから、当地でも遺構の存在する可能性は高いと考えられた。東西に長い調査地のため、南北トレンチ3本と、その間に東西トレンチを2本設定した。

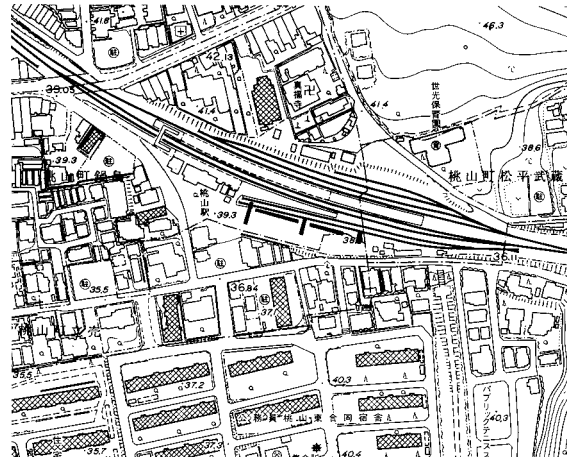


図138 調査位置図（1:5,000）

遺構 基本層序は、盛土層（約2m）の下に耕作土層があり、その下で焼土面を確認した。1トレンチでは自然地形である落込、2トレンチでは1トレンチから続く落込と土壇状遺構（石抜き穴）、3トレンチでは柱穴、4トレンチでは柱穴、溝状遺構、焼土面の東端、5トレンチでは焼土面の北端を確認した。

遺物 遺物は、整理箱にして2箱出土した。今回の調査は、遺構の遺存状況の確認を目的としており、出土した遺物は焼土面に混入していたものと断面清掃に伴うもののみである。駅関係の遺構から昭和初期の酒壺片が多量に出土した。焼土面からは桃山時代の焼塩壺が出土した。その他の遺物（瓦・陶磁器）は、桃山時代から江戸時代のもと考えられる。

小結 調査区西側（1・2トレンチ）では、削平が著しく遺構の確認はできなかった。しかし、調査区北西側から南東側に落ち込む自然地形（高低差約2m）であることが確認できた。断面には石垣が積まれていたようで、2トレンチで石垣の石を抜き取ったとみられる土壇状遺構数基を確認した。5トレンチで検出した焼土は、慶長五年（1600）の伏見城炎上の際のものである可能性が考えられ、5トレンチで北端を、4トレンチで西端を確認した。また4トレンチでは、根石を伴う柱穴や溝状遺構も確認することができた。

以上の結果から、当調査地においても北側（山側）の高い部分を削平し、南側（谷側）の低い部分に盛土して埋めた状況が判明した。また、調査区の東側においては、その盛土層の下に遺構が良好に残存していることを確認した。

（桜井みどり）

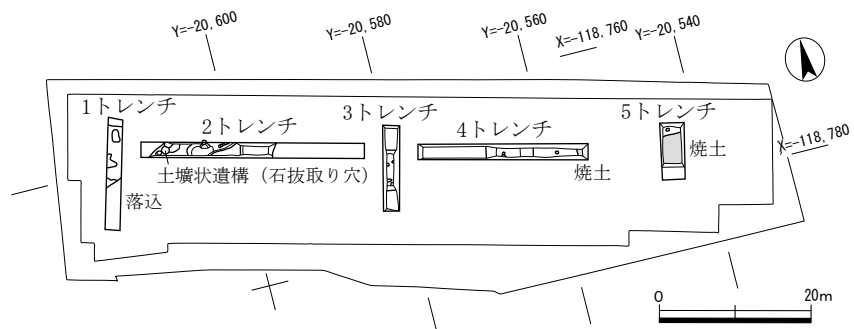


図139 トレンチおよび遺構配置図（1:1000）

12 京都市内遺跡

経過 京都市内に点在する平安京跡・鳥羽離宮跡などの遺跡該当地に対する小規模開発およびガス・水道などの埋設工事を対象に、文化庁の国庫補助を得た立会調査を実施している。平成10年度は合計412件であり、市内を便宜的に11に地区分けした調査件数は表5のとおりである。

平成10年（1998）4月1日から12月28日までの調査分は『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度に報告しているが、平成11年（1999）1月4日から3月31日までの調査分は平成11年度の報告になる。

表5 国庫補助による立会調査件数一覧表

地区	4～12月	1～3月	計	地区	4～12月	1～3月	計
平安宮	50	19	69	南・桂地区	8	2	10
平安京左京	93	29	122	洛東地区	28	9	37
平安京右京	55	18	73	鳥羽地区	15	4	19
洛北地区	15	5	20	伏見・醍醐地区	183	6	24
太秦地区	11	3	14	長岡京地区	4	7	11
北白川地区	12	1	13	合計	309	103	412

遺構・遺物 以下、調査の概要を記す。

平安宮 宮域での立会調査は、その大半が小規模面積での木造建築のため、掘削深が浅く遺構面に達しない箇所が多いため、顕著な成果を得ていない。

平安京左京 京都御苑内では、昨年からの継続で、和風迎賓施設建設に先立つ樹木移植・グラウンド整備などの工事が行われ、また御所内でも上・下水道、電気配線に伴う立会調査を実施した。特に、御所内の立会調査では寛政期造営、宝永期造営の一部を明らかにすることができ、御所の変遷を考古学的に解明していくうえで、多大な成果を得ている。

条坊に係わる成果では二条大路・四条大路の路面を検出している。

五条三坊八町のビル改築工事に伴う調査では、平安時代から江戸時代にわたる多くの遺構・遺物とともに、下層の烏丸綾小路遺跡にあたる溝状の遺構を検出し、弥生時代中期の遺物が多量に出土した。

平安京右京 右京城での条坊遺構は宇多小路西側溝、西大宮大路西側溝、近衛大路北側溝、皇嘉門大路東側溝・路面、道祖大路路面を検出している。

洛北地区 植物園北遺跡、北野遺跡・北野廃寺、尊重寺跡、世尊寺跡、西北町遺跡、本満寺の構え跡、相国寺旧境内、鞍馬山経塚群、聖護院長谷殿跡、岩倉忠在地遺跡、船山須恵器窯跡、北山蓮台寺境内、岩倉中在地遺跡の立会調査を実施した。

太秦地区 村ノ内町遺跡、清涼寺境内、円乗寺跡、花園宮ノ上遺跡、上ノ段町遺跡、和泉式部町遺跡、御所ノ内町遺跡隣接地、多藪町遺跡、西野町遺跡、井戸ヶ尻遺跡、嵯峨七ツ塚古墳群の立会調査を実施した。和泉式部町遺跡では古墳時代の遺物包含層と竪穴住居を検出している。

北白川地区 白河街区跡、岡崎遺跡、京都大学構内遺跡群、田中構え跡、追分町古墳群の立会

調査を実施した。

京都大学北部構内遺跡では良好な縄文時代から中世にわたる包含層を検出している。縄文土器は、中期船元式から晩期凸帯文土器まで含む。工事断面での観察・遺物採集のため遺構は明確ではないが、土器棺墓とみられる畿内第Ⅰ様式の甕形土器・蓋形土器がほぼ完形で出土している。

白河街区跡では延勝寺跡下層の岡崎遺跡に相当する古墳時代の流路を検出し、完形を含む多量の庄内式併行期の遺物を採集している。

南・桂地区 中久世遺跡、大藪遺跡、上里北ノ町遺跡、上久世遺跡・上久世城跡、革嶋館跡、福西古墳群、中街道遺跡、灰方城跡の立会調査を実施した。この地区では顕著な成果はあがっていない。

洛東地区 中臣遺跡、法性寺殿跡、六波羅政庁跡、法性寺跡、左義長町遺跡、山科本願寺跡、将軍塚古墳群、法観寺旧境内、安祥寺下寺跡、安朱遺跡、大塚遺跡、大宅廃寺、大宅遺跡、鳥辺野、南日吉町遺跡の立会調査を実施した。

法性寺殿跡では平安時代中期の南北方向の溝と、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を出土する東西方向の溝を検出している。

鳥羽地区 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡、下鳥羽遺跡、吉祥院竹尻城跡、下三栖遺跡、深草遺跡、淀城跡の立会調査を実施した。

鳥羽離宮跡では鎌倉時代の遺物を多量に含む遺物包含層を確認している。

伏見・醍醐地区 伏見城跡、指月城跡、醍醐廃寺、小野廃寺、法界寺旧境内、向島城跡などの立会調査を実施した。醍醐廃寺では当該期の瓦を採集するも遺構の検出はなかった。

長岡京地区 この地区の調査でも顕著な成果はあげられなかった。

小結 今年度の立会調査によって明らかとなった遺構・遺物の時期は、縄文時代から江戸時代までの多岐にわたっている。特に平安京左京域では、弥生時代から近世まで連続と重複する都市遺跡の特質を反映する結果となった。

京都市内遺跡立会調査は、日々行われる掘削工事に伴い市内全域を巡回・パトロールし、記録・採集を行っている。現市街地と平安京とが重複する京都市の場合、すべての開発行為に対して発掘調査を実施することは不可能であり、小規模開発に対しての立会調査は最も有効な調査方法といえる。

(菅田 薫)

第3章 資料整理

1 保存処理

出土木製品の受け入れ状況

今年度の木製品の受け入れ状況は、大型・小型木製品を合わせて合計 20 現場であった。内訳は表 6 に記した。これらは、小型品は洗浄の後、真空パックし遺物整理箱に収納し、大型品は洗浄の後、不織布で梱包し金属プールに収納し、データ作成・含浸作業までの間、保管・管理する。

表 6 木製品受け入れ一覧表

遺 跡 名	調査記号	遺 跡 名	調査記号
平安京右京七条二坊	89BB - HR3	平安京右京三条一坊	96HK - UI12
平安京左京四条三坊	91BB - HL367	山科本願寺跡	96RT - HG1
鳥羽離宮跡	92TB - TB138	京都市内遺跡	96BB 一括
平安京左京八条三坊	93HK - EF1	平安宮・平安京右京	97HK - UX1
平安京右京三条一坊	93HK - UK2	平安京右京三条一坊	97HK - UI13
平安京左京八条三坊	94HK - EF5	平安京右京七条一坊	97HK - NJ2
平安京左京八条三坊	94HK - EF7	檜原廃寺	97MK - CC2
平安京右京三条一坊	95HK - UI8	平安京右京六条一坊	98HK - XF14
平安京右京三条一坊	95HK - UI9	平安京右京六条一坊	98HK - XF15
法金剛院境内	95HK - IV1	大藪遺跡	98MK - OG1

木製品保存処理

3 m・5 m含浸槽（いずれも大型木製品）では、昨年度より保存処理継続中の木製品の処理が終了し取り上げたもの（表 7）と、新規に保存処理を開始したものがある。

表 7 保存処理済み一覧表

遺 跡 名	調査記号	遺 跡 名	調査記号
平安京右京八条二坊	87HK - YF1	平安京左京八条三坊	94HK - EG1
平安京左京六条一坊	91HK - HK5	平安京右京六条一坊	94HK - XF9
平安京右京六条一坊	92HK - XF7	平安京右京九条二坊	94HK - ZM1
平安京右京八条二坊	93HK - YC3	平安京右京二条二坊	95HK - IW1
平安京右京六条一坊	93HK - XF8	六勝寺跡・岡崎遺跡	95BB - KS62
平安京左京八条三坊	94HK - EF2	平安京左京四条二坊	96HK - FF2
平安京左京八条三坊	94HK - EF7		

木製品の現場仮保存

大藪遺跡(98 MK-OG 1)出土の木製井戸(曲物)に対して、現場で長期間出土状態のまま仮保存の必要が生じたため、この井戸にPEG(ポリエチレン・グリコール)4000番の25%溶液(1回1リットル)を刷毛で約1箇月間塗布し、現場での仮保存を行った。その結果、通常みられる遺物の乾燥の促進を抑制したり、それに伴う変形の防止に効果があった。今後、現場で出土した木製品を長く出土状態のまま仮保存する場合には、有効な手段になる。

金属製品の受け入れと保存処理

平安京左京二条二坊・高陽院跡(97 HK-NF 1)、平安京右京七条一坊(97 HK-NJ 2)、史跡醍醐寺境内(97 FD-DT 2)、六波羅政庁跡(98 RT-AA 2)、中臣遺跡(98 RT-NK 77)を受け入れ、それぞれ保存処理作業を進めた。また、平安京右京一条四坊(97 HK-UX 1)の鉄刀については、事前調査として材質の劣化・象嵌などの有無を確認するために、京都市工業試験場の協力を得て、同試験場の透過型X線撮影装置を用いてX線撮影を行った。

土層転写

平成10年(1998)6月25日～29日に、平安京左京二条四坊(97 HK-JD 1)の土層を、エポキシ系合成樹脂(トマックNR-51)を用いて、転写・取り上げ作業を行った。

修羅の保存処理

昨年度から引き続き、ポリエチレン・グリコール(以下、PEG)による保存処理を行った。

今年度は、修羅大に対して、1998年7月10日に15%から20%に濃度を上げた。10月14日に20%から25%に濃度を上げた。平成11年(1999)1月29日に25%から30%に上げた。

修羅小に対して、1998年7月10日に10%から12.5%に濃度を上げた。1999年1月29日に12.5%から15%に濃度を上げた。

修羅大・小とも、12回の重量測定・ねじれ計測・クラック計測を行い、4回の写真測量を行った。この間、1998年4月2日に第4回目に修羅保存処理検討委員会を開催し、平成9年度の保存処理内容の報告を行い、1999年3月2日に第5回目の修羅保存処理検討委員会を開催し、平成10年度の保存処理内容の報告を行った。(卜田健司)

2 復元彩色

復元遺物の彩色

今年度の復元彩色は、遺物復元が総計 265 点であった。内訳は下表のとおりである。その内 78 点は、京都市考古資料館の昨年に引き続き特別展「続・洛中桃山陶器の世界」のためのものである。

表 8 復元彩色件数一覧表

内 容	調査記号	点数	内 容	調査記号	点数
国庫補助概報	97BB - HL404	1	貸出ほか	77HK - TK	6
	97BB - HL406	8		87HK - RL	25
	97BB - HL478	19		93HK - GN2	1
	98RT - NK78	2		94KS - BA5	2
調査概要	96HK - FF 2	18		95MK - H029・30	3
	96RT - HG 1	59		97RT - NK76	4
	97HK - NJ 2	12		97BB - KS82	1
	97FD - AK 2	24		97BB - KS161	2
資料館展示	89BB - HL104	78			

遺物復元の他に、中臣遺跡見学会のパンフレットのための中臣遺跡時代別イメージイラストを 5 点作成した。また、遺物復元に関する彩色技術指導で、1999 年 2 月 19 日鳥取県埋蔵文化財センターに出向した。(出水みゆき)

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

文化財講演会の開催

日 時	1998年11月7日(土) 午後2時～4時
会 場	京都市生涯学習総合センター (京都アスニー)
講 演	「文字瓦が解きあかす古代の管理社会と宗教」 京 都 大 学 教 授 上 原 真 人
主 催	京 都 市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援	京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局
参加者	約300名

現地説明会などの開催

- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1) 1998年4月26日「平安京跡(京都地方裁判所)」 | (参加者約50名) |
| 2) 1998年6月13日「平安京跡(京都和風迎賓施設)」 | (参加者約200名) |
| 3) 1998年6月20日「平安京右京三条二坊十四町跡」 | (参加者約200名) |
| 4) 1998年8月8日「方広寺石塁(京都国立博物館)」 | (参加者約150名) |
| 5) 1998年8月22日「平安京跡(京都地方裁判所)」 | (参加者約200名) |
| 6) 1998年9月12日「大藪遺跡」 | (参加者約300名) |
| 7) 1998年10月3日「山科本願寺跡」 | (参加者約200名) |
| 8) 1998年10月24日「平安京跡(京都和風迎賓施設)」 | (参加者約200名) |
| 9) 1998年11月14日「方広寺石塁(京都国立博物館)」 | (参加者約400名) |
| 10) 1999年1月9日「平安京跡(南大内小学校)」 | (参加者約50名) |
| 11) 1999年2月6日「平安京跡(修徳小学校)」 | (参加者約100名) |
| 12) 1999年3月13日「中臣遺跡(勸修市営住宅団地)」 | (参加者約150名) |

埋蔵文化財調査報告書など出版物の刊行

- 1) 「南ノ庄田瓦窯跡」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊
- 2) 「研究紀要第5号」
- 3) 「平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要」

「リーフレット京都」(No. 111～No. 122)の発行

- ・No. 111 発掘ニュース 27 「大原野で奈良時代の建物群を発見—大原野松本遺跡—」
- ・No. 112 発掘ニュース 28 「中臣遺跡の方形周溝墓」
- ・No. 113 発掘ニュース 29 「頼道邸高陽院の礎石建物」
- ・No. 114 発掘ニュース 30 「山科本願寺の発掘調査」

- ・ No. 115 発掘ニュース 31 「山上の祭祀遺跡」
- ・ No. 116 考古アラカルト 16 「修羅の保存処理」
- ・ No. 117 発掘ニュース 32 「右京職跡で発見した墨書土器」
- ・ No. 118 信仰・祭祀 8 「一条通紙屋川出土のキリシタン墓碑」
- ・ No. 119 発掘ニュース 33 「檜原廃寺の調査」
- ・ No. 120 遺跡を訪ねて 1 「北嵯峨を歩く」
- ・ No. 121 考古アラカルト 17 「將軍義昭の武家御所と織田信長の二条新造御所」
- ・ No. 122 発掘ニュース 34 「発掘成果をふりかえって 1998」

京都市遺跡巡り山科中臣遺跡見学会」

日 時 1998年11月21日(土) 午後1時～4時30分

内 容 勸修小学校で中臣遺跡の発掘調査成果をスライドを用いた説明および遺物の展示説明のあと、発掘調査現場・宮道列子古墳および勸修寺庭園などの見学を行った。

参加者 56名

研究会などへの派遣

- 1) 1998年4月～1999年3月(毎月開催) 於:向日市(京都府埋蔵文化財調査研究センター)

「長岡京連絡協議」	調査部調査課	第4係長	辻	裕司
	〃	統括主任	百瀬	正恒
	〃	主任	吉崎	伸也
	〃		網	伸也
	〃		上村	憲章
	調査部資料課	第2係長	辻	純一
- 2) 1998年4月25日・26日 於:土岐市(土岐市美濃陶磁歴史館)

「美濃桃山陶器研究会」	調査部調査課		堀内	寛昭
-------------	--------	--	----	----
- 3) 1998年5月15日～17日 於:東京都(鶴見大学)

「討論会中世出土の漆器一椀・皿を中心に」	調査部調査課	主任	百瀬	正恒
----------------------	--------	----	----	----
- 4) 1998年6月6日・7日 於:東京都(昭和女子大学)

「文化財保存修復学会」	調査部資料課		卜田	健司
-------------	--------	--	----	----
- 5) 1998年7月3日・4日 於:奈良市(奈良国立文化財研究所)

「第10回埋蔵文化財写真技術研究会」	調査部資料課		村井	伸也
	〃		幸明	綾子
- 6) 1998年7月27日 於:奈良市(奈良国立文化財研究所)

「報告書抄録データベースに係る協議会」	調査部資料課	第2係長	辻	純一
	〃		宮原	健吾

- 7) 1998年9月3日・4日 於：福岡市（九州大学）
「平成10年度埋蔵文化財担当職員等講習会」 調査部調査課 課長補佐 平方 幸雄
- 8) 1998年9月12日・13日 於：京都市（立命館大学）
「京都府埋蔵文化財研究会第6回大会」 調査部調査課 主任 木下 保明
〃 〃 近藤 知子
- 9) 1998年10月8日・9日 於：ひたちなか市（クリスタルパレスほか）
「平成10年度研修会」 調査部資料課 第1係長 中村 敦
総務部総務課 佐藤 正典
- 10) 1998年10月16日 於：大津市（大津市歴史博物館）
「第4回近畿ブロック埋文研修会」 調査部調査課 第3係長 前田 義明
〃 統括主任 木下 保明
〃 〃 南 孝雄
〃 〃 近藤 章子
- 11) 1998年10月17日・18日 於：沖縄市（沖縄国際大学）
「日本考古学協会1998年度全国大会」 調査部調査課 高 正龍
- 12) 1998年11月9日 於：奈良市（春日野荘）
「埋蔵文化財等遺跡発掘作業に係る安全管理講習会」
調査部 調査課長 鈴木 久男
調査部調査課 尾藤 徳行
(村木節也)

2 京都市考古資料館状況報告

速報展の実施

1) 「平安京右京七条一坊十四町の調査」(1998年4月7日～5月31日)

1997年9月から1998年3月にかけて、七条中学校の敷地で調査が実施され、この成果を速報した。平安時代の西市の市外町にあたるところで、9世紀から10世紀にかけての小規模な邸宅・井戸・溝がみつかった。これらの遺構写真とともに土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器、皇朝十二銭の「承和昌寶」などを展示した。

2) 「平安京右京の木棺墓と副葬品」(1998年6月2日～8月2日)

平成9年度JR山陰線の複線化および側道建設に伴う発掘調査が実施され、この成果を速報した。当地は、右京一条四坊四町の「民部一領」とされる。この地から発見の、12世紀後半の木棺墓および副葬品の資料を展示した。白磁碗と同皿は木棺外から、土師器皿・鉄製短刀・鉄製品は木棺内から出土した。

3) 「和歌を記した茶陶」(1998年8月4日～10月4日)

1997年10月から1998年6月にかけて、竹間小学校跡地で調査が実施され、この成果を速報した。ここは江戸時代「井筒屋町」「和泉町」とよばれたところで、東洞院通沿いに数軒ずつの町屋跡がみつかった。さらに、江戸時代後期の町屋跡から和歌を記した織部向付が出土した。この向付を中心として展示した。

4) 「大仏さんの石罫と太閤瓦」(1998年10月6日～1999年1月31日)

1998年6月から、京都国立博物館の新館建設に伴う発掘調査が実施され、この成果を展示した。当地は16世紀後半方広寺のあったところで、「国指定史跡方広寺石罫」の東側延長部と桐文軒丸瓦・同軒平瓦・刻印丸瓦、錫杖、粘土製鋳型の一部が発見されている。

5) 「鞍馬二ノ瀬町の埋蔵銭ー38,462の銭貨ー」(1999年2月2日～1999年6月6日)

1998年1月、京都市左京区鞍馬二ノ瀬で、多量の埋蔵銭が石垣工事中に発見され、この成果を展示した。出土遺物から南北朝の頃(1340年頃)に曲物の容器に入れて埋められたと推定されている。銭貨は計38,462枚で、一番古いものは五銖銭(初鑄24年)、新しいものは咸淳元寶(初鑄1265年)で、模鑄銭が少量含まれている。

特別展示の実施

「続・洛中桃山陶器の世界ー三条界限出土ー」(1998年12月15日～2000年3月31日)

御幸町通から柳馬場にかけての三条界限で出土した桃山陶器は、余りにも膨大で、昨年度の特別展示だけでは全容を紹介することができなかった。そこで、前回公開できなかった志野・志野織部などを中心に、600余点の新たな展示品で構成した。

第19回京都市考古資料館小・中学生夏期教室の開催

期 間 1998年8月4日～7日

1) 小学生夏期教室4日・5日

第1日（児童のみ参加者36名）

資料館見学、ドロメンコ作り、瓦の拓本実習

第2日（親子参加者33組）

古墳見学(御堂ヶ池1号墳、見学および出土遺物の説明)、広沢池周辺の遺跡(七ツ塚古墳群、名古屋滝など) 散策

2) 中学生夏期教室6日・7日

第1日（参加者32名）

資料館見学、ドロメンコ作り、瓦の拓本実習

第2日（参加者30名）

京都地方・簡易裁判所の発掘調査現場で、発掘および出土遺物の水洗いの体験学習

3) 夏期教室拓本・写真展の開催

期 間 1998年8月22日～9月3日

会 場 考古資料館1階

文化財講座の開催

1) 第108回1998年4月25日（受講者100名）

「1997年度の発掘調査成果をふりかえって」 調査部 調査課長 鈴木久男
特別展示開催によせて

「洛中桃山陶器の世界—三条界限出土—」 考古資料館 主席学芸員 峰 巍

2) 第109回1998年5月23日（受講者85名）

「平安京左京八条二坊十四町の調査」 調査部調査課 主任 加納敬二
連続講座—「私の研究レポート」—講座16

「キリシタンと桃山文化」 調査部調査課 主任 丸川義広

3) 第110回1998年6月27日（受講者102名）

「極原廃寺の調査」 調査部調査課 統括主任 久世康博
連続講座—「私の研究レポート」—講座17

「わが国陶磁にみる中国陶磁の影響」 調査部 担当課長 永田信一

4) 第111回1998年7月25日（受講者87名）

「梅ヶ畑祭祀遺跡の調査」 調査部調査課 吉本健吾
連続講座—「私の研究レポート」—講座18

「扇についての研究ノート」 調査部調査課 第4係長 辻 裕司

5) 第112回1998年9月26日（受講者112名）

現地講座「方広寺の石塁」 考古資料館 研究職員 原山充志

6) 第113回1998年10月24日（受講者66名）

「安井西裏瓦窯跡の調査」 調査部調査課 田中利津子
連続講座—「私の研究レポート」—講座19

「平安京左京八条三坊出土の銭貨鋳型」	調査部調査課	山本雅和
7) 第114回 1999年1月23日 (受講者77名)		
「史跡醍醐寺境内の調査」	調査部調査課	津々池 惣一
連続講座－「私の研究レポート」－講座20		
「発掘調査にもとづく法金剛院の復原」	調査部調査課	小檜山 一良
8) 第115回 1999年2月27日 (受講者87名)		
「平安京右京職跡の調査」	調査部調査課	伊藤 潔
連続講座－「私の研究レポート」－講座21		
「植物園北遺跡の調査成果」	調査部調査課	近藤 章子
9) 第116回 1999年3月27日 (受講者82名)		
「平安京右京七条一坊十四町(西市外町)の調査」		
	調査部調査課	桜井 みどり
連続講座－「私の研究レポート」－講座22		
「金属利用にみる古人の知恵と技－奈良の大仏と南蛮吹き－」		
	考古資料館 館長	村田 耕太良
「大陸文化への憧憬」	考古資料館 主席学芸員	峰 巍

その他普及啓発

1階「情報コーナー」において、「リーフレット京都」や速報展の資料を定期的に作成し配布。パソコンによる情報展示は、新しいシステムに入れかえ、内容の追加・変更も進めている。また、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介をおこなうほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

- 1) 考古学・日本歴史関係図書
- 2) 府下および近県の博物館施設などのパンフレット、講演会資料
- 3) 発掘調査、現地説明会の資料
- 4) 発掘調査関連記載の新聞記事

考古資料の貸し出し

- 1) 継続貸し出し分 32件 770点
- 2) 新規貸し出し分 17件 527点

博物館学芸員課程実習生の受け入れ

1) 京都造形芸術大学	1	立命館大学	4	京都精華大学	3
京都橘女子大学	4	京都女子大学	3	神戸大学	1
2) 京都大学	58	京都女子大学	25	同志社大学	85
池坊短期大学	61	大阪市立大学	41		

関係機関への参加

- 1) 1998年6月23日 於：京都市（表千家北山会館）

- 「平成10年度京博連総会」 館長 村田 耕太良
 2) 1998年7月22日 於：京都市（職員会館かもがわ）
 「平成10年度第2回京博連幹事会」 館長 村田 耕太良
 3) 1998年9月17日 於：京都市（国際交流会館）
 「平成10年度第3回京博連幹事会」 館長 村田 耕太良
 4) 1998年10月6日・7日於：大津市（滋賀県立琵琶湖文化館ほか）
 「日本博物館協会近畿支部第13期前期総会」 研究職員 原山 充志
 5) 1998年12月2日 於：京都市（京都会館会議場）
 「ウォークラリー発会式」 館長 村田 耕太良
 6) 1998年12月15日 於：京都市（京都アスニー）
 「平成10年度第4回京博連幹事会」 館長 村田 耕太良
 7) 1999年1月19日 於：京都市（京都中央信用金庫本店）
 「博物館施設における防犯対策研修会」 館長 村田 耕太良
 8) 1999年2月25日・26日 於：京都市（京都アスニー）
 「ネットワークフォーラム in 京都」 研究職員 原山 充志

入館状況

表9 入館者数一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4月	26	1,184	127	160	183	1,654	63.6
5月	27	1,361	77	126	355	1,919	71.1
6月	25	1,156	72	255	84	1,567	62.7
7月	27	1,382	112	232	0	1,726	63.9
8月	26	1,340	154	127	92	1,713	65.9
9月	26	1,213	37	313	5	1,568	60.3
10月	27	1,245	12	194	0	1,451	53.7
11月	25	1,162	63	22	0	1,247	49.9
12月	24	1,073	38	42	47	1,200	50.0
1月	24	1,070	21	112	0	1,203	50.1
2月	24	1,694	54	201	30	1,979	82.5
3月	26	1,493	44	164	0	1,701	65.4
計	307日	15,373人	811人	1948人	796人	18,928人	61.7人

(村木節也)

3 役職員名簿

役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	坪 倉 讓	京都市文化市民局長
専務理事	岡 崎 道 晴	京都市文化市民局文化部担当部長
理 事	石 野 隆 司	京都市文化市民局文化部長
	井 上 満 郎	京都産業大学教授
	上 田 正 昭	京都大学名誉教授
	川 上 貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田 辺 昭 三	京都造形芸術大学教授
	角 田 文 衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	中 澤 英 又	京都市埋蔵文化財調査センター所長
	西 川 幸 治	京都大学名誉教授・滋賀県立大学教授
	谷 芳 巳	京都市文化市民局文化部文化財保護課長
	村 井 康 彦	京都市歴史資料館館長・滋賀県立大学教授
	和 田 晴 吾	立命館大学教授
監 事	野 原 康	京都市会計室長
	廣 瀬 伸 彦	税理士・京都府監査委員

職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名	
	川上 貢	研究所長（理事）	調 査 部 調 査 課	鈴木 久男	調査課長	
	田辺 昭三	嘱託（理事）		平方 幸雄	課長補佐	
総 務 部 総 務 課	平野 和利	総務部長				総務部総務課長補佐兼職
	辻 博	総務課長		菅田 薫	調査第1係長	
	村木 節也	庶務係長		磯部 勝	調査第2係長	
	金島 恵一	事業係長代理		前田 義明	調査第3係長	
	菅田 悦子	主 任		辻 裕司	調査第4係長	
	上村 京子	〃		本 弥八郎	調査第5係長	
	本田 憲三	〃		平田 泰	統括主任	
	夏原美智代	〃		久世 康博	〃	
	佐藤 正典	事務職員	木下 保明	〃		
上田 栄治	調査補佐員	鈴木 廣司	〃			

	氏名	職名
調査部調査課	百瀬 正恒	統括主任
	吉村 正親	主任
	加納 敬二	〃
	平尾 政幸	〃
	上村 和直	〃
	丸川 義広	〃
	吉崎 伸	〃
	網 伸也	研究職員
	内田 好昭	〃
	高 正龍	〃
	高橋 潔	〃
	山本 雅和	〃
	南 孝雄	〃
	小森 俊寛	〃
	長戸 満男	〃
	上村 憲章	〃
	近藤 知子	〃
	田中利津子	〃
	小松 武彦	〃
	桜井みどり	〃
	清藤 玲子	〃
	伊藤 潔	〃
	津々池惣一	〃
	南出 俊彦	〃
	小檜山一良	〃
	近藤 章子	〃
	永田 宗秀	〃
	東 洋一	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝 勉	〃
能芝 妙子	〃	
法邑真理子	〃	
鎌田 泰知	〃	
小倉万里子	〃 (1998.12.31退職)	
竜子 正彦	〃	

	氏名	職名	
調査部調査課	出口 勲	調査補佐員	
	藤村 敏之	〃	
	山口 真	〃	
	太田 吉男	〃	
	堀内 寛昭	〃	
	大立目 一	〃	
	西大條 哲	〃	
	布川 豊治	〃	
	宮下 則子	〃	
	吉本 健吾	〃	
	端 美和子	〃	
	藤村 雅美	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤 徳行	〃	
	大立目道代	〃	
	調査部資料課	長宗 繁一	資料課長
		中村 敦	資料第1係長
		辻 純一	資料第2係長
		出水みゆき	研究職員
		児玉 光世	〃
岡 ひろみ		〃	
卜田 健司		〃	
宮原 健吾		〃	
村井 伸也		〃	
村上 勉		〃	
モンパティ恭代	〃		
幸明 綾子	〃		
大槻 明義	〃		
中村 享子	〃		
永田 信一	担当課長		
考古資料館	村田耕太良	館長	
	峰 巍	主席学芸員 (1999.3.31退職)	
	原山 充志	研究職員	
	多田 清治	〃	

(村木節也)

表 10 平成 10 年度発掘調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
平安宮	1 H10-036 正親司・漆室跡 98HK - NA005	上京区御前通一条下る 東堅町 132-1 (仁和小学校)	1998. 10. 05 ～ 1998. 12. 09	696 m ²	京都市	長戸	
	2 H9-047、H10-002 左京北辺四坊 97HK - GS002	上京区京都御苑 3 (饗宴場跡地)	1997. 12. 18 ～ 1999. 01. 29	1,945 m ²	建設省近畿地 方建設局	丸川 木下 辻裕	
平安京	* H10-025、H 11-004 左京北辺四坊 98HK - GS003	上京区京都御苑 3 (饗宴場跡地)	1998. 08. 27 ～ 1999. 07. 28	1,670 m ²	建設省近畿地 方建設局	平田 小檜山 小松	平成 11 年度 で報告予定
	3 H10-054 左京一条四坊 98HK - MI002	上京区京都御苑 3	1999. 03. 01 ～ 1999. 03. 26	83 m ²	宮内庁京都事 務所	長戸	
	4 H9-061、H10-004 左京二条四坊 97HK - JD001	中京区間之町通竹屋町 下る楠町 601-1 他 (竹間小学校)	1997. 10. 29 ～ 1998. 07. 08	1,300 m ²	京都市	内田 高	
	5 H9-018、H10-003、H11-008 左京二条四坊 97HK - NG001	中京区丸太町通柳馬場 東入	1997. 10. 01 ～ 1999. 02. 26	4,000 m ²	最高裁判所事 務総局	上村和 山本	
	* H10-030、H11-009 左京六条三坊 98HK - PP001	下京区新町通松原下る 富永町 110-1 (修徳小学校)	1998. 09. 29 ～ 1999. 10. 01	1,310 m ²	京都市	平尾	平成 11 年度 で報告予定
	6 H10-010 左京六条三坊 98HK - PJ002	下京区烏丸通五条上る 悪王子町他地内	1998. 05. 11 ～ 1998. 07. 14	350 m ²	(株)アイフル	小檜山 長戸	
	7 H10-032 左京七条二坊・名勝滴翠園 98HK - WI006	下京区堀川通花屋町下 る本願寺門前町	1999. 01. 25 ～ 1999. 03. 12	20 m ²	宗教法人本願 寺	近藤知	
	* H10-052、H11-006 左京八条二坊 99HK - EQ001	下京区油小路通塩小路 下る東油小路町地内	1999. 04. 01 ～ 1999. 06. 18	200 m ²	社団法人近畿 建設協会	近藤章 加納	平成 11 年度 で報告予定
	8 H10-041 左京九条一坊 98HK - ZQ001	南区八条内田町 20-2 (南大内小学校)	1998. 11. 09 ～ 1999. 01. 14	612 m ²	京都市	南	
	9 H9-072、H10-006 左京九条二坊 97HK - BH010	南区西九条北之内町 11	1998. 03. 07 ～ 1998. 06. 03	372 m ²	㈱松下不動産	小森	
	10 H10-031 右京三条一坊 98HK - UI014	中京区西ノ京小倉町他 地内	1999. 02. 08 ～ 1999. 03. 31	313 m ²	京都市	伊藤	
	11 H10-023 右京三条一坊 98HK - UU002	中京区西ノ京永本町他 地内	1998. 08. 24 ～ 1999. 01. 30	432 m ²	京都市	伊藤	
	12 H9-069、H10-005 右京三条二坊 97HK - CF009	中京区西ノ京下合町地 内	1998. 03. 19 ～ 1998. 06. 26	800 m ²	㈱島津製作所	南 清藤	
	13 H10-033(2) 右京六条一坊 98HK - XF015	下京区中堂寺南町	1999. 01. 29 ～ 1999. 03. 10	210 m ²	住宅都市整備 公団関西支社	永田宗	
14 H10-033(1) 右京六条一坊 98HK - XF014	下京区中堂寺南町地内	1998. 10. 26 ～ 1998. 12. 04	120 m ²	住宅都市整備 公団関西支社	永田宗		

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
中 臣 遺 跡	15 H10-021 中臣遺跡 98RT - NK077	山科区勸修寺東栗栖野町 31 他	1998. 08. 18 ～ 1999. 01. 29	1,619 m ²	京都市	鈴木廣 網	
	16 H10-038 中臣遺跡 98RT - NK078	山科区勸修寺西栗栖野町 44 他	1998. 10. 21 ～ 1998. 11. 27	177 m ²	京都市	高	国庫補助
	* H10-022、H11-002 中臣遺跡 98RT - NK079	山科区勸修寺東栗栖野町 31 他	1998. 10. 02 ～ 2000. 03. 14	9,856 m ²	京都市	内田	平成 11 年度 で報告予定
長 岡 京	17 H10-015(1) 左京一条三坊 98NG - SD	南区久世東土川町 178 他	1998. 06. 15 ～ 1998. 10. 30	500 m ²	京都市	百瀬	C - 1 区
	18 H10-042 左京一条三坊 98NG - SD	南区久世東土川町 178 他	1998. 12. 01 ～ 1999. 03. 05	293 m ²	京都市	上村憲	C - 3 区
	19 H10-034 左京一条三坊 98NG - SD	南区久世東土川町 178 他	1998. 09. 04 ～ 1998. 11. 30	251 m ²	京都市	上村憲	D - 1 区
	20 H10-015(2) 左京一条三坊 98NG - SD	南区久世東土川町 178 他	1998. 09. 05 ～ 1998. 11. 26	325 m ²	京都市	百瀬 上村憲	D - 4 区・ E - 1 区
	* H10-055、H11-007 左京一条三坊 99NG - SD	南区久世東土川町 178 他	1999. 04. 19 ～ 1999. 09. 02	650 m ²	京都市	百瀬	平成 11 年度 で報告予定 D-2・3 区
そ の 他 の 遺 跡	21 H10-039 鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 98RH - NS001	左京区鞍馬二ノ瀬町 67	1998. 11. 09 ～ 1998. 11. 16	5 m ²	京都市	近藤章 菅田	国庫補助
	22 H10-007 六波羅政庁跡 98RT - AA003	東山区茶屋町 527 (京都国立博物館)	1998. 06. 01 ～ 1999. 03. 31	1,567 m ²	建設省近畿地 方建設局	田中 近藤知	
	23 H10-012・017 山科本願寺跡 98RT - HG003	山科区西野左義長町 23- 1・23-4	1998. 08. 17 ～ 1998. 11. 09	505 m ²	京都市・ 谷口榮樹	吉村 南出	国庫補助
	24 H9-063H10-009・040 大藪遺跡 98MK - OG001	南区久世殿城町他地内	1997. 12. 08 ～ 1999. 04. 15	3,925 m ²	京都市	吉崎	
	25 H10-035 下三栖遺跡 98FD - SS004	伏見区横大路下三栖辻堂 町地内	1998. 10. 01 ～ 1999. 01. 12	428 m ²	京都市	小森 南出	
	26 H10-020 伏見城跡 98FD - AM001	伏見区桃山町永井久太郎 他地内 (市道上板橋通)	1998. 07. 06 ～ 1999. 03. 19	933 m ²	京都市	小松	
	* H10-024、H11-003 史跡醍醐寺境内 98FD - DT003	伏見区醍醐東大路町地内	1998. 07. 23 ～ 1999. 08. 06	発 320 m ² 立 455 m	京都市	津々池 布川	平成 11 年度 で報告予定 発掘・立会

表 11 平成 10 年度試掘・立会調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 H10-019 正親司・漆室跡 98HK - NA004	上京区御前通一条下る東 堅町 132-1 (仁和小学校)	1998.06.16 ～1998.06.26	試掘 40 m ²	京都市	平田	発掘へ移行 1章II-1
平安京	2 H10-008 左京三条二・三坊 98HK - OS002	中京区押堀町 45-3 ～上樵 木町 504	1998.04.07 ～1998.06.05	立会 680 m	京都市	東	
	3 H10-018 左京六条一坊 98HK - KT003	下京区中堂寺坊城町 26-1 (光徳小学校)	1998.06.09 ～1998.06.23	試掘 40 m ²	京都市	上村憲	
	4 H10-027 東寺講堂須弥壇 98HK - TG003	南区九条町 1	1998.07.06 ～1998.08.19	確認 11 m ²	宗教法人教王 護国寺	鈴木久 ほか	
	5 H10-028 右京五条二坊 98HK - UW001	右京区佐井通、四条通～ 高辻北通	1998.08.10 ～1998.10.12	立会 1,182 m	京都市水道局	菅田 加納 近藤章	
	6 H10-029 右京七条三坊 98HK - OJ001	下京区西七条八幡町 29	1998.07.13 ～1998.10.31	試掘 84 m ²	社会福祉法人 京都福祉サー ビス協会	平尾	
	7 H10-013 長岡京跡 97NG - RA001	伏見区葭島渡場町 32	1998.03.03 ～1998.04.21	試掘 300 m ²	日本中央競馬 会京都競馬場	吉崎 木下 百瀬	
その他 の遺跡	8 H10-037 史跡賀茂御祖神社境内 98RH - UU001	左京区下鴨泉川町 59	1998.11.24 ～1998.12.16	試掘 67 m ²	宗教法人賀茂 御祖神社	桜井	
	9 H10-050 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 98RH - KK007	北区金閣寺町 1	1999.03.03 ～1999.04.05	試掘 115 m ²	宗教法人鹿苑 寺	南	
	10 H10-026 法性寺跡、貞観寺跡他 98FD - RS001	東山区福稲岸ノ上町～伏 見区深草大亀谷東寺町地 内	1998.12.09 ～1999.02.26	立会 310 m	西日本旅客鉄 道株式会社	吉村	
	* H10-051、H11-005 法性寺跡、貞観寺跡他 98FD - RS002	東山区福稲岸ノ上町～伏 見区深草大亀谷東寺町地 内	1999.03.01 ～2000.01.21	立会 1,460 m	西日本旅客鉄 道株式会社	吉村	平成 11 年度 で報告予定
	11 H10-049 伏見城跡 98FD - MO001	伏見区桃山町立売 1-6 他	1999.02.01 ～1999.02.16	試掘 182 m ²	社会福祉法人 健光園	桜井	発掘へ移行 平成 11 年度
12 H10-001 京都市内遺跡 98BB -	京都市内一円	1998.04.01 ～1999.03.31	立会	京都市	菅田 竜子 吉本	国庫補助	

表12 平成10年度その他契約一覧表

	契約No.	内容	遺跡名・所在地	委託者	担当者	備考
1	H10-011	測量	平安京跡 下京区柿本町	(財)古代学協会	辻純 宮原	
2	H10-014	測量	平安京跡 中京区西ノ京内畑町	京都外国語大学	辻純 宮原	
3	H10-016	保存処理	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 北区金閣寺町1	宗教法人鹿苑寺	卜田	
4	H10-043	測量	平安京右京一条三坊・二条大路 北区大將軍坂田町29(山城高校) 中京区西ノ京式部町1(朱雀高校)	(財)京都府埋蔵文化財調査研究 センター	辻純 宮原	
5	H10-044	測量	平安京跡 中京区西ノ京梅尾町3-8	関西文化財調査会	辻純 宮原	
6	H10-045	測量	平安京右京二条二坊 中京区西ノ京西円町3	京都文化博物館	辻純 宮原	
7	H10-046	整理	中臣遺跡 山科区勸修寺西栗栖野町44他	京都市	高	国庫補助 H10-038分
8	H10-047	整理	鞍馬二ノ瀬町埋蔵銭出土地 左京区鞍馬二ノ瀬町67	京都市	菅田	国庫補助 H10-039分
9	H10-048	整理	山科本願寺跡 山科区西野左義長町23-1他	京都市	吉村	国庫補助 H10-012分
10	H10-053	報告書	京都市内遺跡 京都市内一円	京都市	菅田	国庫補助